

兵庫県文化財調査報告 第64冊

# 寺 中 遺 跡

—淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書IV—

平成元年 3 月

兵庫県教育委員会

## 寺中遺跡正誤表

頁数	行数	誤	正
24	1行目	第3家	第3家第1-2-4節
24	2行目	第3家第1節	第3家第1-3節
25	1行目	第5家第3節2	第5家第3節4
8	9行目	池田 義雄	福田 幸安
28	26行目	径約7.1m割り	径約7.1mを割り
31	11行目	投げられてた	投げられていた
31	33行目	径うもの約4本	径うもの約4本
40	27行目	脚柱部242枚に円	脚柱部242
41	11行目	第99図	第73図
84	23行目	ライン(A-A)	ラインの
95	第56図	3.灰色中細+	3.灰色中細砂+
95	第56図	5.灰色中細	5.灰色中細砂
96	33行目	埋土は下層から	埋土は上層から
99	8行目	(38)は外上方に	(37)は外上方に
112	18行目	台石1点	台石2点
112	24行目	深いもの(1-3)	深いもの(4-5)
112	24行目	浅いもの(4-5)	浅いもの(1-3)
130	18行目	(228-230-234)	(228-230-235)
130	32行目	跡跡(234)が	跡跡(235)が
131	32行目	施したものを(252)	施したものを(251)
140	27行目	扉部は刷毛磨し	扉部は磨きまし
143	18行目	(315)はC類の	(315)はB類の
163	23行目	は残さない。	を施している。
174	3行目	土器の検片	土器の検片 <sup>(*)</sup>
174	11行目	黒谷川郡頭遺跡	黒谷川郡頭遺跡 <sup>(*)</sup>
174	17行目	谷町筋遺跡	谷町筋遺跡 <sup>(*)</sup>
174	20行目	北沢路の探査品	北沢路の探査品 <sup>(*)</sup>
174	27行目	大森谷遺跡	大森谷遺跡 <sup>(*)</sup>
174	27行目	新田遺跡	新田遺跡 <sup>(*)</sup>
174	32行目	志知川・岸田南遺跡	志知川岸田南遺跡 <sup>(*)</sup>
175	4行目	尾中遺跡	尾中遺跡 <sup>(*)</sup>
175	4行目	亀川遺跡	亀川遺跡 <sup>(*)</sup>
175	4行目	北田井遺跡	北田井遺跡 <sup>(*)</sup>
175	30行目	跡るもの(A3)	跡るもの(A2)
176	8行目	紀の川流域	紀の川流域 <sup>(*)</sup>
176	18行目	有田川流域編年案	有田川流域編年案 <sup>(*)</sup>
176	18行目	がなされている。	がなされている <sup>(*)</sup>
178	3行目	鳥形土製品	鳥形土製品 <sup>(*)</sup>
178	4行目	第95図	第99図 <sup>(*)</sup>
178	13行目	金岡氏は	金岡氏は <sup>(*)</sup>
178	16行目	水野氏は	水野氏は <sup>(*)</sup>
178	20行目	井上氏は	井上氏は <sup>(*)</sup>

頁数	行数	誤	正
178	25行目	結谷氏は	結谷氏は <sup>(*)</sup>
179	12行目	「鳥形製品」	「鳥形製品」 <sup>(*)</sup>
179	20行目	表4に示した	表4に示した <sup>(*)</sup>
179	21行目	第95図	第99図 <sup>(*)</sup>
179	28行目	中村松田遺跡例	中村松田遺跡例 <sup>(*)</sup>
179	29行目	蔵平遺跡例	蔵平遺跡例 <sup>(*)</sup>
179	29行目	朝日遺跡	朝日遺跡 <sup>(*)</sup>
179	30行目	加茂遺跡	加茂遺跡 <sup>(*)</sup>
179	33行目	目久美遺跡	目久美遺跡 <sup>(*)</sup>
180	3行目	津町遺跡	津町遺跡 <sup>(*)</sup>
180	19行目	塚邊遺跡	塚邊遺跡 <sup>(*)</sup>
180	21行目	墳丘墓の	墳丘墓の <sup>(*)</sup>
180	25行目	宮前川北斎院遺跡	宮前川北斎院遺跡 <sup>(*)</sup>
180	28行目	跡で住居址から	跡で住居址から <sup>(*)</sup>
180	28行目	白石遺跡	白石遺跡 <sup>(*)</sup>
180	31行目	吉田南遺跡	吉田南遺跡 <sup>(*)</sup>
184	8行目	郷向遺跡	郷向遺跡 <sup>(*)</sup>
184	13行目	大中遺跡	大中遺跡 <sup>(*)</sup>
184	14行目	東郷遺跡	東郷遺跡 <sup>(*)</sup>
184	16行目	秋風遺跡	秋風遺跡 <sup>(*)</sup>
184	18行目	津町遺跡	津町遺跡 <sup>(*)</sup>
184	24行目	さくら山遺跡	さくら山遺跡 <sup>(*)</sup>
184	26行目	唐古・鍵遺跡	唐古・鍵遺跡 <sup>(*)</sup>
185	4行目	田遺跡例は	田遺跡例は <sup>(*)</sup>
185	5行目	遺跡の周溝基の	遺跡の周溝基の <sup>(*)</sup>
185	8行目	中久世遺跡	中久世遺跡 <sup>(*)</sup>
185	8行目	吉河遺跡	吉河遺跡 <sup>(*)</sup>
185	29行目	南東山遺跡	南東山遺跡 <sup>(*)</sup>
185	13行目	百間川沢田遺跡	百間川沢田遺跡 <sup>(*)</sup>
185	18行目	服部遺跡	服部遺跡 <sup>(*)</sup>

## 寺中遺跡正誤表

頁数	行数	誤	正
185	19行目	寺山石神遺跡	寺山石神遺跡 <sup>(*)</sup>
185	31行目	大日山1遺跡	大日山1遺跡 <sup>(*)</sup>
191	11行目	集成した	集成した <sup>(*)</sup>
193	11行目	いう「教杖」	いう「教杖」 <sup>(*)</sup>
194	11行目	大別できる。	大別できる <sup>(*)</sup>
194	24行目	魚住富家赤根川 支那窟	魚住富家赤根川 支那窟 <sup>(*)</sup>
194	25行目	を求められる。	を求められる <sup>(*)</sup>
194	26行目	狭野編年VI期	狭野編年VI期 <sup>(*)</sup>
194	28行目	小長曾家期	小長曾家期 <sup>(*)</sup>
194	29行目	鹿前IV A期	鹿前IV A期 <sup>(*)</sup>
194	32行目	が考えられる。	が考えられる <sup>(*)</sup>
		行目	
213	No.152	倉庫1	土蔵 <sup>(*)</sup>
218	No.259	部分約叩きが	部分約叩きが <sup>(*)</sup>
219	No.269	口縁部。	口縁部。 <sup>(*)</sup>
220	No.278	278	288 <sup>(*)</sup>
220	No.280	280	279 <sup>(*)</sup>
221	No.281	281	280 <sup>(*)</sup>
221	No.282	282	281 <sup>(*)</sup>
221	No.283	283	282 <sup>(*)</sup>
221	No.284	284	283 <sup>(*)</sup>
221	No.284	口縁部	口縁部 <sup>(*)</sup>
221	No.285	285	284 <sup>(*)</sup>
221	No.286	286	285 <sup>(*)</sup>
222	No.287	287	286 <sup>(*)</sup>
222	No.288	288	287 <sup>(*)</sup>
223	No.295	295	296 <sup>(*)</sup>
223	No.296	296	295 <sup>(*)</sup>
223	No.299	299	300 <sup>(*)</sup>
223	No.300	300	299 <sup>(*)</sup>
231	No.205	右面転切り。	右面転切り。 <sup>(*)</sup>

# 寺 中 遺 跡

—淡路縱貫道關係埋藏文化財調查報告書IV—

平成元年 3 月

兵庫縣教育委員會

## 例 言

1. 本報告書は洲本市納字寺中に位置する寺中遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は、本州四国連絡橋公団による淡路縦貫道建設に伴って、昭和59年2月から昭和59年7月にかけて発掘調査を実施したもので、本州四国連絡橋公団の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 現地での作業は株式会社橋詰建設の協力を得て、小川良太、吉識雅仁、岸本一宏、西口圭介が担当して実施した。
4. 整理調査は吉識が主となって担当し、昭和59・61・63年に実施した。
5. 発掘調査、整理調査に伴う経費は全て本州四国連絡橋公団が負担した。
6. 遺構の実測は原田和幸の補助を受け、調査員が実施した。遺物の実測は、土器を山根実生子、社領育代が行い、石器を大下明が行った。
7. 遺構・土器実測図のトレースは和田早芳子が行い、石器は大下が行った。
8. 遺構写真は各調査員が撮影したが、遺物については森昭氏に依頼した。
9. 本書の編集は吉識が担当し、前田陽子の補助を得て、実施した。
10. 遺物類の番号は、本文・挿図・写真図版とも統一している。
11. 本書の挿図等に利用した標高の数値は、本州四国連絡橋公団の工事用B.M.を利用した海拔高であり、方位は磁北である。
12. 本書に掲載した挿図・写真図版の内、第1図の地図は国土地理院発行の1/25000の地図をもとに作成したものであり、図版第1の航空写真は国土地理院撮影の1/10000のものを利用した。
13. 原稿の執筆分担は下記の通りであるが、石器については全て大下が担当した。  
吉識雅仁 第1章、第2章、第3章第2・3節、第4章第3節、第5章第1節  
岸本一宏 第3章、第5章第2節・第3節  
西口圭介 第3章第2節2・第3節3、第4章第1・2・4節、第5章第3節2  
土器観察表は執筆担当者がそれぞれ作成した。
14. 出土した遺物類は兵庫県教育委員会で保管している。
15. 本書の作成にあたって、地理的な環境について高橋学氏の、中世の遺物について岡田章一氏の教示を得たほか、波毛康宏氏、浦上雅史氏を始め淡路考古学研究会の方々、本州四国連絡橋公団など、関係各方面から多大なる協力を得た。記して感謝の意を表します。

# 本文目次

## 第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過と調査後の取扱い	1
1 調査に至る経過	1
2 調査後の取扱い	3
第2節 調査の経過と体制	4
1 昭和57年度の調査	4
2 昭和58年度の調査	4
3 昭和59年度の調査	6
4 昭和61年度の調査	7
5 昭和63年度の調査	8
第3節 遺跡の環境	9
1 地理的環境	9
2 歴史的環境	10

## 第2章 A地区の調査

第1節 調査区の概要	21
第2節 遺構	24
1 弥生時代の遺構	24
2 その他の遺構	36
第3節 遺物	37
1 弥生時代の土器	37
2 石器他	41
3 中世の遺物	41
第4節 小結	42

## 第3章 B地区の調査

第1節 調査区の概要	43
第2節 遺構	53
1 弥生時代の遺構	53
2 奈良・中世の遺構	86
第3節 遺物	99
1 弥生時代の土器	99
2 石器	112
3 奈良・中世の遺物	116
第4節 小結	121

#### 第4章 D地区の調査

第1節 調査区の概要	125
第2節 遺構	127
第3節 遺物	130
1 土器	130
2 石器	143
第4節 小結	144

#### 第5章 まとめ

第1節 建物址・竪穴住居址群	145
1 中期後半の建物址と住居址	145
2 後期の住居址	147
第2節 方形周溝墓群	159
第3節 遺物	168
1 弥生土器	168
2 鳥形土製品	178
3 S(Z)字形浮文	191
4 中世の遺物	194

土器観察表	196
-------	-----

## 挿 図 目 次

第1図	位置と周辺の遺跡	11
第2図	遺跡の範囲と調査区	18
第3図	遺跡全体図	19
第4図	A地区全体図	22
第5図	A地区土層図	23
第6図	住居址A-2	25
第7図	住居址A-1	26
第8図	住居址A-3	29
第9図	住居址A-4	33
第10図	住居址A-5	34
第11図	住居址A-6	35
第12図	建物址1	36
第13図	住居址A-2 出土土器	37
第14図	住居址A-1・3 出土土器	38
第15図	住居址A-4・5・6 出土土器	39
第16図	ガラス管玉	40
第17図	溝1 出土土器	40
第18図	包含層出土土器	41
第19図	紡錘車	41
第20図	包含層出土土器	41
第21図	B地区全体図	45
第22図	Hライン土層図	47
第23図	9、15ライン土層図	49
第24図	B地区東壁土層	51
第25図	建物址1	53
第26図	建物址2	54
第27図	住居址B-4	55
第28図	住居址B-1	57
第29図	住居址B-2	59
第30図	住居址B-3	62
第31図	方形周溝墓1	64
第32図	方形周溝墓1 周溝内土層	65
第33図	方形周溝墓1 西溝内土器出土状態	66
第34図	方形周溝墓2	68
第35図	方形周溝墓2 周溝内土層	69

第36图	方形周溝墓 2	西溝内土器出土狀態	70
第37图	方形周溝墓 3		72
第38图	方形周溝墓 3	周溝内土層	73
第39图	方形周溝墓 3	北溝内土器出土狀態	74
第40图	方形周溝墓 3	南溝内土器出土狀態	75
第41图	方形周溝墓 4		77
第42图	方形周溝墓 4	周溝内土層	78
第43图	方形周溝墓 4	南溝内土器出土狀態	79
第44图	方形周溝墓 5		80
第45图	方形周溝墓 5	北溝内土器出土狀態	81
第46图	方形周溝墓 6		82
第47图	土器棺		84
第48图	土壙 1		86
第49图	建物址 3		87
第50图	建物址 4		88
第51图	建物址 5		89
第52图	建物址 6		90
第53图	建物址 7		91
第54图	建物址 8		92
第55图	土壙 4・5		94
第56图	土壙 6		95
第57图	土壙 7		96
第58图	土壙 8		97
第59图	溝14土層断面		97
第60图	溝15		98
第61图	建物址 2・住居址 B-4	出土土器	99
第62图	住居址 B-2	出土土器(1)	100
第63图	住居址 B-2	出土土器(2)	101
第64图	紡錘車		102
第65图	住居址 B-1・3、溝	出土土器	102
第66图	方形周溝墓 1~3	出土土器	107
第67图	方形周溝墓 4・5	出土土器	108
第68图	方形周溝墓 6	出土土器	109
第69图	壺棺		110
第70图	包含層出土土器		110
第71图	石器(1)		111
第72图	石器(2)		112

第73図	石器(3)	113
第74図	石器(4)	114
第75図	石器(5)	115
第76図	土壇1・周溝墓2 出土土器	116
第77図	建物址・柱穴群出土土器	116
第78図	土壇2・4・6・7・8 出土土器	117
第79図	土壇9 出土土器	118
第80図	溝16 出土土器	118
第81図	溝15 出土土器	119
第82図	包含層出土土器	120
第83図	D地区 全体図	126
第84図	東溝	128
第85図	西溝	129
第86図	東溝出土土器(1)	135
第87図	東溝出土土器(2)	136
第88図	東溝出土土器(3)	137
第89図	東溝出土土器(4)	138
第90図	東溝出土土器(5)	139
第91図	東溝出土土器(6)	140
第92図	西溝出土土器(1)	141
第93図	西溝出土土器(2)	142
第94図	竪穴住居址の種類	157
第95図	中央土壇と屋内溝	157
第96図	方形周溝墓群の築造順と墓道の位置	161
第97図	方形周溝墓平面企画	164
第98図	白石遺跡出土の鳥形土器	179
第99図	弥生時代～古墳時代前期 鳥形土製品分類案	181
第100図	弥生時代～古墳時代前期 鳥形土製品分布図	183

## 表 目 次

表1	遺跡地名表	11
表2	竪穴住居址一覧表	151
表3	弥生後期土器器種分類	170・171
表4	弥生時代～古墳時代前期 鳥形土製品出土地一覧	187
表5	S(Z)字形浮文分類表(縮尺1/3)	191
表6	S(Z)字形浮文を有する土器出土地一覧	192

## 図版目次

- 図版第1 航空写真
- 図版第2 遺跡航空写真(調査前)  
上) 東より 下) 北東より
- 図版第3 遺跡航空写真  
上) 南より 下) 東より
- 図版第4 遺跡全景
- 図版第5 A地区航空写真
- 図版第6 A地区遺構  
上) 住居址群(東より) 下) 住居址群(西より)
- 図版第7 A地区遺構  
上) 住居址A-1 床面上炭化物 下) 住居址A-1
- 図版第8 A地区遺構  
上) 住居址A-2 下) 住居址A-3
- 図版第9 A地区遺構  
上) 住居址A-4・5・6 下) 住居址A-4
- 図版第10 A地区遺構  
上) 住居址A-5 下) 建物址
- 図版第11 B地区航空写真
- 図版第12 B地区遺構  
上) 土層断面 下) 住居址B-4
- 図版第13 B地区遺構  
上) 建物址1 下) 建物址2
- 図版第14 B地区遺構  
上) 住居址群(北より) 下) 住居址群(南より)
- 図版第15 B地区遺構  
上) 住居址B-1 下) 住居址B-1 中央土壌土層断面
- 図版第16 B地区遺構  
上) 住居址B-2 下) 住居址B-2
- 図版第17 B地区遺構  
上) 住居址B-2 下) 住居址B-3
- 図版第18 B地区遺構  
上) 方形周溝墓群(東より) 下) 方形周溝墓群(西より)
- 図版第19 B地区遺構  
上) 方形周溝墓1(検出状況) 下) 方形周溝墓1
- 図版第20 B地区遺構

- 上) 方形周溝墓 2 (検出状況) 下) 方形周溝墓 2
- 図版第21 B地区遺構  
上) 方形周溝墓 3 (検出状況) 下) 方形周溝墓 3
- 図版第22 B地区遺構  
上) 方形周溝墓 4 (検出状況) 下) 方形周溝墓 4
- 図版第23 B地区遺構  
上) 方形周溝墓 5 (検出状況) 下) 方形周溝墓 5
- 図版第24 B地区遺構  
上) 方形周溝墓 6 下) 土器棺
- 図版第25 B地区遺構  
上) 溝 3・4・7 下) 溝14
- 図版第26 B地区遺構  
上) 建物址 3 下) 土壇 6
- 図版第27 B地区遺構  
上) 土壇 4 (遺物出土状況) 下) 土壇 4
- 図版第28 D地区遺構  
上) 調査前の状況 下) 東溝土層断面
- 図版第29 D地区遺構  
上) 東溝 (遺物出土状況) 下) 東溝
- 図版第30 D地区遺構  
上) 西溝土層断面 下) 西溝
- 図版第31 弥生土器  
上) 建物址 2 出土土器 下) 住居址B-4 出土土器
- 図版第32 弥生土器  
上) 住居址A-2 出土土器 下) 住居址A-1 出土土器
- 図版第33 弥生土器  
住居址A-3 (18)・4 (23)・5 (27)・6 (30) 溝1 (32) 出土土器
- 図版第34 弥生土器  
住居址B-2 出土土器
- 図版第35 弥生土器  
上) 方形周溝墓 3 (101)・6 (144)・土器棺(153) 包含層(155) 下) 溝内出土土器
- 図版第36 弥生土器  
上) 住居址A-3~6 出土土器 下) 住居址B-1~3 出土土器
- 図版第37 弥生土器  
上) 方形周溝墓 1・2 出土土器 下) 方形周溝墓 3・4 出土土器
- 図版第38 弥生土器  
上) 方形周溝墓 3 出土土器 下) 方形周溝墓 3 出土土器

図版第39 弥生土器

上) 方形周溝墓4 出土土器 下) 方形周溝墓5 出土土器

図版第40 弥生土器

上) 方形周溝墓1~6 出土土器 下) 方形周溝墓6 出土土器

図版第41 弥生土器

上) 方形周溝墓6 出土土器 下) 東溝出土土器

図版第42 弥生土器

東溝出土土器

図版第43 弥生土器

東溝出土土器

図版第44 弥生土器

上) 東溝出土土器 下) 東溝出土土器

図版第45 弥生土器

西溝出土土器

図版第46 ガラス管玉・紡錘車・弥生土器文様

図版第47 石器

図版第48 石器

図版第49 須恵器(奈良)・土師器(中世)

土壇1(156・157)・方形周溝墓2(158・159)・土壇4(182)・土壇6(170)・溝15(200・204)・溝16(190・191)出土土器

図版第50 中世土器

土壇4・6(172) 出土土器(土師器皿・埴)

図版第51 中世土器

上) 溝15出土土器(土師器) 下) 溝15出土土器(埴差陶器・瓦質土器・土師器)

図版第52 中世土器

上) 溝15出土土器(須恵器・備前)外面 下) 溝15出土土器(須恵器・備前)内面

図版第53 中世土器

上) 羽釜・土壇(35-柱穴・206-溝15、他は包含層出土)

下) 瓦器(160~162-建物址3・220-柱穴、他は包含層出土)

図版第54 中世土器

上) 国産陶器(包含層出土) 下) 須恵器、備前焼(包含層出土)

図版第55 中世土器

上) 瓦質土器(189-土壇9、他は包含層出土)

下) 磁器・国産陶器(188-土壇2・192-溝16、他は包含層)

# 第 1 章 は じ め に

## 第 1 節 調査に至る経過と調査後の取扱い

### 1 調査に至る経過

本州と四国を結ぶ本州四国連絡橋計画の内、神戸・鳴門ルートは神戸市垂水区から明石海峡を明石海峡大橋で渡り、淡路島を縦貫し、鳴門海峡を大鳴門橋で渡って、四国側の徳島県鳴門市に至る自動車専用ルートの計画である。淡路島の縦貫には一般国道28号を改良し、淡路縦貫道と通称される高速自動車道を建設し、スムーズな交通の流れを確保するとともに、縦貫道に7ヶ所のインターチェンジを設けて、島内産業を活性化しようとする計画である。

こうした計画にもとづき、昭和47年本州四国連絡橋公団（以下本四公団と呼ぶ）から兵庫県教育委員会（以下県教育委員会とする）に事業の概要説明と、幅200mの道路計画予定地について分布調査の依頼があった。これを受けた県教育委員会は計画予定地を3地区に分け、分布調査を淡路考古学研究会に依頼し、昭和47・48年の2ヶ年にわたって実施した。この分布調査では、洲本市内の2ヶ所も含め、全体で26ヶ所の散布地が発見された。この報告を受けた県教育委員会は直ちに本四公団と協議に入り、昭和49年兵庫県側の窓口である兵庫県淡路縦貫道対策室を交えて、26ヶ所の散布地の現地確認を行った。そしてこれら計画予定地にかかる散布地については、道路詳細計画から外すとともに、その保存処置を講じることを要望した。またやむを得ず予定地内に遺跡がかかる場合は、今後確認調査等の調査を行う事で合意した。

そして昭和48年、オイルショックの影響を受け、明石海峡大橋の工事計画が凍結されたことから、淡路縦貫道も津名郡以南が先行されることとなった。しかし淡路島は平野部が少ない事等から用地交渉が難航し、昭和54年になって三原郡側から工事が開始された。そして昭和57年になって、工事も本格化し、ようやく洲本市側も、昭和60年度の共用開始を目指して、工事が本格的に動き出した。

そこで本四公団から洲本市内の2ヶ所の散布地、寺中遺跡と大森谷遺跡の調査依頼が県教育委員会にあり、依頼を受けた県教育委員会は昭和57年11月に確認調査を実施した。この内寺中遺跡の調査は、台地に挟まれた谷部で行われ、遺構は検出されなかったものの、僅かではあるが、遺物の出土を見た。そこで北側の台地上に遺跡の存在する可能性が高い事が指摘された。そのため本四公団と協議したところ、昭和47年時の道路計画が変更され、台地上は洲本インターチェンジの予定地となっていた。そこで再度分布調査から行うことになった。

分布調査は昭和58年6月に淡路考古学研究会の波毛康宏氏の応援を得て実施した。その結

果、台地上のほぼ全域に遺物の散布が認められ、遺跡の存在する可能性が高いと判断された。そのため本四公団と遺跡の取扱いについて協議したが、すでに工事発注が予定されていたことから、現状での保存は困難となった。そこで現在植えられている稲等の作物の刈り入れ後の10月に確認調査を実施することとなった。

この再度の確認調査では台地の先端部にあたる地区から竪穴住居址、方形周溝墓等が検出され、遺跡は集落と墓地が同一の場所に存在する、貴重な遺跡であることが判明した。そこで工事計画の変更等も含めた何らかの保存処置が必要と判断された。しかしすでに工事発注がまじかに迫っていること、また工期の関係等から、工事計画の変更は難しく、全面にわたる調査を実施し、その結果をもとに、再度保存方法について協議することになった。

全面調査は当初昭和58年12月から開始する予定であったが、すでに工事が開始されていた洲本市側の工区で、新たな散布地8ヶ所が相次いで発見され、その確認調査が必要となった。そのため本四公団と協議したところ、この確認調査を急ぐことになり、寺中遺跡の調査はこれらの確認調査が終了した時点で開始することとなった。ところが確認調査で新たに森遺跡が発見されたため、再度本四公団と協議し、工事発注がされている森遺跡の調査を優先させることになった。

こうしたことから寺中遺跡の全面調査開始は昭和59年2月からとなった。しかし調査開始が大幅に遅れたことから、調査は分割して実施することになり、昭和58年度は台地奥側のB地区について調査を実施し、A地区については昭和59年度に送ることとなった。また調査後の取扱いも工事工程の都合から、それぞれの調査区の調査が終了した段階ですみやかに、協議することになった。

そして年度が変わった昭和59年6月に、ほぼ当初計画の範囲を終えた。ところが淡路縦貫道が完成時には、障害物となる有線放送のケーブルを地下に埋設する工事が、遺跡を分断する旧淡路鉄道敷に沿って実施されていた。その工事が遺跡の乗る台地内側の谷部で行われた際に、多量の土器が出土した。そこで急遽本四公団と協議を行い、工事を一時中止するように要請するとともに、その保存について検討した。しかし、すでに淡路縦貫道の建設工事が進んでいること等から、現状での保存は困難であった。さらに建設工事の工期が迫っていることから充分な調査期間もとれないこととなった。ただ土器の出土地点は建設工事でも盛土となる部分であることから、地下の遺構等は保存されるということで、今回は保存資料を得ることを目的とした調査とし、トレンチによる調査を実施した。

## 2 調査後の取扱い

調査開始は大幅に遅れたため、調査は淡路縦貫道の建設工事と並行する様な状態で実施した。しかし昭和58年度の全面にわたる調査の結果、この遺跡は弥生時代の方形周溝墓と竪穴住居址・建物址が同一の場所で検出され、当時の村落の様子を知る上で貴重な遺跡であることが判明した。

そこで昭和58年度予定の台地奥側（B地区）の調査が終了した昭和59年4月、その取扱いについて本四公団と協議した。しかしこの地区には、洲本インターチェンジの料金所と淡路縦貫道の管理施設が予定されており、工期との関係等から、県教育委員会は現状での保存は困難と判断、道路下に遺構を保存することとした。そこで道路計画の中で、掘削を伴う構造物、管理施設の構造物等を遺構の無い場所に変更するように求めるとともに、遺構を砂等で埋め戻し、傷めないような工事方法をとるように求めた。特にこの遺跡の中では最大の規模である、方形周溝墓2の上には管理棟が計画されており、その位置等の変更を強く要望した。この要望を受けて本四公団は検討を進めた。しかしB地区には淡路縦貫道の管理施設と洲本インターチェンジの料金所が計画されており、料金所を通過し淡路縦貫道へ進入する車両と、管理施設への車両との関係で、管理施設への進入は限定され、そのため管理施設の位置についても大幅に変更することは困難という結論であった。方形周溝墓2の上に予定されている管理棟についても、地形的な関係から遺構全体を避けることは難しい、ただ他の掘削を伴う構造物については全て遺構を避けて構築できるという結論であった。この検討結果を受けて県教育委員会は、方形周溝墓2上の管理棟の建設も止むなしの結論となった。

したがって台地奥側のB地区については方形周溝墓2が淡路縦貫道の管理棟建設によって壊されたが、他の遺構については、遺構を壊さないように、砂による埋め戻しが行われた後、建設工事が行われた。

台地先端側のA地区については、竪穴住居址等が検出され、台地奥側のB地区と同様、できるだけ遺構を壊さないような工事計画に変更し、砂による埋め戻しを行うよう、本四公団に要望した。これを受けた本四公団は検討を進めたが、しかしこの地区は一般国道28号との取り付き部分にあたり、しかも台地上にあたる地区であるため、道路勾配の関係上、A地区全域を保存することは難しいとの結論であった。そこで県教育委員会は道路勾配を可能な限り大きくし、削平する部分を少なくするように要望した。その結果竪穴住居址1周辺だけが削平されることになり、他の遺構は砂による埋め戻しが行われた後、建設工事が行われた。

有線放送のケーブル埋設工事中に見えられた地区（D地区）については、工事計画が盛土部分にあたり、また遺構も工事計画を変更するほどのものではなかったため、工事計画通り、建設工事が行われた。

## 第 2 節 調査の経過と体制

### 1 昭和57年度の調査

昭和47年の分布調査で遺物の散布が確認された、谷部（後のD区）について確認調査を行った。調査は2m角のグリッド5ヶ所設定し、昭和57年11月2・3日の2日間で実施した。

この調査で、遺構は確認できなかったが、2ヶ所のグリッドで遺物の出土が見られ、遺跡は調査地区の東・北側の台地上に位置している可能性が高いと思われた。

この年度の調査体制は以下の通りである。

調査主体 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査主体	事務担当	課 長	藤本 繁
		参 事	吉村 芳郎
		課 長 補 佐	池田 義雄
		埋蔵文化財係長	大村 敬通
		主 任	西口 和彦
		主 任	小川 良太
		技 術 職 員	水口 富夫
	調査担当	主 査	松下 勝
		主 任	井守 徳男
		技 術 職 員	吉識 雅仁
		技 術 職 員	別府 洋二
		現 場 事 務 員	嶋本 文子
		整 理 作 業 員	浅井多英美
	作 業 員	株式会社西淡建設土木作業員	

### 2 昭和58年度の調査

#### 確 認 調 査

昭和57年度の調査で遺跡の所在する可能性が高いとされた台地上について、本年度の6月30日に淡路考古学研究会の波毛氏と分布調査を実施したところ、台地全体に遺物の散布が認められた。そこで台地全体について確認調査を実施することとなったが、台地の中央から奥側は用地問題が残っている地区があり、その部分を除外して実施した。

調査は昭和58年10月26日から、調査区の内、台地先端部をA地区、台地先端部奥側をB地区、台地中央から奥側をC地区として開始した。調査はまず台地先端部でも奥側の地区（B地区）に2m角のグリッドを設定して行い、遺構の検出された部分には、巾1mのトレンチを追加して行った。その結果この地区では竪穴住居址と、方形周溝墓と思われる方形に巡る

溝が検出され、遺跡の存在は確実となった。そこでさらに台地の先端側の地区（A地区）に2m角のグリッドを設定して調査を行い、遺構が検出されたため、ここでも1m巾のトレンチを追加して調査を実施した。その結果この地区でも竪穴住居址が検出され、遺跡は台地先端部のA・B区には、ほぼ全域に広がっていることが確実となった。またC地区とした地区では時期不明の溝・柱穴等が小範囲で検出されたが、調査の実施できない部分が多く、今回の調査では結論を出せなかった。この地区については用地の問題が解決した後、再度確認調査を行う事とし、今回の調査は取り敢えず、昭和58年11月3日に終了した。

用地買取等の問題で、調査が十分にできなかった、C地区の調査は用地問題が解決した昭和58年12月21・22日に、前回の調査で時期不明の遺構が検出された地区を中心に、2m角のグリッドを設定して実施した。しかし今回の調査では多少の土器の出土があったものの、遺構は検出されなかった。そこでこの地区については、新たな調査の必要が無いものと判断し、一応今回の調査だけで終了することにした。

#### 全面調査

本年度の全面調査は工事工程の関係から、台地先端部でも奥側のB地区約4,400㎡について実施した。ただ洲本インターチェンジの建設工事がすでに実施されており、その工事への進入路が必要なこと、さらにB地区の中央を市道が通っており、これの迂回路が必要なことなどから、調査区の東端は現表土の上に盛土をし、工事用道路と市道の迂回路とすることになり、この部分の調査は次年度に回すことになった。こうした工事が本四公団側で行われた後、昭和59年2月6日より全面調査を開始した。調査にあたっては、確認調査で包含層等はほとんど認められなかったこと、また調査期間の関係から、現表土から遺構面までは機械によって掘削し、遺構面の検出及び遺構の掘削だけを人力で行うこととした。

機械による表土掘削は、調査区の北辺から始めたが、途中調査区北端の斜面部で、黒色土層が検出され、内部から多量の土器の出土があった。当初これを包含層と考え、遺構面である黄褐色シルトまで下げたが、後にこれは方形周溝墓3の溝と判明した。また調査区中央南端の地区では包含層が検出されたため、これについては人力による掘り下げを行った。森遺跡の調査が終了した2月20日からは作業員を30名に増やし、遺構の検出・掘削作業を行った。

その結果、この調査では台地頂部から北斜面にかけて方形周溝墓5基と、台地頂部の南半部に竪穴住居址、建物址等が検出され、3月20日にヘリコプターによって航空写真の撮影を行った後、実測作業を行い、昭和59年3月30日をもって、一応終了した。ただ一部実測の作業が残ったが、これは翌年度にあわせて行うこととした。

昭和58年度の体制は以下の通りである。

調査主体 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課長	西沢 良之
		参事	大西 章夫
		課長補佐	池田 義雄
		埋蔵文化財調査係長	榎本 誠一
		技術職員	大平 茂
	調査担当	主任	小川 良太
		技術職員	吉識 雅仁
		技術職員	岸本 一宏
		調査補助員	原田 和幸 山崎 敏昭
		現場事務員	浅井多英美
		整理作業員	山岡 仁美 木下ひふみ
		現場作業員	株式会社橋詰建設作業員

### 3 昭和59年度の調査

#### 全面調査

本年度の調査は昨年度の実測作業が残ったため、昭和59年4月6日、この作業から開始した。また本年度の調査は、B地区東端の工事用道路下の地区約750㎡と台地先端部のA地区約1,300㎡について行う予定であるが、本年度から現場作業員・機械リースの関係は入札によって、業者決定することになり、4月19日に入札を行った。その結果株式会社橋詰建設がこれらの提供業者に決定し、4月26日から、本年度予定の調査を開始した。

調査にあたっては昨年度と同様、遺構面までを機械掘削し、遺構の検出・掘削作業を人力で行うこととした。また工事計画との関係から、B地区の工事用道路下から実施することになり、本四公団によって、工事用道路を昨年度の調査で、調査済みとなった地区に振り替える作業が行われた。そして4月26日、まず機械によって表土を剥く作業から始め、表土がある程度剥かれた4月30日より、人力による遺構の検出・掘削作業を開始した。

この工事用道路下となって残っていたB地区の調査では、昨年度の調査区と異なり、遺構の密度が濃く、また遺構の時期も弥生時代から室町時代に及んでいた。そのため調査には時間がかかり、この地区の調査が終了したのは5月19日であった。

B地区の調査終了が間近になった5月16日から、台地先端部のA地区の表土を機械によって剥ぎ始め、B地区の調査が終了した翌週の5月21日から、A地区の遺構検出・掘削作業を開始した。この地区では堅穴住居址6棟が検出されたが、遺構の密度は薄く、遺構掘削作業は6月16日に終了した。そして6月19日にヘリコプターによって空中写真の撮影を行い、6

月20日からは実測作業にかかった。

ようやくA地区の実測作業も終わりに近づいた7月9日、A地区とB地区を区切る旧淡路鉄道敷地内で、本四公団の依頼を受けた洲本市農業協同組合が、有線放送のケーブルを地下に埋設する工事中に、土器が多量に出土した。そこで急遽本四公団と協議し、取り敢えずこの工事を延期して、遺物の採集等を目的とした調査を実施することになった。

調査にあたってはこの地区をD地区とし、調査は、昭和59年7月13日、すでに工事によってトレンチ状に掘られた埋設溝の断面観察から始め、溝状の落ち込みが認められた部分に限って、トレンチを設定して調査を行った。その結果、2本の溝内から多量の土器の出土があったため、調査には時間がかかり、調査の終了は7月23日となった。

#### 整理調査

全面調査が終了した時点で、出土遺物の整理作業にかかり、本年度は土器の水洗いとネーミング作業を行った。水洗い作業は三原郡西淡町の谷町筋遺跡の調査期間に、その事務所を使用して行った。水洗い作業の終了後、土器の遺存状況が悪いため、バインダーの20%水溶液に浸けた。ネーミング作業は兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行った。ネーミング作業にあたっては作業を簡略化するため、台帳を作成し、遺物には番号化した記号だけを付す事にした。記号は遺跡名をJ Tとし、その下に遺構番号、通し番号とした。ただ包含層出土の遺物は遺跡記号と通し番号だけとした。そこで遺物を遺構・土層ごと整理し、B・A・D地区の順に実施した。

昭和59年度の体制は以下の通りである。

調査主体 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課長	西沢 良之
		参事	大西 章夫
	課長補佐	和田 富男	
		埋蔵文化財調査係長	櫃本 誠一
	技術職員	大平 茂	
		森内 秀造	
	調査担当	技術職員	吉識 雅仁
		技術職員	西口 圭介
	調査補助員	原田 和幸	
		現場事務員	浅井多英美
整理作業員	山岡 仁美	木下ひふみ	

#### 4 昭和61年度の調査

本年度は遺物の整理作業だけを行い、作業は遺物の復元・実測・写真撮影を実施した。た

だD地区以外の遺物は小片が多く、遺存状況も悪いため、復元作業は極めて困難であった。特に竪穴住居址B-2出土の遺物は、出土時にほぼ完形のものでも、復元できないものもあった。

遺物実測は小片が多いことから、遺構出土の遺物についてはかなり小片のものでも実測した。

遺物写真の撮影は森氏に依頼して、昭和62年3月に実施した。

昭和61年度の調査の体制は以下の通りである。

調査主体 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課 長	北村 幸久	
		参 事	森崎 理一	
		課 長 補 佐	池田 義雄	
		課長補佐兼 埋蔵文化財調査係長	大村 敬通	
		技 術 職 員	渡辺 昇	
	調査担当	主 査	小川 良太	
		主 任	吉識 雅仁	
		技 術 職 員	岸本 一宏	
		技 術 職 員	西口 圭介	
		調 査 補 助 員	山板実生子	社領 育代

## 5 昭和63年度の調査

本年度は調査報告書の刊行を目指して、遺物・遺構図のトレース、レイアウト、原稿執筆、印刷の作業を行った。

昭和63年度の体制は以下の通りである。

調査主体 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査体制	事務担当	課 長	中根 孝司	
		課 長 補 佐	松下 勝	
		主 査	小川 良太	
		主 任	岡田 章一	
	調査担当	主 任	吉識 雅仁	
		技 術 職 員	岸本 一宏	
		技 術 職 員	西口 圭介	
		調 査 補 助 員	大下 明	和田早芳子
			前田 陽子	吉本 佳恵

### 第 3 節 遺跡の環境

#### 1 地理的環境

瀬戸内海東部に浮かぶ淡路島は、東は大阪湾に、西は播磨灘に面し、南は太平洋を望む。本州側とは明石海峡で隔てられ、紀伊半島とは紀淡海峡を挟み、四国とは渦潮で有名な鳴門海峡を挟んで対峙している。本州四国連絡橋の一つ、鳴門海峡に架かる大鳴門橋の開通で、四国とは陸続きとなり、大経済圏である阪神間と四国を結ぶ島として、またリゾート地として、淡路島の占める位置はますます高まりつつある。

淡路島の気候は年平均気温約15.5°Cと温暖で、年間降水量は約1,550mmと少ない<sup>(1)</sup>。この温暖な気候を利用して、野菜の促成栽培、花卉栽培等が行われている。ただ降水量が少ない上に、山肌が海岸まで迫っているため貯水がしにくく、恒常的に水不足が言われる地域である。

淡路島の地形は、北部と南部で異なる。島北部は津名丘陵と呼ばれ、六甲山地に連なる、大阪層群で形成された丘陵地帯であるのに対し、島南部は島南端を走る中央構造線に沿って、和泉層群の砂岩で構成された、論鶴羽山地がそびえる。

島北部は津名丘陵の山足がそのまま海に落ちているため、平野部は少ない。ただ丘陵の傾斜は緩やかな上、桶歯状に開折谷が深く入り込み、この谷を利用して溜池等の灌漑施設が造られ、丘陵上は頂部近くまで階段状に開墾されている。丘陵地帯の南端には額家花崗岩で形成され、島民の信仰が厚い先山がそびえている。

島南部は標高600mを越える論鶴羽山を中心として、400mを越える山地が連なる。この山地の南斜面は急峻で、直接海に落ちる。山地の北斜面は裾部になだらかな丘陵が続き、一部は洲本平野内に独立丘陵のような形で伸びている。ただこの丘陵は構成される岩のためか、農地として開墾されていない。

これら両山地の交界部に平野部が広がり、分水嶺である中山峠を挟んで、西側が三原平野、東側が洲本平野と呼ばれる。面積は三原平野側が広い。

遺跡の所在する洲本平野は、東側だけが大阪湾に面して開け、三方を山に囲まれた平野である。平野の北側は津名丘陵の南端と、そこに突き出た先山がそびえ、南側は低い丘陵地帯が広がり、その背後に論鶴羽山地が高くそびえる。西側は論鶴羽山地の裾から丘陵地帯が伸び、三原平野と画している。

また洲本平野は洲本川と、その支流である千草川の流域に広がった平野である。洲本川は論鶴羽山地の中央付近を源とし、北流した後、平野部の北端を東流して、大阪湾に注ぎ込む。千草川は論鶴羽山地の東端付近を源とし、平野部南端を東流した後、北流して、洲本川の河口付近に注ぎ込んでいる。かつては直接大阪湾に注ぎ込んでいた時期もあったようである。

平野内部の地形は大きく分けると、2本の河川流域に広がる沖積地と、平野の中央に広がる中位段丘とで形成される。平野中央の中位段丘は平野部のかなりの部分を占め、その上部は開析されて、なだらかな起伏を持つ。現在は大池・金屋大池等の溜池を灌漑施設として、その大部分は水田化されている。沖積地は洲本川と千草川の流域に中狭く形成されている。その中で洲本川流域の沖積地は、洲本川が東に向きを変えた、中流域から下流域に広がり、平野内では最も大規模な沖積地が形成されている。

こうした沖積地、段丘以外に現在は、先山の南裾に取りつく丘陵上も、水田化されている。この丘陵は津名丘陵の南端にあたり、先山からの水によって開析を受け、細く深い谷が櫛歯状に入り込んでいる。この谷を利用して溜池が造られ、先山からの水を堰き止めて、丘陵上の水田の灌漑にあてられている<sup>(2)</sup>。

## 2 歴史的環境 (第1図)

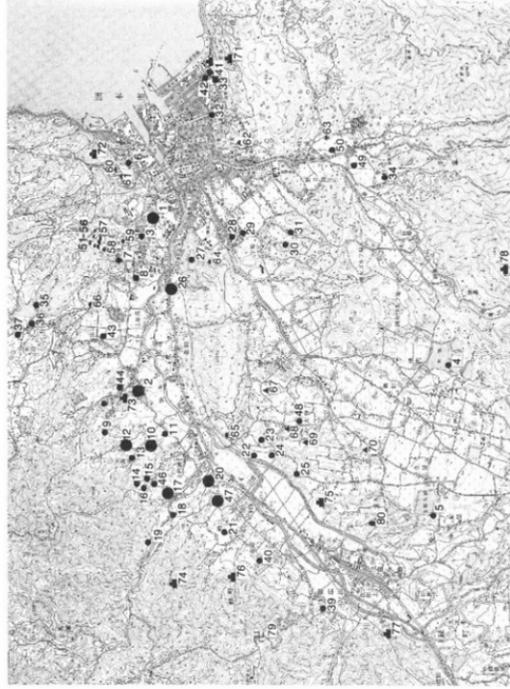
洲本平野は淡路島内では遺跡の分布密度の高い地域である。特に沖積地の広がる洲本川の、中流域から下流域の左岸に集中する傾向があり、千草川流域は極めて薄い分布となっている。

現在洲本平野では旧石器時代の遺跡は知られておらず、淡路島全体でも確実にこの時代に属すると考えられるのは、三原郡三原町神代で採集された石器がある程度である。この他旧石器から縄文時代の始めと思われる有舌先頭器が、洲本市由良佐長真野谷で採集されている<sup>(4)</sup>。

縄文時代の遺跡も少なく、洲本市武山遺跡・金屋大池遺跡・池の内大池遺跡が知られている程度である。武山遺跡は南淡路を代表する縄文時代の遺跡で、昭和48年に発掘調査が行われ、前・中期の遺物が出土している。遺物の多くは北白川下層Ⅲ式・里木Ⅰ式に類別が求められているが、中部地方に類例を求められるものも1点出土しているようである<sup>(5)</sup>。

弥生時代に入ると遺跡の数は増加し、その多くは、洲本川の形成した沖積地と、その縁辺に立地する。弥生時代の代表的な遺跡としては、先の武山遺跡と、洲本市下内膳遺跡があげられる。武山遺跡は洲本川下流の沖積地に位置し、遺構として中期前半の方形周溝墓が検出されている。出土した遺物は中期後半の遺物をのぞいては、ほぼ弥生時代の全期間に及んでいる。遺跡の規模等不明なことが多いが、洲本川下流域の拠点的な集落と思われる<sup>(6)</sup>。下内膳遺跡は山麓の沖積地に位置し、前期から後期に至る遺物を出土している。遺物の中には紀伊の影響が見られるようであり、この遺跡は洲本川中流域の拠点的な集落と考えられる。ただ武山遺跡よりは出現がやや遅れ、前期でも新しい段階から始まる集落のようである<sup>(6)</sup>。

こうした前期から後期にかけて継続する集落とは異なり、中期後半以降洲本川中流域の沖積地を望む中位段丘の縁辺や、洲本平野の北を縁取る丘陵地帯に、断続的な集落が営まれるようになる。丘陵上に位置する遺跡の代表的な遺跡として、洲本市の大森谷遺跡と下加茂岡遺跡が上げられる。大森谷遺跡は先山山麓の丘陵上に位置する遺跡で、中期末から後期後半にかけての遺跡である。竪穴住居址等が検出され、出土遺物の中には河内・紀伊・瀬戸内東



第1図 位置と周辺の道路

遺跡名	時代	備考
1 武山遺跡	縄文・弥生・古墳	
2 下野原遺跡	弥生・古墳・平安・中世	
3 芝の台遺跡	弥生(前)	
4 他社の代人遺跡	縄文・平安	下野原
5 金屋遺跡	縄文	下野原
6 龍遺跡	弥生(中)	
7 下加茂遺跡	弥生(中・後)	
8 耳野遺跡	弥生(中)	
9 井野遺跡	弥生・古墳	
10 大谷谷野遺跡	弥生(後)	
11 方谷遺跡	弥生	
12 大谷谷遺跡	弥生	
13 大谷谷田遺跡	弥生	
14 尾籠丸山遺跡	弥生	
15 尾籠田遺跡	弥生	
16 ハナ遺跡	弥生	
17 龍遺跡	弥生(中)古墳(後)	
18 大野遺跡	弥生(後)	
19 龍田遺跡	弥生(後)	
20 年中遺跡	弥生(後)古墳(上層)	石橋
21 二反相遺跡	弥生(後)古墳(上層)	石橋
22 戸持遺跡	弥生(後)	
23 藤林遺跡	弥生(後)	
24 笠田遺跡	弥生(後)古墳(後)	
25 金屋山遺跡	弥生(後)	
26 尾籠田遺跡	弥生(中)	
27 尾籠山遺跡	弥生(中・後)	

遺跡名	時代	備考
28 加茂遺跡(水田)	弥生(中)・古墳	
29 馬木遺跡(日蓮)	弥生・古墳・平安	
30 大野池遺跡	弥生(中・後)	
31 澤田遺跡	弥生	
32 所尾遺跡	弥生(後)	
33 山下町遺跡	弥生	
34 下野遺跡	弥生	
35 三本間遺跡	弥生	
36 清沢遺跡	弥生	
37 西の下遺跡	弥生	
38 宮崎遺跡	弥生(末)	彌生土器
39 宮の下遺跡	弥生(後)	
40 堀野遺跡	弥生	
41 城戸遺跡	弥生(中・後)	
42 山宮田遺跡	弥生(後)	
43 赤巻遺跡	古墳	
44 下池遺跡	古墳(後)	
45 西の横遺跡	平安	
46 向上遺跡	奈良	
47 野原遺跡	奈良	
48 野上遺跡	奈良	
49 中川遺跡	奈良・奈良	
50 明山遺跡	奈良	
51 下加茂1号墳	古墳(後)	
52 下加茂2号墳	古墳(後)	
53 下加茂3号墳	古墳(後)	
54 下加茂4号墳	古墳(後)	

遺跡名	時代	備考
55 下加茂5号墳	古墳(後)	
56 下加茂6号墳	古墳(後)	
57 加茂の石遺跡	古墳(前)	
58 宇山遺跡	古墳(後)	
59 下加茂河川遺跡	古墳(後)	
60 宇山取壊1号墳	古墳	
61 宇山取壊2号墳	古墳	
62 龍田山古墳	古墳(後)	
63 尾籠丸山古墳	古墳(後)	
64 尾籠谷古墳	古墳(後)	
65 尾山古墳	古墳(後)	
66 尾の森古墳	古墳(後)	
67 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
68 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
69 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
70 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
71 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
72 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
73 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
74 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
75 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
76 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
77 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
78 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
79 尾籠河川古墳群	古墳(後)	
80 尾籠河川古墳群	古墳(後)	

表1 遺跡地誌表

部の影響が見られる。段丘の縁辺に位置する遺跡としては洲本市の森遺跡が調査されている。この遺跡では中期後半の竪穴住居址が検出され、主として中期後半と後期後半の遺物が出土している。中期後半の遺物には簾状文を描いた土器等、畿内的な影響が見られる。

またそれまで遺跡の分布が見られなかった、千草川流域にも遺跡の分布は拡大して行き、千草川の支流である桶戸野川流域には馬木遺跡・太郎池遺跡等が営まれるようになる。

このような中期後半以降の遺跡分布の拡大から、洲本平野での弥生時代は、洲本川の河口近くから始まり、順次洲本川を逆上って拡大していったと言われている<sup>(10)</sup>。

これらの集落遺跡とは異なり、弥生時代の後期には、海浜に面した地域で、製塩が始まったことが、洲本市の宮崎遺跡等で確認されている<sup>(4)</sup>。

この他淡路の弥生時代を特徴づけるのは、銅鐸の出土数が極めて多いことであろう。現在最大数を取れば、13遺跡から20口の銅鐸が出土している<sup>(11)</sup>。その内洲本平野では緑町広田堂丸から扁平鈕式6区袈裟禪文銅鐸が、洲本市中川原から菱環鈕式2区横帯文銅鐸が出土している。この他出土地ははっきりしないが、扁平鈕式6区袈裟禪文銅鐸が知られている。

古墳時代の集落遺跡としては、下内膳遺跡と森遺跡が上げられる。下内膳遺跡では前期に属する竪穴住居址が検出され、出土した遺物には紀伊の影響が見られるようである<sup>(6)</sup>。森遺跡は中期から後期にかけての遺跡で、竪穴住居址8棟検出されている。この内6世紀後半の住居址には作り付けの竈を伴い、淡路にもこの時期に電が普及したことが確認されている<sup>(9)</sup>。

弥生時代に出現した製塩遺跡はこの時期、現在の洲本市の中心街付近に多く見られ、旧城内遺跡<sup>(12)</sup>、山下町居屋敷遺跡等が知られている<sup>(13)</sup>。

古墳は淡路島全体に少なく、洲本平野もその例外ではない。洲本平野の内部では、現在16基の古墳が知られているが、墳形のわかるものは全て円墳で、前方後円墳は知られていない。またその分布については洲本川下流域の丘陵上、あるいは旧海浜に面した丘陵上に多く、洲本川中流域、千草川流域には極めて少ない。特に弥生時代以降、下内膳遺跡を中心として、遺跡密度の高い洲本川中流域には1基のみが知られているにすぎない。この地域の古墳の分布密度の薄さは、後世の丘陵地帯の開墾と無関係ではないと思われる。

前期に属する古墳としては、洲本市の下加茂コヤダニ古墳だけである。この古墳は淡路島で唯一の三角縁神獣鏡を出土しているが、調査によったものではないため、出土状況は不明である。ただ内部主体は竪穴石室であったようである<sup>(14)</sup>。この他前期に属する可能性のあるものとしては、洲本市の宇山牧場1号墳がある。この古墳は大正年間の畜産試験場建設の際に、五銖銭数枚と素文鏡1面が出土している<sup>(14)</sup>。

中期に属すると思われる古墳は現在1基も無く、上記の2基以外は後期古墳である。ただ洲本市のバベの森古墳・下加茂岡古墳・宇山牧場2号墳が後期よりも古くなる可能性がある。バベの森古墳・下加茂岡古墳は緑泥片岩を使用した箱式石棺を埋葬施設とした古墳である。

宇山牧場2号墳は板石が確認されたようであるが埋葬施設ははっきりしない。しかし宇山牧場1号墳に近接して築かれており、後期よりも古くなる可能性がある。

後期古墳の内、洲本市の下加茂岡群集墳は、平野内では唯一の群集墳で、円墳4基と墳形の不明な2基の古墳で構成される群集墳である。この内2号墳は横穴石室を埋葬施設とする古墳であり、他の古墳も石材が周囲に見られることから、横穴石室を埋葬施設とする古墳であった可能性が高い。下加茂岡群集墳以外の古墳は非常に散在しており、地域的にまとまるといった傾向も見られない。こうした状況の中で、洲本市曲田山古墳は全長約8.4m、高さ1.7mの横穴石室を埋葬施設とする古墳で、淡路では大規模な横穴石室に入る<sup>(15)</sup>。逆に洲本市の亀谷古墳は全長約2.4m、高さ約1mと、非常に小規模な横穴石室を埋葬施設とする古墳である。

このような洲本平野の古墳の特徴として上げられることは、古墳の数が極めて少ないこと、大規模な古墳がないこと、埴輪を伴う古墳がないこと、さらに石棺を持つ古墳がないことなどである。これらの点は何も洲本平野だけに限ったことではなく、淡路島全体に言えることである。古墳の数が少ないことについては後世の開墾もその一因であろう。特に洲本川中流域には1基の古墳が存在するだけであり、先山の裾に広がる丘陵地帯では古墳は全く見られない。これは丘陵地帯が頂部まで開墾されていることと、密接な関係があるものと思われる。

また大規模な古墳、埴輪を伴う古墳、石棺を持つ古墳等が洲本平野に見られないことは、この地域に有力な勢力が育たなかったことを表している。その要因としては洲本平野の沖積地が狭いことが考えられる。洲本平野は現在、中央に広がる中位段丘上まで水田化されて、平野としては比較的広い面積を持つ。しかし中位段丘は次の奈良時代においても繁業生産の場として利用されており、段丘上の水田化はかなり遅れるものと思われる。したがって当時、洲本平野の可耕地は洲本川・千草川流域の沖積地に限られ、面積的には極めて狭いものであったと考えられる。その経済基盤の弱さから、有力な勢力は育ちにくかったと思われる。

律令期には淡路島全体は「淡路」一国とされ、南海道に編入されている。「淡路」は「下国」に位置づけられ、「三原」「津名」の2郡に分けられて、国府は三原平野側に置かれる。「三原」郡は6郷に、「津名」郡は10郷に分けられ、「和名抄」によれば、当時の「田」の面積は約2,561町となっている<sup>(16)</sup>。洲本平野は津名郡に属し、諸説はあるが、「物部」・「加茂」・「広田」の3郷が置かれたとされている。その位置については物部郷が千草川の流域、加茂郷は洲本川の下流域から中流域にかけて、広田郷が洲本川の中流域から上流域にかけてと考えられている。この3郷の他「津名」郷も洲本平野内に比定する説がある<sup>(14)</sup>。

また淡路国内には「由良」・「大野」・「福良」等の南海道の駅が置かれた。この内洲本平野には「大野」の駅が置かれていたようであり、現在の洲本市大野付近がその比定地となっている<sup>(17)</sup>。南海道の位置については諸説があり、一定はしていない。しかし紀伊国から、「由良」駅が置かれたとされる洲本市由良に渡り、そこから山中を抜けて洲本平野に出て、洲本市千

草・物部・宇原を經由して「大野」駅に至り、大野駅から中山峠を越えて、三原平野に入り、国府の比定地である三原町市付近を通って、「福良」駅に至ると言う説が、比較的有力である。<sup>(18)</sup>

この時期の集落遺跡としては下内膳遺跡・里池遺跡・鴨根原遺跡・馬木遺跡・中村遺跡等がある。下内膳遺跡では掘立柱建物址が検出され、出土遺物に円面硯・緑釉陶器がみられる。現在判っているこの時期の遺跡の中では、最も官衙的な様相を示す遺跡である。里池遺跡は圃場整備に伴って調査され、柱穴等が確認されている。<sup>(19)</sup>その他の遺跡は分布調査で遺物が採集されているだけであり、詳細は不明である。これらの集落遺跡はいずれも洲本平野の沖積地や、その縁辺の段丘上に位置しており、弥生時代以降の遺跡立地と大きく変わっていない。

「大野」駅が比定されている洲本市の大野付近は、この時期、窯業生産の中心地であり、庄慶陶瓦窯址・土生寺陶瓦窯址・新宮窯址・官林瓦窯址が確認されている。庄慶陶瓦窯址は7世紀後半頃から、須恵器とともに瓦・硯等の生産を開始し、洲本平野では最も早く操業を開始した窯址である。<sup>(20)</sup>庄慶陶瓦窯址に続くのが土生寺陶瓦窯址で、この窯址は8世紀前半に操業を開始する。続いて新宮窯址が8世紀後半に、官林瓦窯址が平安時代に入って操業している。<sup>(21)</sup>これらの窯址は段丘上の起伏を利用して営まれている。

「延喜式」によれば、淡路の調の品目の一つに塩が上げられ、平城京からは塩を納めた付け札が出土している。したがって製塩が行われていたことは確かだろうが、この時期の製塩遺跡は確認されていない。また同じ平城京から出土した木簡に、加茂の里人が米を納めた物も見られ、「加茂」里は洲本市上加茂・下加茂付近に比定されている。<sup>(22)</sup>

荘園制成立後、洲本平野の大部分が荘園の中に組み込まれて行く。僅かに加茂郷が国衙領として、遅くまで残っていたようである。洲本川の流域には広田荘・内講荘・炬口荘が成立し、千草川の流域には築佐荘・物部荘が成立する。この内広田荘は広田神社領として古代に成立しているが、他の荘園の成立は中世に入ってからのようである。

中世前半、淡路は佐々木氏が守護に任命され、中世後半は細川氏が守護となる。そして細川氏は三好氏に亡ぼされ、淡路は三好氏の支配するところとなる。その一方中世後半には淡路の国人も安宅氏を始め台頭してくる。16世紀には安宅氏は洲本城・炬口城等を居城とし、16世紀後半豊臣氏によって亡ぼされたと言われている。その他洲本平野を取り囲む山々には城主もはっきりしない城址が残されており、遺跡背後の丘陵上にも羽風山城が残されている。<sup>(23)</sup>

中世の遺跡としては下内膳遺跡・大森谷遺跡・森遺跡等があげられる。大森谷遺跡では12世紀から15世紀にかけての建物址が検出され、13世紀までは魚住を中心とした遺物が出土し、それ以降は備前焼を中心とした遺物が出土している。<sup>(24)</sup>森遺跡は12世紀から16世紀にかけての遺跡であり、13世紀までは常滑等が出土しているが、それ以降は備前焼が搬入陶器の中心に

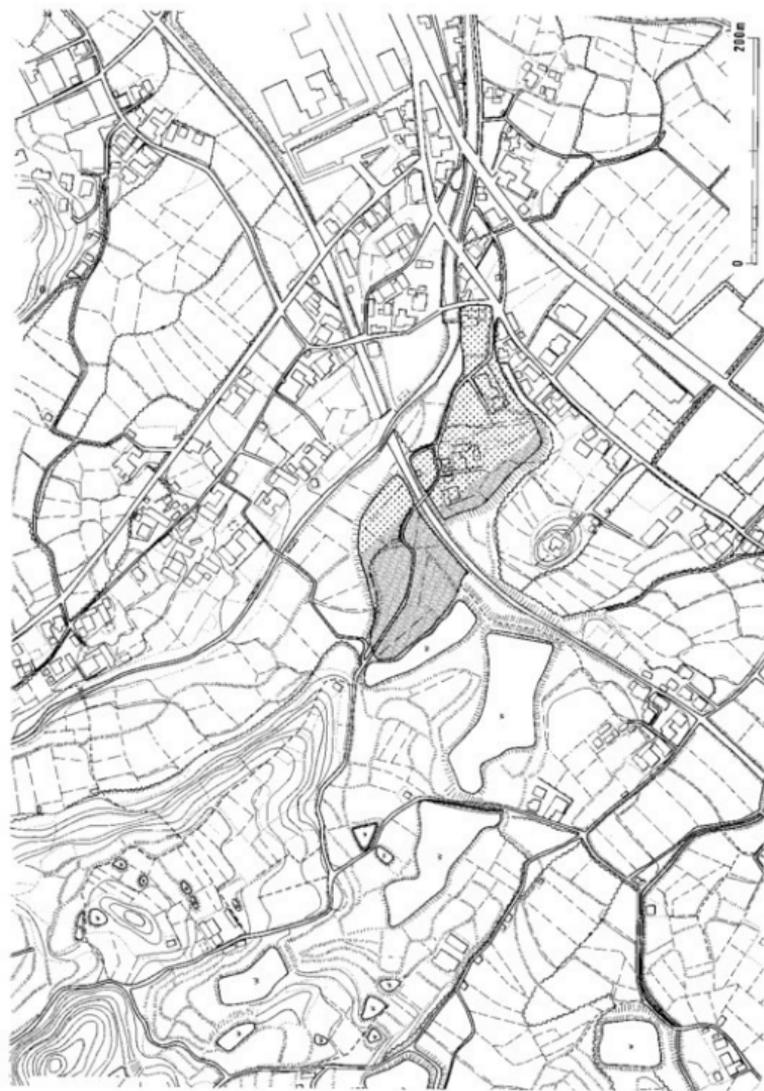
なっている。<sup>(9)</sup> これら中世の遺跡も立地は沖積地と、それを望む河岸段丘や丘陵裾部であり、洲本平野の中央に広がる段丘上は、現在のところ遺跡の分布は見られない。

中世、阿波藩とのつながりが強くなった淡路は、近世以降そのまま阿波蜂須賀氏の所領とされた。そして蜂須賀氏は家来である福田氏を淡路城代とし、淡路を治めたとされている。<sup>(14)</sup>

〔註〕

- (1) 洲本藩領所調べ
- (2) 以下の文献を参考にした。  
高橋学「地理的環境」『志知川沖田南遺跡—淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』  
兵庫県教育委員会 1986年  
植賀正夫「自然環境」『三原郡誌』三原郡誌編纂委員会 1979年  
神戸新聞社学芸部「地形と地質」『兵庫探検自然編』神戸新聞社 1974年
- (3) 神戸新聞1986年7月16日掲載記事
- (4) 『洲本市内遺跡分布調査概報Ⅰ』洲本市教育委員会 1983年
- (5) 丹羽佑一「武山遺跡発掘調査報告」洲本市教育委員会 1974年
- (6) 『下内膳遺跡発掘ニュース1～3』下内膳遺跡調査団 1978年  
「下内膳加茂校遺跡出土品について」『淡路地方史研究会誌3』淡路考古学研究会 1966年  
遺物・遺跡の具体的な内容については浦上雅史氏の教示を得た。
- (7) 別府洋二他「大森谷遺跡」淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 兵庫県教育委員会 1985年
- (8) 村川行弘「下加茂岡遺跡発掘調査概報」1963年
- (9) 古舘雅仁他「森遺跡」淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 兵庫県教育委員会 1988年
- (10) 岡本稔「淡路弥生式時代の研究—洲本川流域の遺跡を中心として—」『淡路考古学研究会誌2』淡路考古学研究会 1974年
- (11) 種定淳介「兵庫の銅鐸」兵庫県立歴史博物館 1987年
- (12) 田村昭治「旧城内遺跡—製塩遺跡—」『淡路考古学研究会誌2』淡路考古学研究会 1974年
- (13) 岡本稔他「山下町居屋敷遺跡発掘調査報告」洲本市教育委員会 1975年
- (14) 新見賢次「洲本市史」洲本市 1974年
- (15) 浦上雅史他「曲田山古墳石室実測調査報告書」『淡路考古学研究会誌2』淡路考古学研究会 1974年
- (16) 池邊 彌「和名類聚地名考証」古川弘文館 1981年
- (17) 菊川兼男「三原郡誌」三原郡誌編纂委員会 1979年  
今井林太郎他「兵庫県史 第1巻」兵庫県史編纂委員会 1974年
- (18) 代表的な説に「淡路常舞草」の上陸地を洲本市由良付近とし、そこから山越えて洲本市千種に出、千種川沿いに北上し、洲本市物部から西進して大野駅に至るとの説と、「兵庫県史」の上陸地は同じ洲本市由良付近とし、上陸後は海岸沿いに北上し、途中から山越えて、洲本市小路谷・上物部・大野に至る説がある。

- (19) 岡本稔「昭和53年度・洲本市上加茂・中河原町安板地区内農業基盤整備事業に伴う緊急発掘調査実績報告」『淡路考古学研究会誌第3号』淡路考古学研究会 1980年
- (20) 田辺昭二「大野庄塵須恵器窯跡について」『淡路考古学研究会誌1』淡路考古学研究会 1972年
- (21) 浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌3』淡路考古学研究会 1980年
- (22) 今井林太郎他『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』兵庫県教育委員会 1982年



第2図 遺跡の範囲と調査区 (網点部分…道路推定範囲、細い網点部分…調査区)



第3图 遗址全图

## 第 2 章 A 地区の調査

### 第 1 節 調査区の概要

A地区は旧淡路鉄道によって分断された台地の先端側の調査区であり(第3図)、台地の西端をかすめる長さ約103m・最大巾約19mの、北西から南東にかけて細長い調査区である。A地区の西側から南側は段丘崖となつて、急傾斜で落ち、下方の水田面との比高差は約8mを測る。調査区内の現状は大部分が水田であるが、一部宅地も含まれている。この宅地部分が約30cm程水田面より高く、南端の水田が北2枚の水田より約10cm程低くなつていた。

遺構は段丘を形成する黄褐色シルト面で検出されたが、後世の開墾で削平を受けたと思われる痕跡が竪穴住居址A-1両側と、宅地下となつていた部分で認められた。また竪穴住居址A-3の遺存状況から見ても、黄褐色シルト上面はかなり削平を受けたことが窺える。住居址A-1の北側では現在の畦畔下に、削り出して造られたと思われる畦畔状の高まりが、約15cmの高さで検出されている。これからすれば住居址A-1の周辺では、15cm以上の削平を受けたことは確実である。さらに調査区南端の東側には墓地があり、周囲より約1m近く、高くなつてゐる。この墓地が台地本来の高さを残しているかどうかは不明だが、開墾時に台地全体が大きく削平されたことは確かであろう。

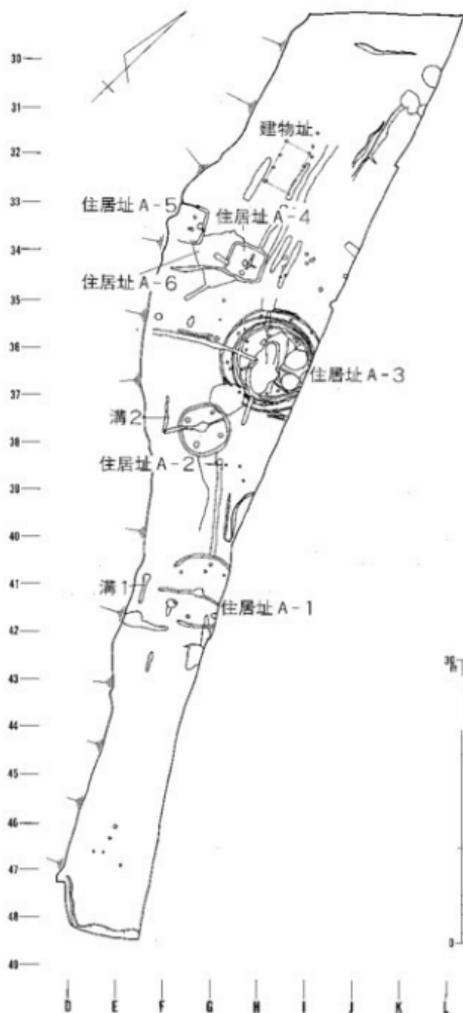
また遺構の検出面である黄褐色シルト上面は、こうした削平だけではなく、土壌等によつて攪乱を受けている。特に住居址A-3の中央やその北側、さらに住居址A-1の南側等は後世の土壌や溝によつて、大きく攪乱を受けていた。住居址A-3の中央の土壌は2基が切り合つて、住居址に設けられていたと思われる中央土壌・屋内小溝等を消滅させていた。2基の土壌はともに内部に板敷がされ、石組みが施されていた。この土壌のすぐ東側には円形の土壌があり、内部に施設は認められなかったが、おそらく近世以降の墓と思われる。また住居址A-3の北側には住居址の際溝を切つて、長方形の土壌が検出された。この土壌内部にも石組みがあり、住居址中央を攪乱している土壌とほぼ同様の性格と考えてよいものと思われる。この他住居址A-4・5・6の北側には、並行して走る5本の溝が認められた。これらの溝は現在の水田の畦畔と同方向であり、深さも浅いことから、後世の鋤跡と思われる。

遺構の検出面である黄褐色シルト上面は、調査区の東端が最も高いが、調査区の中央北寄り付近では台地上の平坦面が西側の谷に向かって、僅かに張り出している。そこに竪穴住居址群が位置している。住居址A-5の西壁が流失していることからすれば、この張り出しは本来もっと大きかつたものと思われる。これ以外の部分では調査区中央から西は、調査区外の谷部に向かって落ちる傾斜面となつてゐる。特に竪穴住居址A-5付近から南は、調査区

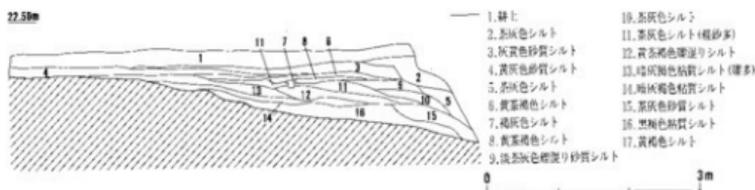
の中央から急激に落ち、崖状となって調査区西側の谷に落ちる。竪穴住居址A-1はこの崖状の落ちによって西壁を失っており、葉落が営まれた後にも崩壊したようである。住居址A-1の西側斜面、住居址A-2の西側斜面で排水溝と接して検出された溝状遺構は、土器を内蔵していたが遺構とは考えにくく、この台地西斜面の崩壊した痕跡であろう。また調査区北端付近は、調査区東端から西端に向かって緩やかな傾斜を示し、D地区に向かって落ちて行く。A地区の北側は旧淡路鉄道の線路敷によって台地が切られているため、はっきりはしないが、A地区北端の傾斜はA地区の北側に、本来小さな谷が入り込んでいたためと思われる。

A地区は細長い調査区であることから、調査にあたっては、土層観察用の畦畔は調査区の中央37ラインに1本残しただけである。他は調査区の周囲の壁を土層観察用にあてた。その結果斜面にあたる調査区の西半で、包含層等の土層の堆積が認められただけで、台地上の平坦面にあたる調査区東半では、現在の

耕作土直下で、遺構の検出面である黄褐色シルトが検出され、土層の堆積はまったく認められなかった。調査区の東端は台地上に当たることから本来土層の堆積があまりなかったこと



第4図 A地区全体図



第5図 A地区土層図

から、後世の削平の影響を大きく受けたため、このように土層の堆積が全く認められず、耕作土直下で遺構が検出されるということになったものと思われる。

斜面側の調査区西端は耕作土下に床土が認められ(第5図)、第6層以下が自然堆積の土層と思われる。第2・5層は茶灰色シルトであるが、礫を含み、土層に全く締まりが無い。おそらく新しい時期に落ちた流土であろう。第7層はビット状に落ち込み、中世以降のビットの埋土と思われる。どの土層からも少量の土器は出土するが、弥生土器の包含が顕著なのは第16層の黒褐色シルト層であった。ただこの土層は調査区全体には見られず、住居址A-5から調査区北端付近の緩やかな傾斜を持つ地域にかけてと、住居址A-2から住居址A-1の南にかけての、台地が崩壊したと思われる台地斜面部で見られた。中世以降の土器は第15層以上の土層から出土し、中世包含層は台地の西側斜面部の全域と、調査区北端付近の緩い傾斜をもつ部分から、調査区北端にかけての地域で認められた。

これら第6層から第16層までの土層の堆積状態を見ると、東から西に傾斜して堆積しており、調査区東半の台地平坦面から土層が供給されたことが窺える。

この調査区では竪穴住居址群が検出されたが(第4図)、その内弥生時代中期に属するのは、竪穴住居址A-2だけである。この住居址は台地が西側の谷に向かって落ち込み始める、傾斜の変換点に位置し、排水溝と思われる小溝を谷に向かって伸ばしている。

弥生時代後期の遺構は竪穴住居址5棟があり、住居址A-1以外は調査区中央の、台地が少し西に張り出した地区に位置している。ただ住居址A-1付近は後世にかなり崩落しており、本来は他の住居址が位置する張り出しが少しすばまったような所に位置していた可能性もある。

住居址群の内、住居址A-4・5・6に切り合い関係が見られたり、住居址A-3では壁溝が同心円状に検出され、数回の同一場所での建替えが見られたりする。このような住居址の在り方はB地区の住居址群の在り方と異なっており、A地区が居住空間として、B地区より長く続いたようである。

中世と思われる遺構は、住居址A-4・5・6の北で検出した建物址1棟だけである。他に柱穴状の遺構が検出されているが、時期的には不明である。

## 第 2 節 遺 構

### 1 弥生時代の遺構

この時期の遺構としては、調査区の中央で集中して検出された竪穴住居址 6 棟と、西側の斜面部で検出された溝状遺構 2 本がある。以下住居址番号は前後するが、时期的に古いものから記していく。

#### 住居址 A-2 (第 6 図)

調査区のほぼ中央、台地平坦面が西に張り出した南側の付け根あたりで検出された住居址で、台地平坦面が西側谷部に落ちる傾斜の変換点に位置する住居址である。

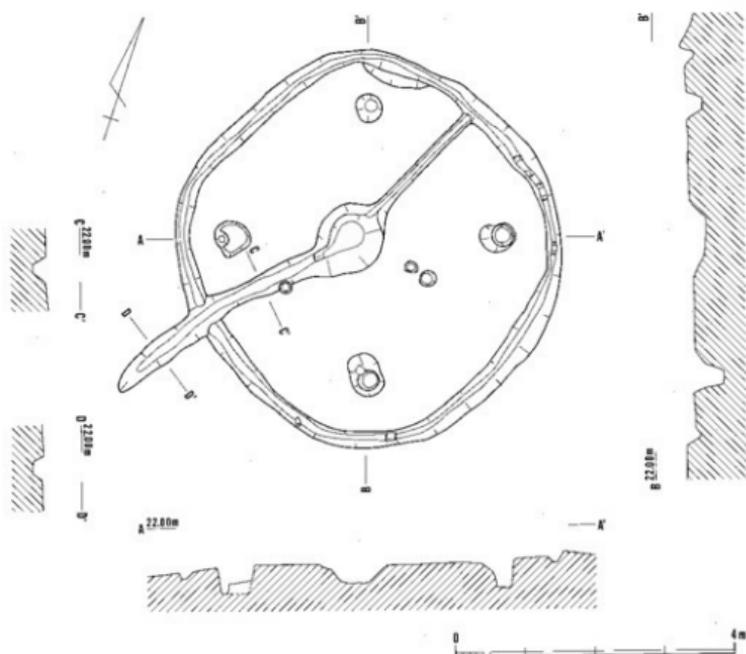
住居址の壁は最高約 21cm まで確認されたが、北壁の一部は後世の土壌によって切られ、斜面下方側にあたる西壁は、ほぼ床面と同じ高さまで、流失していた。ただ壁下には設けられた巾約 20cm・深さ約 3~11cm の壁溝は、壁を流失あるいは壁が攪乱されていた部分でも、遺存しており、この壁溝で住居址の規模・平面形等を窺うことができた。

住居址は、主柱穴付近でやや角張った、径約 5.3m の円形を呈し、住居址の規模から壁面・壁溝を除いた床面規模は径約 4.7m、床面積は約 19.3m<sup>2</sup> を測る。今回検出された住居址の中では小規模なものであるが、同時期と考えられる住居址 B-4 とはほぼ同規模となっている。

床面上からは柱穴 7 本が検出されたが、この内主柱穴はほぼ方形に配置された 4 本である。主柱穴の内、北隅の柱穴を除く 3 本に、柱の抜き取り痕が認められた。特に西隅の柱穴には抜き取った後、50cm 大の川原石が埋め込まれていた。柱の抜き取りは住居址の中央から外側に向かって行われている。主柱穴のほかに小柱穴が 3 本、床面上から検出されている。その中には床面を 2 分する小溝と切り合っているものがあり、本住居址に伴わないものもあると思われる。

床面の中央には、長径約 120cm・短径約 92cm・深さ約 27cm を測る、楕円形の土壌が設けられていた。この中央土壌の北壁は約 5~7cm の深さまでは緩い傾斜をもって掘られ、そこから底までは急な傾斜で掘られている。緩い傾斜の部分では僅かの範囲であったが、焼土化した壁面が認められた。埋土中には炭化物・焼土が認められた。

この中央土壌を貫くように、斜面上方側である東側の壁溝から、斜面下方側である西側の壁溝まで小溝が設けられ、そこからさらに西側の谷に向かって、約 1.5m 伸び、台地の斜面部で垂れ流しの状態で終わっていた。この小溝は中央土壌の東側では巾約 16cm・深さ約 6~11cm と細く浅いものであるが、中央土壌の西側では巾約 30cm・深さ約 12~17cm を測る。溝の底面はほぼ東側の壁溝部分が高く、西壁溝部分が約 20cm 低くなっている。さらに屋外にあたると思われる西側斜面部では、東側壁溝より約 30cm 低くなっていた。壁溝との連結は、東側の壁溝部分では壁溝が約 8cm 深く、西壁溝部分では中央の小溝が約 8cm 深くくなっている。また



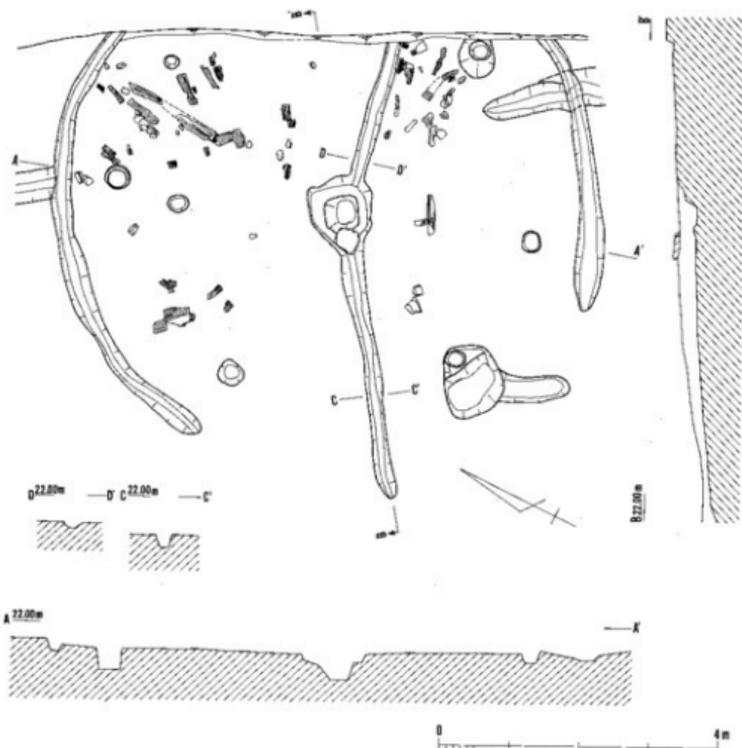
第6図 住居址 A-2

中央土壇との関係は、小溝が中央土壇より約10cm浅くっており、実際に水が流れたとすると、中央土壇には水が溜まった状態となる。

床面はほぼ斜面上方側の東側から斜面下方側の西側に向かって僅かに傾斜していた。床面上には、中央土壇の周辺に焼土と炭化物が見られ、中央土壇の東側では焼土と炭化物が集中する部分が認められた。また中央土壇の周囲には小溝部分を除いて、炭化物の集中が認められた。

遺物は中央土壇の西側の床面上から若干出土しているが、床面上からの遺物の多くは弥生時代中期の畿内第Ⅳ様式に並行するものであった。しかし床面上の遺物には一部弥生時代後期に属するものがあり、また埋土中にはかなり多くの弥生時代後期の遺物が含まれていた。

したがってこの住居址の時期を断定することは難しいが、他の住居址には弥生時代中期の遺物が見られないこと、また床面上の遺物の多くが弥生時代中期の遺物であることから、ここでは一応弥生時代中期（畿内第Ⅳ様式）に考えておきたい。



第7図 住居址A-1

住居址A-1 (第7図)

A地区で検出された住居址の中では、最も南に位置し、台地が西側谷部に落ち込む斜面に変わる、傾斜の変換点に位置する住居址である。西壁部分は斜面にかかることから、壁から床面まですでに流失しており、また東壁の一部は調査区外となるため検出することはできなかった。したがって住居址の全容を把握することはできなかった。

検出できた壁は南壁・北壁部分で、最高約15cmまで確認された。壁下には巾約20cm・深さ約10cmの壁溝が設けられていた。壁・壁溝とも弧状を呈して検出されている。

これらの壁・壁溝から住居址の平面形は円形と考えられ、住居址の規模は南北約7.8mを測る。東西の規模は検出できた部分では約6.6mを測るが、南壁と北壁をそのまま延長すると、

約8m前後となる。住居址の規模から壁・壁溝をひいた床面規模は南北約7.1m・東西約6.3m以上となり、東西の規模が先の大きさと仮定すれば、東西の床面規模は約7.3mとなる。この大きさの床面から柱穴を除いた床面積は約42.3㎡を測る。

床面は西端を流失し、東端は調査区外となり、全体を検出できなかったが、床面上からは7本の柱穴が検出された。この内主柱穴は、その位置から、6本と思われる。ただその配置を見ると、検出できた部分の東端は柱間が広くっており、調査区外に主柱穴がもう1本あると想定される。したがってこの住居址に伴う主柱穴は7本と考えられる。

床面の中央には2段に掘られた、不整形な方形の土壌が検出された。この中央土壌の上段の規模は長軸約110cm・短軸約90cmで、約10cm下がった所でほぼ平坦な面を造る。そしてその中央に、長軸約52cm・短軸約50cmのほぼ正方形に近い土壌が、約25cmの深さに掘り込まれていた。この中央土壌の内部には焼土・炭化物が多量に流入していたが、住居址の床面にも焼土・炭化物・炭化材が多量に見られたことから、中央土壌に流入した炭化物が、中央土壌に伴うものとは断定できない。

また床面上には、中央土壌を貫くように、斜面上方側の住居址東端から中央土壌に至る小溝と、中央土壌から台地西側斜面に伸びる小溝が検出された。流失した西壁を想定復元すると、台地斜面に伸びる溝は、住居址の壁から外に、僅かに出ていたようである。中央土壌東側の小溝は巾約23cm・深さ約5～7cmを測り、2段に掘られた中央土壌の上段に連なる。小溝の底は僅かに東端から土壌に向かって傾斜している。小溝の内部には溝底に接する石がみられた。中央土壌西側の小溝は巾約23～30cmを測り、中央土壌と連結した部分が最も太くなっている。深さは約20cmで、ほぼ一定した深さとなっていたが、溝底の高さは中央土壌に連なる部分が最も高く、台地斜面にかかる溝の西端が最も低くなっており、その差は約30cmを測る。小溝は中央土壌の下段につらなるが、小溝の底は土壌の底より約7cm高くなっていた。小溝と中央土壌とが連なる部分から、約30cm大の石が約20cm浮いた状態で検出されている。

床面は斜面上方の東端から、斜面下方側の西に向かって傾斜し、その差は約30cmを測る。床面全体に炭化物層が見られ、炭化材として検出できた部分もあった。しかし全体に炭化が酷く、炭化物の層としか捉えられない部分が多かった。特に北西部の炭化が酷く思えた。

出土遺物には土器の他、砥石2点がある。しかし遺物量は少なく、床面上からは砥石以外、土器の小片が出土しただけである。図化できたものは僅かに8点であるが、二重口縁の壺片等、弥生時代後期末の特徴が見られる。

以上がこの住居址の概略であるが、床面の状況から、住居が火を受けたことは確実と考えられる。しかし床面に遺存していた遺物はほとんどなく、失火による焼失とは考え難い。

### 住居址A-3 (第8図)

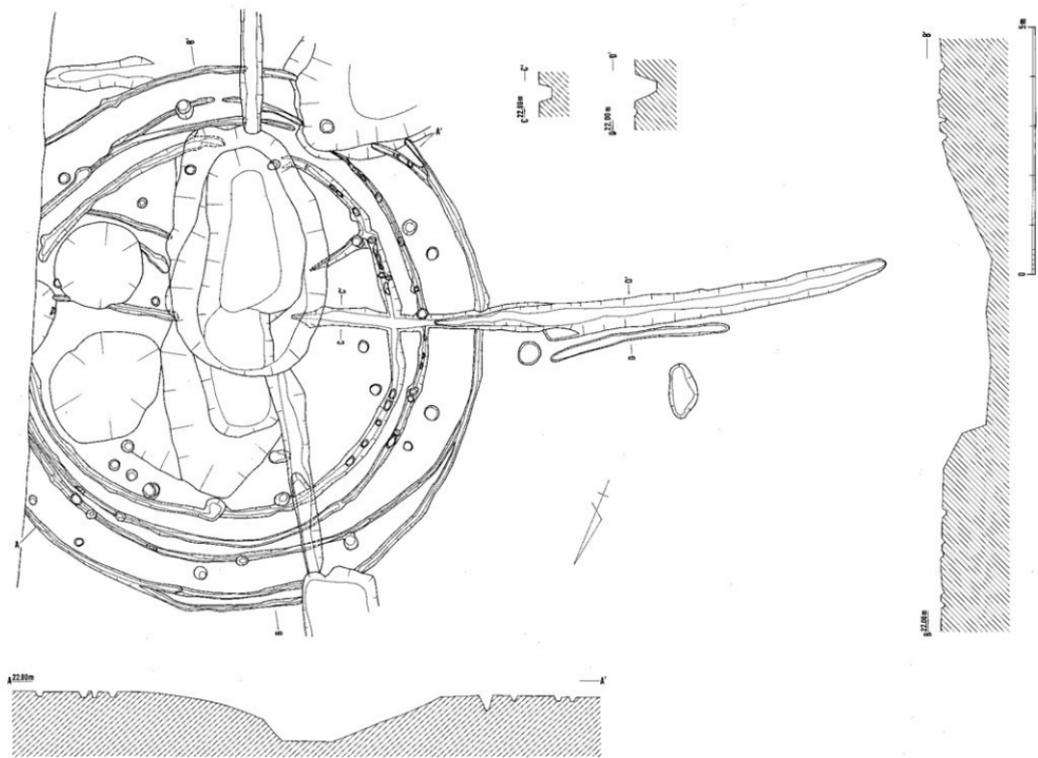
A地区のほぼ中央、台地が西側谷部に僅かに張り出した部分の、台地上の平坦面で検出された住居址である。ただ後世の削平を受けて、壁は完全に消滅し、壁溝だけが同心円状に検出された。また床面も焼土・炭化物等は見られず、削平を受けたようである。さらに床面はその大部分を後世の土壌によって攪乱され、壁溝の一部も後世の土壌に切られていた。住居址の東端は調査区外となっており、検出できなかった。

検出できた部分では、3～5本の壁溝が同心円状に回り、遺存していた床面には小溝が認められた。この小溝は西側の谷部に向かって、屋外に伸びている。壁溝が同心円状に見られることから、この住居址は同一場所での建替えが行われた事は確実であるが、床面まで削平を受け、埋土が残っていないため、土層の堆積状況からは、建替えの順次を把握することはできなかった。しかし屋内から屋外に伸びる小溝が掘り直されていたり、壁溝に切り合い関係が認められる部分があることから、ある程度建替え順を捉えることができた。

まず屋内から屋外に伸びる溝は、最も内側の壁溝付近でやや歪み、内側から2本目の壁溝の外側では段をなして深くなっている。またその部分では溝は2段に掘られているなど、壁溝の2本目と3本目の間では、屋内から屋外に伸びる小溝には掘り直しが認められる。また内側から3本目の壁溝の外側では、屋外に伸びる溝は、巾が広がっており、掘り直しが行われたと思われる。さらに3本目と4本目の壁溝には切り合い関係が認められ、4本目の壁溝が3本目の壁溝を切っていた。こうしたことから壁溝は内側から2本目、3本目、4本目の順に掘られたものと思われる。最も内側の壁溝と2本目の壁溝との関係ははっきりしないが、屋内小溝に継ぎ足した痕跡が窺えること、また小溝に埋め戻した痕跡がないことから、最も内側の壁溝から2本目の壁溝の順になるものと思われる。したがって住居址も内から順に規模を外側に拡張しながら、建替えが行われたものと思われる。

建築当初の住居をA-3-1とし、以下順にA-3-2・3・4・5住居址として記述する。  
住居址A-3-1

同心円状に巡る壁溝の内、最も内側の壁溝に伴う住居址A-3-1は、東端が検出できなかったが、径約7.8mの円形を呈し、壁溝を除いた床面規模は径約7.1m測り、床面積は約42㎡を測る。壁溝は巾約24～36cm・深さ約10cmを測る。壁溝内側の床面上からは柱穴が14本検出されたが、その内、確実にこの住居址に伴う柱穴は特定できない。また床面上には小溝が5本見られ、内2本は壁溝と連続し、壁溝から外には伸びない。したがってこの2本の小溝はこの住居址に伴う可能性があるものと思われる。2本の小溝の内、西側の小溝は住居址中央よりの部分を後世の土壌に切られているが、壁溝から住居址の中央に向かって伸び、巾約20cm・深さ約15cmを測る。東側の小溝は住居址の中央からずれた方向を向き、壁溝から約1.8mで途切れており、巾約14cm、深さ約3cmと浅いもので、遺構ではない可能性もある。



新石器时代陶器 A-3

### 住居址A-3-2

住居址A-3-1を同心円状に外側に約40cm拡張した、径約8.6mの円形を呈する住居址で、床面積約54.5m<sup>2</sup>の住居址である。東端は調査区外となり検出できなかった。壁溝は一部後世の攪乱土壌に切られていたが、巾約10~15cmを測り、深さは4~15cmを測る。深さは、東端付近が浅く、屋外に伸びる溝に接する部分が深くなっていた。

床面上には後世の土壌に切られているが、小溝が見られ、床面中央の攪乱土壌の西側では、巾約30cm・深さ約20cmを測る。中央の攪乱土壌東側では巾約10~18cm・深さ約3~9cmを測る。この2本の溝は、攪乱を受けているためはっきりしないが、他の住居址例からすると、東壁下の壁溝と繋がり、床面中央にあったと思われる中央土壌を貫くようにして、西側の壁溝と繋がっていたものと思われる。ただ屋外に伸びる溝が設けられていたかどうかははっきりしないが、壁溝の外側に掘り直した痕跡が認められることから、この段階で設けられてた可能性が高い。

柱穴は壁溝内側の床面上に多数見られ、位置からみて、この住居址に伴うと思われるものも認められるが、特定できない。

### 住居址A-3-3

住居址A-3-2を屋外に伸びる溝付近で最大になるように拡張されたもので、東端の南側ではA-3-2住居址と重なっている。拡張は最大約1.1mを測り、住居址の規模は南北径約9.4m・東西径約9.1m以上となり、東西径を復元すれば約9.8mとなる。住居址規模から壁溝を除いた床面規模は南北径約9.1m・東西径は推定9.6mを測り、床面積は約67.7m<sup>2</sup>を測る。

壁溝は南側を後世の土壌に攪乱されているが、巾約15cm・深さ約12cmを測る。後世の土壌で切られた部分で少し歪んだ形状となり、A-3-2住居址が一度東に拡張された後、この住居址に拡張された可能性もある。

遺存していた床面上には、住居址を2等分するような屋内小溝がみられ、この小溝はそのまま真っ直ぐに台地西側の谷部に向かって伸び、台地斜面で終わっている。この小溝の屋内部分ではA-3-2住居址屋内溝を利用し、拡張した部分ではA-3-2住居址の屋内溝に継ぎ足したか、あるいはA-3-2住居址の屋外溝を掘り直して利用している。拡張した部分での屋内小溝は巾約20cm・深さ約30cmを測る。壁溝から外側は約8.2mの長さまで確認でき、溝の先端は台地斜面に垂れ流しの状態で終わっている。この部分では溝は巾約45~60cmを測り、深さは約45cmを測る。溝の底は住居址側から台地斜面の先端側に傾斜し、その差約75cmを測る。ただこの屋外に伸びる部分は後の建替え時に掘り直された形跡が窺われ、巾・深さともこの住居址の段階の規模ではない可能性もある。

壁溝内側の床面上ではA-3-1・2の床面で検出されたものも合わせて、柱穴は約18本検出され、その位置から見て、この住居址に伴うもの約4本以上あると思われるが、特定す

ることは困難であった。

#### 住居址A-3-4

住居址A-3-3を東側に拡張した住居址で、検出できた部分では最大約1.1m拡張されている。ただ最も大きく拡張されたと思われる住居址の東端は、調査区外となって検出できなかった。西側の屋外に伸びる溝付近では、壁溝がA-3-3住居址の壁溝を切って、重なっており、この部分は拡張されていない。住居址の規模は南北約10.8m・東西約9.1mを測り、東西径を復元すれば、約10.8m前後となり、ほぼ南北径と同規模であったものと思われる。住居址規模から壁溝を除いた床面積は南北約9.5m・東西約9.0mを測るが、東西径を復元すれば、ほぼ南北径と同規模となり、床面積は約86㎡になるものと思われる。

屋内から屋外に伸びる溝は、多少手が増えられたかもしれないが、A-3-3住居址に伴う溝を利用している。この住居址に伴う柱穴は7本が検出されたが、配置から見て、調査区外にも1本程度あるものと思われ、この住居址は8本の支柱穴を持つ構造であったと思われる。

#### 住居址A-3-5

住居址A-3-4を北側に僅かに拡張した住居址で、拡張範囲は長さ約4.5m、外側に約20cmに止まる。この拡張で住居址は南北径11mとなり、今回の調査で検出された住居址の中では最大規模の住居址となった。床面積は約87㎡を測る。床面に見られる屋内施設はA-3-4住居址とほぼ変わりが無いが、支柱穴は拡張に伴って、A-3-4住居址の支柱穴を1本取り除き、その部分を2本にしている。したがって検出された支柱穴は8本で、調査区外にも1本想定されることから、この住居址は9本の支柱を持つ構造となったものと思われる。

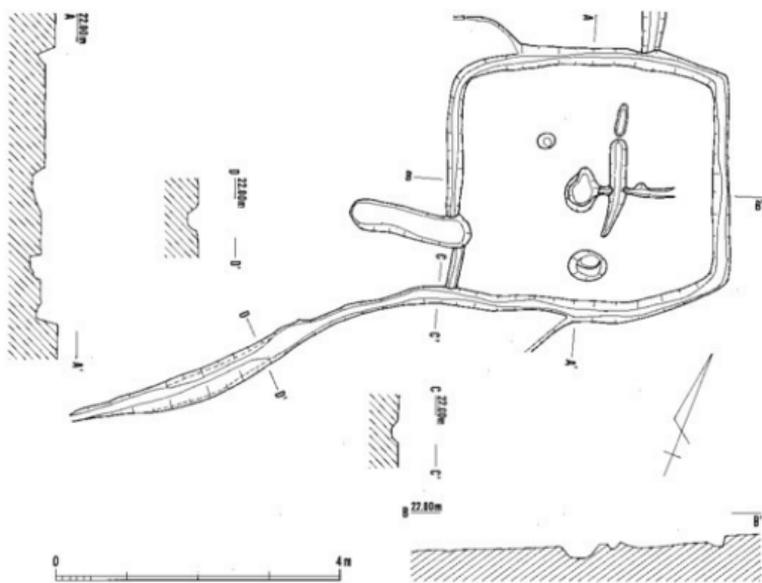
以上のようにこのA-3住居址は当初8m前後の規模であったが、建替え拡張が5回以上行われ、最終的に住居址の規模は11mの規模となっている。今回の調査で検出された他の住居址には、こうした建替えは見られず、この住居址にだけ見られる現象である。この住居址の性格が他の住居址と異なっていたためかもしれない。

出土遺物は極めて少なく、A-3-4に伴う壁溝から(20)の底部が出土しただけであった。屋外に伸びる溝底から(18)の底部を欠く壺が出土している。

#### 住居址A-4 (第9図)

住居址A-3の北側、僅かに西に張り出した台地の中央やや南寄りで、住居址A-6と切り合っ、検出された住居址である。しかし土層観察からは切り合い関係は把握できず、床面に遺存した土器の状態から、切り合い関係を判断した。このような状態であったため、住居址A-6と重なる部分では、住居址A-6の床面上で壁溝だけを検出した。

住居址は東西約3.9m・南北約3.8mの隅丸方形を呈し、南西コーナーから西側谷部に向かって伸びる溝を持つ。住居址規模から壁溝を除いた床面積は約11.1㎡を測る。壁而下には巾約22cm・深さ約6~17cmの壁溝が巡らされ、南西コーナーで最も深くなり、屋外に伸びる溝



第9図 住居址A-4

に繋がっている。

床面上には柱穴1本が検出されたが、主柱穴とは考えにくく、中央に溝を伴った土塊と、その南側にピットが認められた。中央の土塊は南北に長い、長軸約60cm・短軸約45cmの不整形な楕円形を呈し、深さは約15cmを測る。南半の壁は2段に掘られている。中央土塊から巾約10cmの溝が東に約1.1m伸び、浅くなって終わる。この溝と十字にクロスして巾約22cm・深さ約5cmの溝が認められた。ともに埋土中に炭化物が少量認められたが、焼土等は見られず、炉址となる痕跡は認められなかった。

床面中央から南寄りの壁近くには、長径約52cm・短径約42cm・深さ約19cmの、東西に長い楕円形のピットが検出された。ピットは約15cm下がった所で段を持ち、北半だけが楕円形に約5cm深くなっていた。

南壁下の壁溝はそのまま南西コーナーから調査区西側の谷部に向かって伸び、巾約15～50cm・深さ約7～20cmの屋外溝となる。この溝は中央で僅かに南に曲がり、斜面にかかる部分で巾が広がっている。溝の底は住居址に取りつく部分が高く、斜面にかかる先端部が低い。その差は約30cmを測る。

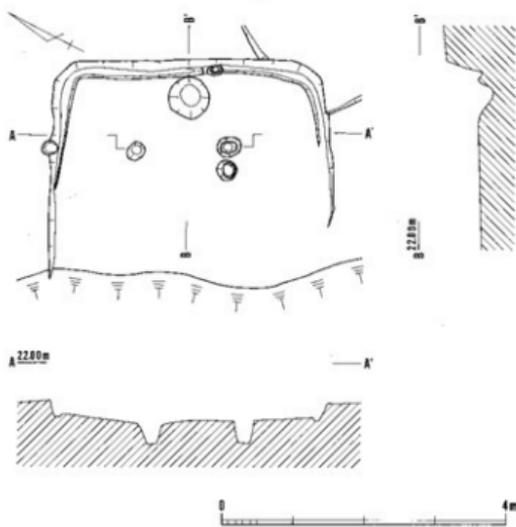
床面には、いずれも破片であったが、若干遺物が残り、(23)が北壁際の床面から出土して

いる。また中央土壌からも(24・25)の遺物が出土している。

出土した土器からは(23)のように若干古い様相も窺えるが、住居址の時期をここでは一応弥生時代後期の後半と考えておきたい。

#### 住居址 A-5 (第10図)

台地が西に張り出した部分の、台地が平坦面から斜面に変わる、傾斜の変換点に位置する住居址である。斜面下方側の壁はすでに流失しており、住居址は「コ」の字状に検出され、住居址 A-6 の北西コーナーをこ



第10図 住居址 A-5

の住居址の北東コーナーが切った状態で検出された。

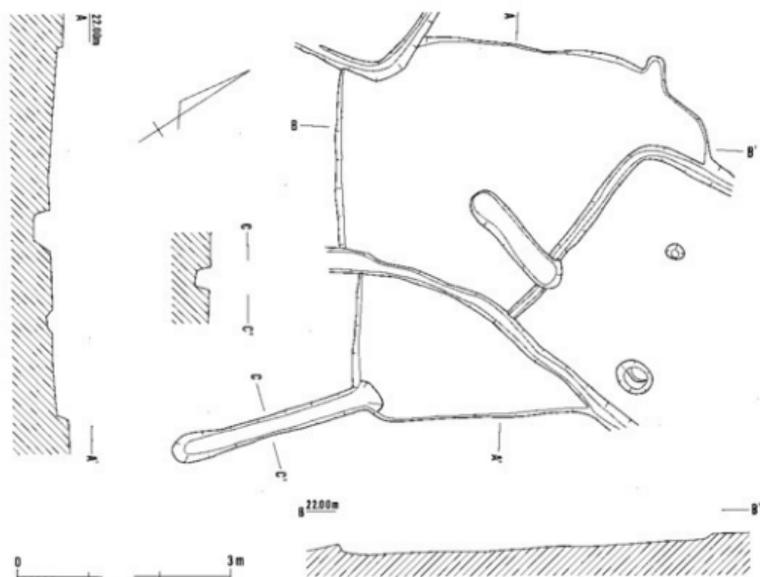
斜面下方側の壁を流失しているため住居址の全容を知ることはできなかったが、検出できた部分では、南北約4.0m・東西約3.4m以上を測り、隅丸方形の平面形を呈する住居址である。住居址の床面規模は南北約3.5m・東西約3.4m以上で、床面積は約10.3m<sup>2</sup>以上を測る。

現状での壁面は最高約40cmまで遺存し、東壁下と南・北壁の東半壁下には巾約15cm・深さ約6cmの壁溝が検出された。壁溝は東壁中央下が途切れた様な状態となって浅く、そこから両側へ深くなり、南・北壁下で床面と同じ高さとなって消えている。

床面上には柱穴3本が検出されたが、2本はほぼ同じ位置にあり、住居址の主柱穴は2本と思われる。ただその位置が中央からかなり東によっており、住居址の主柱穴は本来4本であったものと思われる。

また東壁中央下の床面上には、壁溝に接して、径60cm・深さ約22cmの円形の土壌が検出された。土壌は住居址内側の壁面が緩く、外側の壁面がやや急に掘られていた。

北側の柱穴周辺の床面上には5ヶ所、遺物が集中する地点があった。ただいずれも破片で、完形に復元できるものはなかった。(26)の甕は北側柱穴の約65cm北の床面上から出土した。埋土中には(27)の鉢が含まれ、さらに埋土上層からはガラス製の管玉が出土した。



第11図 住居址A-6

#### 住居址A-6 (第11図)

台地が西に僅かに張り出した地区の、台地平坦面上で検出された住居址である。住居址A-4・5の中間に位置し、住居址A-4に東壁から南東コーナーを切られ、住居址A-5に北西コーナーを切られている。

床面上には何らの施設も見られないこと、床面も一定した高さでないことなどから住居址とするには疑問も残る。ただ南コーナーから屋外溝とみられる溝が伸びていることから、ここでは一応住居址として扱った。

住居址の規模は南北約5.3m・東西約5.2mの不整形な方形を呈し、床面規模は南北・東西とも約5.1mを測り、床面積は約24.1㎡を測る。

住居址の壁は最高約19cm遺存しており、壁面下には壁溝は認められなかった。床面の中央には長さ約170cm・巾約40cmの、長軸を東西方向に向けた長楕円形の土壇が検出された。土壇の深さは約8cmと浅く、中央土壇とするには、形状からも疑問が残る。

南コーナーから台地斜面に伸びる溝は、約2.8mの長さまで確認でき、巾約30cm・深さ約20cmを測る。住居址に取りつく部分では、住居址の床面を半円形に窪ませていた。

住居址から出土した遺物は、いずれも埋土中からの出土であり、図化できたものは僅かに

2点(30・31)であった。床面からの遺物の出土はほとんど見られなかった。

したがって住居址の時期を決定することは困難であるが、(30)を古く見る事もできるが、住居址の時期をここでは一応弥生時代後期後半に見ておきたい。

#### 溝 1 (第4図)

住居址A-1の西約1.3mで、住居址から約1.2m下がった、台地斜面で検出された巾約55cmの溝である。深さは斜面上方側では約17cmを測り、斜面下方側は僅かに1~2cm程度であった。溝の埋土は黒褐色シルトの単一層で、溝底から(32)の器台脚部が出土している。

非常に急傾斜の斜面に位置しており、こうした斜面に溝を設ける意図は不明であり、遺構であると断定は出来ない。しかし埋土が弥生土器を包含する土層と同一であること、内部から土器の出土があったことから一応遺構として扱った。

#### 溝 2 (第4図)

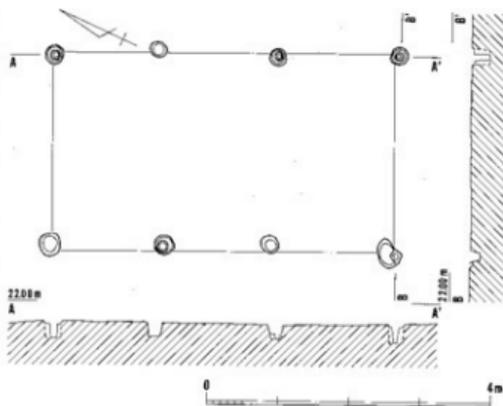
住居址A-2の西約1mで、住居址から約30cm下がった、台地の斜面で検出された巾約25cmの溝である。住居址から屋外に伸びる溝の先端から北へ伸び、約3.8mの長さまで確認できた。溝の南半はやや斜面下方側へ、弧状に曲がっている。深さは斜面上方側から約7~12cmを測り、溝底は北が高く、南が僅かに下がっている。埋土は溝を覆っていた弥生土器の包含層と同じ、黒褐色シルトであった。

この溝も遺構と断定はできないが、包含層下で検出されたものであり、埋土が包含層と同一であったことから、一応遺構として扱った。

## 2 その他の遺構

### 建物址 1 (第12図)

桁行3間(4.8m)×梁行1間(2.8m)の規模で、棟方位を南北(N14°E)にとる側柱建物址である。桁行の柱間寸法は160~170cm、梁行の柱間寸法は2.8mを測る。各柱穴の掘り方は径約20cmの円形を呈し10cm前後の柱痕跡が認められた。検出面からの深さは約20cmを測り、レベルにばらつきはない。出土遺物はなく、時期は不明であるが、方位はB地区の建物址と同方位である。



第12図 建物址 1

### 第 3 節 遺 物

#### 1 弥生時代の土器

##### 住居址A-2 出土遺物 (第13図)

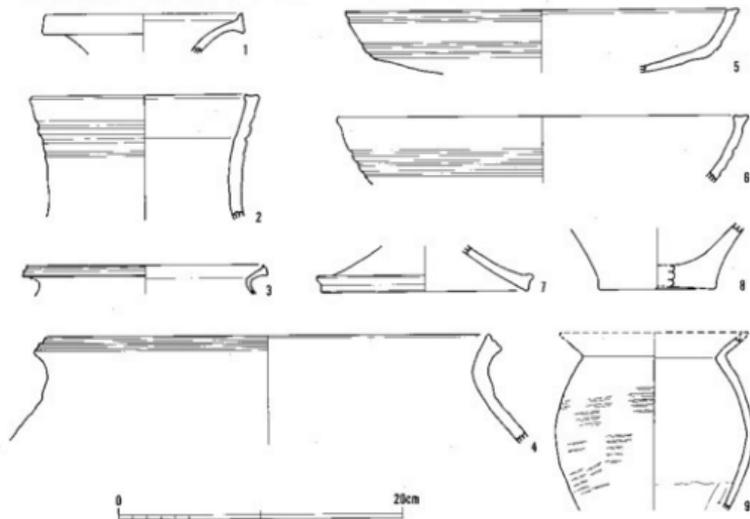
住居址の床面上から、破片であるが若干の土器と石器が出土している。その内、土器には壺・甕・鉢・高杯が見られるが、いずれも遺存状況が悪く、調整等は不明なものばかりである。

壺には外反する口縁の端部を拡張したもの(1)と、直立する頸部がそのまま伸びて口縁となる直口壺(2)とがある。(2)には口縁下に凹線文が施されている。

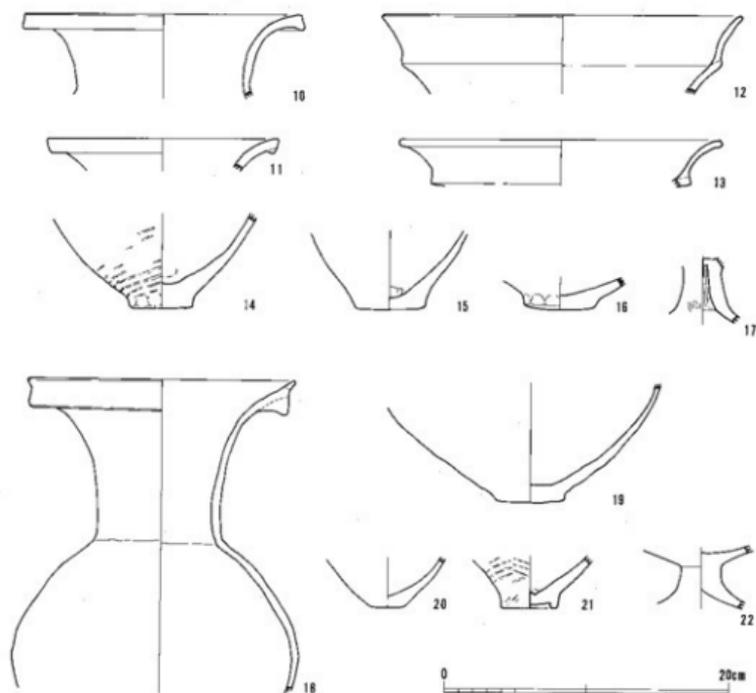
(3)・(4)・(9)は甕で、(3)は小型の甕である。体部から「く」の字状に外反して開く口縁の端部を肥厚させ、凹線文を施している。(4)は大型の甕で、口縁端部にはやはり凹線文が施されている。(9)は体部の外面に叩き目の残る甕である。

(5)・(7)は高杯で、(5)は杯部片である。浅い体部から口縁部が立ち上がり、口縁部の上・下端に凹線文が施されている。(7)は柄端部を拡張した脚部で、外面は笊磨きしている。(6)は鉢の口縁部で、口縁端部は内外に肥厚し、口縁下部には3条の凹線文が施されている。(8)は外面に指押えの痕跡を残す底部で、壺の底部と思われる。

これら9点の土器の内、(1)~(8)はその器形的な特徴や、施された文様の特徴等から畿



第13図 住居址A-2 出土土器



第14図 住居址A-1・3 出土土器

内第IV様式に並行するものと考えられる。ただ(9)は最大胴位が体部の中位にあるという器形的な特徴や、体部の外面に叩き目が残されていること等、畿内第V様式の特徴を示している。

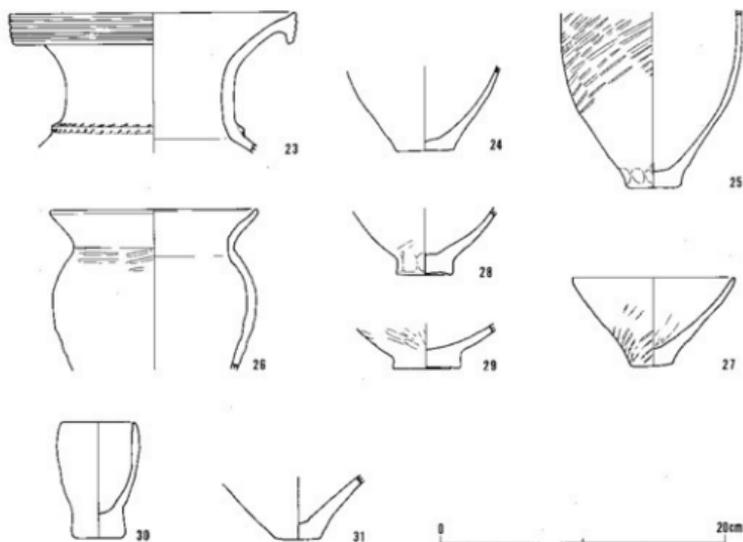
#### 住居址A-1 出土土器 (第14図10~17)

床面全体に炭化物・炭化材が見られた住居址であるが、遺物は極めて少なく、床面上からは(10)の壺1点と、他に砥石2点が出土しただけである。

埋土からの出土土器も合わせ、図化できたものは8点あるが、いずれも小片で遺存状況が悪く、調整は不明な点が多い。

(10)・(11)・(12)は壺の口縁部片である。(10)・(11)は外反して開く口縁の端部を下方に拡張した壺A2であるが、(10)は下外方に、(11)はやや下方内に拡張して内傾した端面を作っている。(12)は所謂二重口縁の壺である。

(13)は体部から稜を持って外反する高杯A1の口縁部片である。ただ小片であることから、



第15図 住居址A-4・5・6 出土土器

高杯とは断定できず、壺の口縁部片である可能性も残されている。

(14)～(16)は底部であるが、(14)・(15)は甕か鉢の底部から体部下半の破片と思われる。(14)の体部外面には叩き目が残る。(16)は壺か鉢の底部であろう。

(17)は高杯の脚柱部で、内面に絞り痕、外面に縦方向の寛磨きが施されている。

#### 住居址A-3 出土土器 (第14図18～22)

床面まで削平されていたため出土遺物は少なく、出土状態も(20)がA-3-3の壁溝から出土した以外、他は屋外に伸びる溝から出土したものである。また遺存状態も悪い。

(18)は胴部下半から底部を欠く壺A2であるが、(19)と同一個体となる可能性が高い。(18)の壺は長い頸部が外反して開き、口縁部は上下に拡張されている。体部の肩は張らず、体部の中央に最大胴位が来る。(19)は壺の底部から胴部下半にかけての破片である。(18)と同一個体になる可能性が高いが、接合できず、一応別々に扱った。

(20)・(21)は底部片であるが、(21)はリング状の上げ底の底部で、体部外面には叩き目が残る。甕の底部であろう。(20)は体部の外面に寛磨きが施され、壺の底部と思われる。

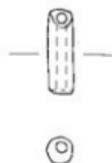
(22)は高杯の脚柱部から体部下半の破片であるが、脚柱部は短い。

#### 住居址A-4 出土土器 (第15図23~25)

出土遺物は小片が多く、3点が図化できただけである。(23)は床面上から、(24)・(25)は住居址の中央土壌から出土している。

(23)は壺B4類に分類され拡張された端面には4条の凹線文が施されている。頸部と体部の境には1条の凸帯が貼り付けられ、凸帯には2段に刻み目文が施されている。

(24)・(25)は底部から体部にかけての破片で、(24)は壺、(25)は細長い体部の外面に叩き目が残り、壺の底部と思われる。



0 2cm

第16図 ガラス管玉

#### 住居址A-5 出土土器 (第15図26~29・第16図)

住居址の床面上には遺物が遺存していたが、図化できたのは(26)の1点だけであり、他は埋土からの出土である。この他、特徴的な遺物としてガラス製の管玉1点が出土している。

(26)は体部から「く」の字状に開く口縁部を持つ甕で、体部外面には叩き目を残す。

(27)は底部から体部が直線的に伸びる鉢であり、体部の外面には叩き目を残す。

(28)・(29)は体部から突出した底部であり、ともにやや上げ底気味となっている。(28)の底部周囲には指押えの痕跡が残り、(28)・(29)とも体部の外面は磨きされている。ともに壺の底部と思われる。

#### 住居址A-6 出土土器 (第15図30・31)

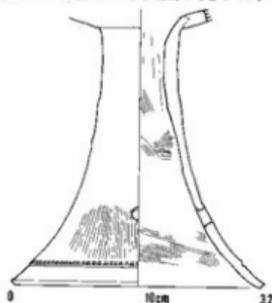
遺物の多くは埋土から出土で、図化できたものは(30)・(31)の2点だけであった。

(30)は鉢形のミニチュア土器で、体部には指押えによるものと思われる凹凸が見られ、全体をナデ調整で仕上げている。

(31)は壺あるいは鉢と思われる比較的小さな底部である。

#### 溝1 出土土器 (第17図)

(32)は器台の脚部片であり、住居址出土の土器と比較すると器面の遺存状態は良好である。脚柱部に緩く外反する裾部が付き、端部は面を持つ。裾部を1条の沈線と円形の刺突文で飾り、脚柱部には2段に円形透かし孔が認められるが、その数は不明である。



0 10cm

第17図 溝1 出土土器

#### 包含層出土土器 (第18図)

包含層は台地南側の斜面部に僅かに認められただけであり、出土遺物も少量で、しかも小片が多い。図化できたものは(34)の1点だけで、(33)は住居址A-4・6の上面から出土したものである。ただ住居址検出以前の出土であり、住居址の特定が困難であったため、包含層出土として扱った。

(33)は壺B 4でやや内傾する頸部が外反して口縁部となり、口縁端部は下方に拡張されている。口縁端面には僅かに凹線と思われる痕跡を残している。(34)は頸部から外上方に開く壺B 2、口縁端部は肥厚され、端面には1条の凹線文と篋による刻み目文を施す。

## 2 石器 他

A地区では、定型的な石器として石匙1点と台石1点・砥石4点が出土した。

### 石 匙 (第71図)

(9)は典型的な横型石匙である。サヌカイトを素材とする。調整加工はつまみ部とその周辺に集中し、刃部には未調整の部分も残る。住居址A-2出土。

### 台 石 (第69図)

(17)は、住居址A-6から出土した、小型品の破片で、砂岩を素材とする。

### 砥 石 (第74・75図)

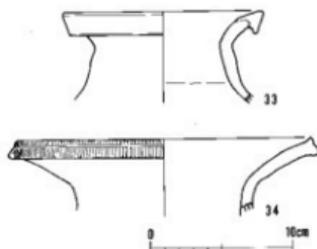
(24)は、角柱状の砥石である。砥面の形成はあまり明瞭ではない。一端を折損する。(23)は、肌理の細かく揃った砂岩を素材とする据え置き式の砥石である。機能面は一面のみで、裏面には、据え置いて利用された際の床擦れ面となっている。(21)は大型の砥石を破砕後再利用した例で、図裏面の砥面は割れ面を新たに機能面としたものである。

### ガラス製管玉 (第16図)

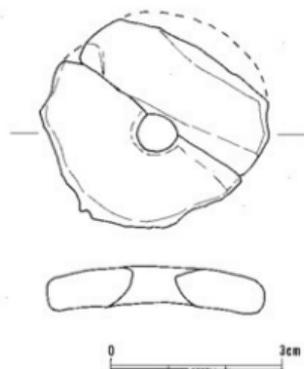
住居址A-5の埋土上層で出土したもので、一端を僅かに欠損している。色調は薄い水色を呈し、気泡がみられる。長さ約1.5cm、太さ約4.6mmを計る。中央からやや偏った位置に、径約1.7mmの孔が穿たれている。

### 3 中世の遺物 (第20図)

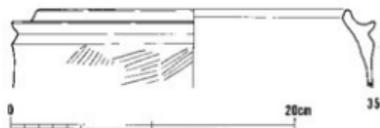
遺構内からの出土はなく、包含層から土師器皿・鍋等が出土している。図示し得たのは(35)の土師器鍋1点だけであった。



第18図 包含層出土土器



第19図 紡錘車



第20図 包含層出土土器

#### 第4節 小 結

A地区は台地の南端をかすめるような調査区で、調査面積も僅かであったが、竪穴住居址6棟と建物址1棟が検出された。ただ出土遺物が少ない遺構が多く、時期の特定が難しいが、一応住居址は弥生時代中期後半と後期後半と考えられ、建物址の時期は不明である。

中期後半の竪穴住居址は住居址A-2、1棟だけであり、平面は円形を呈し、径約5.3mを測る。床面積は約19.3m<sup>2</sup>で、4本柱の構造をとり、床面の中央には土壌が穿たれている。また床面を2分するように小溝が設けられ、小溝は壁溝と交わった後も、そのまま屋外に伸びていた。出土遺物には中期後半（畿内第Ⅳ様式併行期）の特徴を持つものと、後期後半（畿内第Ⅴ様式併行期）の特徴を持つものが見られたが、他の竪穴住居址に中期後半の遺物を出土するものが見られないことから、一応中期後半の所産と考えた。

後期後半の竪穴住居址には平面が円形を呈するもの（A-1・3）と、方形を呈するもの（A-4～6）とが見られる。円形住居址は径が7m、11m、床面積約42.6、87m<sup>2</sup>と大規模で、床面構造は住居址A-3は擾乱のため不明であるが、住居址A-1は推定7本（検出6本）の柱を持ち、床面中央に土壌が穿たれている。また床面には小溝が設けられ、小溝は屋外にまで伸びていたようである。こうした屋内から屋外に伸びる溝は住居址A-3にも設けられている。住居址A-3は円形住居址のなかでは唯一、同一場所での建替えが行われている住居址で、5回前後の建替えで、床面積は最終的に当初規模の約2倍になっている。

3棟の隅丸方形住居址は一辺5m以下、床面積約11～24m<sup>2</sup>の小型の住居址で、3棟とも住居址は検出されていないことから、円形住居址のように通常の住居として使用されたものではない可能性を持つ。住居構造も円形住居とは異なり、住居址A-6では床面上に何らの施設も見られない。また床面施設の内、壁溝は住居址A-4・5で検出されたが、床面中央の土壌は住居址A-4に浅いものが設けられていただけで他の2棟に見られなかった。ただ住居址A-5では壁下に土壌が設けられていた。また円形住居址と同様に屋外に伸びる溝がA-4・6に見られ、住居址のコーナー部から屋外に向って設けられていた。

包含層からの遺物もほとんどなく、住居址内部に残されたものもほとんど無く、出土遺物は極めて少なかった。したがって後期後半の住居址の内、同時存在のものを抽出することは極めて困難である。しかし出土遺物に大きな時期差は見られず、僅かにA-3・4出土のものに古い様相が見られ、A-1出土のものに新しい様相が窺える程度である。そうしたことから後期後半の住居址は比較的短期に営まれたものと思われ、最も早い時期にA-3とA-6、次いでA-3とA-4、最後の段階にA-1・3・5が同時に存在していたものと思われる。

ただ住居址A-5からガラス製の管玉が出土しており、今回の調査で出土した遺物の中では、特筆すべき物であろう。

## 第 3 章 B 地区の調査

### 第 1 節 調査区の概要

B地区(第3図)はA地区西北方の台地上方にあたり、南北両側は急傾斜をもって谷部へ続いている。本地区は調査時は水田となっており、中央には道路が敷設されていた。一方、本地区のすぐ北西側は約1.5~2mの段差をもって低くなっており、さらにその北西は山地形に変換しており、傾斜が急になっている。また、南側のA・B岡地区間くびれ部は現状では旧鉄道敷によって分断されているため別々の台地のように見えるが、本来は南東に伸びる同一尾根の台地であることが推察される。

B地区の地山面での地形は、方形周溝墓群が存在する部分が最も高く、ほぼ西から東側方向に伸びている。南側は徐々に低くなっていくが、東寄りに浅い谷が形成されている。一方、最高部北側はやや急傾斜となっており、北~東側にかけては水田構築の際に段状に削平されている。段は特に北側では大きく、約40cmの落差となっている。

遺構面は水田造成の際の削平を受けた部分がかかなり認められ、それらは調査区内周辺部および調査区中央南部付近、M-18区周辺にも及んでいる。従って、これらの部分では遺構の残存状況が悪く、消滅している部分も認められた。また、水田排水用の暗渠が遺構面まで及んでいる部分が多数認められた。

本地区では地形にそって北西~南東方向に一本(Hライン)、北東~南西方向に二本(9・15ライン)の土層観察用の畦(巾1m)を「井」の字形に残して土層の堆積状況を調べた。

Hラインでみた遺構の遺存状況は、全体に水田構築による遺構面の削平はかなりあったものと思われ、あまり良好でなかった。特に20~21ライン間で水田構築の際の大きなカットがあり、そこから南東側は耕土の下が薄い床土を挟んですぐに地山となっており、遺構の残りは劣悪であった。しかし、16ラインからこのカットまでの間は比較的削平が少なく、弥生~奈良時代の遺物を包含する灰褐色シルト層(第27層)が薄く堆積していた。一方、削平以外の攪乱については、2ライン付近で肥溜めの埋置による大きな攪乱があるほかは、道路が敷設されていたにもかかわらず、遺構面およびその上層が大きく攪乱を受けた箇所はなかった。

Hラインを通してみた基本層序(第22図)は、1~6ラインまでは上から耕土(第1層)、淡灰褐色シルト(第20層)、灰褐色シルト(第27層)、淡灰色シルト(第28層)、暗黄褐色シルト(第29層)、黄褐色シルト(地山)となっており、第20層は水田構築時の埋め立て層である。6~9ライン間は第20層の下に淡黄褐色シルト(第25層)が、9~12ライン間と同じく第20層の下に暗灰褐色シルト(第31層)が堆積している。13~19ライン付近までは耕土の下に淡

黄灰色シルト(第23層)があり、その下には13~15ラインまでが明褐色シルト(第24層)、16~19ライン付近間で灰褐色シルト(第27層)が堆積している。また、第23層も第20層と同じく水田構築の際の盛土である。19ライン付近から21ラインの手前までは耕土から地山までの間に4層が堆積している。それらは、上から順に淡灰褐色シルト(第20層)、褐色シルト(第26層)、灰褐色シルト(第27層)、暗灰褐色シルト(第34層)となっている。

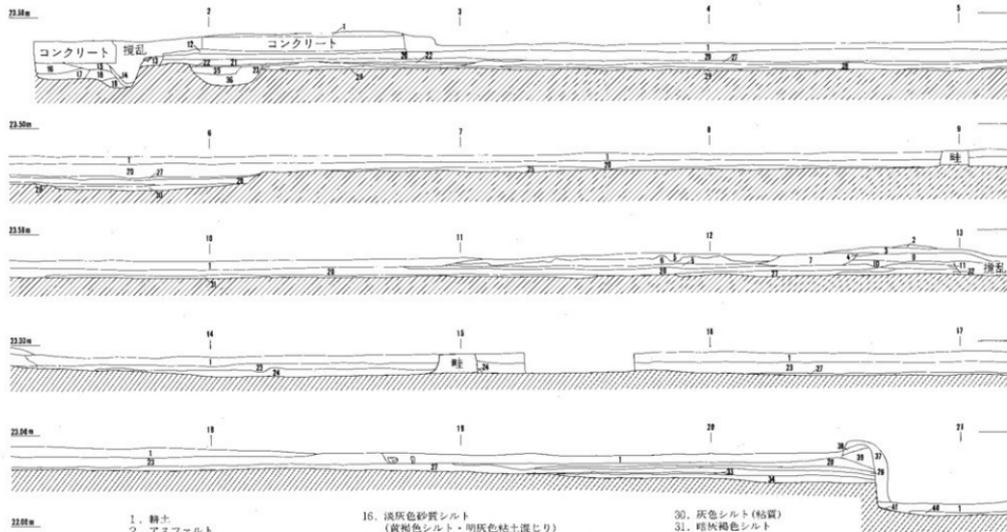
9ラインでの土層(第23図)は、D~Gラインまでが耕土直下に薄い明灰褐色シルト(第14層)の床土を挟んですぐ地山となっている。HラインからKラインの手前までは地山の傾斜に従って、耕土下に淡黄灰色シルト(第3層)、灰褐色シルト(第4層)、濃灰褐色シルト(第6層)、灰褐色シルト(第8層)、暗灰褐色シルト(第9層)、黒褐色シルト(第10層)が堆積している。この第10層は方形周溝墓2・3の周溝埋土である。K・Lライン間は、Kライン付近で耕土下に淡灰褐色シルト(第5層)と淡茶褐色シルト(第13層)が堆積している。このうち第13層は方形周溝墓3の墳丘盛土である。Lライン付近では、耕土下に淡黄褐色シルト(第11層)、暗灰色シルト(第12層)、第10層が堆積している。第10層は先述のように方形周溝墓3の北側周溝埋土である。

15ラインでみた土層堆積状況(第23図)は、Bライン付近では耕土下に淡黄灰色シルト(第3層)、淡茶褐色シルト(第13層)、明灰褐色シルト(第14層)が堆積している。B~Hライン間では、第3層の下に淡黄褐色シルト(第11層)が堆積しており、その上に部分的に黒褐色シルト(第10層)が認められた。第10層は方形周溝墓や溝等の埋土でもある。Iライン付近とNラインとの間では、第3層の下は基本的に灰褐色シルト(第4層)のみで、N~Pライン間では第3層下に水田構築時埋め立て層である黒褐色・褐色・暗灰色シルトの混じり合った層(第43層)があり、この埋め立て層は弥生~中世の包含層と同じ土であることから、これらを削って埋め立てたものであろう。その下層には暗灰色シルト(第12層)、明灰褐色シルト(第14層)、淡灰褐色シルト(第40層)、暗茶褐色シルト(第41層)が堆積しており、それぞれに若干の中世の遺物を包含している。一方、調査区両端は水田構築により削平され、特にAライン付近では遺構は全く残っていなかった。

調査区東側壁面でみた土層の堆積状況(第24図)は、基本的には耕土(第1層)、灰褐色シルト(第3層)、淡灰褐色砂質シルト(第4層)、黄褐色砂質シルト(第7層)、灰茶色砂質シルト(第8層)の順に堆積しており、第8層が中世の遺物包含層となっている。北部では第4層と第7層の間に明灰褐色砂質シルト(第5層)があり、第8層が厚くなっている。また、第8層の下には溝14の埋土である茶褐色シルト(第9層)、暗茶褐色シルト(第10層)、暗灰褐色シルト(第11層)、淡黒褐色シルト(第12層)、暗灰色シルト(第13層)が堆積している。なお、第17層の黒褐色シルトは方形周溝墓6の周溝埋土である。東壁南部では、第4層の下に灰褐色砂質シルトである第6層が堆積しており、その下の第7層はしだいに薄くなってゆ



第21図 B地区全体図



22.88m



1. 舗土
2. アスファルト
3. 淡灰色砂質シルト
4. 灰色砂質シルト
5. 淡黄色砂質シルト
6. 暗灰色シルト
7. 明灰褐色砂質シルト
8. 灰色シルト
9. 灰褐色砂質シルト
10. 淡灰色砂質シルト
11. 淡灰色シルト
12. 茶褐色砂質シルト
13. 暗灰褐色シルト
14. 淡黄色粘質土
15. 淡黄灰色砂質シルト

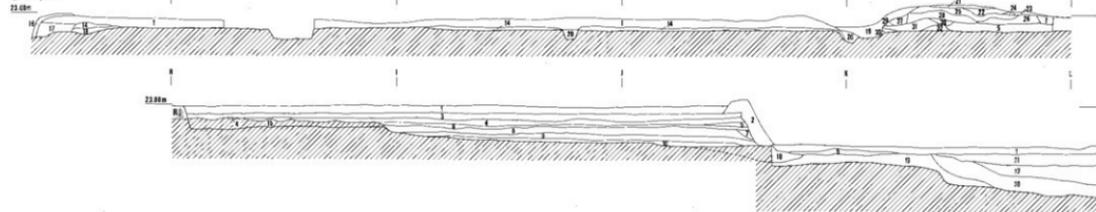
16. 淡灰色砂質シルト  
(黄褐色シルト・明灰色粘土混じり)
17. 黄褐色シルト
18. 淡灰色砂質シルト
19. 淡灰色シルト(黄褐色シルト混じり)
20. 淡灰褐色シルト
21. 淡灰褐色シルト
22. 灰黄褐色シルト
23. 淡灰色シルト
24. 明褐色シルト
25. 淡黄褐色シルト(粘質)
26. 褐色シルト
27. 灰褐色シルト(やや粘質)
28. 淡灰色シルト
29. 暗黄褐色シルト(粘質)

30. 灰色シルト(粘質)
31. 暗灰褐色シルト
32. 暗黄色シルト
33. 淡褐色シルト
34. 暗灰褐色シルト
35. 灰色シルト(暗褐色シルト混じり)
36. 灰色シルト(暗褐色シルト・黄褐色シルト混じり)
37. 粘土・腐植土
38. 淡黄色砂質シルト
39. 淡灰色砂質シルト
40. 明灰褐色シルト
41. 淡灰褐色シルト

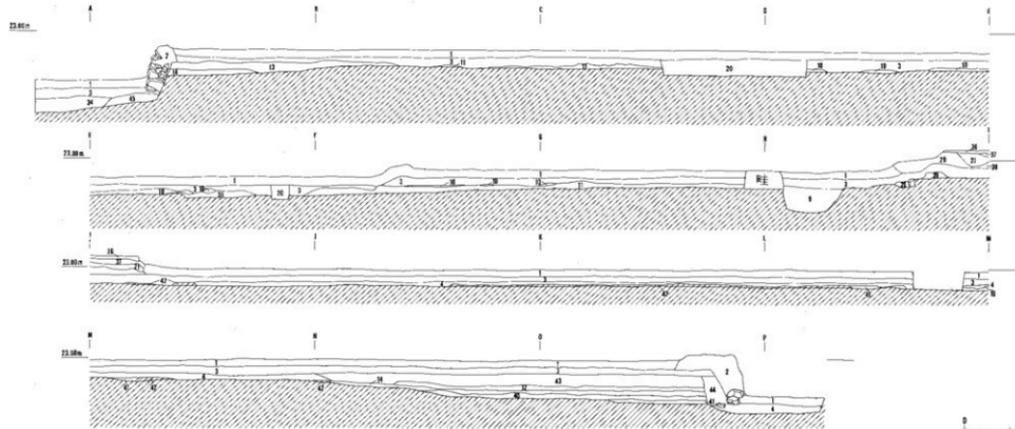


第22図 Hライン土層図

9ライン

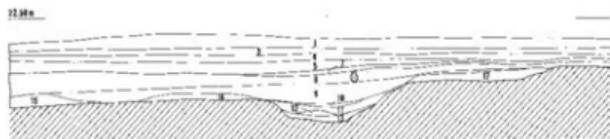


15ライン

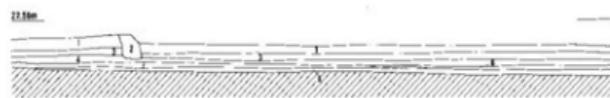
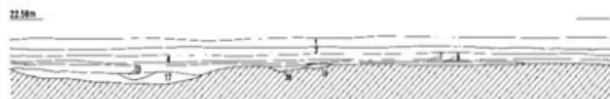


1. 緑土 黒
2. 緑土・腐食土
3. 淡黄褐色シルト
4. 灰褐色シルト 青色
5. 淡灰褐色シルト 黄(マ)
6. 濃灰褐色シルト 紫色
7. 淡褐色シルト
8. 灰褐色シルト
9. 暗灰褐色シルト 緑
10. 黒褐色シルト 茶色
11. 淡黄褐色シルト 橙
12. 暗灰色シルト 赤
13. 淡茶褐色シルト ベージュ
14. 明灰褐色シルト 黄緑
15. 青褐色シルト(地山) 紫色
16. 灰色砂質シルト
17. 淡灰褐色砂質シルト
18. 暗褐色シルト
19. 灰色砂質シルト
20. 淡灰色砂質シルト(暗栗)
21. 淡黄褐色砂質シルト
22. 暗藍色砂質シルト
23. 淡茶色シルト
24. 灰色シルト
25. 淡褐色砂質シルト
26. 暗灰色シルト
27. 明褐色砂質シルト
28. 淡褐色シルト
29. 暗灰色砂質シルト
30. 淡灰褐色シルト
31. 淡灰色シルト
32. 黄褐色粘質シルト
33. 暗黄褐色シルト
34. 淡灰色シルト
35. 淡黄色シルト
36. アスファルト
37. 黄灰色砂質シルト(貝殻を含む)
38. 黒灰色砂質シルト
39. 淡黄色シルト
40. 淡灰褐色シルト
41. 暗茶褐色シルト
42. 黄褐色シルト(地山)
43. 黒褐色・褐色・暗灰色シルト
44. 明褐色シルト
45. 明黄褐色シルト

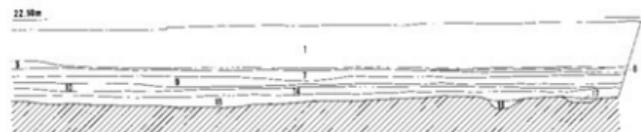
第23図 9・15ライン土層図



1. 耕上
2. 耕上・腐食土
3. 灰褐色シルト
4. 淡灰褐色砂質シルト
5. 明灰褐色砂質シルト
6. 灰褐色砂質シルト
7. 黄褐色砂質シルト
8. 灰褐色砂質シルト (中世包含層)
9. 紫褐色シルト (奈良包含層)
10. 暗紫褐色シルト
11. 暗灰褐色シルト
12. 淡紫褐色シルト
13. 暗灰色シルト
14. 暗灰色シルト (黄色シルト含む)
15. 黒褐色シルト
16. 暗紫褐色砂質シルト
17. 黒褐色シルト
18. 黒褐色シルト (黄色礫含む・弥生包含層)
19. 暗灰褐色砂質シルト



1. 盛土
2. 現耕上
3. 淡灰褐色細砂 (新耕上)
4. 灰褐色細砂 (旧耕上)
5. 黄灰色細砂
6. 灰色砂質シルト
7. 明灰褐色細砂
8. 薄青灰色細砂
9. 黄灰色細砂
10. 淡灰褐色細砂
11. 淡灰色細砂 (中世包含層)
12. 灰色細砂 (清15)
13. 土壌B
14. 淡灰色細砂
15. 黒褐色シルト (弥生包含層)
16. 黒褐色シルト (溝12)
17. 黒褐色シルト (溝13)



第24図 B地区東段土層

き、途切れながら消滅している。南部では第8層の下に弥生時代の遺物包含層である黒褐色シルト(第18層)が地山の上に堆積している。

B地区の遺構(第21図)には弥生時代中・後期、奈良時代、鎌倉・室町時代のものがある。弥生時代中期のものには、円形の竪穴住居址1基(住居址B-4)のほか、掘立柱建物址が2棟(建物址1・2)認められた。いずれも台地の最も拡がりのある部分に位置している。

弥生時代後期の遺構には円形の竪穴住居址・方形周溝墓・土器棺・溝がある。方形周溝墓は6基が台地の最高部に連絡と築かれているが、方形周溝墓3でかろうじて墳丘が高さ30cm残っていた以外は、埋葬施設・墳丘はもとより周溝までも削平を受けており、遺存状況は良好ではない。周溝も一部が途切れるものが認められるが、陸橋状に掘り残したものか、溝底の浅い部分が陸橋状に残ったのかは不明である。また、方形周溝墓6は南西コーナー部分しか検出できなかったため確実とはいえないが、溝の形状・時期・位置から方形周溝墓と考えている。方形周溝墓群は現状では方形周溝墓1～4・6が列状に形成されており、方形周溝墓2と3は周溝を共有し、方形周溝墓1と2は復元すれば周溝を接するかたちとなっている。方形周溝墓5はこれらの列とはやや離れて単独で存在している。竪穴住居址は3棟認められた。いずれも円形で、中央穴と屋外に伸びる排水溝を有している。住居址B-2・3は台地最高部の良好な位置に立地しているが、住居址B-1は調査区南隅部の斜面、浅い谷の横に存在しており、台地頂部からかなり下がった位置に存在している。住居址B-1・3は大きく削平を受けており、壁面は残っていない。溝は8本検出したが、ほぼ確実にこの時期と思われるものは溝3・4・7のみである。また、F-2区付近で壺棺を1基検出している。

奈良時代の遺構にはG-19区付近の土壌1が単独で認められ、他にこの時代の遺構は認められなかった。但し、方形周溝墓2の南溝内上層で奈良時代の須恵器が2点出土している。

鎌倉・室町時代の遺構はすべて東部に存在し、掘立柱建物址が6棟、柵列址が4基、土壌8基のほか溝が3本検出された。これらの中には時期の決め手を欠くものも含んでいる。

鎌倉時代の遺構には建物址3・4の2棟と柵4がある。建物址4は建物址3と方向・柱通りが同じであることから、この時代のものと考えられる。建物址3は庇を持つ。

室町時代に属する遺構は掘立柱建物址が3棟(建物址5・6・8)と柵3基・土壌9基・溝3本があり、建物址6は柵3を備えている。また、建物址8は北・西・南の3面に庇を設けているようである。柵1・2はいずれも建物址5と同方位のため同時期と考えられる。土壌のうち6は形状・規模から木棺墓と思われる。また、土壌4の中には多量の土器が入っていた。検出した溝の中には、建物址の雨落ち溝や排水溝と考えられる溝15や溝16がある。

他にも柱穴を多数検出しており、以上あげたほかに柵や建物が存在していた可能性が高い。近世の遺構には、近世墓と思われる円形の土壌と肥溜めと考えられる桶埋設土壌がある。

## 第 2 節 遺 構

### 1 弥生時代の遺構

#### 建物址 1 (第25図)

建物址 1 は掘立柱の建物址で、調査区のほぼ中央部やや北寄りの台地頂部に位置し、方形周溝基5の北溝から約2m北に存在している。

この建物址は、3間×1間の規模で、桁方向の主軸はN12°Eである。

規模は、柱穴の中心間の距離でみると、桁方向が東側で5.51m、西側で5.58mを測り、桁行の柱間は北半東脇が1.97m、中央が1.96m、西脇が1.84m、南半東脇では1.70m、中央では1.50m、西脇が2.12mで、桁行北半が長く、南半が短くなっている。梁行は北側で2.96m、南側でも同じ計測値を示し、梁行の柱間は北側東半が1.50m、西半が1.46mを測り、南側東半は1.52m、西半は1.44mである。

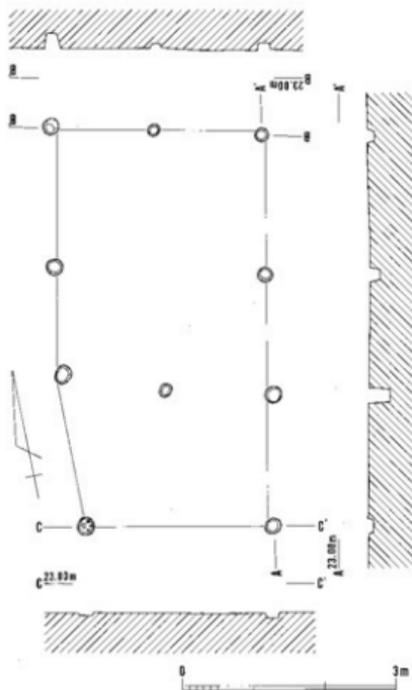
柱穴はいずれも柱の痕跡部分は検出できず、掘り形全体を掘削した。柱穴上端部の径は16~26cmまでであるが、梁行中央の柱穴は径16cm程度の小さなものである。また、深さは梁行中央の柱穴が6・8cmであるのに対し、桁行のものは10~30cmの深さで、平均約20cmとなっている。

遺物は柱穴内よりサヌカイト製の石鏡が1点出土しているだけであり、時期の決定は難しいが、柱穴埋土が建物址2と同じものであることを考え合わせると、建物址2と同様の弥生時代中期の所産と思われる。

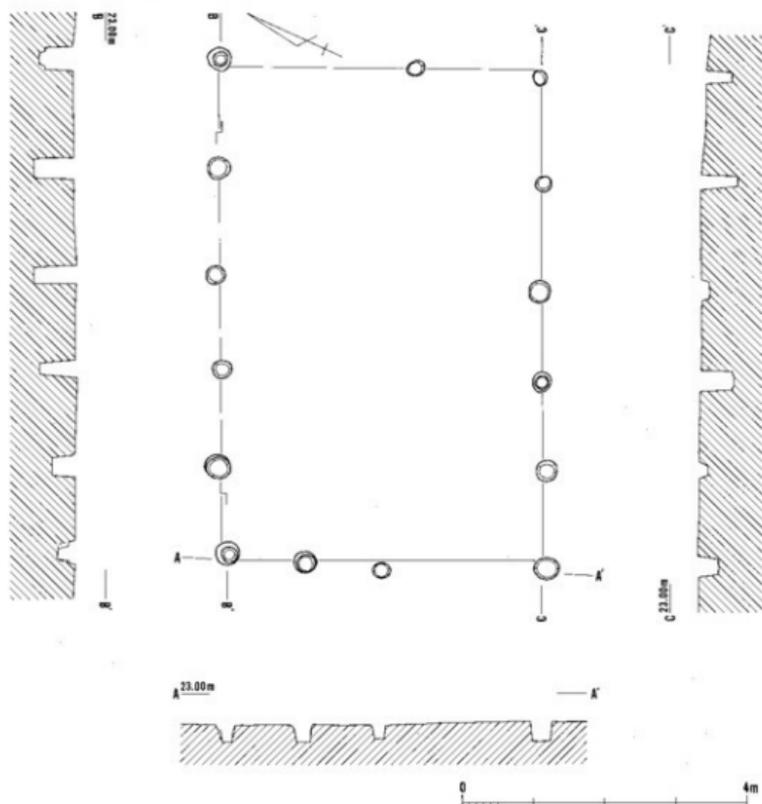
#### 建物址 2 (第26図)

建物址 1 の東約13mの台地頂部に位置する掘立柱の建物址で、この地区の弥生時代中期の遺構の中では最も南に位置する。

建物址の平面形は多少歪になっているが、桁行5間(約7.0m)×梁行2間(約



第25図 建物址 1



第26図 建物址2

4.5m)の規模で、棟方位を $N66^{\circ}E$ に置く。桁行北側柱列の柱間は西から約 $1.2 \cdot 1.4 \cdot 1.4 \cdot 1.5 \cdot 1.2m$ を測り、南側柱列の柱間は同じく西から約 $1.4 \cdot 1.2 \cdot 1.3 \cdot 1.5 \cdot 1.5m$ となっている。このように桁行の柱間は $1.2 \sim 1.5m$ の間で多少ばらつきがあり、揃っていない。梁行の柱間は西側柱列が南から約 $2.3 \cdot 2.2m$ となっており、北側柱間の中央に柱穴がある。東側柱列の柱間は南から約 $1.8 \cdot 2.7m$ となっており、南側の柱間がかなり狭くなっている。

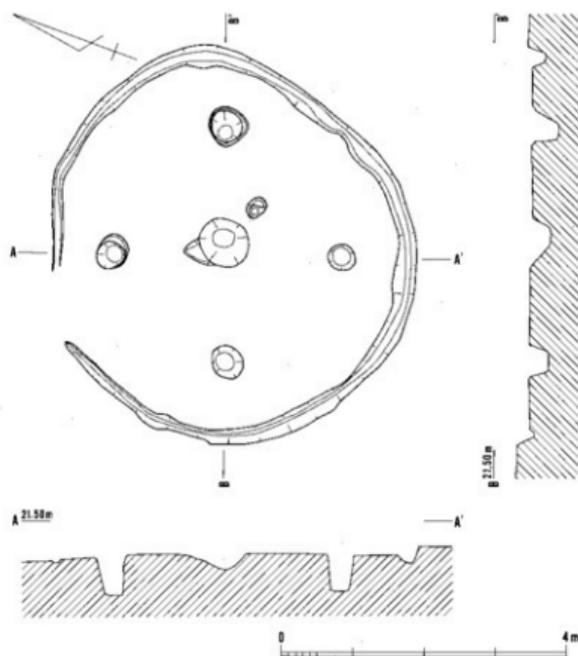
柱穴の大きさは径約 $20 \sim 35cm$ で、深さは約 $10 \sim 58cm$ を測る。特に南側柱列の西から2本目と4本目の柱穴は浅くなっていた。また3本の柱穴に太さ約 $20cm$ の柱痕跡が認められている。これらの柱穴から見ると、深さにばらつきが多く、建物址とするには若干の疑問も残るが、

柱穴の配置から建物址と断定した。

桁行の南側柱列の西から4本目の柱穴からは、(36)の菱形土器と櫛描波状文を持つ壺形土器(37)が出土しており、この建物址の時期は一応弥生時代中期と考えられる。

#### 住居址B-4 (第27図)

建物址1の北側約5mの、台地平坦面の北端で検出された住居址である。台地は住居址の北側からはかなり急な斜面となっ



第27図 住居址B-4

て、台地北側の沖積地に落ちている。方形周溝墓3・溝8とに切られて検出され、北壁と壁溝の一部は失っていた。

住居址の規模は南北約5.6m・東西約5.1mを測り、南北に長い楕円形の平面を呈する。壁は最高約15cmの高さまで確認され、壁下には巾約25cm・深さ約15cmの壁溝が巡らされていた。壁溝の一部は方形周溝墓3の東溝に切り取られていた。住居址規模から壁・壁溝を除いた床面規模は南北約5.1m・東西約4.6mを測り、床面積は約18.7㎡を測る。

床面上からは5本の柱穴が検出され、その配置から見て、主柱穴は4本と思われる。主柱穴は径約38~50cm・深さ約25~56cmを測る。柱穴の中には柱の抜き取り後に、15~16cmの石が埋め込まれているものもあった。

床面の中央には長径約70cm・短径約66cm・深さ約26cmの土壇が設けられていた。土壇の壁面は西側が緩く、東側が急な傾斜で掘られている。土壇の埋土には炭化物が含まれていたが、この土壇の上面及び周辺の床面にも炭化物が認められている。

床面上からは2～3cm浮いた状態であったが、遺物(38・39)が遺存していた。しかし土器はいずれも破片であり、完形に復元できるものはなかった。

これらの土器の特徴から、この住居址は弥生時代中期後半の所産と考えられる。

#### 住居址B-1 (第28図)

住居址は調査区の南隅に位置している。住居址東側には、溝3が流れる浅い谷部が台地の中央近くまで入り込み、住居址の乗る平坦面は方形周溝基2付近から派生する尾根状の、僅かな高まりとなっている。この尾根状の高まりは住居址付近では、巾約14～15mとなり、本来は南に緩く傾斜していたものと思われる。住居址のすぐ西側は台地斜面となって、急な傾斜で台地西側の谷部に落ち、南側は台地の平坦面が4～5m続いた後、D地区に向かって落ちていく。東側の浅い谷部を挟んで、北東約30mには住居址B-2が存在している。

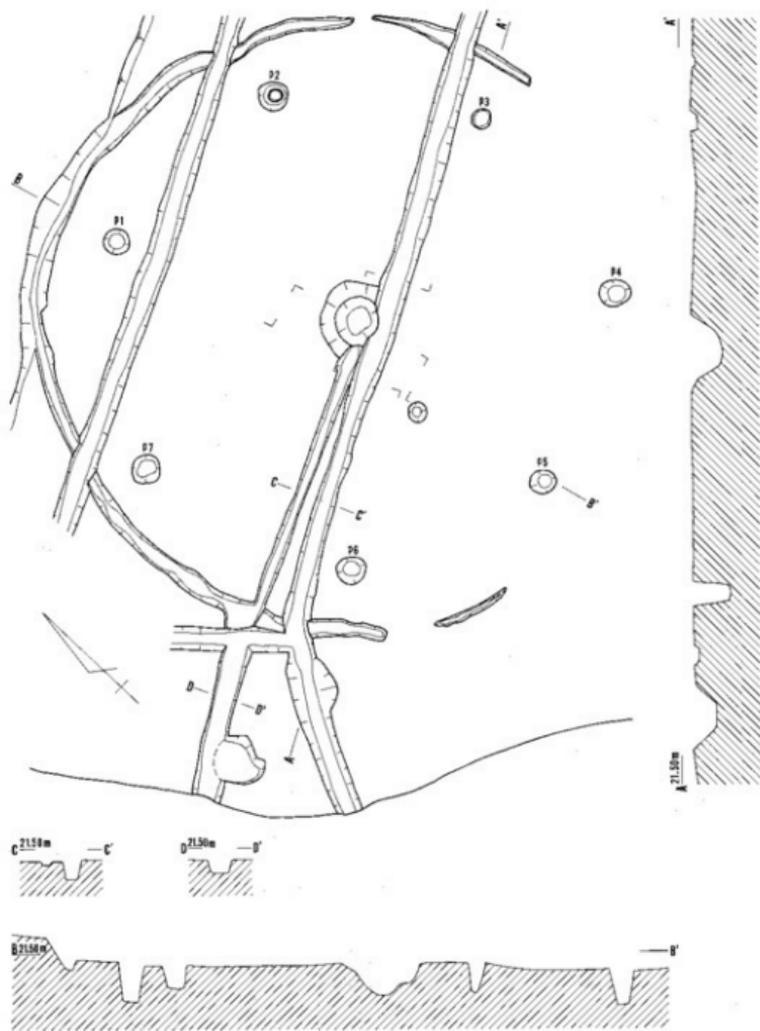
住居址は大きく削平を受け、北壁の一部を残す以外、大部分は床面まで削平され、斜面下方側の南壁部分は壁溝まで消失していた。また床面は後世の暗渠によって、ほぼ2等分された状態になっていた。

したがって住居址の南北規模を知ることはできなかったが、検出できた部分では東西8.8m・南北8.2m以上を測る。東西規模を支柱穴の位置等から推測すると、約9.0m前後であったようである。住居址規模から壁・壁溝を除いた床面規模は南北約8.6m・東西約8.2m以上となるが、東西規模が上記の推測値とすると、床面積は約56.7㎡となる。

壁は北壁以外は検出されず、北壁は最高約40cmの高さまで遺存していた。北壁下には巾約18cmの壁溝が設けられ、壁溝は斜面下方側の部分を除いて、途切れる部分もあるが、住居址を約2/3周する形で遺存していた。壁溝の深さは約11cmを測る。

また床面には中央に土壇が設けられ、柱穴は8本が検出されている。中央の土壇から西側に小溝が設けられ、小溝は調査区西側の谷部に向かって伸びていた。床面上で検出された8本の柱穴の内、位置から見て、支柱穴は7本と思われる。7本の支柱穴は径約30～45cm・深さ約36～54cmを測る。柱穴の深さは柱穴4が最も浅く約36cm、柱穴2・3が43・44cm、柱穴1・5・6・7が52～55cmとなっている。柱穴2には径約16cmの柱痕跡が確認され、柱穴3には底から約26cm浮き、上部でほぼ床面と同じ高さとなる状態に石が捨て込まれていた。支柱穴以外の柱穴は床面中央の土壇南側で検出され、柱穴1・5と柱穴3・6を結ぶ線の交点に当たる位置に配置されている。径は約27cmで、支柱穴より小さく、深さは約42cmを測る。

床面中央の土壇は南半を後世の暗渠に切られていたが、2段に掘られ、上段は東西約115cm・南北約100cmを測る楕円形を呈し、約9cmの深さである。そこから壁の傾斜が急になって下段となり、下段は東西約66cm・南北約62cmのほぼ円形に近い楕円形に掘られている。下段の深さは約35cmを測り、土壇全体の深さは約44cmを測る。埋土には炭化物を多量に含む層が3層確認された。



第28回 住居址B-1

またこの土壌から壁溝を貫いて、台地西側の斜面まで伸びる小溝が設けられていた。小溝の内、屋内にあたる中央の土壌と壁溝間の部分では、巾約20cm・深さ約4~14cmを測り、溝の底は壁溝と繋がった部分が深くなっていたが、全体は中央の土壌に向かって徐々に深くなっている。壁溝より外の部分では巾約34cm・深さ約11cmを測り、長さ約2.6mまで検出されたが、それから先は調査区外となって検出できなかった。ただ台地平坦面は調査区の端でほぼ終わっており、この小溝も調査区外にはそれほど伸びないものと思われる。

出土遺物は極めて少ない上、細片であり、図化できたものは(62)だけである。(62)は床面中央の土壌埋土から出土したものである。

#### 住居址B-2 (第29図)

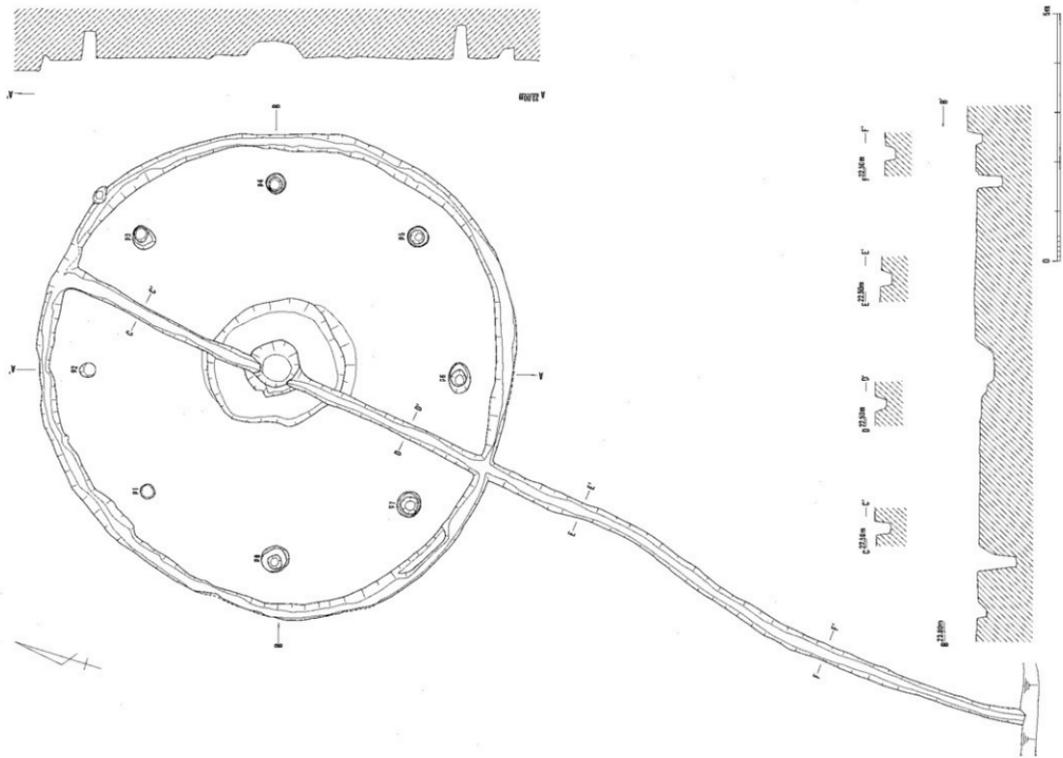
台地頂部から南に派生した尾根状の高まりに位置し、緩やかに南に傾斜した斜面に位置している。住居址B-1とは浅い谷によって隔てられ、北東約7mには住居址B-3が存在している。西約7mには方形周溝墓5が築かれており、その間は浅い谷によって隔てられている。この住居址も後世の削平を受けているが、他の住居址よりは遺存状況は良く、壁は全周遺存していた。

住居址は円形の平面プランを持ち、規模は東西約10.0m・南北約9.8mを測り、住居址規模から壁・壁溝を除いた床面積は約62.4㎡を測る。この地区では最も大規模の住居址である。

壁は全周して検出され、最高約27cmの高さまで確認された。壁の内、北側で小溝が壁溝に取りつく付近から西側約1/4の壁は赤変し、焼土化していた。ただ焼土は壁溝の上でも確認され、住居址に直接伴うものではない可能性が高い。壁下には巾約20~40cm・深さ約11~20cmの壁溝が巡らされていた。西壁下では壁溝は壁に挟り込んだ状態で検出されており、壁溝底には薄い砂層が認められた。

床面上には中央に土壌が設けられ、床面の周囲には8本の柱穴が配置されていた。また床面を東西に2分するように、中央の土壌を貫いて小溝が設けられ、小溝は屋外に伸びていた。検出された8本の柱穴は径約30~50cm・深さ約52~70cmを測り、位置から見て主柱穴と判断される。この内柱穴1・2は径約30cmと細く、深さも約52・59cmと比較的浅くなっている。柱穴3・5~8の深さ約64~70cmと極めて深い。また柱穴3・6・8は平面形は不整形で、掘り方も2~3段となっている。柱穴6では台石等が埋め込まれた状態で出土している。こうしたことから住居址に伴う主柱の一部は抜き取られた可能性が高い。

床面の中央に設けられた土壌は2段に掘られ、上段は長径約270cm・短径約250cm・深さ約6cmを測り、北西-南東方向に長く、隅丸方形に近い不整形な楕円形に掘られていた。この上段の底ほぼ中央には長径約120cm・短径約110cm・深さ約27cmを測り、上段と同じ方向に長くなった、不整形な楕円形に下段が掘られていた。また土壌の上段の北西・南東側の周囲には幅巾約40cm・最大高さ約5cmの畦畔状の高まりが検出された。この畦畔状の高まりは本来



第23回 住居誌 B-2

土壌の上方周囲全体に設けられていたものと思われる。土壌埋土には焼土・炭化物を多量に含む層が認められたが、いずれも埋土の上層であった。また埋土の上層には約30cm大の石も見られた。

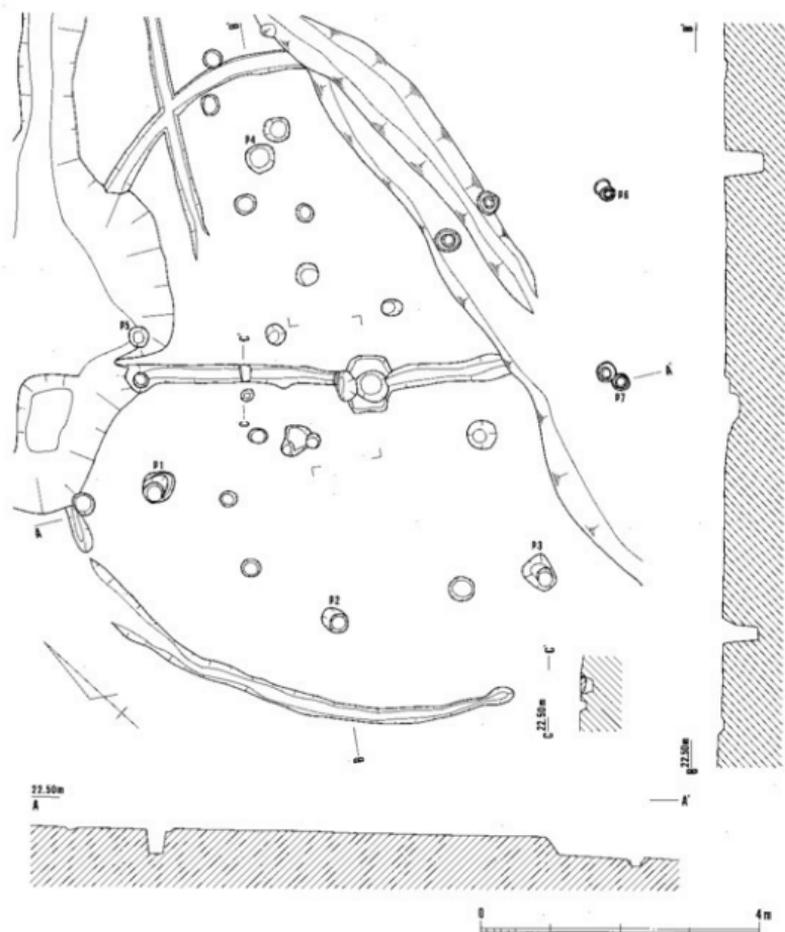
この中央の土壌を貫き、住居址床面を2分するように、斜面上方側の北壁下壁溝から、斜面下方側の南壁下壁溝まで小溝が設けられている。床面上の小溝の中央土壌北側部分は巾約30cm・深さ約3～27cmを測る。北壁下の壁溝と繋がる部分では深さ約3cmと浅く、壁溝の方が約3cm深くなっている。そこから小溝は中央の土壌に向け徐々に深くなり、中央の土壌と繋がる部分では深さ約23cmとなって、中央の土壌底より約9cm上に接続している。中央の土壌より南側の部分では巾約30cm・深さ約20～27cmを測る。中央の土壌と接続する部分では土壌底より約9cm浅く、深さ約23cmを測る。南壁下の壁溝と接続する部分では壁溝と同じ深さの約19cmとなっていた。小溝の埋土には焼土・炭化物等が見られた。特に中央の土壌南側部分の中央付近では、溝両側の床面上に焼土が見られ、その焼土が小溝の底から約18cm浮いて、小溝の埋土上層となっていた。

床面はやや斜面下方側の南壁にかけて傾斜していたが、ほぼフラットであった。床面上には焼土・炭化物が多く認められ、柱穴5・6の間では壁から中央の土壌付近までの広範囲には焼土・炭化材が認められた。さらに床面上の小溝と壁溝が接続する付近の北壁から西壁にかけての壁は焼土化し、その下の壁溝・床面にも焼土が認められた。ただこの付近では炭化材は認められていない。またいずれの部分も焼土は壁溝内の上層の埋土となっており、床面上に広がる焼土・炭化材とこの住居址との関係は即断できない。

床面上の小溝と南壁が接合する部分から、床面上の小溝が屋外にそのまま伸びたような状態で、巾約34cm・深さ約20cmの溝が設けられていた。この溝は少し蛇行するがほぼ直線で、約12mの長さまで確認された。その先は、後世の水田化の際に削られて消失しており、確認できなかった。他の住居址の例からすると、おそらく台地南斜面まで伸ばされていたものと思われる。

遺物は北壁下の壁溝内から(42・53・60)等が出土し、中央の土壌内には(57)が落ち込んだ状態で出土している。また中央の土壌東側の床面上には(43・58)等を始め、多くの遺物が集中していた。ただいずれも破片で、完形に復元できるものはなく、床面からも3～4cm浮いた状態で出土している。この他に埋土中からは手づくね土器も出土している。

これらの土器の特徴から住居址の時期は、一応弥生時代後期後半に考えておきたい。



第30図 住居址B-3

住居址B-3 (第30図)

住居址B-2の北東約7mで検出された住居址で、台地頂部の南斜面にあたる地区で検出された。住居址の東約1/3は後世の水田化の際に削られ消失し、検出できた部分でも住居址の壁もまったく遺存していなかった。さらに住居址南側では床面まで削平を受けたようで、壁

溝をも検出することはできなかった。また斜面上方側の北西部分の中世の土壌と溝によって切られて、壁溝・床面ともに検出されなかった。住居址の西側は台地上にはきついで段状の斜面となっていたが、これは後世の削平のためと思われる。

検出できた部分では円形プランの住居址と考えられ、規模は南北約10.0m・東西約7.0m以上であった。床面中央の土壌を住居址の中央とすると、住居址は東西も約10.0mの規模となる。東西規模をほぼ10mとすると、床面積は約65.4㎡に復元できる。

壁は削平されてまったく遺存せず、壁溝も北側と南側の一部が検出されただけであった。その部分の壁溝は巾約20cm・深さ約6～13cmを測る。

住居址の床面上には相当数の柱穴が検出され、中世以降の柱穴も多く含まれているものと思われたが、柱穴埋土での区別は困難であった。しかし柱穴1～4は、床面上で検出された他の柱穴より深さが約55cm前後と深く、柱穴の底が標高約21.5mで揃っている。また他の柱穴が比較的形が整っているのに対し、柱穴4以外は形が不整形である等、床面上の柱穴の中から抽出できるものである。これら4本の柱穴はその位置から見て、住居址に伴う支柱穴と考えてよいものと思われる。また北側の中世土壌に切られた柱穴5と、水田化の際の削平でついた住居址東側の段下で検出された柱穴6・7は、柱穴の径・深さが他の4本と異なっているが、位置的には支柱穴になるものと思われる。さらに柱穴4と6の柱間は広く、ここにもう一本柱穴が配置されていた可能性が高い。こうしたことからこの住居址に伴う支柱穴は、本来7～8本であったものと思われる。柱穴1～3は形が不整形で、2～3段の掘り方となっており、柱の抜き取りが行われた可能性が高い。

床面の中央には2段に掘られた土壌が設けられていた。土壌の上段は床面上の小溝とほぼ直交する北東—南西方向に長い、長さ約80cm・巾約60cm・深さ約7cmの方形を呈している。その中央に径約40cm・深さ約9cmの円形に下段の土壌が設けられている。中央の土壌全体の深さは約16cmを測るが、他の住居址の中央土壌と比較すると浅くなっている。また土壌と北西側の小溝が取り付く部分には、深さ約18cmの不整形なピット状の落ち込みが検出された。

この床面中央の土壌には北西側からと南東側から小溝が取り付いていた。ただ北西側の溝は中世の土壌によって壁溝とも失われ、南東側の溝は水田開発の際の削平で床面とも失われていた。そのため壁溝との関係は確認できなかったが、他の住居址例からすると、本来壁溝と接続していたものと思われる。北西側の溝は巾約25cm・深さ約17cmを測り、中央の土壌に取り付く寸前と、ほぼ中央付近に、溝を壊し止めるように、溝巾いっぱいの扁平な石が検出された。ただ石は溝の底から7～9cm浮いた状態であった。南東側の溝は巾約25cm・深さ約3～9cmであったが、この付近は床面が削平されており、溝底の高さが北西側の溝と大差ないことからすれば、本来北西側の溝とほぼ同じ程度の深さがあったものと思われる。

出土遺物はほとんど無く、僅かに1点(64)だけが図化できたものである。

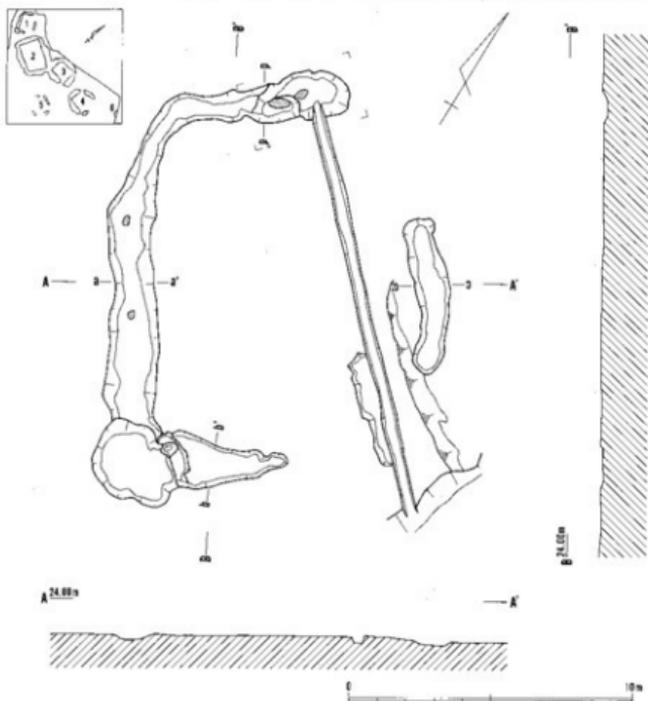
### 方形周溝墓1 (第31~33図)

方形周溝墓1は調査区西端に存在し、方形周溝墓群の西端に位置している。台地の最も高い所に占地しており、北東および南西側は急傾斜となっている。南西側は周溝の外側から傾斜が始まっているが、北東側は周溝の内側から傾斜している。

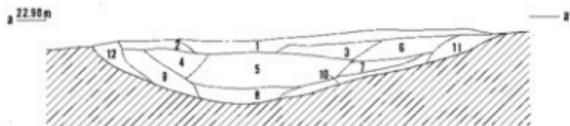
台地全体が削平を受けているため本来の形状を留めてはいないと思われ、周溝墓全体の現形状は北西～南西～南東の周溝がつながって「コ」の字状になっており、北東側周溝は他の溝に繋がらず、途中で消失している。したがって、現状では周溝墓の北および東隅が途切れて、除橋状を呈している。また、台状部墳丘も周溝外側と同じ高さまで削平されていたため、封土のみならず埋葬施設もその痕跡すら残っておらず、検出できなかった。

各周溝のうち、南西側周溝は長さ約13.9m、巾は約0.8～1.8mで、深さは約15～40cmであり、中央は巾広く、西側コーナーは溝巾が狭くなっている。また、本周溝の南端に土壇状の

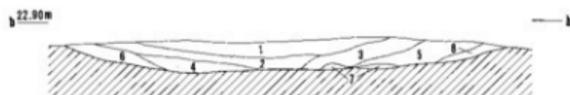
ものが存在するが、周溝埋土上から掘り込まれており、埋土は淡黄灰色シルトと淡橙灰色粘質シルトで、周溝埋土とは全く違い、近世の掘り込みと思われる。北西側周溝はその北端が土壇状に深く掘り込まれており、深い部分は長さ約3.4m・巾



第31図 方形周溝墓1



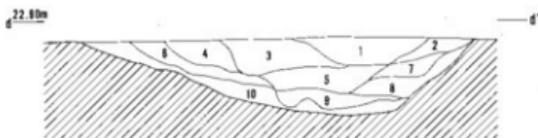
- |                       |                        |
|-----------------------|------------------------|
| 1. 淡灰褐色シルト (マンガン含む)   | 7. 灰褐色シルト (風化礫少量含む)    |
| 2. 白灰褐色シルト (マンガン少量含む) | 8. 黒灰褐色粘質シルト (風化礫少量含む) |
| 3. 淡茶褐色シルト (マンガン少量含む) | 9. 褐灰色シルト (風化礫少量含む)    |
| 4. 淡褐灰色シルト (マンガン少量含む) | 10. 淡乳褐色シルト (風化礫少量含む)  |
| 5. 黒灰色シルト (風化礫少量含む)   | 11. 暗灰橙色シルト            |
| 6. 淡灰色シルト (風化礫少量含む)   | 12. 淡橙灰色シルト (マンガン含む)   |



- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1. 暗灰褐色シルト           | 5. 暗褐色シルト (風化礫含む)    |
| 2. 黒灰褐色シルト (風化礫少量含む) | 6. 淡灰褐色シルト (風化礫含む)   |
| 3. 暗褐灰色シルト (風化礫含む)   | 7. 灰棕色粘質シルト (風化礫含む)  |
| 4. 黒褐色シルト (風化礫含む)    | 8. 暗灰橙色粘質シルト (風化礫含む) |



- |                      |
|----------------------|
| 1. 淡灰褐色シルト (風化礫多く含む) |
| 2. 暗灰褐色シルト (風化礫多く含む) |



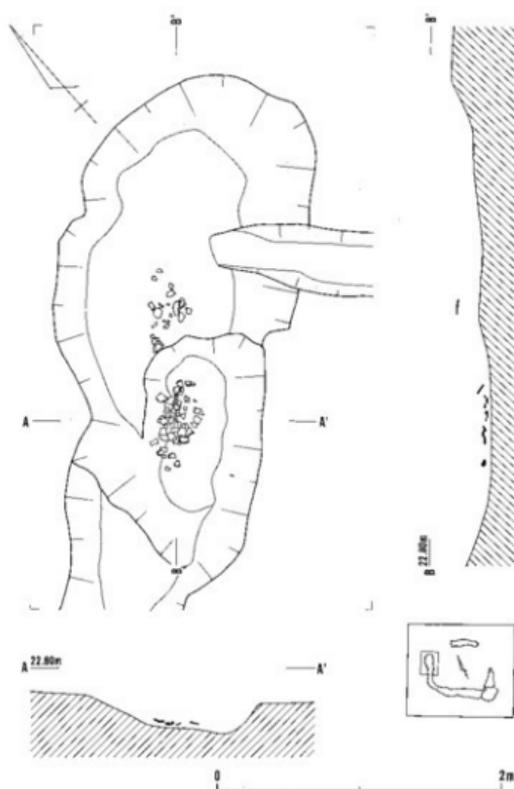
- |                            |                          |
|----------------------------|--------------------------|
| 1. 茶褐色シルト (淡黄灰色シルトブロック含む)  | 6. 淡茶灰色シルト               |
| 2. 淡灰褐色シルト (淡黄灰色シルトブロック含む) | 7. 淡灰色シルト (やや粘質・風化礫少量含む) |
| 3. 黒灰褐色シルト (風化礫少量含む)       | 8. 淡黄褐色シルト (風化礫少量含む)     |
| 4. 灰褐色シルト                  | 9. 黄褐色シルト (風化礫少量含む)      |
| 5. 暗灰褐色シルト                 | 10. 淡褐色シルト (風化礫多く含む)     |



第32図 方形周溝塞1 周溝内土層

約1.7m・深さ約15~25cmである。南東側周溝は平面が三角形状を呈しており、巾約0.5~1.9m・深さ約5~15cmである。北東側周溝は中央部分しか残っており、北東側の傾斜面について後世の削平があったものと考えられ、現状では長さ約5.4m・巾約0.9~1.2m・深さ約10cmである。

周溝内の埋土（第32図）をみると、最も多く堆積している土層は黒灰色系と褐色系のシルトであり、方形周溝墓1の周溝埋土の基本の土層となっている。南西側周溝や北西側周溝では墳丘側と周溝墓外側の両方から埋まっているが、墳丘側から流入した土量の方が多かったことを示している。特に、南東側周溝では墳丘側からの流入が多かったことが窺える。



第33図 方形周溝墓1 西溝内土器出土状態

周溝の北コーナー部分は現状では陸橋状に残っているが、これが当初からのものかどうかは不明である。しかし、北西側周溝が北東側周溝につながる位置まで伸びていることと、北東側周溝が削平により短くなっていることを考えると、本来は北東溝とつながっていた可能性が高いと思われる。一方、南東溝は削平が平面的にもかかわらず、途中で急に浅くなって消失していることから、南東溝と北東溝の間には陸橋部が設けられていた可能性が高い。

台状部は平面長方形を示しており、周溝内肩からの計測値によると、長辺は南西端で約11.2m、中央部では約12m、短辺は中央部で約9.3mである。

周溝内には若干の土器が遺存しており（第33図）、それらは南西溝に2ヶ所、北西溝の北端

土壌状部分の中に認められた。南西溝のものは、小片が溝底より2～6cm浮いた状態で出土し、北西溝のものは小さく2群にわかれ、ほぼ溝底に密着して検出された。溝内から出土した土器は弥生時代後期の壺口縁部・脚部・底部の他、甕の体部片である。

#### 方形周溝墓2 (第34～36図)

方形周溝墓2は方形周溝墓1の南東側にあり、東側に存在する方形周溝墓3と周溝を共有している。台地最高部の北端に築造されており、群中では最も規模の大きいものである。

本局溝墓は全体に大きく削平を受けていたため、盛土・埋葬施設は全く残っていなかった。一方、方形周溝墓の南側はほぼ平坦で、周溝墓北側は台状部北半から急傾斜となっている。これは、部分的に段状の削平を受けてはいるが、旧地形の傾斜を残しているものと思われ、北側周溝の底のレベルが墳丘側で高く、外側で低くなっていることから窺える。

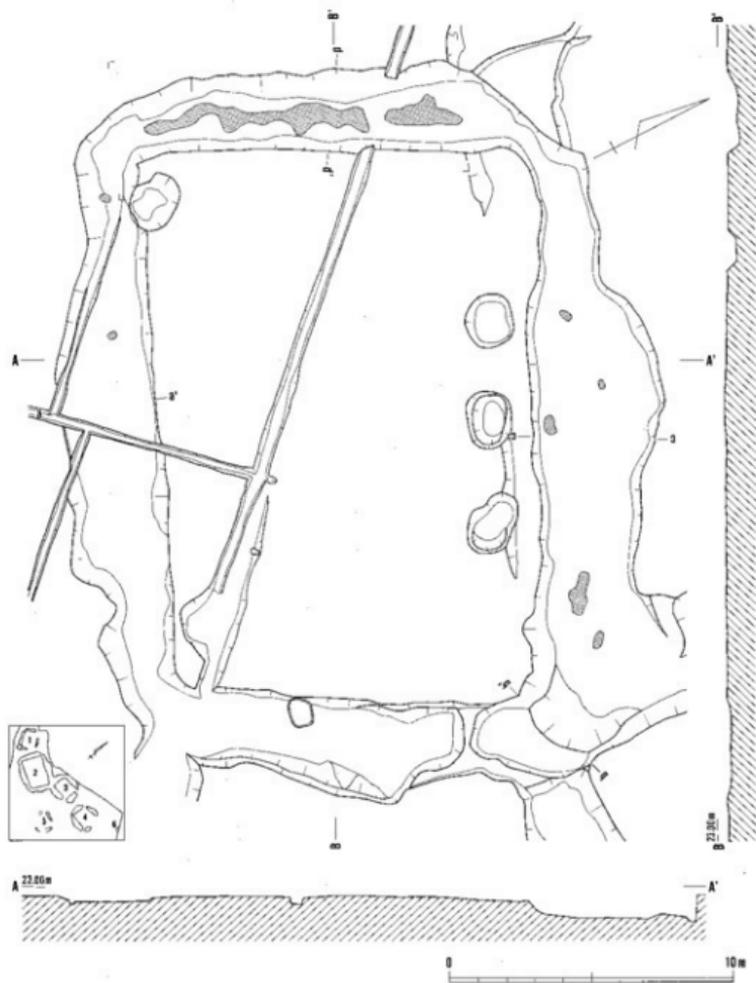
周溝は台状部を全周し、周溝の内側肩のラインは直線、外側ラインは弧状を呈して、周溝外端で見た平面形は楕円形に近いものとなっている。周溝の最も張り出した部分での方形周溝墓の規模は東西約26.1m・南北約21mである。溝巾は四隅では狭く、辺の中央部では広い。この形態は方形周溝墓3・4でも認められ、本遺跡の方形周溝墓平面形の特徴である。

北溝の肩のレベルは台状部側が高く、外側が低くなっており、その差は約25cmである。巾は中央部の最も広い所で約4.7m、北西コーナー部分では約1.1mで、検出面からの深さはコーナー部分が浅く、中央部分が深くなっており、約10～30cmである。南溝は全体に著しい削平を受け、約10～20cm程度しか残っていないが、西コーナー部分のみ深く、約30cmを測る。溝巾は約2.1～3.4mである。東溝も残りが悪く、10～15cm程度の深さである。東溝では、北東コーナー手前で溝と直交方向に巾20～40cmの特に浅い部分があり、陸橋部にあたると思われる。西溝は巾が約1.2～3.2mと比較的狭いにもかかわらず、20～35cmと深く残っている。

方形周溝墓2は方形周溝墓3と一部周溝を共有している。共有部分の溝底は方形周溝墓2の形態に合っているが、方形周溝墓3の周溝掘削が下まで及ばなかったのか、方形周溝墓2が新たに周溝を掘削したためであるのか断定しがたく、土層関係からも前後関係は断定できなかった。

周溝内の埋土(第35図)は、細かい堆積が多いが、土層は基本的には方形周溝墓1と同様、黒灰色・褐色系のシルトが堆積しており、墳丘側と外側の両方から土が流入している状況が認められる。西溝を除いて溝底は平坦に近い。

台状部は、周溝内端からの計測値では、東西方向の長辺が南端で約19m、中央で約19.4m、北端で約19.6mとなり、南北方向の短辺は西端で約13.8m、中央で約13.2m、東端で約12.5mとなる。計測値では西辺が長い台形に近い長方形になっている。台状部内には水田排水用



第34图 方形周溝墓2

22.00m



- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| 1. 暗灰褐色シルト          | 7. 淡灰色シルト (風化礫少量含む)   |
| 2. 黒灰褐色シルト          | 8. 淡黄褐色シルト (風化礫少量含む)  |
| 3. 黒褐色シルト           | 9. 淡黄褐色シルト (風化礫多く含む)  |
| 4. 灰褐色シルト           | 10. 淡褐色シルト            |
| 5. 灰橙色シルト           | 11. 濃灰褐色シルト (風化礫少量含む) |
| 6. 暗褐色シルト (風化礫少量含む) | 12. 淡灰褐色シルト (風化礫少量含む) |

22.00m



- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 1. 暗灰褐色シルト (風化礫少量含む) | 4. 黒灰褐色シルト (風化礫少量含む) |
| 2. 黒灰褐色シルト (風化礫含む)   | 5. 黒灰褐色シルト (風化礫含む)   |
| 3. 黒灰色シルト (風化礫少量含む)  | 6. 濃灰褐色シルト (風化礫多く含む) |

22.68m



- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| 1. 灰褐色シルト (粘質)         | 5. 淡黒褐色シルト (粘質・風化礫含む) |
| 2. 黒褐色シルト (粘質・風化礫少量含む) | 6. 暗黄褐色シルト (砂質・風化礫含む) |
| 3. 黒褐色シルト              | 7. 淡黒灰色シルト (砂質・風化礫含む) |
| 4. 黒灰色シルト (粘質・風化礫含む)   | 8. 暗黄灰色シルト (粘質)       |

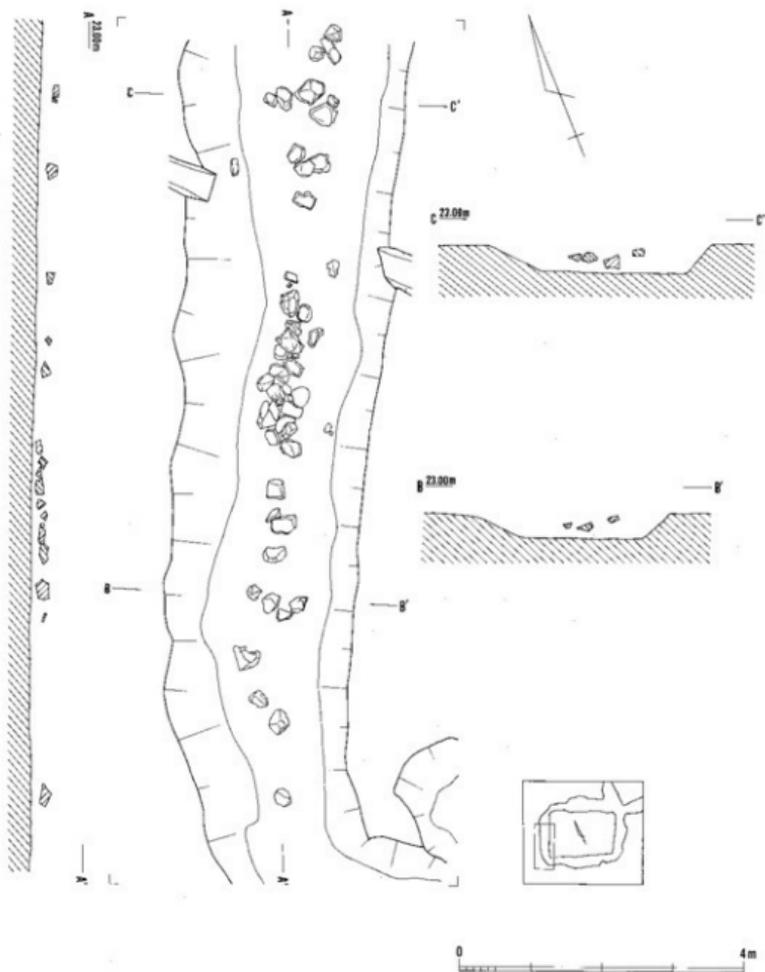
23.00m



- |                    |                          |
|--------------------|--------------------------|
| 1. 濃灰褐色シルト (砂質)    | 8. 黒灰色シルト (粘質)           |
| 2. 淡灰褐色シルト (砂質)    | 9. 暗濃褐灰色シルト              |
| 3. 明灰褐色シルト (砂質)    | 10. 黒灰褐色シルト (粘質)         |
| 4. 暗灰褐色シルト (やや粘質)  | 11. 暗褐色シルト (やや粘質)        |
| 5. 暗濃灰褐色シルト (やや粘質) | 12. 明褐色シルト               |
| 6. 黒褐色シルト (やや粘質)   | 13. 暗黄灰色シルト (風化礫少量含む)    |
| 7. 灰褐色シルト          | 14. 暗黄褐色シルト (粘質・風化礫少量含む) |



第35図 方形周溝墓2 高溝内土層



第36图 方形周溝墓2 西溝内土器出土状態

の暗渠が縦横に走り、近世基と考えられる径1.5m前後の円形土壇が4基掘り込まれている。

周溝内には若干の弥生時代後期の土器が遺存しており、それらは壺・甕・高杯の小片である。また、南溝より奈良時代の須恵器が数点出土している。一方、西溝内中層には10~40cm大の礫が50点近く存在していた(第36図)。これは、南溝より須恵器が出土していること、溝内中層であることとを考え合わせると、築造時の方形周溝墓に伴うものではないと考えられる。

### 方形周溝墓3(第37~40図)

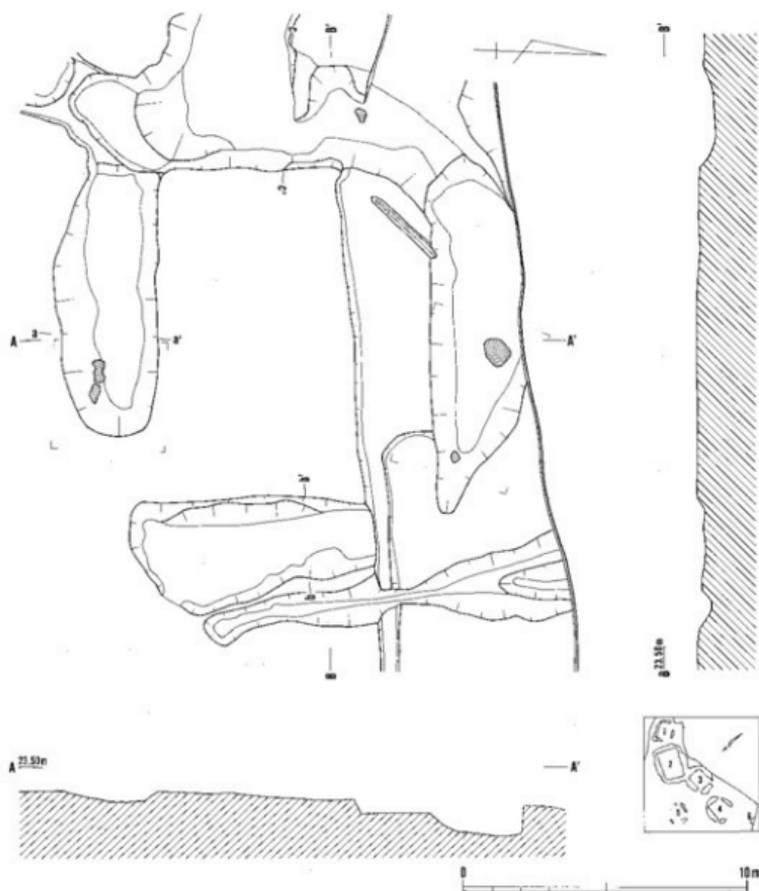
方形周溝墓3は調査区北側のほぼ中央部に位置し、方形周溝墓2の北東コーナーと周溝を共有し、方形周溝墓4とは約4m隔てている。方形周溝墓2と4をつないだラインよりも北側斜面下方にずれて存在している。また、東溝は埋没した住居址4を切り込んで掘削されている。

この周溝墓の北溝底は南溝底よりも約1.2m低く、現地形が示す傾斜にほぼ近い角度の斜面に築造されたものと考えられる。全体に削平を受けており、周溝墓の南側はほぼ平坦な地形となっている。一方、北側の約1/3は水田構築による段状のカットが見られたものの、一部墳丘が残っており、最高約30cm認められた。しかし、表土掘削時にはそれとは気付かず、その殆どを重機により除去してしまい、9ラインの土層観察用畦で確認できたにすぎない。9ライン土層断面(第23図)のKライン付近での観察によると、墳丘の構築は、北側の墳裾を地山削り出しにより整形した後に、淡茶褐色シルト(第13層)を積み上げている。この土は削り出した地山(黄褐色シルト)と旧表土が混じった土と考えられる。盛土の北端は当初に整形した墳裾のラインよりも約1m北に伸びており、盛土によって規模を大きくしたものと考えられる。

現状での周溝外側ラインは方形周溝墓2と同じく、円に近い形を示しており、周溝墓の規模は最も張り出した部分で東西約19.2m・南北約16.6mであるが、北溝の北端が未確認であり、さらに約1m程北に伸びていると思われる。

北溝の現巾は約3.4m、深さは検出面から約20~40cmで、中央が深く、東西両隅が浅くなっている。また、北溝の西コーナー外側は削平によって浅くなっている。南溝は巾約2.5~3.6m、深さ約10~40cmで、最も深い部分は東端より約3分の1の所である。南溝の法面の傾斜角度は東溝とともに台状部側が急で、外側が緩やかになっている。東溝は北端が削平により途切れ、全長は約8.6m、巾は約2.2~4mで、深さは約15~35cmとなっている。この溝は東側に接する溝8に規制されたような形態であり、溝8が周溝墓築造時に何らかの機能を果たしていたと考えられるが、溝8からは弥生土器の破片の他、須恵器片も出土しており、溝8の方が新しいかもしれない。

各溝の埋土(第38図)は他の周溝墓と同じく黒灰色・褐色系のシルトが主体となっており、



第37図 方形周溝墓3

風化礫を含んでいる。また、主として台状部側から流入していることが堆積状況から窺える。

台状部には埋葬施設は全く認められなかったことから、その底が墳丘盛土のなかでおさまっていたと考えられる。台状部の現状規模は、東西方向が南端で約11.8m、中央で約11.6m、南北方向が西端で約9.6m、中央でも約9.6mであり、本遺跡の方形周溝墓群の中では最も正方形に近いものである。

22.80m



1. 淡黄灰色シルト (風化礫少量含む)
2. 淡茶灰色シルト (風化礫多量含む)
3. 淡褐色シルト (風化礫少量含む)
4. 白褐色シルト (風化礫少量含む)
5. 淡灰褐色シルト (風化礫少量含む)
6. 黒灰色シルト (風化礫少量含む)
7. 暗褐色シルト (風化礫少量含む)
8. 暗黒灰色シルト (風化礫多量含む)
9. 褐色シルト (風化礫多量含む)
10. 淡灰黄色シルト (風化礫多量含む)
11. 暗灰色シルト (風化礫多量含む)
12. 暗灰褐色シルト (風化礫多量含む)
13. 灰褐色シルト (風化礫少量含む)
14. 淡褐色シルト

22.60m



1. 淡褐色シルト (風化礫少量含む)
2. 淡褐色シルト (マンガン少量含む・風化礫少量含む)
3. 淡黄褐色シルト (マンガン少量含む・風化礫少量含む)
4. 淡茶灰色シルト (マンガン少量含む・風化礫少量含む)
5. 褐色シルト (マンガン少量含む・風化礫微量含む)
6. 茶灰色シルト (マンガン少量含む・風化礫微量含む)
7. 黒褐色シルト (風化礫少量含む)
8. 黒灰褐色シルト (風化礫多量含む)
9. 黒灰色シルト (風化礫含む)
10. 暗茶灰色シルト (風化礫少量含む)
11. 明黒灰色シルト (風化礫多量含む)
12. 淡灰色シルト (風化礫多量含む)
13. 淡灰褐色シルト (風化礫含む)
14. 淡黄灰色風化礫

22.50m



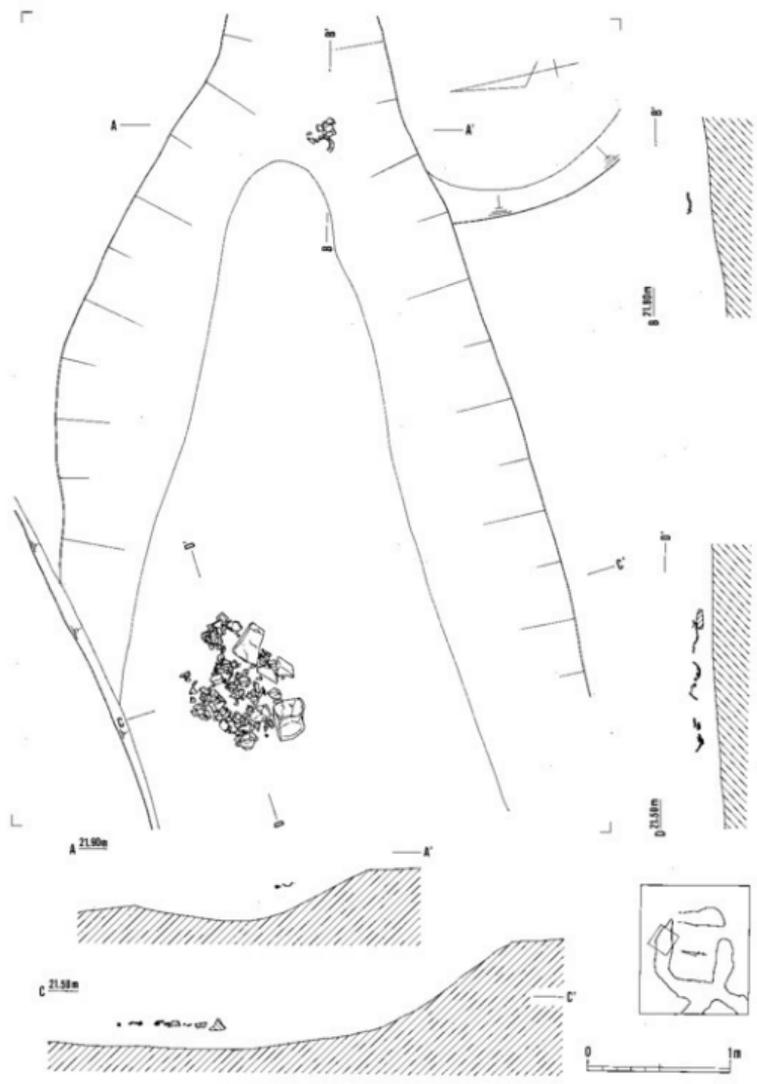
1. 黒褐色砂質シルト (白色砂混じる・風化礫含む)
2. 黒色粘土質シルト (風化礫含む)
3. 淡黒色砂質シルト (黄色細砂混じる)
4. 黒灰黄色細砂



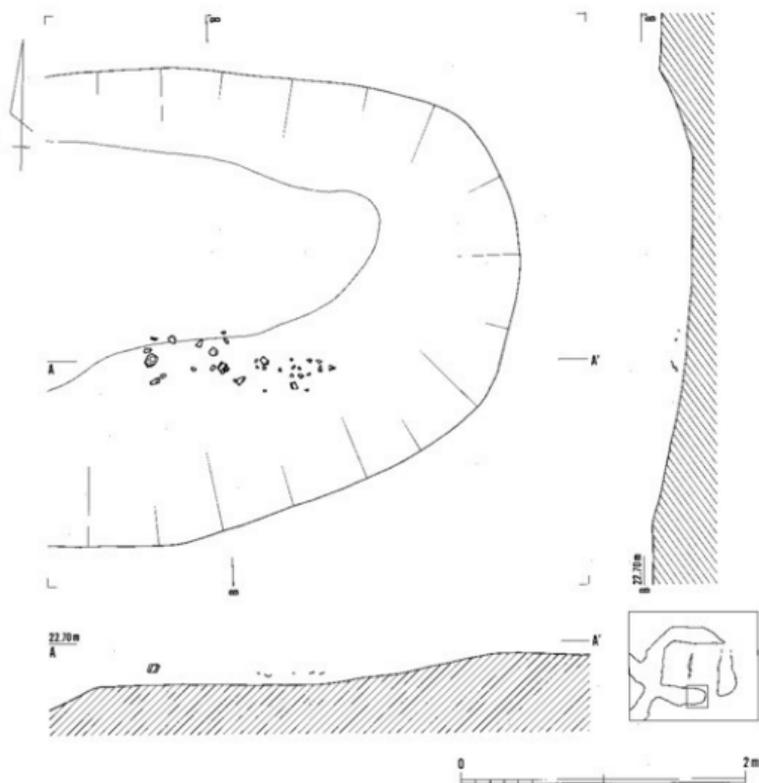
第38図 方形周溝墓3 周溝内土層

陸橋は南東コーナー部分で巾約2.4mの明確なものが認められる。また、北東コーナーも現状では途切れているが、東溝の北端は後世の削平により消失したものであり、北溝の東端が細長く伸びていることを考えると、本来は北溝とつながっていたものとする方が妥当性があると思われる。しかし、北東コーナー部分の溝底が浅かったことは否めないであろう。

前述のように、周溝は外側ラインがほぼ円に近い形状を示している。この形状になった理由には二通りの考え方ができそうである。一つは、本遺跡の周溝墓の墳丘盛土には、台状部を水平に整形した際にできた土と、周溝を掘削した土を使い、他の場所から運んで来ないものと仮定するならば、墳丘の高さが足りない際には、周溝を深く掘削するのではなく外側に掘り拡げることによって盛土を確保したため、この形態になったとする考え方である。



第39图 方形周溝墓3 北溝内土器出土状态



第40図 方形周溝墓3 南溝内土器出土状態

このことは、周溝墓築造の初期段階で先に台状部裾を決定しており、それに規制されていることと、地山が下層にゆくにつれ風化礫を多く含む硬い土になってゆくため、掘削が困難になり、このような方法を採用したものと考えられる。もう一つの考え方としては、方形周溝墓の築造にあたっての平面的な設計図があり、それに基づいて方形周溝墓を築造したためこの形態になったとする考え方である。台状部を整った形にするための円を使った設計図の線をそのまま利用して掘削すれば、内側が方形で、外側が円をなす形になる。これらの築造方法については後述する。

遺物は各周溝から出土しているが、北溝の中央と東端・南溝の東端及び西溝の中央北寄り

部分で少しまとまって出土した(第39・40図)。それらは溝底より約4~10cm程度上で出土しており、特に北溝ではその数値は大きく、斜面下であるため墳丘からの土砂の流入が多かったためと考えられる。出土土器の器種としては壺・甕・高杯・器台があるが、その殆どが小片である。また、鳥形と考えられる異形の土器が北溝から出土している。

#### 方形周溝墓4(第41~43図)

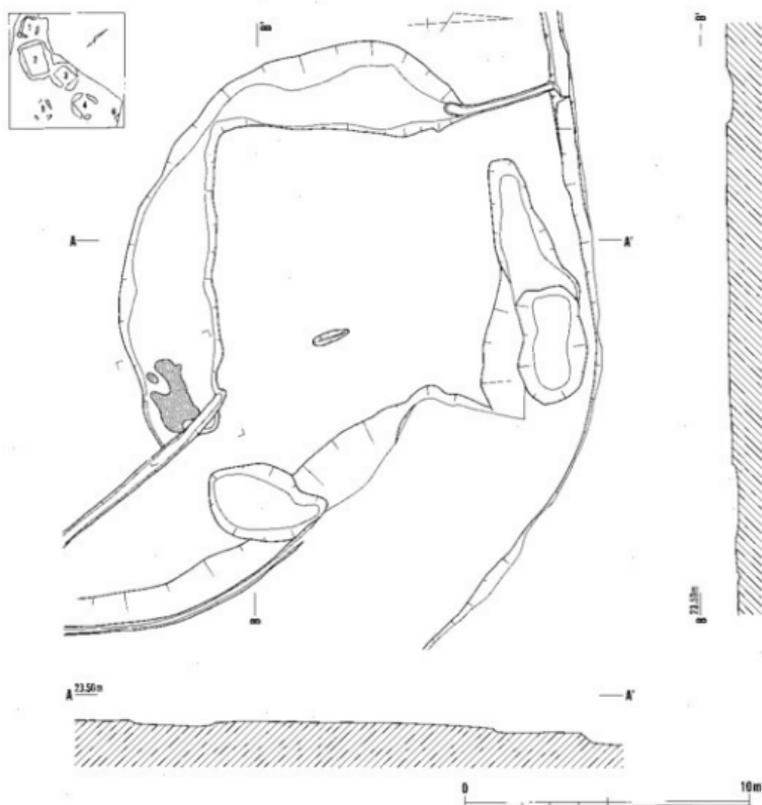
方形周溝墓4は、台地が最も北東に張り出した部分の平坦面から斜面に変換する位置に築造されている。西側の方形周溝墓3とは約4m、東側の方形周溝墓6とは約16mの間隔を置いて存在している。

本方形周溝墓の南西半分は現状ではほぼ平坦であり、北東半分は傾斜面になっているが、この斜面は旧地形の傾斜面に近い角度であると考えられる。それは、掘削後の等高線(第3図)が、東隅付近以外は台状部を巡るように走っていることにより首肯できると思われる。したがって、本周溝墓は、後世の削平を考慮したとしても、その約半分が緩やかな傾斜地に及んで築造されているものと考えられる。すでにみてきたように、本遺跡の方形周溝墓群は、傾斜面上にも築造されていることが特徴の一つに挙げられるが、それを細かくみると、方形周溝墓1・2のように台状部端から周溝にかけて傾斜面に及ぶものと、方形周溝墓3のように台状部全てが斜面に位置しているものがあり、方形周溝墓6も方形周溝墓3と同様の立地と考えられる。本周溝墓についてはそれら両者の中間的位置に存在しているものであろう。

周溝は、方形周溝墓3で顕著にみられたように、その外側ラインの平面形が円形に近いものとなっている。周溝が最も外に広がった部分での規模は、南北方向で約16.4mを測り、東西方向では、東溝が南端しか残っていないため推定値になるが、約17.6mである。

北溝は残存長約8.8mで、巾は約1~2.5m・深さ約10~25cmで、溝底のレベルは東側が低くなっている。南溝は最も巾の広い中央部で約3.4m、狭い西側コーナー部で約1mであり、深さは約15~25cmで、中央部が最も浅く、東端が最も深い。コーナー部分では深さ約20cmである。西溝は最も巾の広い所で約3.2mを測り、深さは約10~25cmで、中央部が最も深くなっている。また、西溝の北端から北側斜面下方に伸びてゆく溝(溝5)があるが、その埋土が灰茶褐色ないし黒灰褐色シルトで、西溝と同じものであり、周溝の排水用の溝あるいは自然の流路であるかも知れない。しかし、溝5からは全く遺物が出土していないため時期の決定はできない。一方、南溝の東端にも南東方向に伸びる細い溝(溝2)が南溝に取り付いた形で存在しているが、溝2は南溝が埋まった段階で掘り込まれており、その埋土も周溝墓のものとは違っている。溝2からも遺物が出土していないため時期は不明である。東溝は巾約2.7m・深さ約10~15cmで、前述のように溝の南端が長さ約4.2m残っているにすぎない。

周溝内の埋土の状況(第42図)を見ると、調査時の不手際によって各周溝のどの位置の断面であるか不明になってしまっているが、それら埋土は周溝墓の台状部側から流入している



第41図 方形周溝墓4

状況が窺われ、特に内溝において顕著に認められる。埋土は他の方形周溝墓と同じく、黒灰色・褐色系のシルトが主体となっている。

台状部は北東部が削平を受けているが東西に長い方形を呈し、周溝内側での計測値は、南北方向短辺は西端で約9.7m、東端で約10.6mを測り、東西方向長辺は南端で約11.9mである。台状部には墳丘はもちろん埋葬施設も全く残っていなかった。ただ、中央東寄りには小さな土壙状のものが存在しているが、埋土は全く異質のもので、後世の擾乱によるものと思われる。

方形周溝墓の陸橋と考えられる部分は北西隅と南東隅の2ヶ所認められ、それぞれ巾約

22.80m



南溝

- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. 黒灰褐色シルト              | 6. 暗灰褐色シルト              |
| 2. 黒灰褐色シルト (粘質)         | 7. 灰褐色シルト (風化礫含む)       |
| 3. 黒灰褐色シルト (風化礫多く含む)    | 8. 黄褐色シルト (粘質・灰褐色シルト含む) |
| 4. 暗灰褐色シルト (黒灰褐色シルト粒含む) | 9. 暗褐色シルト               |
| 5. 暗褐色シルト               |                         |

22.83m



東溝

- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 1. 黒灰褐色シルト         | 4. 灰褐色シルト (風化礫多く含む) |
| 2. 黒灰褐色シルト (粘質)    | 5. 黄褐色シルト           |
| 3. 暗灰褐色シルト (風化礫含む) |                     |

22.89m



北溝

- |            |           |
|------------|-----------|
| 1. 黒灰褐色シルト | 3. 暗褐色シルト |
| 2. 暗黄褐色シルト | 4. 灰褐色シルト |

22.78m



西溝

- |                      |                        |
|----------------------|------------------------|
| 1. 灰褐色砂質シルト          | 10. 黒褐色シルト (風化礫含む)     |
| 2. 灰茶褐色シルト           | 11. 暗灰褐色砂質シルト (7より砂質)  |
| 3. 暗灰茶褐色シルト          | 12. 暗褐色シルト             |
| 4. 黒灰褐色シルト           | 13. 暗灰褐色シルト (黄褐色シルト含む) |
| 5. 暗灰茶褐色シルト          | 14. 灰褐色シルト (風化礫多く含む)   |
| 6. 暗灰褐色粘質シルト         | 15. 14と同じ              |
| 7. 暗灰褐色砂質シルト         | 16. 暗灰褐色シルト (風化礫含む)    |
| 8. 黒灰褐色シルト (風化礫少量含む) | 17. 暗褐色シルト (風化礫含む)     |
| 9. 黒灰褐色シルト (風化礫含む)   | 18. 暗褐色シルト (粘質・風化礫含む)  |



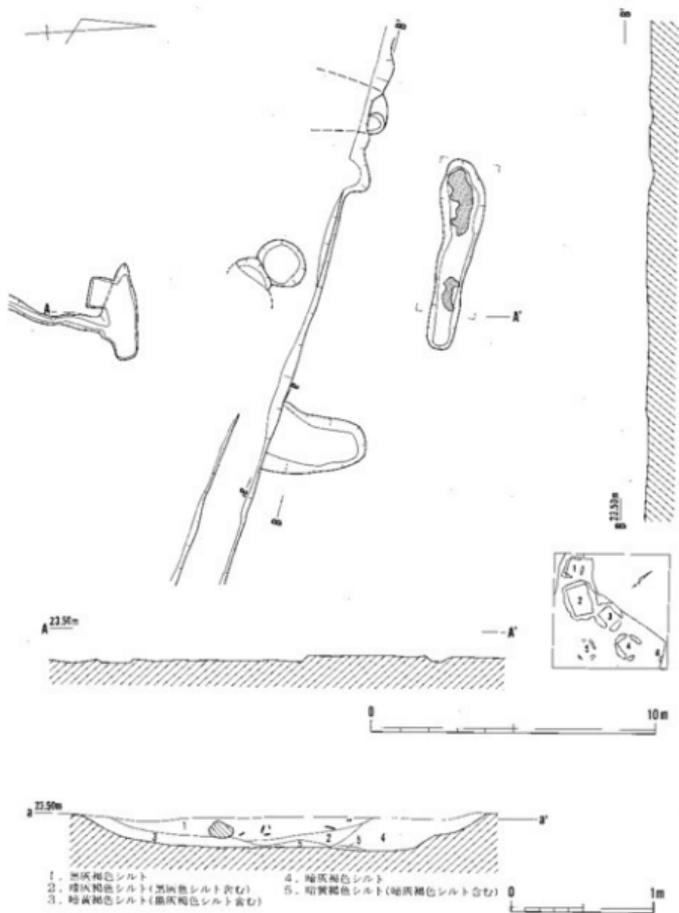
第42図 方形周溝墓4 周溝内土層



第43図 方形周溝墓4 南溝内土器出土状態

1.9・1.4mの周溝の途切れである。本遺跡の他の方形周溝墓の陸橋部は全て東側短辺に存在しているのに対し、本周溝墓の場合はやや異なっている。また、本周溝墓の北東部も周溝が途切れているが、この部分については先の等高線図を見ればわかるように、削平により消失しているものと思われる。しかし、北東隅に陸橋部があったか否かは定かでない。

北溝を除いた周溝内には若干の土器が遺存していたが、南溝東端でやや纏まって存在していた(第43図)。それらは溝底より約8~12cm上で認められ、すべて小さな破片となって出土した。また、土器以外に小さな礫も混じっていた。本遺跡の方形周溝墓周溝内の土器の出土のしかたには二通りが認められ、前述の方形周溝墓1・3と方形周溝墓4のように周溝内の一部にまとまって出土する場合と、後述の方形周溝墓5・6にみられるような周溝内全体に拡がって出土する場合とがある。

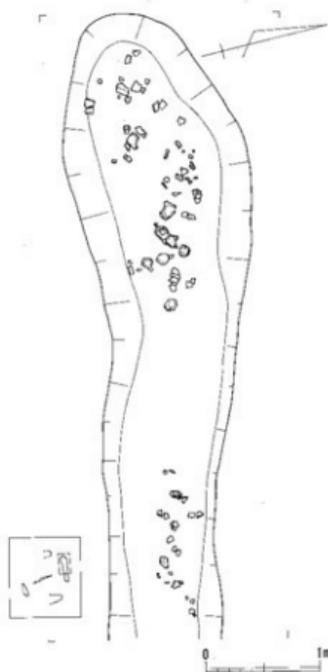


第44図 方形周溝墓5

出土した土器はすべて弥生時代後期に属するもので、器種としては壺・甕・高杯・高杯あるいは器台の脚柱部・平底の底部・有孔の底部・脚台があり、完形に復元できたものではなく、図化できたものには底部が多い。

方形周溝墓5 (第44・45図)

方形周溝墓5はB調査区のほぼ中央に位置し、方形周溝墓1～4・6が列状を呈して存在



第45図 方形周溝墓5 北溝内土器出土状態  
約3.4m、最も広い部分での巾は約2.5m、深さは約12cm残っていた。西溝は痕跡しか認められなかったが、他の周溝埋土と同じ土が残っており、周溝と認めた。

周溝埋土は黒灰色・褐色系のシルトで、他の方形周溝墓と同じ埋土である。

台状部は東西の規模が約10m、南北が約10.8mで、南北が若干長い方形を呈している。台状部中央に2基の円形土壇が存在しているが、形状・規模・埋土から近世墓と思われ、方形周溝墓に伴う埋葬施設ではない。また、西溝内側の半円形の落ち込みも近世墓と考えられる。

遺物は西溝を除いた各周溝から出土したが、特に北溝では大きく東西に分かれてほぼ全体に遺存していた(第45図)。それらは溝底から約2～3cm浮いたものが殆どであった。出土土器はすべて小さな破片であり、壺・甕・鉢・底部が認められる。

#### 方形周溝墓6 (第46図)

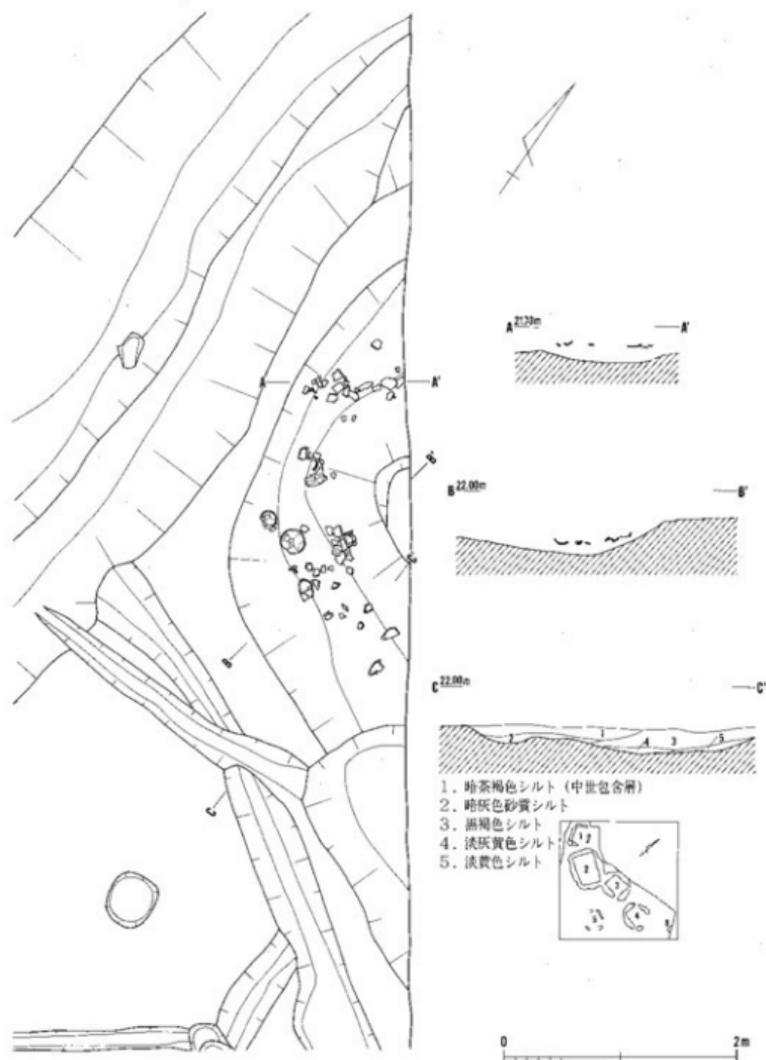
方形周溝墓6は調査区の東北端に存在し、工事予定範囲内いっぱいまで調査したが、その殆どが調査区外にのびており、全容を把握するにはいたらなかった。

しているのに対し、その列からはずれた台地中央部にある。長軸方向は方形周溝墓2に近い。

本方形周溝墓は全体に面的な削平を受けているが、特に南半部は削平が著しく、東・南・西溝が寸断されている。比較的遺存状況が良好な北半部分では、周溝の東北・西北隅は途切れており、それぞれ巾約3.8・2.6mの陸橋状を呈している。

なお、本周溝墓の周溝外端ラインは円形をなしていない。

北溝は長さ約6.7m・巾約1～1.6mで西側が巾広がっている。深さは東側が浅く約5cm、深い西側は約15cm遺存していた。南溝は東端部分が長さ約3.4m残っており、最も広い部分の巾は約1.2mである。深さは10cm程度しか残っていなかった。南溝にはその中央部分に南に伸びる細い溝(溝3)が取りついており、この溝から方形周溝墓と同じ時期の土器が出土しているため同時期に存在していたものと思われる。この形態のものは方形周溝墓4でもみとめられ、同様に周溝からの自然流路または排水溝の可能性が高い。東溝は北端が長さ



第46図 方形周溝墓6

検出できた溝は、「く」の字形に曲がっていること、溝内に土器が集中して存在し、それが弥生時代後期に属するものであること、その位置が台地の縁辺の傾斜変換部分にあたり、方形周溝墓1～4の列をそのまま延長したラインに近いところに存在していること、溝の埋土が他の周溝墓とほぼ似通っていること、土器の出土状態が溝底からやや浮いて小片となつて出土していることなどから、この溝を方形周溝墓の一部であると考えられる。

本方形周溝墓は南西隅部分のみ検出できたのであるが、ごく一部であり、方形周溝墓全体の規模・形状、台状部の状況等は全く不明で、周溝外側ラインが円形を呈するのかすらも不明である。ただ、僅かに調査できた範囲からの推定が許されるならば、本方形周溝墓は列状に存在する方形周溝墓1～4と一連のものであり、その方向は方形周溝墓2と似たものであることが推定できる。

検出できた範囲内での溝巾は最も広い所で約1.5m、最も狭いコーナー部分では約1mを測り、深さは検出面から約10～24cmで、南東部分が深くなっている。周溝内埋土は中世の削平が少し見られるが、主として黒褐色シルトである。周溝の断面の形状をみると、その傾斜角度は墳丘側が急で、外側が緩くなっている。

台状部は周溝外側に比べて約20～30cm高くなっており、墳丘の遺存状況は他の方形周溝墓に比較して良好である。これは、本周溝墓が斜面下方に立地していることにより、後世の削平をあまり受けなかったためと思われる。

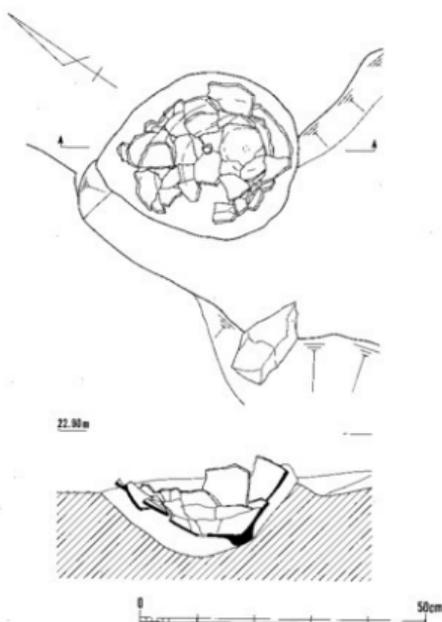
溝内の土器は主として周溝全体に拡がって出土しており、方形周溝墓1・3・4でみられたような集中した状況ではない。また、それら土器群はB-B断面でみると墳丘側から周溝内に向かって、ゆるやかな傾斜をもって出土しており、墳丘側から土器が流入した状況が窺える。それらは溝底から約5～10cmで検出され、溝底との差は墳丘側では小さく、溝中央部分では大きくなっている。このことから、これらの土器は本来墳丘上にあつたもので、周溝がある程度埋まった段階に周溝内に流入したものと考えられる。このことは他の方形周溝墓においても周溝底から若干浮いた状況で土器が出土しており、同様の状況であつたと思われる。

本周溝墓から出土した土器は、調査範囲が限られているにもかかわらず、その量は多く、破片も他の方形周溝墓に比較して大きいものである。周溝内出土土器のうち図示できたものには二重口縁壺・広口壺・甕のほか鉢の完形品、高杯あるいは器台の脚柱部、壺・甕・鉢の底部があり、図示した以外には壺体部の比較的大きな破片のほか、甕の体部・高杯又は器台の脚柱部などがあり、いずれも他の周溝墓と同じく弥生時代後期に属するものである。

#### 土器棺 (第47図)

土器棺は調査区西北端F-2付近にあり、方形周溝墓1の南西コーナー部の西北方約4.2mのところに位置している。

棺は甕を利用したもので、上半部は既に欠失し、下半部のみ遺存していた。上半部については、当初からなかったものか、あるいは後世の削平により失われたものかは断定できない。しかし、甕が傾いて据えられているにもかかわらず、残存部の上端がほぼ水平に欠失していること、棺内部から小片であるが口縁端部の破片が出土していることから、埋設時には口縁部までも具備した甕であった可能性が高く、後世に削平を受けたものと考えられる。



第47図 土器棺

甕はその底部が墓壇（掘り形）の最も深い中央部から東南方向へ約7cmずれているため、垂直から約25°北西方向に傾いており、しかも墓壇が北西方向に少し拡張された形になっている。また、甕の焼成後の穿孔部分がちょうど土壇の中央部分の最も

低い位置にあっている。したがって、これらの状況から、甕は当初からこの傾きで置かれていたものと考えられる。

なお、内面底部中央と穿孔部分をつないだライン（A-A'）の方向は約N34°Wである。

墓壇は北西～南東方向に長い卵形を呈し、その断面は半月形となっている。墓壇の長軸は約36cm、短軸は約30cmを測り、検出面からの最深値は約17cmであった。

墓壇・棺とともに南西半分の削平が著しく、土器も欠失する部分が多く、墓壇の上端も約15cmの落差が認められた。この削平部のラインは水田畦のラインと一致しており、水田構築に伴う削平であると考えられる。

なお、土器棺は方形周溝墓に近接した位置にあり、住居址近辺では認められず、今回の調査では唯一の存在である。また、方形周溝墓1に近接していることからその被葬者と近い関係であったことが推測できる。

## 溝 2 (第21図)

溝2は方形周溝墓4の南溝の東端を切って営まれたもので、巾約40cm・深さ約22cmを測る。

ほぼ方形周溝墓4の南溝東端内側から南東方向に伸び、約9.5mの長さまで確認され、先端は後世の削平で、消失している。溝内の埋土は黒褐色シルト一層で、断面は箱形を呈する。出土遺物は弥生土器の小片だけであった。

#### 溝 3・4・7 (第21図)

溝3・4・7は住居址B-1・2間の浅い谷に位置する溝で、溝4は谷の最も奥から始まり、谷の低い部分を流れる巾約40cm・深さ約15cmの溝である。溝3は方形周溝墓5の南溝から始まり、南西方向に流れた後大きく蛇行して、溝4と住居址B-1の北側で合流する巾約70cm・深さ約20cmの溝である。合流して巾約80cm・深さ約20cmとなった溝3・4は、途中後世の削平で途切れるが、住居址B-1の東側、調査区端で検出された溝に続くものと思われる。また調査区外は旧淡路鉄道線路敷となっており、調査を実施していないが、D地区の西溝が溝3・4の延長上にあたり、溝3・4はD地区の西溝に繋がっていた可能性が高い。溝3・4は途中で交差しているが、切り合い関係は把握できなかつた。溝7は溝3・4の交差部分に取りつく巾約20cm・深さ約7cmの短い溝である。

#### 溝 5 (第21図)

方形周溝墓4の西溝北端から、台地北側の斜面にかけて営まれた、巾約50cm・深さ約18cmの溝である。周溝墓の西溝を切り、台地の斜面とはほぼ直交している。後世の削平による段で2分割され、斜面下方側の溝は巾広になり、先端は垂れ流しの状態で終わっている。埋土は黒褐色シルトであった。

#### 溝 6 (第21図)

方形周溝墓1と2の中間の斜面下方側から始まり、斜面と直交して流れ落ちる、巾約50cm・深さ約8cmの溝である。埋土は黒褐色シルトで、弥生土器の小片が出土している。

#### 溝 8 (第21図)

住居址B-4を切り、方形周溝墓3の東溝の外側とほぼ並行し、台地北斜面と直交して営まれた、最大巾約2.9m・深さ約70cmの溝である。巾は斜面下方側の調査区端で最大となり、そこで深さも最も深くなっている。この溝も後世の削平で2分割されている。内部から弥生土器の小片が出土しているが、図化できなかつた。

#### 溝 9 (第21図)

住居址B-4のすぐ北側から始まり、方形周溝墓4の南溝に切られて、検出された溝である。台地の北斜面とほぼ直交し、最大巾約60cm・深さ約50cmを測る。斜面上方の住居址北側が最も深く、巾も広がっている。埋土は黒灰色シルトであった。

#### 溝 10 (第21図)

調査区東端のほぼ中央で、L字状に検出した巾約30cm・深さ約5cmの溝である。溝の折れ曲がった部分から弥生土器が出土しており、埋土は黒褐色シルトであった。

### 溝 11 (第21図)

溝10の南側で検出した溝で、巾約40cm・深さ約7cmの溝である。断面は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色シルトであった。南端は調査区外に伸びている。

### 溝 12・13 (第19図)

調査区南東端で、溝16に切られた状態で検出された溝である。北東から南西方向に並行して伸びる2本の溝の内、北西側の溝を12とし、南東側の溝を13とした。12・13ともに斜面下方側は工事によって削られ消失していた。溝12は巾約60cm・深さ約25cmを測り、断面は逆台形を呈していた。埋土は黒褐色シルトで、埋土中からは弥生土器の小片が出土している。溝の様相から、住居に伴う屋外の溝となる可能性がある。

溝13は巾約50cm・深さ約10cmの溝である。埋土は黒褐色シルトで、弥生土器の小片が出土している。

## 2 奈良・中世の遺構

### 土 塼 1 (第48図)

住居址1・2の中間、A区・B区間の谷部に張り出した住居址2の乗る枝丘の先端付近、枝丘の西斜面に位置する土塼である。

長辺約90cm・短辺約83cmで、南隅が少し出っ張るが、正方形に近い隅丸方形の土塼である。

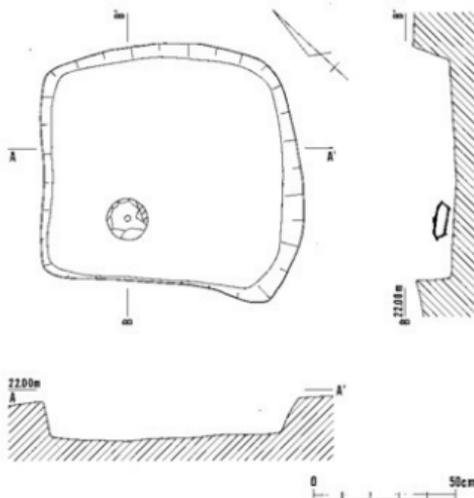
埋土は黒褐色シルトで、深さは約12cmを測る。底はほぼ平らであった。

西コーナー近くから、須恵器の杯が蓋をされた状態で出土している。

### 建物址 3 (第49図)

B地区南端に位置する桁行3間(5.6m)×梁行2間(3.5m)・床面積約19.6㎡を測る建物址で、主軸をN3°Eに置く、総柱建物址と考えられる。しかし西側の桁行北側2間分は柱穴が検出できなかったことから、鍵形の建物址である可能性もある。

桁行の柱間は約187cmを測り、梁行の柱間は約175cmを測る。柱



第48図 土塼1

穴の掘り形は径約30cmの円形であり、検出された柱穴全てに約15cm～20cmの柱痕跡が確認された。柱穴の深さは約20cm～40cmを測り、東側桁行の柱穴が西側桁行・棟通りに比べて深くなっている。

北妻通りの中央の柱穴が土壌4に切られて検出され、建物址は土壌4より古いと思われる。

また、建物址4・6・8と棟方位をほぼ同じくしており、その関連性が考えられる。

出土遺物に瓦器椀(161)があり、その特徴から建物址の時期は鎌倉時代前半と考えられる。

#### 建物址4 (第50図)

建物址3の西側で検出された建物址である。建物址の規模は桁行2間(5.6m)×梁行1間(2.4m)・床面積約14m<sup>2</sup>を測り、西側に1間分の付属施設と思われる張り出し部を持つ。桁行の柱間は東側が約260cm、西側が約300cmで、張り出し部は約120cmを取っている。梁行の柱間は約240cmで、中央の梁行が短くなっている。

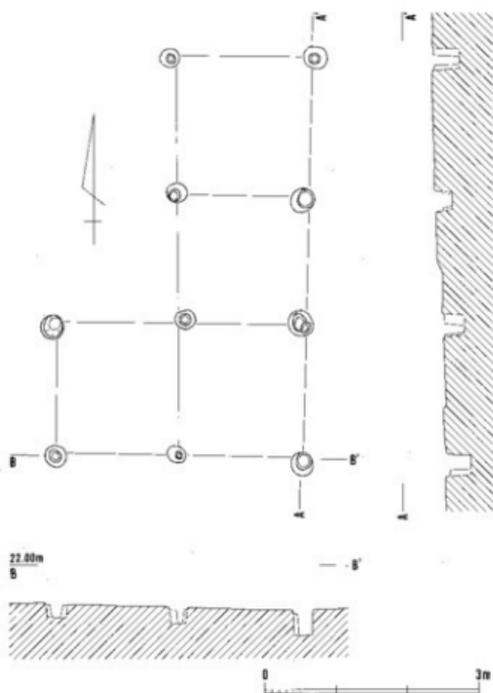
柱穴の掘り形は径20cm～30cmの円形で、7本の柱穴で約10cm～15cmの柱痕跡が確認された。柱穴の深さは約10cm～20cmであり、柱穴の底場はほぼ同じレベルとなっている。

棟方位を建物址3・6・8とほぼ同じN86°Eに置き、建物址3の南妻と本建物址の南桁行とはほぼ通りを揃えている。

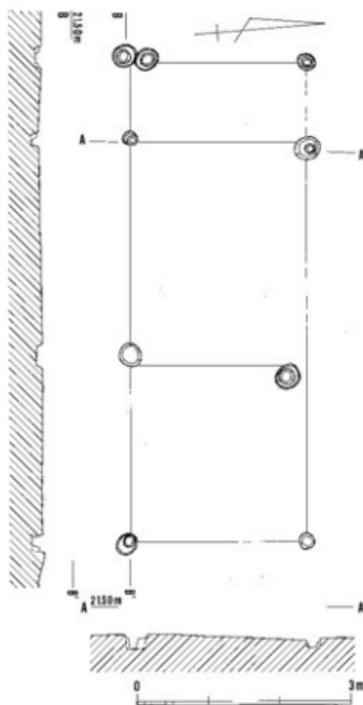
#### 建物址5 (第51図)

B地区の南端近くで、建物址6と切り合って検出された、桁行3間(約7.5m)・梁行2間(約4.45m)・床面積約30m<sup>2</sup>を測る建物址である。棟方位をN56°Wに置き、建物址の南・東と北側の一部に庇あるいは下屋と思われる施設を持つ。

柱間は桁行が北から約300cm・約240cm・約210cmを測り、北側の柱間を広くとっている。梁



第49図 建物址3



第50図 建物址4

行の柱間は東から約220cm・約200cmを測り、東側の柱間を広くしている。ただ、北妻側の中央には柱穴が認められない。北妻側と梁行の北から2列目には、桁行から約50cmの間隔で柱穴が配置されており、間仕切りになるものと思われる。

建物に伴う柱穴は径約30cm～40cmの円形掘り形で、約20cm～50cmの深さを測る。全ての柱穴で、約15～25cmの柱痕跡が確認されている。

庇あるいは下屋と思われるものは、建物の南・東・北側とも建物と約75cm離して設けられているが、建物北側の部分は、東から1間分だけである。建物南側の部分は桁行の延長線上に柱穴が配置されている。しかし、東側の部分は必ずしも梁行の延長線上に配置された柱穴ばかりではなく、梁行延長上の中間にも柱穴が配置されている。柱穴の掘り形は、約35cm～60cmの円形で、深さは約30cm～80cmを測る。北側西端の柱穴は、他の柱穴に比べて小さくなっており、北側の部分に、こうした庇あるいは下屋が付設されていなかった可能性も残る。

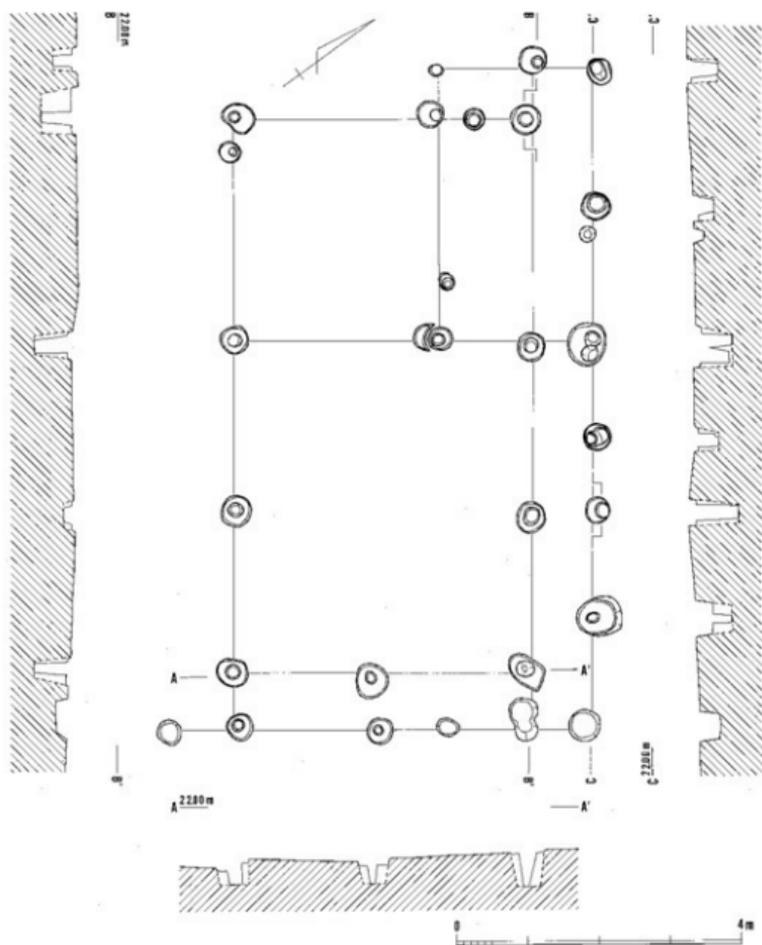
時期の判かる遺物の出土が見られなかったため、時期の特定はできない。しかし、南側に付

設された庇あるいは下屋と思われる柱穴が土壌4を切っていることから、土壌4よりは新しいものと思われる。また、櫓4と方位が近似することから、なんらかの関連性を持つ可能性がある。

#### 建物址6 (第52図)

B地区東端近くで、棟方位を同じくする建物址4の約12m北側に位置し、溝15・土壌3と切り合って検出された建物址である。

建物址の規模は、桁行3間(約6.15m)・梁行1間(約3.15m)で、床面積は約19.4㎡を測る。東妻の中央に間柱と思われる小さな柱穴が認められた。棟方位をN80°Wに置き、建物址を取り囲んで櫓3が存在しており、この建物址に伴う施設である可能性が高い。その場合この建物址は桁行5間、梁行3間の規模と想定されるが、建物址の南側は後世の水田化の際、削



第51図 建物址5

平されており、建物址に伴うような柱穴が検出されなかったため、断定できなかった。

柱間は、桁行約205cm・梁行約315cmを測り、桁行・梁行とも比較的揃っている。柱穴は径約35cm～45cmの円形掘り形で、深さは約15cm～20cmを測る。建物址に伴って検出された7個の柱穴の内、5個の柱穴に約15cm～20cmの柱痕跡が確認された。柱痕跡が確認されなかった

南東隅の柱穴には、柱痕跡と思われる部分に、礫が詰め込まれていた。

時期を特定できるような遺物の出土はなかったが、溝15を切り、土填3に切られているということから、建物址の時期は室町時代後半と考えられる。

柵3をこの建物址に伴う施設とした場合、柱穴の並びから見て、近世民家に近い構造を持つ建物址であったと考えられ、上屋・下屋構造を持つ建物址であった可能性がある。

#### 建物址 7 (第53図)

B地区の東端で検出された建物址で、棟方位をほぼ同じくする建物址5から北へ約27m離れて位置する。

建物址の規模は桁行3間(約6.25m)・梁行1間(約2.0m)・床面積約12.5㎡を測る。棟方位をN21°Eに置き、建物址5とはほぼ棟方位を直交させる。

柱間は桁行約230cm~200cm・梁行約190cm~200cmを測り、桁行の北柱間が広くなっている。柱穴は径約25cm~30cmの円形で、深さ約20cm~25cmを測り、底場のレベルはほぼ揃っている。検出された7個の柱穴の内、

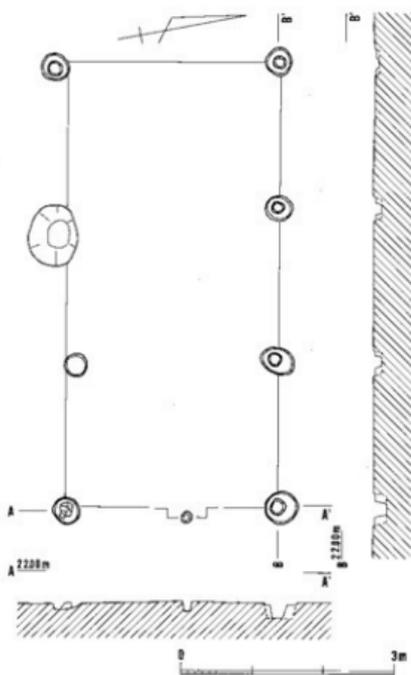
4個の柱穴には径約15cm~20cmの柱痕跡が確認された。

建物址とは、北側で約60cm離れ、東側で約100cm離れた位置に、L字形に曲がる柱穴列が見られる。この柱穴列は柱穴の配置が建物址の桁行及び梁行の延長線上とはなっていない。したがってこの柱穴列が本建物址に伴うものかどうか不明であるが、本建物址に伴うものとした場合、塀あるいは柵である可能性が高い。

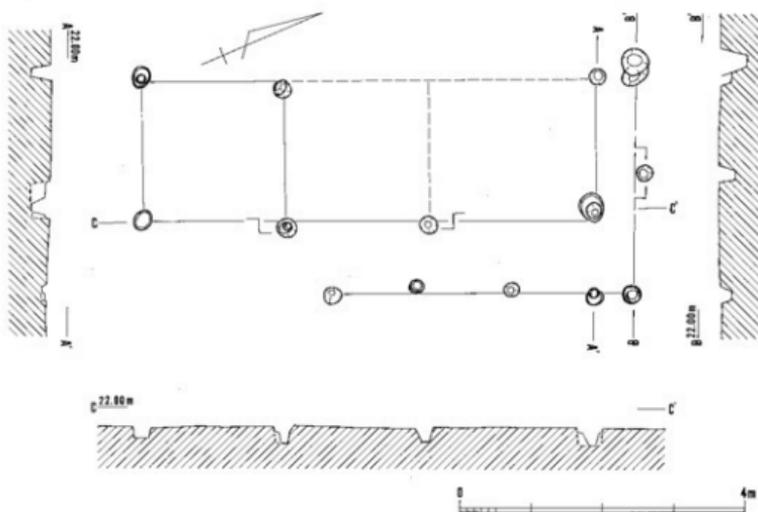
柱穴からは瓦器皿片(162)が出土している。

#### 建物址 8 (第54図)

B地区の北東端近くに位置する建物址で、棟方位を建物址3・4・6とほぼ同じくし、3・4・6のグループからは北西へ約15m離れて位置する。しかし後世の削平のためか検出されなかった柱穴が多く、建物址とするには若干の疑問も残るが、柱穴にある程度の規則性が認



第52図 建物址6



第53図 建物址7

められることから、建物址として扱った。

建物址の規模は桁行3間(約6.6m)・梁行2間(約4.4m)・床面積約29㎡である。棟方位をN10°Eに置き、北・西・南の三面に庇もしくは下屋と思われる施設が設けられていた建物址と思われる。

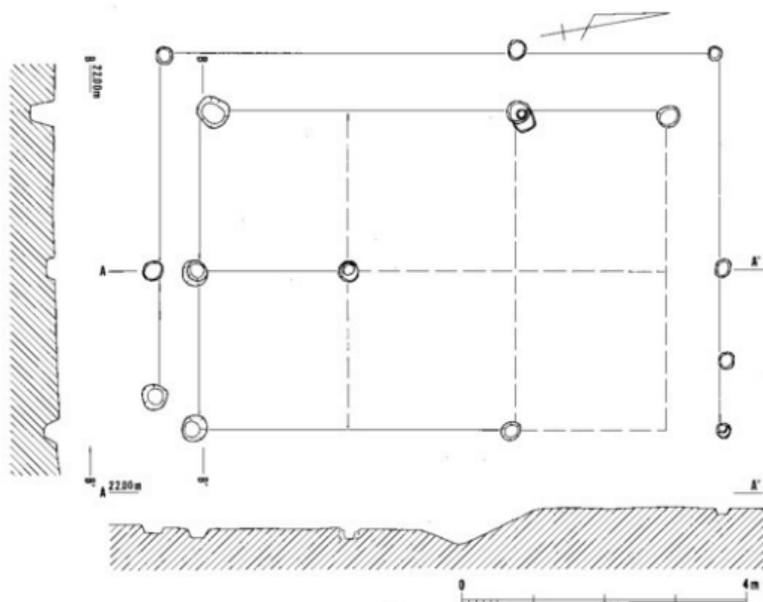
柱間は、不明な点も多いが、桁行約220cm・梁行約220cmが想定される。柱穴の掘り形は約25cm～35cmの円形で、深さは約5cm～15cmを測る。3個の柱穴には径約12cm～15cmの柱痕跡が確認できた。

建物址の北・西・南側には、北側で約70cm、西側で約90cm、南側で約60cm離れて、とびとびではあるが、建物址の棟通りの延長線上、あるいは北から2列目の梁行の延長線上に、柱穴列になると想定される柱穴が検出されている。柱穴の大きさは径約20cm～25cm・深さ約10cm～15cmで、掘り形は円形を呈する。この柱穴列を建物址に伴うものと断定するには疑問もあるが、一応、建物址に伴うものと判断した。

出土遺物はなく、時期の決定はできないが、溝14の走行方向と建物址の棟方位はほぼ同じ方向をとっており、両者の関連性が考えられる。

#### 備考 1

調査区の南東隅で、溝16と約1mの間隔で平行して設けられている。5個の柱穴によって



第54図 建物址8

構成されており、柱間は約170cmである。柱穴は径約25cm~35cmで、深さは約10cm~15cmを測り、掘り形は円形を呈する。

南側約20cmの間隔で柵2が設けられており、柵1・2は建替えの関係にあるものと思われる。

出土遺物はなく、時期の特定はできないが、建物址5とほぼ同じ方位をとっている。

### 柵 2

調査区の南東隅で、溝16と約0.7mの間隔、柵1とは約20cmで平行して設けられている。5個の柱穴によって構成されており、柱間は約90cmである。柱穴は径約25cm~35cmで、深さは約15cm~25cmを測り、掘り形は円形を呈する。

出土遺物はなく、時期の特定はできないが、建物址5・柵1・溝16とほぼ同じ方位をとっており、同時期の可能性がある。また柵1とは建替え等の関係を持つものと思われるが、柱穴に切り合いが認められず、前後関係等は不明である。

### 柵 3

建物址6を大きく取り囲むように設けられており、建物址6の規模によっては建物址の庇等になる可能性がある柵である。

柱間は約200cmと約300cmで建物址6の柱間と近似した数値となっている。柱穴は径約20cm・深さ約15cm~20cmで、掘り形は円形を呈する。

出土遺物はなく、時期の特定はできないが、建物址6と同じ時期になる可能性がある。

#### 柵 4

建物址6と柵3の北側で検出された柵で、N28°Eを走行方向とする、柱穴5本で構成された柵である。

柱間は約180cmと200cmであり、柱穴は径約25cm~30cm・深さ約25cm~30cmで、円形の掘り形となっている。

建物址5と近似する方位をとっており、関連性があるのかも知れない。

遺物には瓦器皿片1点が出土している。

#### 土 壇 2

建物址6の北桁行と切り合い、柵3に接した状態で検出された土壇である。長軸を東西に向け、長径約50cm・短径約40cm・深さ約5cmの規模を測る。平面形は不整形な楕円形を呈し、断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物には古瀬戸椀片が見られる。

性格は不明であるが、建物址6に伴う施設である可能性を持つ。

#### 土 壇 3

建物址6を切って検出された、長径約45cm・短径約35cm・深さ30cmで、長軸を東西に向けた土壇である。平面形は不整形な楕円形を呈し、断面はすり鉢状となっている。

性格は不明であり、建物址6に伴う柱根の抜き取り穴である可能性もあるが、断面観察では確認できなかった。また、建物址6に伴う何らかの施設である可能性もある。

#### 土壇4・5 (第55図)

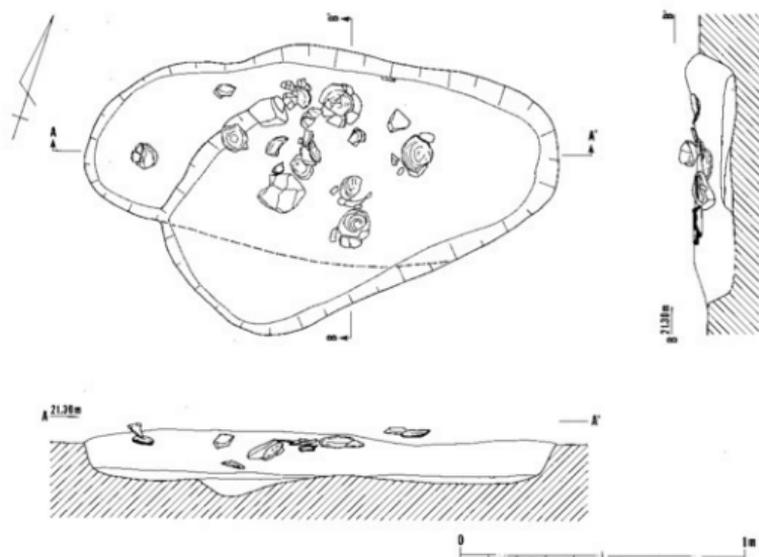
建物址3の北妻側中央の柱穴に切られた状態で検出された土壇である。断面観察では切り合い関係が確認されなかったことから、調査時には1基の土壇として扱ったが、平面形は不整形であり、遺物の出土状態から、2基の土壇が切り合っている可能性が高い。

土壇4は長径約165cm・短径約90cm・深さ約15cmの規模で、平面は楕円形を呈し、断面は浅い皿状を呈する。内部より土師器皿が20個体(174~186)以上と土師器の土壇片(187)が出土している。土器の出土状態から見れば、他の1基の土壇を切って設けられたものと思われる。

土壇5は長径約140cm・短径約80cm・深さ約20cmの規模であったものと思われるが、南端の一部を残す以外は切り取られてしまっており、詳細は不明である。

#### 土 壇 6 (第56図)

建物址4の西方、柵3の南方で検出された、長辺約160cm・短辺約80cm・深さ約15cmの土壇である。長軸を北東方向に置き、平面形は長方形を呈するが、遺物の出土が多く見られた北



第55図 土壌4・5

端付近の中が約90cmと広く、南端付近が約75cmとやや狭くなっている。断面は箱形を呈している。

土壌の埋土は、底にシルト、中層に中砂、上層に炭化物混じりの中砂が堆積していた。

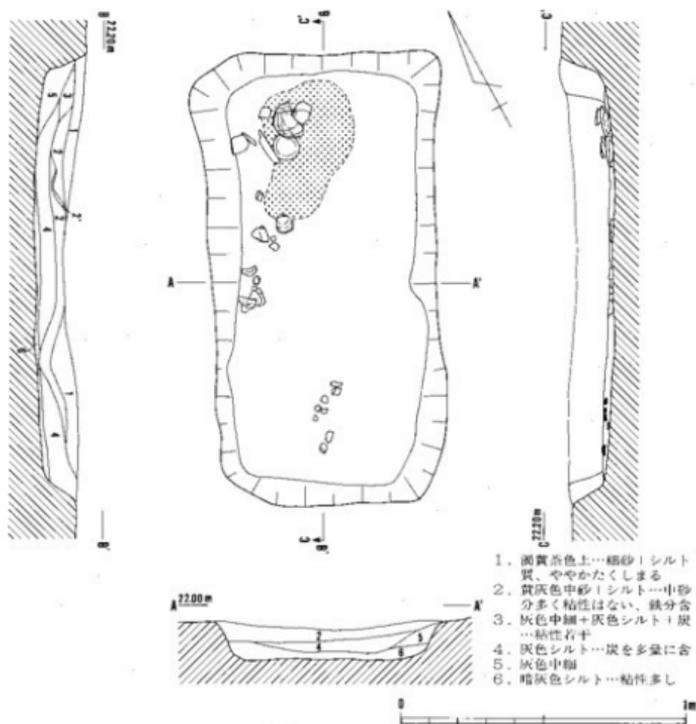
土壌の北西隅底には炭化物層が見られ、その部分に土師器皿・漆器（小皿）等が置かれていた。ただ漆器は遺存状況が悪く、漆膜が遺存するだけであったため、採集することはできなかった。また土師器の皿6個体が漆器と同一場所に置かれていた。この他、土壌の西壁下の北半にも遺物が見られた。

土壌の平面形から見て木棺墓の可能性が高かったが、断面観察においてはその痕跡を見出せなかった。しかし、土壌の形状、炭化物の状況、遺物の出土状況、出土遺物の内容等から見て、木棺墓であった可能性が高い。

#### 土 壌 7 (第57図)

B地区南東端近くで建物址5の扉あるいは下屋と思われる柱穴列と近接し、この土壌から土壌8に伸びる溝と切り合って検出された土壌である。

長径約170cm・短径約140cm・深さ約40cmの規模で、平面は楕円形を呈し、断面はすり鉢状となっている。



第56図 土壌6

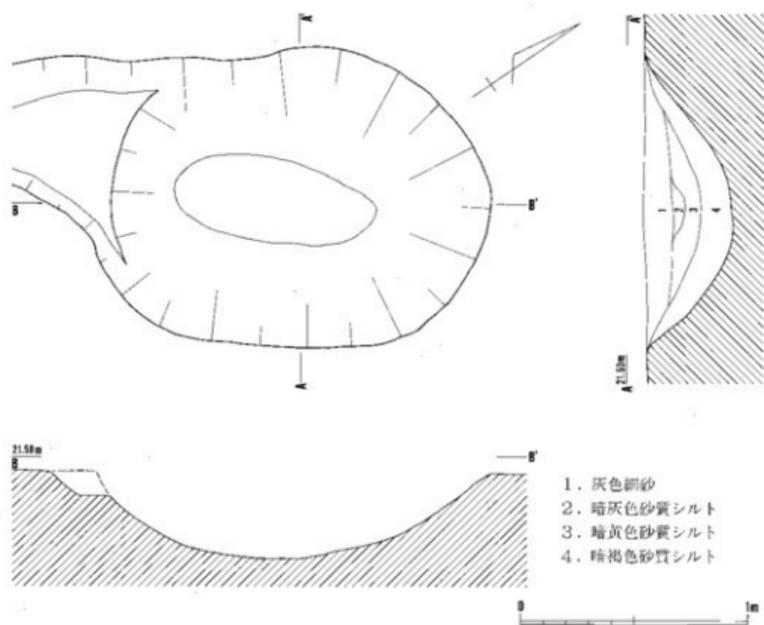
土壌内の埋土は4層見られるが、自然堆積の様相を呈し、最上層の灰色細砂は土壌8に向かって伸びる溝の埋土と考えられる。

遺物は土壌底より土師器皿片、土塼片が出土している。

#### 土 壌 8 (第58図)

B地区の南東端で建物址5と近接し、土壌7の南東約2.3mの位置で検出した土壌である。ただ土壌の東半は、調査区外となって、検出できなかった。また、土壌7から伸びてくる浅い溝と切り合った状態であったが、前後関係については断面観察でも把握できなかった。

土壌の正確な規模は不明であるが、検出できた部分では長辺約2.6m、短辺1.3m、深さ約80cmを測る。平面形は長方形を呈し、断面は逆台形を呈する。土壌の形状から見て木棺墓と思われたが、断面観察ではその痕跡を確認することはできなかった。



第57図 土壌7

土壌内の埋土は最上層の暗灰褐色砂質シルトは一時期に堆積している状況であるのに対し、土壌下半の堆積土はブロック状の堆積となっており、比較的時間をかけて堆積したものと思われる。こうした土層の堆積状況から見て、この土壌は木蓋土壌墓の可能性がある。

遺物としては土壌底より土師器皿片(166・167)が出土している。

#### 土 壌 9

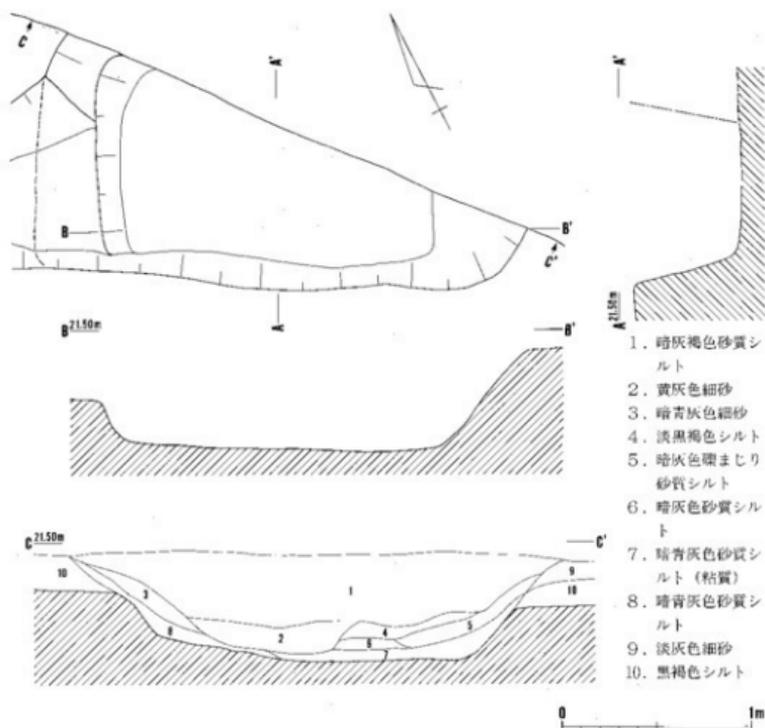
建物址5・6と接して存在する。長径約60cm・短径約30cm・深さ約45cmを測る。平面形は不整形な長楕円形、断面形はすり鉢状を呈する。遺物は瓦質火鉢片(189)を出土している。

性格は不明であるが、断面で確認できなかったが、柱根の抜き取り穴である可能性も残り、また、土壌2・3・溝15と共に建物址6・櫓2に伴う遺構である可能性を持つ。

#### 溝 14 (第59図)

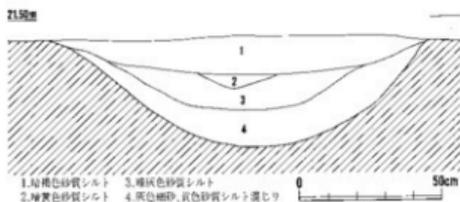
調査区の東端、建物址8の東側付近から北に向けて伸びる溝である。巾約1m・深さ0.4mを測り、断面は弓形を呈する。

溝の埋土は下層から暗褐色砂質シルト、暗黄色砂質シルト、暗灰色砂質シルト、灰色細砂



第58図 土坑8

となっており、堆積状態は自然に埋没した状態を示している。ただ全体に砂が含まれており、若干の水流があったものと思われる。



第59図 溝14土層断面

遺物は図示し得なかったが、土師器皿・土銅片が出土している。

溝は建物址7と8の間に位置し、周辺の地形に直交して設けられている。建物址3・4・6・8と同じ方位をとることから、その関連性が考えられ、集落内の区画といった性格を持つ溝である可能

性が考えられる。

#### 溝 15 (第60図)

B地区の東南端付近で建物址6・棚2と重複して検出された溝で東に流れるものと思われる。溝巾は西端で約1.5m、東端で約0.8m、深さ約7cmを測り、断面は浅い皿状を呈する。溝の西半は、不整形となっており、特に右肩部では著しく拡大され、浅い窪み状となっていた。この部分では、本来の溝肩と思われる部分に板材の痕跡が残っていた。おそらく溝の護岸に使用されていたものであろう。溝中央付近では底に礫が見られ、特に底西側には石列状を呈する礫が検出されている。これらの礫は本来、護岸の石組であったものかも知れない。

遺物は溝底より土師器の皿(193~205)、須恵器の握鉢(208~210)、備前焼の握鉢(213~215)、古瀬戸椀(211・212)が出土しているが、これらの多くは溝西半から集中して出土している。

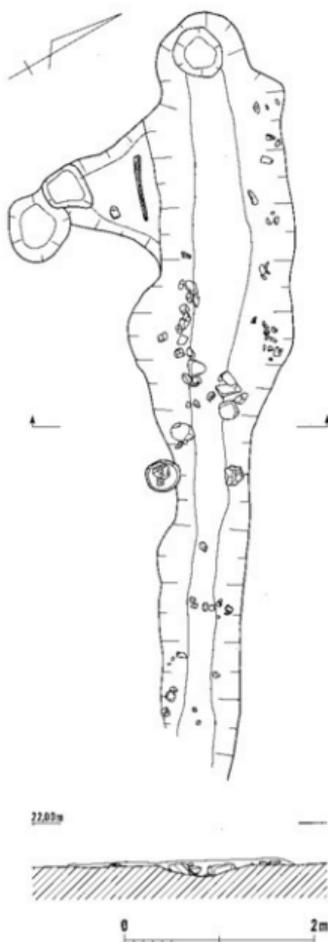
#### 溝 16

調査区の南東端で、棚1・2と走行方向を同じくして検出された溝である。西端が折れ、L字状の形状を呈する溝で、巾約50cm・深さ約10cmの浅い皿状の断面を呈する溝である。

溝の埋土は灰褐色砂質シルト一層である。

形状から見て、建物址に伴う雨落ち溝の可能性はあるが、この溝の南側は調査区外であり、建物址の存在は明らかにできなかった。

溝内からは古瀬戸椀片(192)の他、土師器小皿(190・191)の2個体が出土している。



第60図 溝15

### 第 3 節 遺 物

#### 1 弥生時代の土器

##### 建物址 2 出土土器 (第61図)

同一の柱穴内から(36)・(37)の2点が出土している。(36)は「く」の字状に開く口縁を持つ甕で、口縁端部を上方に摘み出し、口縁端面には2条の凹線文を施す。体部は水平方向の叩きの後、刷毛調整で叩き目を消している。

(38)は外上方に開く頸部が大きく外反して開き口縁部となる広口壺で、口縁端部は上下に拡張されている。口縁端部は櫛描波状文、口縁の内面は櫛による刺突文で飾り、頸部の下半は3条の凹線文、胴肩部を櫛描きの簾状文で加飾する。

##### 住居址B-4 出土土器 (第61図)

床面上から数点の土器が出土したが、図化できたものは(38)・(39)の2点だけであった。

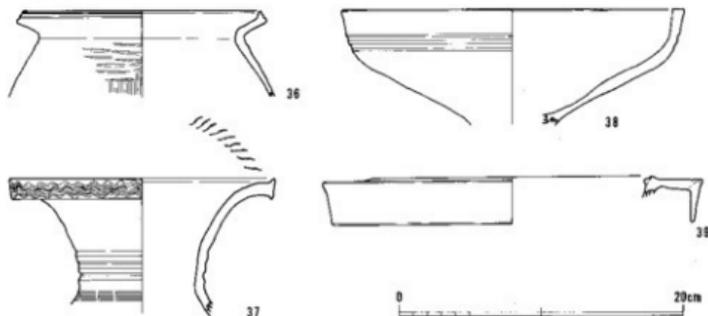
(38)・(39)ともに高杯の杯部で、(38)は体部から屈曲して立ち上がる口縁を持つ。屈曲部には2条の凹線文が施され、杯底部は円板充填法である。(39)は水平方向に開いた後、屈曲して、下方に垂下する高杯である。口縁端部は僅かに内上方に突出する。

##### 住居址B-1 出土土器 (第65図)

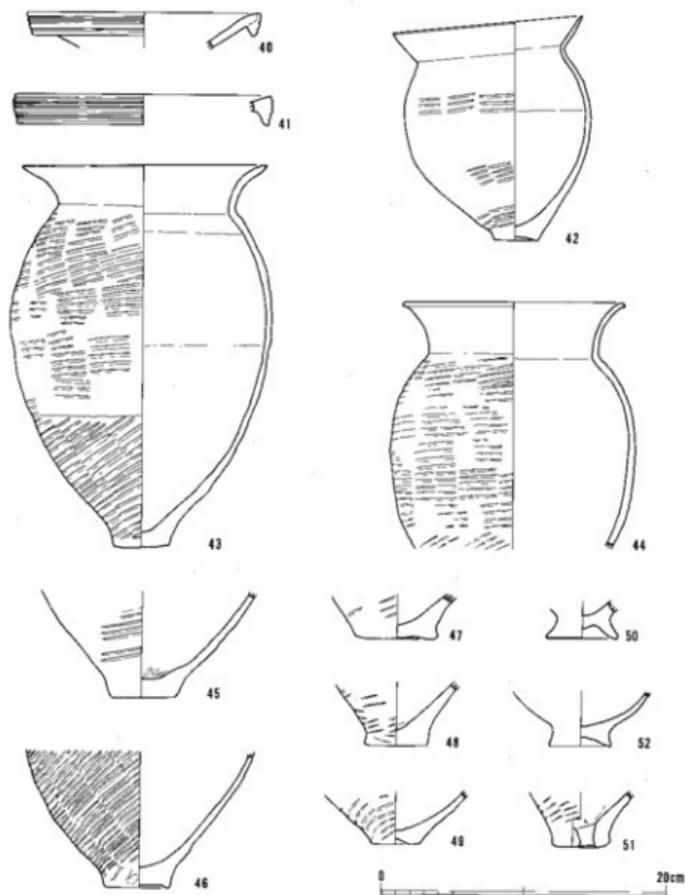
出土遺物は極めて少なく、僅かに(62)の壺口縁1点を図化できただけである。(62)は頸部から緩く外反して開く壺口縁で、端部は下方に拡張されている。口縁端面には1条の凹線文が施されている。器表の遺存状態が悪く、調整等は不明である。

##### 住居址B-2 出土土器 (第62～64図)

今回検出した住居址の中では最も多くの遺物が出土している。基本的な器種は一応揃っているが、壺類は小片だけであり、住居址の床面からは遊離していた。また器種の中では鉢が



第61図 建物址2・住居址B-4 出土土器

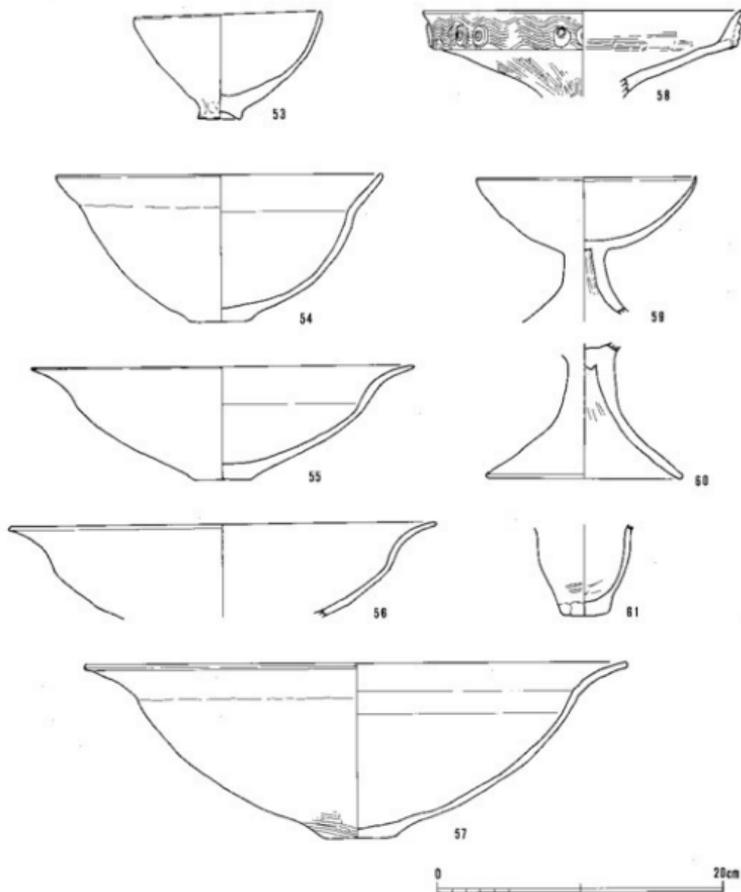


第62図 住居址B-2 出土土器(i)

多く見られる。他に壺形土器の体部片を転用した紡錘車(第64図)も出土している。

(40)・(41)は口縁端部を下方に拡張した壺の口縁である。口縁端部には(40)は3条の、(41)には5条の凹線文が施されている。

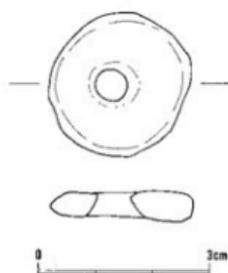
(42)～(44)は体部から外反して開く口縁を持つ甕で、(45)～(50)は甕の底部である。(42)は体部から「く」の字状に開く口縁を持つ小型の甕B2で、底部は小さな上げ底となっている



第63図 住居址B-2 出土土器(2)

る。(43)・(44)は体部から屈曲した後、外反する口縁を持つ壺Aで、(44)は口縁端部に面を持つ。体部は細長い形状となり、外面に叩き目を残し、体部下半には分割整形の痕跡を残す。

(45)～(50)は壺の底部で、(45)・(46)は体部下半からの破片である。(45)～(49)は外面に叩き目を残し、(45)・(46)は内面はナデ調整している。(50)は内外面ともナデ調整である。(45)・(48)は突出した平底、(46)・(47)・(49)は上げ底、(50)は台状の底部である。



第64図 紡錘車

(51)は外面に叩き目を持つ底部で、穿孔は焼成前である。

(52)～(57)は鉢形土器で、体部がそのまま伸びて口縁となる鉢C(53)と、体部から外反して開く口縁を有する鉢A(54)～(57)が見られる。また(54)～(57)は体部の深さと口径の関係から、口径に比して体部の深いA2(54)、口径に比して深さの浅いA3(55)・(56)、口径が38cmを超える極めて大型のもの(57)にわけることができる。(53)は器表の残りが悪く調整等は不明だが、(54)～(57)は内外面とも篋磨きされている。(52)は小型の鉢の底部で、内外面ともナデ調整である。

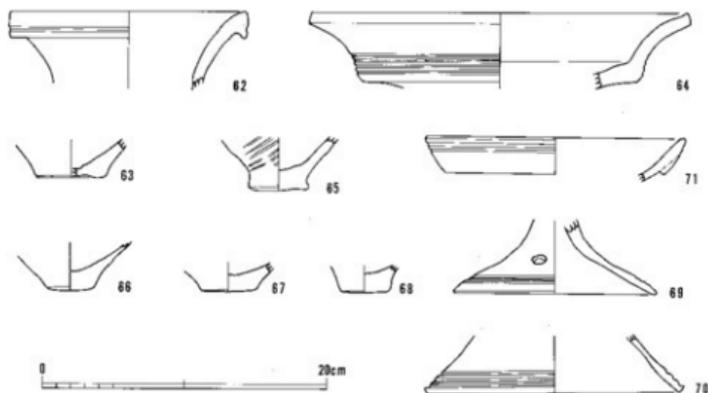
(58)は器台Aの杯部で、体部から屈曲して立ち上がる口縁を持つ。口縁端面は櫛歯波状文と2個1組の円形浮文で飾られている。内外面とも篋磨きである。高杯の可能性も否定できないが、杯底部の形状、体部の形状・厚さ等から、器台と思われる。

(59)・(60)は高杯で、(59)は体部がそのまま伸びて口縁となる高杯B1類である。(60)は脚部に内面に絞り痕を残す。ともに器表の残りが悪く、調整等不明である。

(61)は壺のミニチュア土器で、口縁部を欠いている。体部外面の一部には叩き目を残す。

#### 住居址B-3出土土器(第65図)

出土遺物は殆どなく、図示し得たのは(63)の1点だけである。(63)はドーナツ状の上げ底の底部であるが、器表の遺存状態が悪く、調整等は不明である。



第65図 住居址B-1・3、溝 出土土器

### 溝3 出土土器 (第65図)

(65)～(70)の脚部と底部が出土している。(65)～(68)は底部で、(65)の外面には叩き目が見られる。(67)は壺か鉢の底部、(65)・(66)・(68)は甕か鉢の底部であろう。

(69)・(70)は脚部で、ともに裾端部に凹線文が施される。(69)は「ハ」の字状に大きく開いた裾部の端部に3条の凹線文が施されている。脚柱部が細いことから、高杯の脚部と思われる。(70)は裾端部に面を持つ。

### 溝4 出土土器 (第65図)

(64)の甕1点だけが図示し得た。(64)は所謂二重口縁を持つ壺で、口縁端部は僅かに上方に摘み出されている。口縁外面の下半には4条の凹線文が施されている。調整は不明である。

### 溝7 出土土器 (第65図)

(71)1点だけが図示し得た。(71)は内彎しながら開く器台B2類で、端部は下方に拡張され、端面の上半には3条の凹線文を施す。

### 方形周溝墓1 出土土器 (第66図72～75)

方形周溝墓1からは南西側周溝と北西側周溝の土壇状部分で若干の土器が出土している。

それらはすべて小片になっており、図示できたものは僅か4点にすぎない。図示した4点はすべて北西側周溝の土壇状部分から出土したもので、壺口縁部・底部・脚部がある。

壺は両方とも広口のもので、直立する頸部から曲折して外上方に伸びる口縁部をもち、本遺跡出土土器器種分類の壺Bにあたる。(72)は口縁部だけの破片であるが、口縁端部を肥厚させるもので、端部は凹面を呈している。壺B4にあたり、胎土には金雲母を含み、茶色に近い色を示していることから、四国系の土器と考えられる。(73)は口縁端部の下方への拡張が目立つことから壺B2にあたる。

高杯または器台と考えられる脚裾部(75)は下外方にまっすぐ伸び、端部が面をなしている。透し孔が認められるが、個数は不明である。裾部の形状・径から高杯の脚部と考えられる。

底部(74)は突出しない平底を呈し、体部と底部の角度から壺の底部と考えられる。

器種としては、以上のほかに甕の体部破片が出土している。

### 方形周溝墓2 出土土器 (第66図76)

方形周溝墓2から出土した弥生時代後期に属する遺物で図示できたものは(76)に示した壺1点である。他に図示できなかった破片には甕・高杯がある。また、木周溝墓南溝から奈良時代の須恵器が数点出土している。

(76)は西側周溝から出土したもので、壺Bに属する。口縁部は直立する頸部から曲折して外上方に伸びているが、口縁端部を若干下方につまみ出すが、肥厚させないことから壺B1に分類される。体部内面は篋削り調整であるが、その他の部分は不明である。

なお、壺B1はその形状・胎土から四国系のもと思われる。

### 方形周溝墓3出土土器 (第66図77~101)

方形周溝墓3では、各周溝から土器がいずれも小片となって出土しているが、特に多かったのが北側周溝の中央と東端、南側周溝の東端、西側周溝の中央北寄り部分であった。

図示した土器を出土場所別に分けると、北溝出土分が最も多く、(78・80・81~83・85~88・90・98~101)があり、壺・甕・器台・脚部・底部がある。次いで多いのが東溝で、(77・79・84・92・93・96・97)があり、壺・甕・底部であり、最も少ないのが西溝分で、(91・95)の底部のみである。なお、特記できるものとして、(101)の異形土器が北溝から出土している。

壺は合計5点図示できたが、壺Aに属するものは(77・78)、壺Bは(79)、二重口縁に近い形態で頸部を大きく拡張する壺Cとして(80)がある。(77・78)は口縁端部を上下に拡張しており、壺A3に分類できる。(77)の端面には擬凹線文を3条施している。あるいは中期に属するものかもしれない。(78)は無文である。(79)は壺B2に分類でき、口縁端部を若干肥厚させるとともに上方に摘み上げている。壺Cの(80)は口縁端部よりやや下がった位置に粘土を貼り付けて拡張しており、壺C2に属する。口縁部外面には上下に2条ずつに分けて凹線を施しており、中央部には竹管文をめぐらしている。(81)は壺頸部の破片であるが、体部と頸部の境に断面三角形の突帯を貼り付けている。口縁部の形態は不明である。

(82・83)は器台の口縁部と考えられ、内嚢気味に伸びる体部を持ち、口縁部を上下に拡張している。器台Cに分類されるが、器台としてはやや異形であり、管見では類例を知らない。しかし、体部が内嚢していることから、一応器台として扱っておく。器台Cは出土土器の中ではこの2点しか出土していない。器表の残りが悪いので、調整・文様等は不明である。

甕と判断できるものは口縁部が残っているもので、(84・85)がある。どちらも口縁部の形態は、体部から「く」の字形に曲折してほぼまっすぐに伸びて、口縁端部は丸くおさめるもので、甕Bに属し、口径が12~13cmと小型であることから、甕B2に分類できる。両方とも体部外面は叩き目を施している。(85)は推定復元値では器高15cmになる。

脚部は3点図示できたが、いずれも高杯の脚部と考えられる。(86・87)はやや下方に開く脚柱部から屈折して脚裾部にいたる。(88)は透し孔を有するが、個数は不明である。裾端部外面に1条の凹線をめぐらしている。

底部は器壁が厚いためか残っているものが多く、図示できたものも多い。図示した底部のうち、外面に叩きをもつもの(91~95)は甕の底部と考えられ、(89)の底部は体部の角度から壺の底部と思われる。

(101)は異形の土製品であるが、一方の端と上部からもう一方の端にかけて欠失しており、底部も外端を失っている。また、器表の遺存状況も悪く、調整痕は全く不明である。この土器の成形法は、平らに伸ばた粘土板の両端を上部でつなげ中空にし、端を絞っていると考えられる。底部はやや突出した平底となっているが、その成形法は不明である。また、上部が

欠失しているため、その形状も不明である。

遺存している形態から考えると、烏形土製品あるいは皮袋形土製品と呼ばれているものに近い形状を示している。弥生時代の鳥形土製品は愛媛県宮前川北斎院遺跡、愛知県朝日遺跡、石川県漆町遺跡、静岡県泉蔵平遺跡などで出土している。この異形土器については後述する。

#### 方形周溝墓 4 出土土器 (第67図102~124)

方形周溝墓 4 では、北側溝以外の周溝から土器が出土しているが、特に、南側周溝東端で小破片がまとまって出土した。図示したものを出土場所別に見ると、まず、南側周溝からのものは(102~105・108~112・114~122)であり、西側周溝からは(106・107・113・124)に示した土器が出土している。また、東側周溝出土土器では(123)の底部が図示できた。

出土した土器には壺・甕・高杯・高杯脚部・平底の底部・有孔の底部・脚台がある。

(102)の壺はその形状から壺Bに分類できるが、口縁が端部付近で曲折し、端部が肥厚することから壺B3に細分できる。(103)の壺口縁部も壺Bに属するが、端部が少し肥厚していることから壺B2に分類できる。口縁端部に2条の凹線文をめぐらしている。なお、この土器は金雲母を含んでいる。(104)は壺頸部の破片で、体部と頸部の境に半月状の刺突文をめぐらしている。また、頸部から口縁部へは曲折して移行しているものと思われ、壺Bの頸部である可能性が高い。

確実に甕と断定できるもの(105)は1点図示できた。口縁部は体部から曲折して外反しながら伸び、口縁端部に面を持つことから甕A1に分類できる。体部には叩き目が観察できる。

(106)の高杯杯部は碗形を呈することから高杯B1に分類でき、口縁端部外面に1条の凹線文を施している。あるいは、中期的な要素を残すものと考えられるかもしれない。高杯脚部で、端部までよく残っている(107)は、杯部との接合部から外反しながら開いており、裾端部上面に2条の凹線文をめぐらしている。また、3方向に透し孔を穿っている。

脚部は4点(108~111)図示できたが、いずれも高杯の脚部であると考えられる。(107)と同様の形態のものには(108・109)があり、(110・111)は長い柱状部をもっている。(108)には透し孔が4方向に認められる。(110)は外面笠磨き調整で、(111)の脚柱部は棒状のものに粘土を巻いて成形している様子が窺える。

平底の底部は(112~122)の11個図示できたが、それらのなかには、体部がすぼまってそのまま底部になるもの、やや突出する平底になるものが認められる。体部外面の調整には叩き目を施すものと、笠磨きのものがある。(122)はやや上げ底状になっている。有孔の底部(123)は1点のみ出土している。

脚台は脚径6.6cmのもので、台付きの甕または鉢になると思われる。この土器には赤色粒を全く含まず、砂粒を含む率も他の土器と全く違い、他地域産の可能性が高いものである。

#### 方形周溝墓 5 出土土器 (第67図125~134)

図示できた本周溝墓出土土器は、(125・126)を除き、全て北側周溝から出土したものである。器種としては壺・甕・鉢・底部がある。

壺は(125)の1点図示できた。頸部から外反しながら上外方に伸びる口縁部で、端部は拡張していないことから、壺A 1に分類できる。調整痕は全く残っていない。

(126)は甕の口縁部で、体部から屈折して外反し、端部に面を持つことから甕A 1に分類される。外反度は端部付近でさらに大きくなっている。

鉢は2種類出土している。(127)は体部がほぼまっすぐ外上方に伸び、口縁端部を丸くおさめており、鉢Bに分類できる。底部はやや突出した平底である。(128)は体部が内彎し、口縁部が屈曲して外反しており、中型に属することから鉢A 2に分類した。器表は剝落しているため調整は不明である。胎土には金雲母を少量含んでいる。

底部は6点図示できた。平底のもの(129・131・132)と中央がくぼんだやや上げ底のもの(130・133・134)がある。体部外面に叩き目を施したもの(129~132)は甕の底部と考えられ、(133・134)は体部の傾きから壺の底部と思われる。

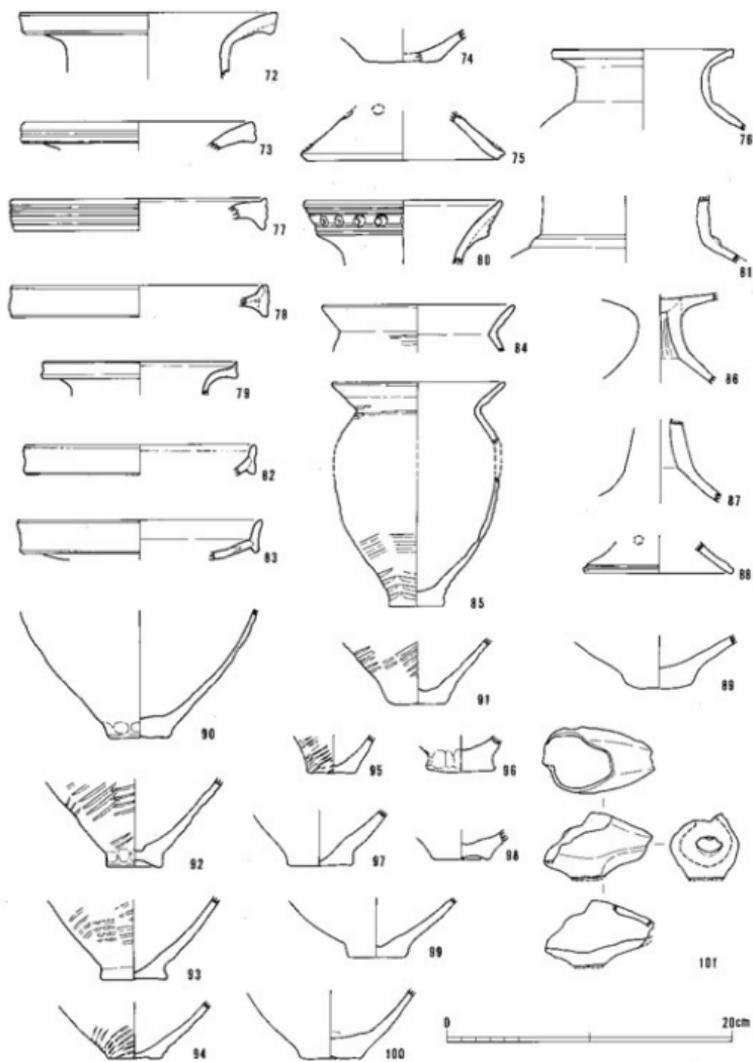
#### 方形周溝墓 6 出土土器 (第68図135~151)

方形周溝墓 6 は溝の一部を調査したにもかかわらず、多くの土器が出土し、その破片も比較的大きなものが多い。器種には壺・甕・高杯・鉢・脚柱部・底部がある。

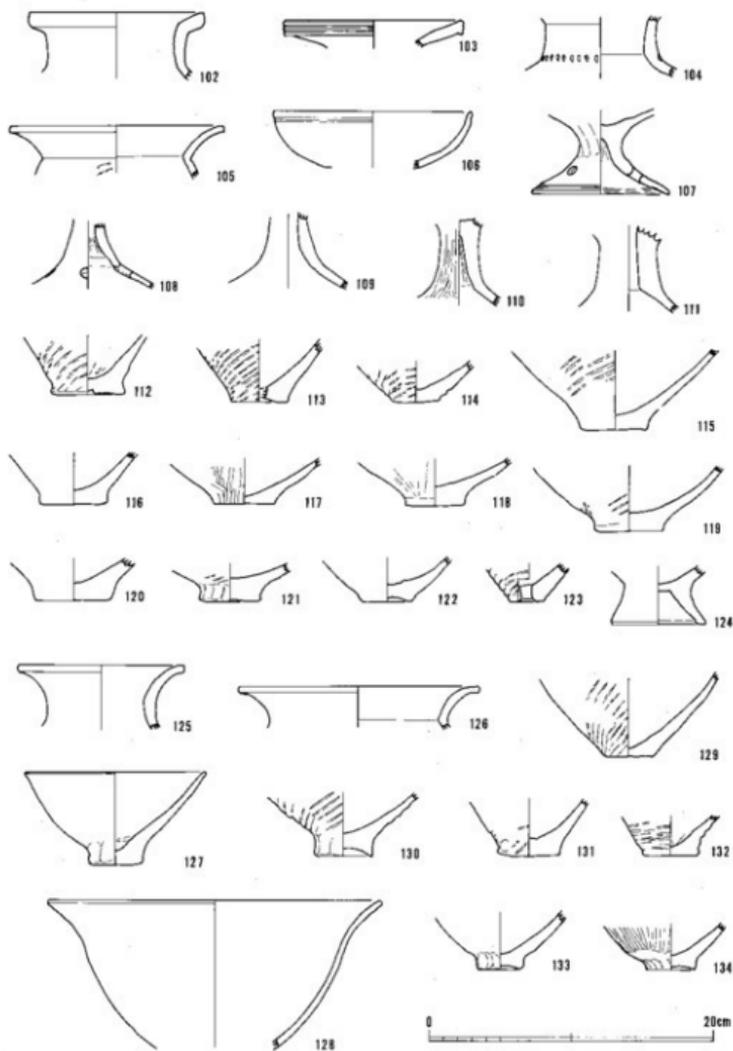
壺は4点図示できた。(135)は外反して大きく開く口縁部で、端部を上下に拡張している。口縁端部には円形浮文を貼りつけるが、2個しか残っておらず、単位・数は不明である。また、器表の剝落が著しく、調整も全く不明である。壺A 3に分類できる。(136・137)は同じタイプの壺口縁部で、端部を殆ど拡張せず外反するものである。壺A 1に属する。どちらも内面は寛磨き調整で、胎土には金雲母を含んでいる。なお、(136)の口縁端面に2~3条の擬凹線を施しているようであるが、残存状況が悪く、断定できない。いわゆる二重口縁壺(138)は、ほぼ直立する頸部から水平に外反し、さらに屈曲して外上方に伸びる口縁部をもち、甕D 2に分類されるものである。口縁部外面下端には4条の弱い擬凹線を施し、さらにその部分に竹管円形浮文を3個単位で6方向に加飾している。また、体部と頸部との境に断面三角形の突帯を貼り付け、刻み目を加えている。内外面とも器表剝落のために調整は不明になっている。

甕はA~Cの3タイプが認められる。(143)は体部から屈折して外反しながら伸びる長い口縁部をもつもので、端部を丸くおさめていることから甕A 2に分類される。体部外面は叩き目を残し、内面はナデ調整である。甕Bは(140~142)で、いずれも体部から「く」の字状に屈折してほぼまっすぐに伸びる口縁部をもち、端部を丸くおさめている。(141・142)は大~中型で甕B 1、(140)は小型で甕B 2に分類できる。

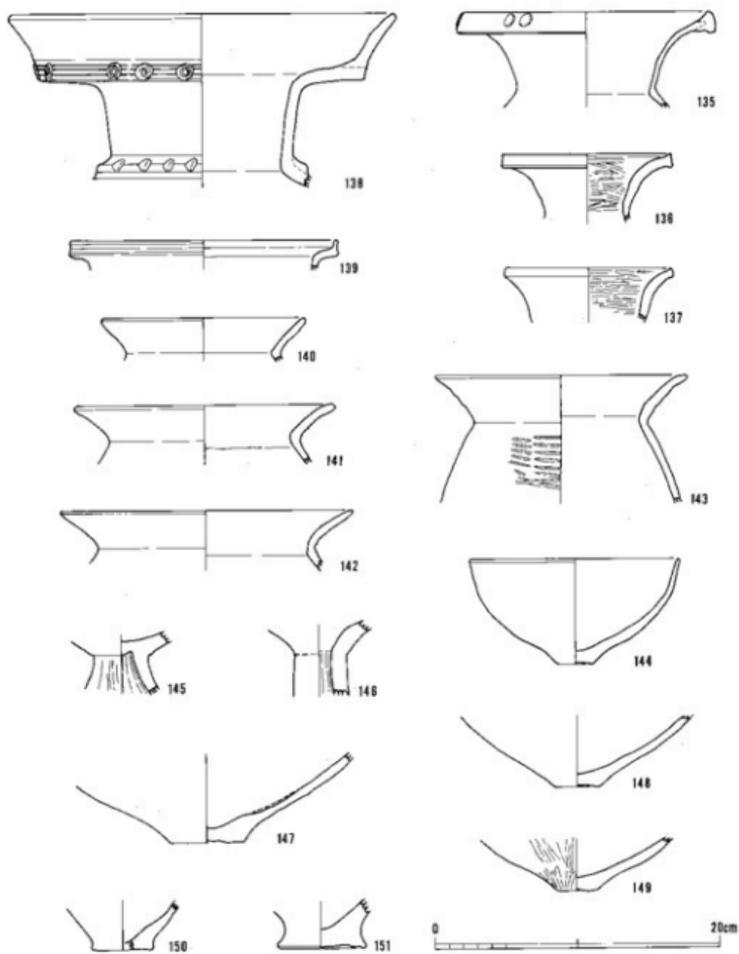
鉢(144)は体部が内彎し、口縁端部を丸くおさめており、底部は若干上げ底となっている。



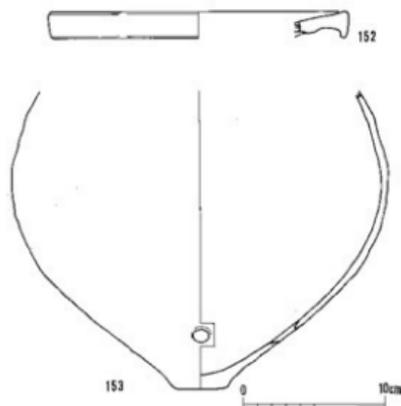
第66图 方形周清墓1~3 出土土器



第67图 方形周溝墓4・5 出土土器



第68图 方形周溝墓6 出土土器



第69図 壺棺

#### 壺 棺 (第69図)

棺として使用された壺はかなりの部分が欠失していたが、口縁端部と肩部以下が図化できた。

口縁部はほぼまっすぐ横外方に伸び、端部を下方に拡張したもので、無文である。体部は底部がやや突出する丸い形のもので、体部下方に焼成後の穿孔(径1.3cm)が1か所認められる。器表はいずれも剝離が著しく、調整痕は全く不明である。他の本遺跡出土土器に比べてやや茶色に近い色を呈している。

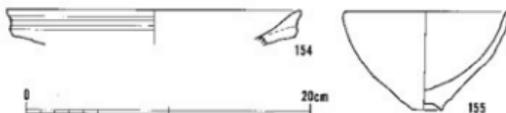
現体径は形が歪になっているため誤差は大きいですが、約26cmで、残存高は約21cmを測る。口縁部径は約21cmである。

#### 包含層出土土器 (第70図)

包含層から出土した遺物は微量であるが、調査区南端の暗灰褐色シルト(第34層)から出土した壺口縁部と鉢が図示できた。

(154)は本遺跡では例が少ないタイプで、D地区東溝でもう一点出土しているにすぎない。口縁端部を上方に拡張し、端面に擬凹線を施している。壺C3に分類しているが、器台の口縁部の可能性がある。胎土には長石を含む率が高い。

(155)は鉢Cに分類されるもので、小さな底部が上げ底になっている。口径

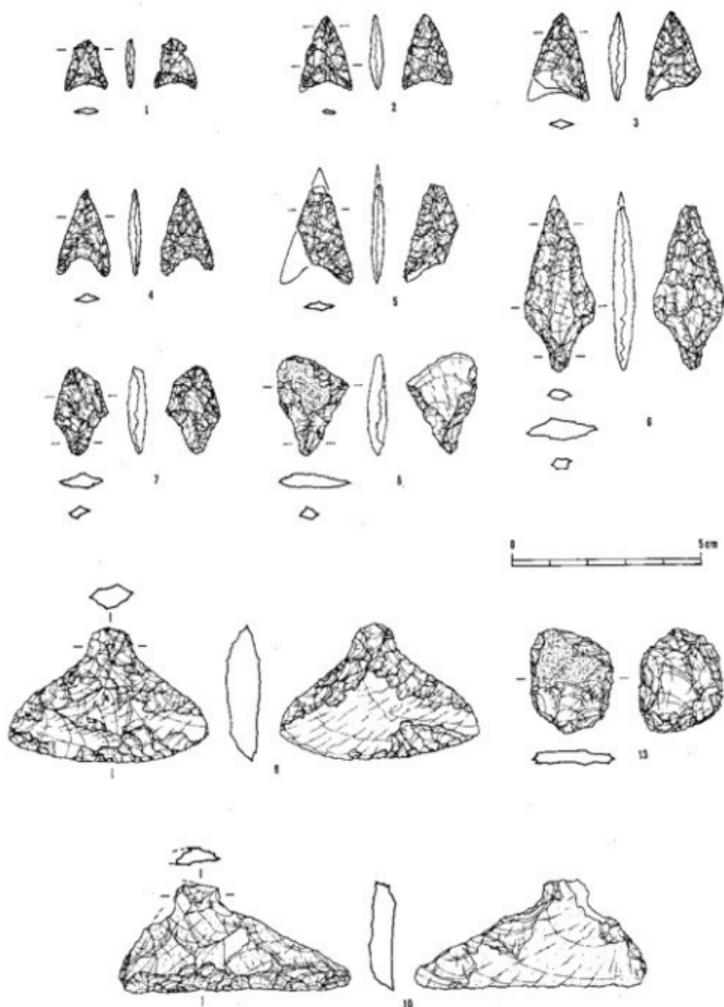


第70図 包含層出土土器

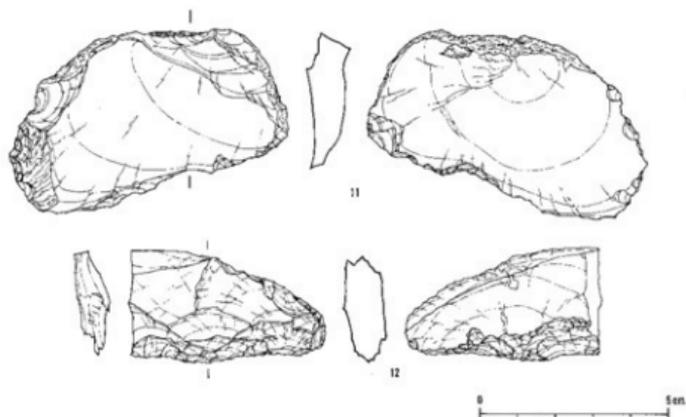
鉢Cに属し、胎土に赤色粒を多く含んでいる。

脚部は2点図示できた。(145)は高杯、(146)は器台の脚部と思われる。(145)は杯部との接合部から外反しながら開き、(146)は円筒状のやや長い脚部である。(145)の杯部中央は粘土円板で充填している。

底部のうち(147~149)は底部から大きく開く体部となっており、壺または鉢の底部と思われる。(149)は体部外面に笠磨き調整を施している。(150・151)は突出する平底で、体部の傾きから壺の底部と考えられる。(151)の形態は中期の底部に近い。



第71圖 石器(1)



第72図 石器(2)

11.3cm、器高6.9cmで、外面は鈍磨きまたは刷毛、内面は刷毛調整である。鉢Cではやや小型になる。

## 2 石器

B地区では、定型的な石器は、総数18点出土した。器種別の内訳は、石鎌7点、石錐1点、石匙1点、削器2点、楔形石器1点、敲石2点、磨石1点、台石1点、砥石2点である。

石材は、剥片石器では全てサヌカイトを、その他では砂岩と斑瀾岩を素材としている。サヌカイトはいずれも石理が目立ち、風化の進行の著しいものを含むことから、淡路島内産出の原石を使用しているものと思われる。以下、各器種ごとに記述を行う。

### 石 鎌 (第71図)

7点出土した。基部の平面形態による分類では、凹基無茎が5点、凸基有茎が2点となる。さらに前者には、基部の挟りが深いもの(1~3)と浅いもの(4~5)の二者が認められる。後者には大小が存在する。(1)は、小型で両側縁に突出部をもつ、いわゆる五角形鎌である。(7)は先端部が尖らないが、これは欠損したのちに再加工したためと考えられる。

### 石 錐 (第71図)

(8)の1点認められた。調整加工は両面の周縁部のみに施され、先端部の作出も粗い。

### 石 匙 (第71図)

(10)は横型の石匙である。風化が著しく、剥離面は十分に観察し難い。刃部の加工は、腹面側からのみ施される。握み部の一部を欠失する。

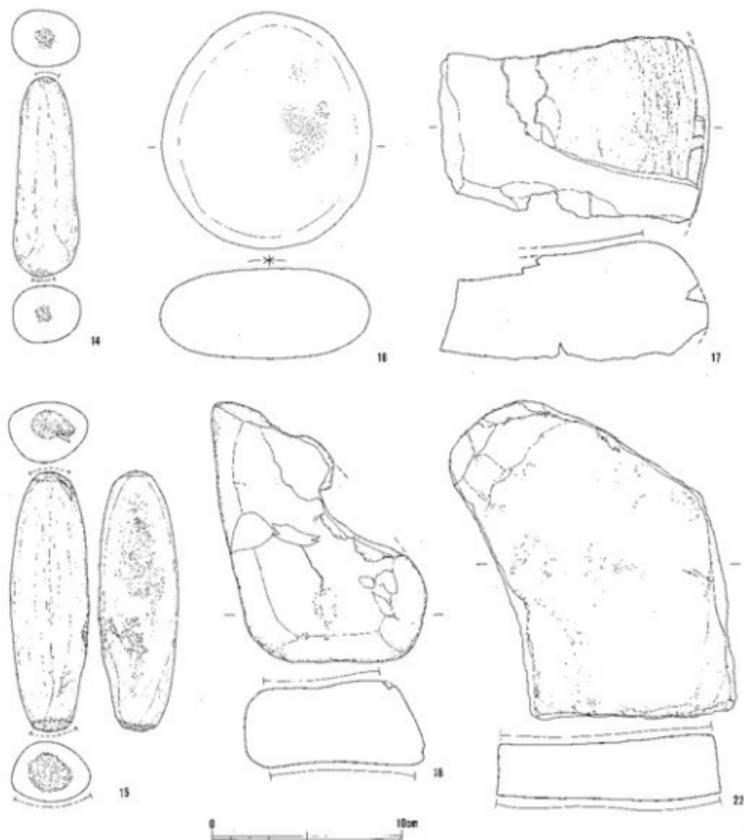
### 削 器 (第72図)

2点出土した。(11)は一部に礫表を残す大型・厚手の横長剥片を素材とする。刃部は下縁

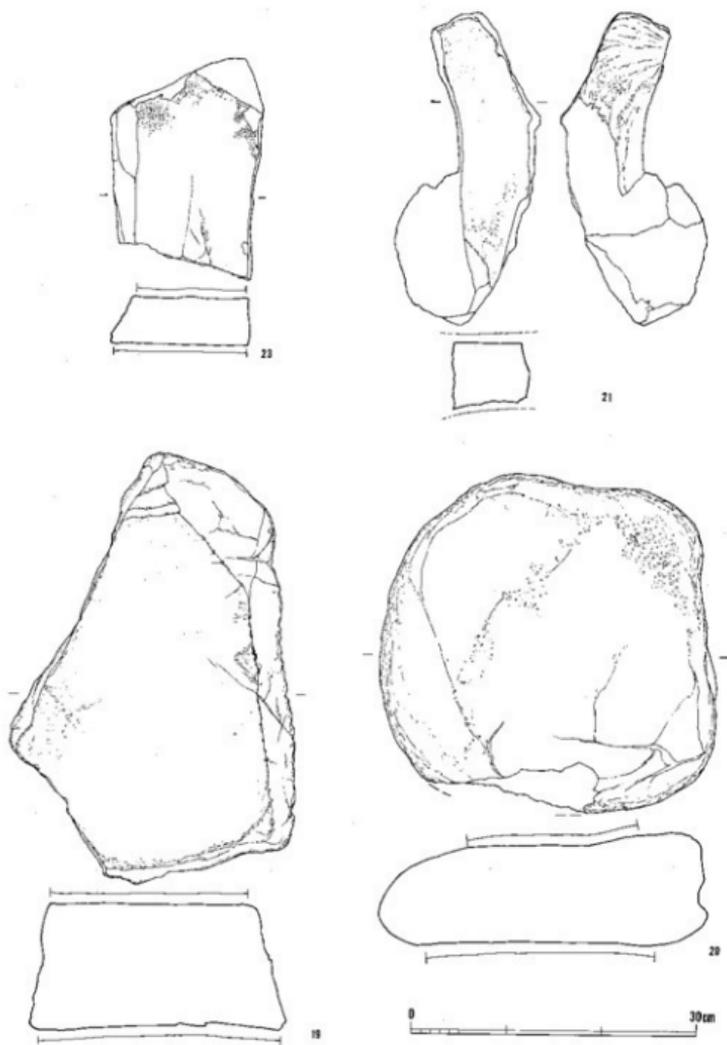
に散漫な剝離を施すのみである。(12)は横長剥片の打面部側に調整を加えて刃部とする。一方の側縁は切断面となっている。

楔形石器 (第71図)

(13)の1点のみ出土した。両面の周縁に細かい剝離痕を残す。



第73図 石器(3)



第74圖 石器(4)

### 敲石 (第73図)

(14・15)とも棒状の砂岩の自然礫を素材とする。いずれも長軸の両端に敲打痕の集中を認める。(14)は、側面にも敲打痕が認められ、さらに線状擦痕も観察される。図中の点線は敲打痕の、一点破線は敲打痕と擦痕の複合が及ぶ範囲をそれぞれ表す。

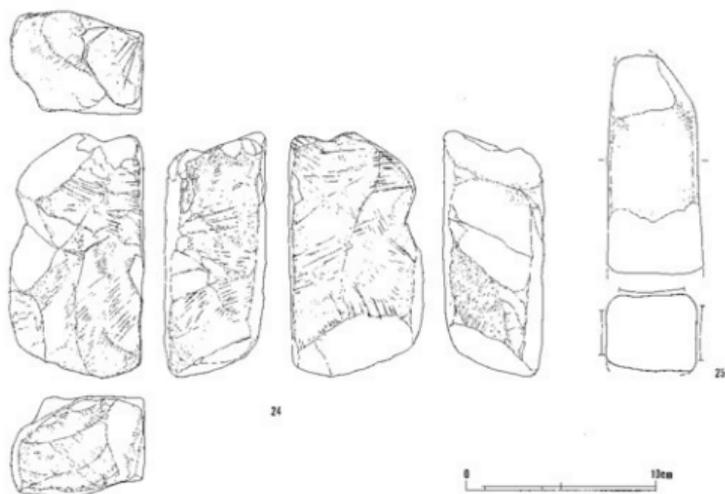
### 磨石 (第73図)

(16)楕円形の砂岩の自然礫を素材とし、両面に磨り面が形成される。片面の一部に敲打痕様の部分が見られるが極めて軽微であるため磨石とした。図中の実線は、磨面の範囲を示す。

### 台石 (第74図)

2点出土した。(19)は斑瀞岩、(20)は砂岩を素材とする。共に、頻繁に運搬し得ない重量であり、住居址B-2内の柱穴に廃棄された状態で出土した。(20)は、裏面に床擦れ痕が見られる。いずれも縄文時代の台石・石皿と考えられるような堅果類の調理・加工だけでなく、住居内に据えられて多目的な作業台として利用されていたと推定される。

以上、各器種について述べたが、A地区も含めてこれら石器の所属時期については、縄文時代的な形態を有する石鏃や第71図9・10に示した石匙を含むものの、サヌカイトの風化進行度や出土状態から、弥生時代中期の所産とするのが最も妥当であると考えられる。

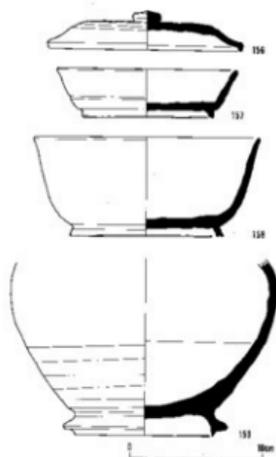


第75図 石器(5)

### 3 奈良・中世の遺物

#### 土壇1出土土器 (第76図)

(156)と(157)がセットで出土している。ともに完形で、(156)は扁平な天井部を持つ体部から、僅かに外反した後、強く屈曲して口縁部となる蓋Aである。つまみは中央が膨らむ。(157)は体部の下半に段を持つ杯で、高台は僅かに外側に踏ん張る。高台の端面は内傾した面をなす。一応8世紀後半頃のものと思われる。



第76図 土壇1・周溝墓2 出土土器

#### 建物址3・7出土土器 (第77図)

(161)は瓦器碗片で、体部に弱い稜を造り出している。口縁部は2段にヨコナデし、内面の暗文は底部がラセン状に、口縁部では横方向に、太く粗いものを施している。建物址3出土。(162)は瓦器皿片で、器壁は薄く仕上げられ、口縁端部はシャープに仕上げられている。口縁端部には、炭素の吸着が見られる。建物址7出土。

#### その他のビット出土土器 (第77図)

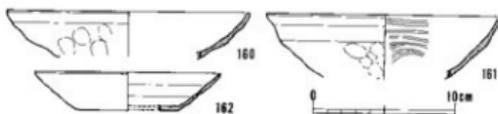
(160)は瓦器碗の小片で、底部を欠く。体部外面は器表が剝離し、調整は不明瞭であるが、指頭痕が顕著で、口縁部はヨコナデをしている。右回りの粘土紐巻き上げ痕が顕著に窺え、胎土にスサが混入されている。

#### 土壇7出土土器 (第78図)

土壇7からは土師器皿・碗片が出土している。(163・164)は土師器皿で、(163)は底部を欠く、外傾度の強い器形である。(164)は僅かに突出する底部片である。(165)は端部を内側に折り曲げて肥厚させた土壇で、端部は内傾する面となる。

#### 土壇8出土土器 (第78図)

土師器皿と、図示できなかったが須恵器埋鉢・白磁梅瓶片が出土している。(166)は土師器皿で、体部は内彎して外上方へ伸び、底部は僅かに突出し、外面には強めのナダが見られる。(167)は回転糸切りの底部を持つ、皿あるいは碗の底部で、内面には炭素が吸着している。

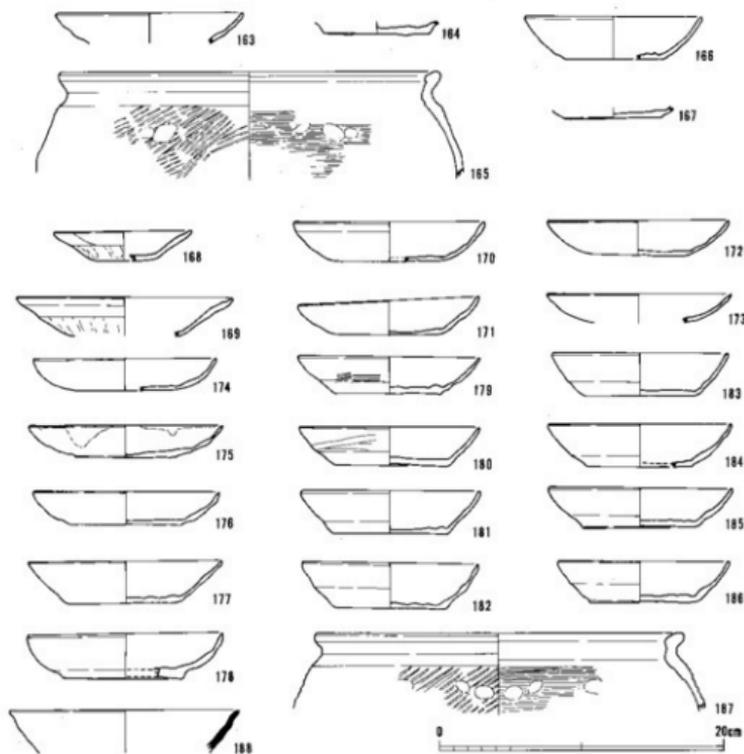


第77図 建物址・柱穴群出土土器

#### 土壇6出土土器 (第78図)

土師器皿(168~173)の他、土鍋片・漆器痕跡が確認されている。

(168・169)は分量に違い



第78図 土埴2・4・6・7・8 出土土器

はあるが、同じ器形で、調整方法も同じくする。(168)はススの付着が見られ、灯明皿に使用されたと考えられる。(170～172)は口径約13cm前後の皿で、底部に糸切り後の板状工具による圧痕を残す。3個体のうち(170・172)は形態・技法・胎土ともに同一で、同産地であろう。(173)も口径13cm前後の皿で、薄手の造りで、口縁端部はシャープに仕上げられている。

漆器(痕跡)は径10cmの円形に赤漆が残るだけで、取り上げは不可能であった。赤漆の下に径5cm・巾0.5cmの粘土が認められたことから、輪高台を持つものであったらしい。

#### 土埴4出土土器(第78図)

土埴4からは20個体を超える土師器皿・土鍋が出土している。

(174～186)は皿類であるが、内彎する体部を持つもの(174～176)、内彎する体部に突出し



第79図 土壇9 出土土器

た底部を持つもの(178)、体部が直線的に外上方に伸びるもの(177・179~186)に分類できる。(174~176)は口径約12.8~13.5cmの皿で、底部は左回りの回転糸切りである。(175・176)の底部は僅かに突出する。(178)は口縁部が直口し、底部は静止糸切りの皿である。全体に厚手の造りとなっている。(177・179~186)の底部は右回り回転糸切りである。口径は(177)が13.4cmでやや大きい、(179~186)は12.2~12.7cmの範囲となっており、(174~176)の皿と比べやや口径は小さくなっている。(179・180・184)は体部外面に横方向の刷毛を施す。(181)は石英粒を多く含む胎土で灰白色の色調である。

(187)は口縁部が外反した土鍋で、口縁端部を内側に肥厚させている。口縁部外側に面を持ち、口縁端部も内傾する面を持つ。体部は丸みを帯びた形状になると思われる。

#### 土壇2 出土土器 (第78図)

図示できたのは施釉陶器碗1片であった。(188)は体部からやや屈曲して外反する口縁部を持つ。オリブ黄の釉が掛かり、黄瀬戸碗であろう。

#### 土壇9 出土土器 (第79図)

(189)は瓦質火鉢片で、肩部に2条の突帯を持ち、その間に回字を対角線で四分劃した幾何文を連続して押印している。同様の破片は柱穴からも出土しており、それには円形の透しが施されている。

#### 溝16 出土土器 (第80図)

完形の土師器小皿2個体(190・191)、施釉陶器碗片(192)が出土した。

(190・191)は短く立ち上がる口縁を持つ土師器小皿である。胎土はクサリ礫・石英粒を含むが、(191)は長石も多く含む。

(192)は黄瀬戸碗であろう。内面と体部上半外面はオリブ黄の釉が掛かる。

#### 溝15 出土土器 (第81図)

溝15からの出土遺物には、土師器皿・埴、須恵器捏鉢、施釉陶器、無釉陶器がみられ、中世遺構では、最も多量の遺物を出土している。(193)は土師器小皿で、底部は右回り回転糸切りし、口縁端部は丸い。

(194~196)は11cm内外の口径に、3cm弱

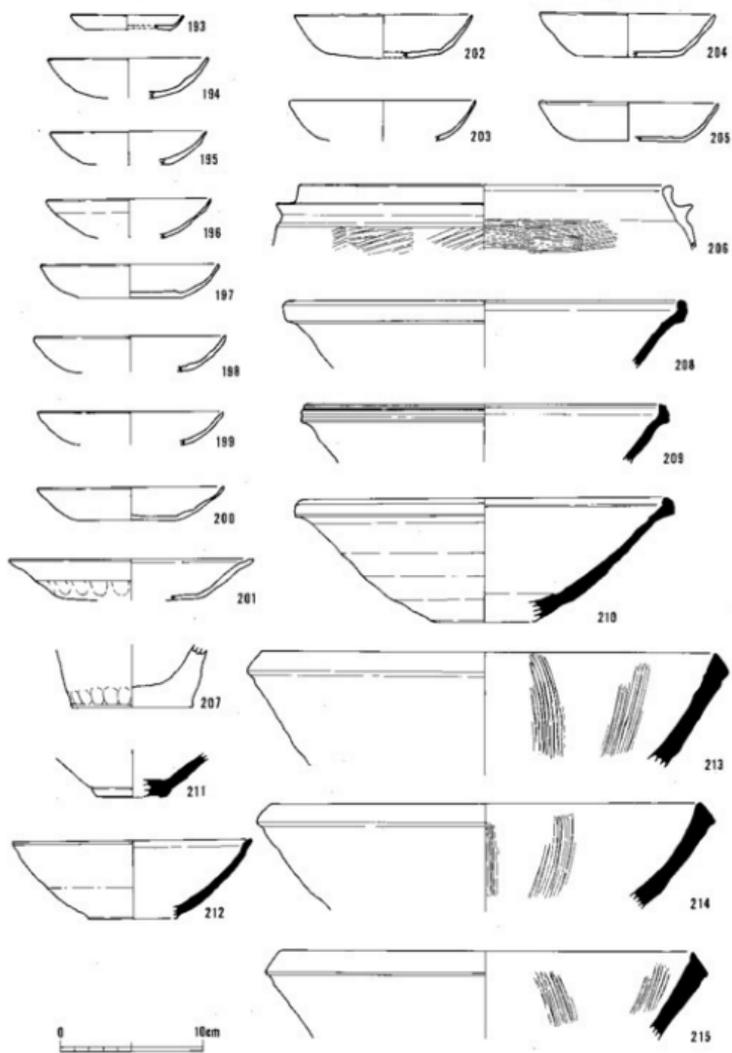
の器高を持つ、深い器形の皿である。

(197~205)は13cm内外の口径を持つ皿で、

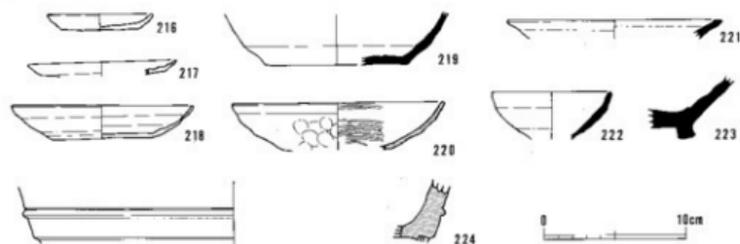
(197~200)は2.5cm前後の器高を持つ。



第80図 溝16 出土土器



第81图 满15 出土土器



第82図 包含層出土土器

(197)は底部内面の周囲ヨコナデによる凹線状の凹みをめぐらし、(198)の底部は左回転の糸切りと考えられる。(202~205)は3cm前後の器高を持つ、やや深目の皿である。(202)は左回りの糸切りを施す。(201)は土壌6出土の(169)と胎土・焼成・形状とも似ている。

(206)は羽釜で、口縁端部は内側に傾斜する面を持ち、鐔は小さく斜め上方へ張り出す。

(207)は土師器壺底部である。内外面に炭素が吸着している。底部は糸切りである。

(208~210)は口縁部を上方に拡張し、口縁端部に面を持つ須恵質捏鉢である。(210)は魚住産であろう。

(211~212)は施釉陶器、黄瀬戸平碗である。(211)は底部内面にオリブ黄の釉を施す。(212)は内面には全面にオリブ黄の釉を施すが、外面は体部中位の釉を掻き取っている。

(213~215)は備前焼摺鉢で、いずれも内面に櫛目を施している。(213・214)は口縁部を若干肥厚させるが断面では矩形に近く、端部は面を持つ。(215)の口縁端部は摘み上げている。

#### 包含層の遺物 (第82図)

土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器・白磁・瓦質土器・無釉陶器・輸入陶磁器の出土を見た。

(216~218)は土師器皿で、ともに底部は回転糸切りである。(216)は底部を糸切り後に板状工具で押さえている。胎土・焼成等が土壌4出土土器と似たものが多く、(216)は(175・176)と、(217)は(170)と、(218)は(171・172)と類似する。

(219)は須恵器の底部で、胎土に石英粒を特に多く含む。壺の底部と考えられる。

(220)は瓦器椀で、外面は指押えが顕著であり、口縁部のみヨコナデをしている。内面に暗文が見られ、底部にはラセン状の、口縁部には横方向に、太く粗いものを施している。

(224)は瓦質火鉢片である。他に(189)と同一の可能性のある破片が2点出土している。

(221・222)は施釉陶器で、(221)は黄瀬戸平碗、(222)は瀬戸・美濃系の天目茶碗である。無釉陶器は備前焼摺鉢の他、格子目印きの入った常滑焼と考えられる胴部が出土している。

(223)は白磁壺底部高台片である。他に白磁片は小皿片が出土している。輸入陶磁器は青磁鍋蓮弁文碗・青磁劃花文碗の小片が出土している。

## 第 4 節 小 結

B地区で検出した遺構は、前述のように弥生時代中・後期、奈良時代、鎌倉時代、室町時代にわたっているが、それらのうちでも弥生時代後期と室町時代の遺構の数が多く、次いで弥生時代中期、奈良時代となっている。

### 弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構では、円形の竪穴住居址が1棟（住居址B-4）と掘立柱建物址が2棟（建物址1・2）検出することができた。

弥生時代中期の遺構はA地区で円形の竪穴住居址が1棟検出されているのみで、他の弥生時代中期の遺構は本地区のみである。住居址B-4は住居址A-2とほぼ同程度の規模で、4本柱であることや中央に土壇を設置している点も同様であるが、住居址A-2が隅丸方形に近い形を示しているのに対し、住居址B-4は楕円形に近い形であることや、屋外に排水溝を持っていないことが住居址A-2との相違点である。また、後期の住居址と比べると、中期の住居址は規模が小さく、柱の数も少ないことが挙げられる。

一方、掘立柱の建物址はB地区でのみ検出することができた（建物址1・2）が、柱穴内より土器が出土し、時期が決定できたのは建物址2のみで、建物址1は柱穴埋土が中世のものとなっている点や柱穴内より石鏃が出土したことにより中期の所産と考えているが、後期のものである可能性も残っている。建物址2は2間×5間の規模で、その大ききから倉庫以外の目的で使用されたものと考えられる。ただし、床構造が高床であった可能性は薄く、平地式であった可能性が高い。また、建物址1は時期を知る決め手を欠くが、その規模からは倉庫としての機能も考えられる。

今回の調査では、弥生時代中期の遺構は本地区に集中して存在し、A地区では住居址が1棟検出されているだけである。寺中遺跡が立地する丘陵のうち、本地区が最も広い部分にあたっているため遺構が多く存在しているということも考えられるが、むしろ、A地区については丘陵の西端部しか調査できなかったために、中期の遺構が少なかったとする方が妥当であると考えられる。弥生時代中期の遺構が丘陵先端部にも存在している可能性は高く、またそう考える方が妥当であろう。本遺跡の弥生中期の様相については今後の調査に期待したい。

### 弥生時代中期の遺物

住居址B-4から出土した土器には高杯が2点あるが、一つは木器を模倣したタイプ、もう一つは鉢形のものである。後者は杯部の屈曲部に凹線文を施している。

一方、建物址2からは壺と甕が1点ずつ出土しており、壺の方は口縁部に櫛で文様を描いているが、頸部には凹線文を施している。甕は口縁端部を上方にひき伸ばしており、体部外

面には叩き目が残っている。

以上の土器の観察から、住居址B-4・建物址2出土土器ともに弥生時代中期後半、畿内地方の編年にあてはめると畿内第三様式新段階～第四様式の範疇に含まれる。

#### 弥生時代後期の遺構

弥生時代後期の遺構では円形の竪穴住居址が3棟と方形周溝墓6基、壺棺が1基検出できた。また、溝は弥生時代後期に限定できるものはなかったが、弥生時代と推定されるものが9本ある。また、時期不明の溝は3本存在する。

竪穴住居址はB-1がやや小さく径8.8m、B-2はB-3とともに径10.0mで、A地区の後期の住居址のうちA-3の拡張されたもの以外は本地区のものよりすべて小さい。住居址の深さはB-1が最も残りがよく40cm残っていたが、B-3は壁面は全く残っていない。柱穴の数はB-1が7本、B-2は8本であり、B-3は8本柱と推定される。いずれも中央に土壇を持ち、屋内・屋外溝を有している。土器は最も残りのよい住居址B-2の床面直上に多く遺存しており、器種としては甕と鉢が多く目立っており、壺は非常に少ない。時期的には弥生時代後期後半に属するものと考えられる。B-1からは壺の口縁部が1点図示できただけで、中央土壇から出土している。B-3の溝からも土器が出土しているが、図示したものは1点だけである。時期はB-2と同じく後期の後半と考えられる。

住居址はすべて調査区の南東部に存在しており、A地区と考えあわせてこの時期の居住域は南部に移っていったようである。

一方、方形周溝墓は調査区の中央、台地頂部から台地北側斜面にかけて存在しており、それらの間隙には住居址は全く検出されていない。したがって居住域と墓域とを明確に区別していたものと考えられる。また、南側のA地区では方形周溝墓が全く検出されていないことから、居住域と墓域という意識は強く働いていたものと考えられる。

方形周溝墓群は溝を共有しないが、5基が列状をなして築かれており、もう1基は調査区中央に単独で存在している。周溝内からは土器はあまり多く出土しなかったが、方形周溝墓3からは鳥形の土製品が出土している。列状をなしている方形周溝墓1～4・6については後述するように出土土器と立地から方形周溝墓6→方形周溝墓4→方形周溝墓3→方形周溝墓2→方形周溝墓1の順に築造されたことが推定でき、方形周溝墓5は方形周溝墓3が築造される以前に築かれていたと考えられる。

また、本遺跡の方形周溝墓の平面形は周溝の外辺が弧状を呈していることが特徴としてあげられ、平面築造企画があったことが推察される。

壺棺は方形周溝墓1の西側約4.2mのところ検出したが、上部はすでに削平を受け、壺は肩部以下しか遺存していなかった。ただ、口縁部の小片が壺内から1点出土した。壺棺は底部付近に焼成後の穿孔が認められ、そこが底になるように斜めに埋置されていた。

弥生時代後期に属する溝は溝3・4・7と考えられ、若干の土器が出土している。調査区の南半分に存在し、溝3は方形周溝墓5の南溝から始まり、溝4は調査区内の小さな谷の最も奥から始まっている。いずれの溝もE-16・17付近で合流・交差し、最終的には住居址B-1付近で1本の溝となっている。また、合流した後の溝はD地区の西溝につながってゆく可能性が高いと考えられる。

#### 弥生時代後期の遺物

弥生時代後期の遺物は住居址B-2と方形周溝墓3～6で主として出土している。

壺についてみると、口縁部は外反し、体部の最大径は中位にあり、底部は突出ぎみの平底である。外面には太筋の叩き目が施され、刷毛などは加えられていない。

以上のことから、住居址B-2と方形周溝墓3～6出土土器は、弥生時代後期でも後半に属し、古墳時代には下らないものと考えられる。また、それらのなかでも住居址B-2と方形周溝墓6出土土器がより古い様相を呈しているようであるが、その点については後述する。

#### 奈良時代の遺構

本地区の奈良時代の遺構には土壇1があるのみで、他に遺構は存在せず、わずかに方形周溝墓2の周溝内より遺物が出土したのみであった。

土壇1の性格は不明であるが、単独で存在していることや、土壇内に蓋をかぶせた杯が1点存在していたのみであることから、覆衣を収めた土壇である可能性を指摘しておきたい。しかし、杯の中からは遺物が全く出土しなかったことから、断言はできない。

#### 奈良時代の遺物

本地区では奈良時代の遺物は少なく、わずかに土壇1出土の杯と蓋のセットと方形周溝墓2から出土した杯身と長頸壺の下半があるのみである。

土壇1出土土器は奈良時代の前半と考えられ、方形周溝墓2出土土器は奈良時代の後半と考えられる。

#### 鎌倉時代の遺構

この時代の遺構は主に調査区の東南部で、室町時代の遺構と重なって検出した。

掘立柱建物址は柱穴内より遺物が出土し、時期が明確にできるものは建物址3・4の2棟である。建物址3は西北部の柱穴を検出していないが、3間×2間の総柱建物址であり、柱穴内より瓦器碗が出土している。一方、遺物は出土していないが、建物址3と同時期と考えられる建物址4は2間×1間で西側に張出部をもつ建物址である。建物址3と棟方向が同一で建物址3の南妻と本建物址の南桁とは柱通りを描いている。

棚はこの時期では1基のみ(掘4)検出できた。4間のもので、柱穴内より瓦器皿片が出土している。

### 鎌倉時代の遺物

この時代の遺物は少ない。瓦器碗・皿片が柱穴内より出土している。それ以外は、青磁竊蓮弁文碗片・白磁小皿片といった輸入陶磁器片が出土しているが全て包含層からの出土である。

青磁竊蓮弁文碗はI-5・a・b類、白磁小皿はVI-1・b類（横田・森田分類 1978年）と考えられる。

### 室町時代の遺構

室町時代の遺構は3棟の掘立柱建物址(5・6・8)、3基の櫓(1~3)、8基の土壇(2~9)、3本の溝(14~16)を検出している。他に鎌倉時代の遺物を出土しているが、柱間等から建物址7もこの時期と思われる。

これらの遺構の内遺物の出土によって時期が決定できたのは土壇(2・4・6・7・8)と溝(14~16)だけであり、その他の掘立柱建物址・櫓の時期決定は、土壇・溝との切り合いによる先後関係、方位・走行によっている。これらの遺物の内、土壇8は建物址5の柱穴によって切られ、溝15は土壇7を切り、建物址6の柱穴によって切られている。また、溝15の走行方向は建物址5の棟方位に近い。このことからみて、重なり合う建物址5・6は5が6に先行する可能性が高い。櫓1・2・溝16は溝15と並行を一にしている。櫓3・建物址8は建物址6と直交している。こうした関係から遺構の先後関係は、土壇7・8→建物址5・溝15・16・櫓1・2→建物址6・8・櫓3となり、それぞれが同時存在していた可能性が高い。この他の遺構は、切り合い関係が認められず、同時存在は確認できなかった。

### 室町時代の遺物

遺物は包含層・柱穴からの出土は少なく、土壇と溝から比較的纏まって出土している。

遺物の大半は土師器皿で、糸切り底の「褐色系」土師器皿に混じって、屈曲する口縁部を持つ「白色系」土師器皿が土壇6・溝15より出土している。「褐色系」土師器皿はロクロ回転・胎土・底部調整技法によって分類が可能である。

陶磁器では、青花等の中国製輸入陶磁器の出土が殆どなく、瀬戸・美濃系陶器、特に黄瀬戸平碗の出土が多い。他には、溝15からの出土遺物に、東播系の握ね鉢・備前焼摺鉢がみられ、包含層出土遺物の中に常滑系の壺片がみられる。

瓦質土器では雷文帯の他、数種の幾何文帯をもつ火鉢片が出土している。

このように切り合い関係からは先後関係が認められているが、各土壇と溝から出土した遺物はその内に同器種・同時期と考えられるものを相互に含んでいる。土壇4・6の遺物は土壇7・8、溝15・16の遺物と時期差は殆どないものと考えられる。遺構の先後関係から示される時期差は遺物の面からは殆どなく、全て室町時代中頃~15世紀中頃を前後する時期に収まるものであろう。前述した土壇7・8から溝15・16、櫓1・2までは極めて短期間の変遷であったと考えられる。

## 第4章 D地区の調査

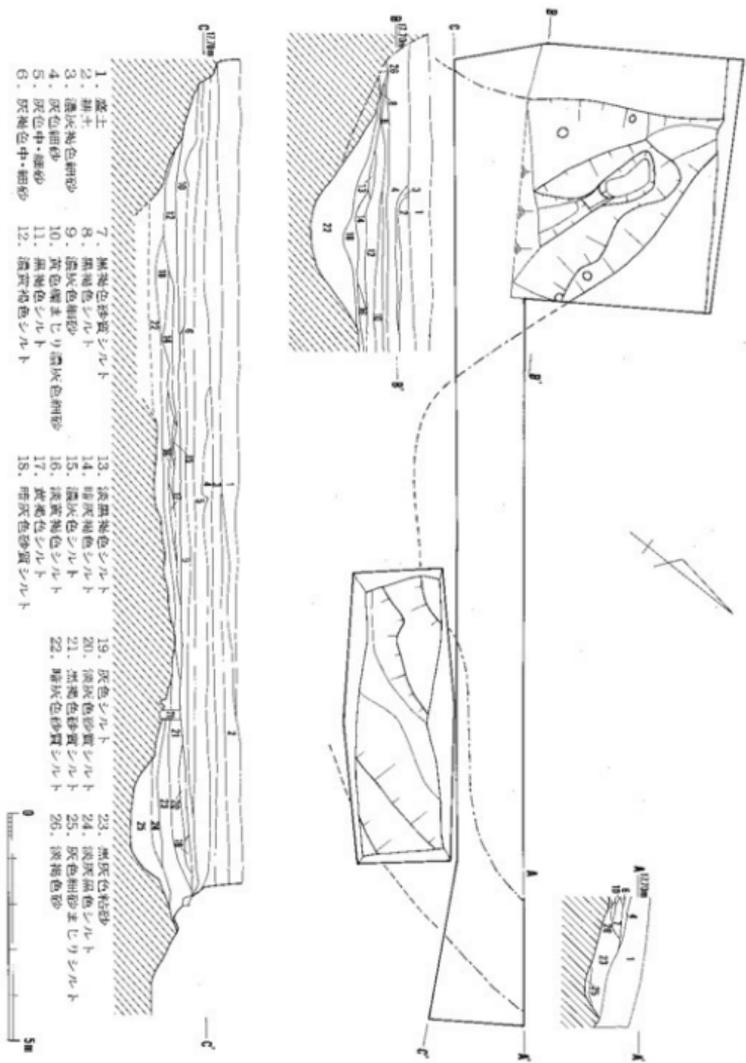
### 第1節 調査区の概要

D地区はA・B地区の間にある南西方向へ開いた小支谷の口にあたる地区に設定した調査区である。この谷部は当初、調査対象にはなっていなかったが、淡路縦貫道建設の関連工事として、農業協同組合の有線放送ケーブルを地下埋設中に、多量の遺物の出土が確認された。そのため急遽、D地区として調査を行った。調査はまず工事に掘削された溝をトレンチとして断面観察を行い、多量の遺物の出土があった2カ所の溝状の落ち込み部分について、調査区を拡張した調査を実施した。調査期間・工事期間の都合で、土器の出土が考えられる地区について、全体にわたる調査は実施し得なかった。ただ、より多くの土器を出土した東溝については調査区の南端で、遺物量が少なくなっていたことから、ほぼ土器集中地点全体の調査が行えたものと思われる。

調査区はA・B地区の南側に入り込んだ細長い谷から、北に分かれた小さな枝谷の口付近にあたる(第3図)。この谷部はほぼ全体を淡路鉄道の線路敷設の際に切り取られ、全容がはつきりしない。しかし走行方向から見て、B地区のM-21付近から始まり(第21図)、谷底部はかなり急な傾斜で落ち込み、調査区付近で緩やかな傾斜になっていたものと思われる。僅かに残る谷口部では、谷底部は主谷より一段高くなっている。また東側のA地区とは比高差約3mを測る崖状となって断絶し、B地区との間は後世の削平で断絶した状態となっているが、約3mを測る崖状であったと思われる。

調査では多量の遺物を包含する2本の溝状落ち込みと、中世以降と思われるピット状遺構が検出された(第83図)。東側の溝状落ち込みを東溝、西側の溝状落ち込みを西溝と呼称する。東溝では溝底近くから弥生時代中期の遺物を出土しているが、浮いた状態であり、両溝ともその形成時期は不明である。

個々の溝の埋土は後述するが、調査区の土層堆積状況(第83図)は第1・2層が淡路鉄道敷あるいは縦貫道建設工事に伴う盛土と耕土、第3・4層がそれ以前の水田に伴う耕土及び床土である。自然堆積層は第5層の灰色細砂以下で、第5層から第10層の黄色礫混じり濃灰色細砂までは溝の埋没後、谷底部に堆積した土層である。これらの土層の内第6層以下は西溝上部に堆積している。したがって両溝埋没後も西溝上は浅い谷状地形となっていたようである。それは第12層以下の溝埋土の内、東溝の埋土が早く堆積して溝を埋没させたためで、東溝の埋土の状況からみて、A地区からの土層の供給が多かったものと思われる。なお第6層からは須恵器片が出土しているが、時期は特定できない。



第833図 D地区 全体図

## 第 2 節 遺 構

### 東 溝 (第84図)

ほぼ南北に走行する肩巾約4.5mの溝で、拡張した調査区では深さ約1.0mのU字形を呈する。しかし土層観察を行った工事掘削部の断面では底は浅く、特に西壁断面では約20cmとなっている。こうしたことから溝は工事掘削された部分で、底は急に浅くなっていたものと思われる。溝は第20層の地山(青白色シルト)上で検出したが、溝内の土層は地山面より上のレベルから流入し、第5層が溝の肩部を抉り取って堆積している。したがって溝の切り込み面が本来地山の上面であった可能性は少ない。

溝は南北走行し、B地区のM-21付近から始まる谷部の水が集まる溝であったと思われる。また溝の先端については追求できていないが、走行方向から考えて、今回検出した西溝と調査区の南側で合流するものと思われる。

溝埋土は大きく下層の灰白色を呈する第18・19層、中層の黒灰色を呈する第13~17層、上層の灰色を呈する第11層~12層に分けられる。その中で、下層の第18層からは弥生時代中期の(225)が出土している。中層からは多くの遺物が出土し、特に第16層からは弥生時代後期の遺物が重なりあって出土している。第16層の堆積状況からみて、A地区からこの土層が供給された可能性が高く、含まれる遺物もA地区から廃棄された可能性を持つ。

### 西 溝 (第85図)

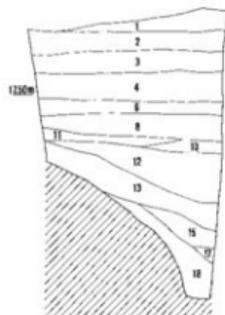
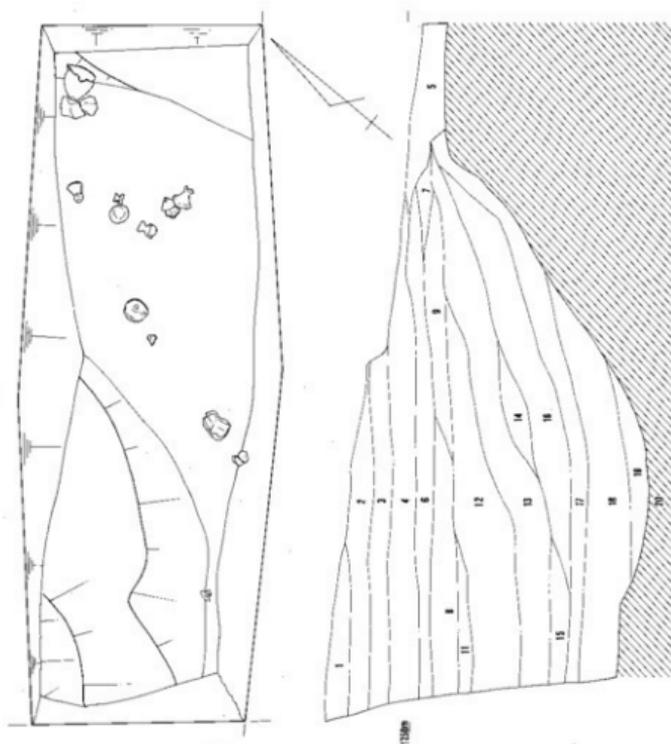
ほぼ東西に走行する溝で、西端では巾約80cm・深さ約50cmを測る。しかし急激に溝巾を増し、検出された部分では最大巾約6.8mを測る。底は西隅付近で段をなして落ち、最も深い部分で約1.5mを測る。また底は一定した深さではなく、その状況からみて自然の流路と思われる。溝内の土層堆積状況は下層の灰色系シルト(第16・17層)、中層の黒灰あるいは暗灰色系のシルト(第10~15層)、上層の灰色系の色調を呈する砂層(第5~9層)に分けられる。

東溝同様、この溝からも多くの遺物が出土しているが、出土遺物の多くは中層の第11層淡黒灰色砂質シルト、第12層淡黒灰色シルト、第15層灰黒色砂質シルトからの出土である。

出土した遺物は弥生時代中期末から後期前半に属する遺物も見られるが、大半は後期後半に属するものである。ただ多少型式差も認められる。

### ピット状遺構 (第83図)

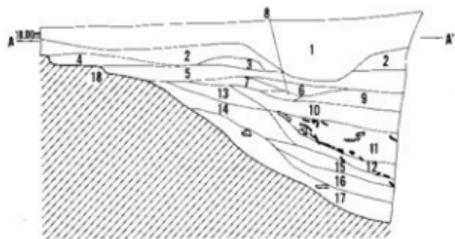
調査当初の断面観察の際に東溝上で1個と、西溝を検出するために拡張した調査区で6個の合わせて7個のピット状遺構を検出した。ピットは西溝の上面にあたる第6層上、東溝の埋土である第21層上面の2面で検出されていることから、2時期以上にまたがるものと思われるが、時期的にははっきりしない。また西溝上で検出した6個のピットにはある程度の規則制が見られるが、これも建物址として捉え切れなかった。



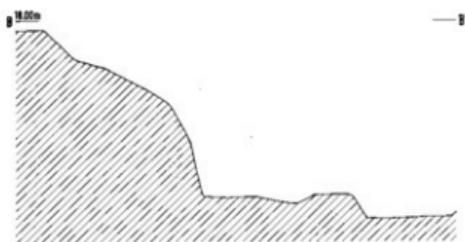
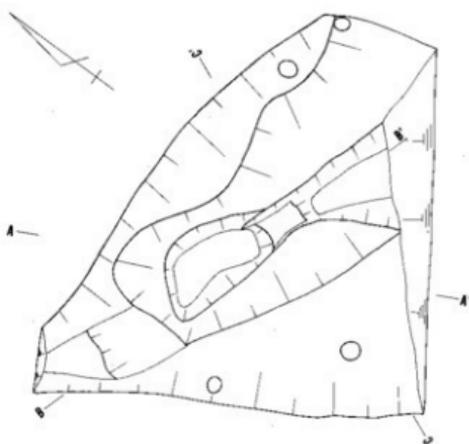
- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| 1. 濃青灰色砂礫 (盛土)  | 11. 暗灰色砂質シルト    |
| 2. 濃灰褐色細砂 (田跡土) | 12. 灰黒色シルト      |
| 3. 黄灰色細砂        | 13. 黒褐色砂質シルト    |
| 4. 灰色細砂         | 14. 黒褐色シルト      |
| 5. 濃灰色細砂        | 15. 黒灰色粘砂       |
| 6. 灰褐色細砂        | 16. 黒灰色礫まじり粘砂   |
| 7. 灰色細砂         | 17. 淡灰黒色シルト     |
| 8. 濃灰色細砂        | 18. 灰白色粘質土      |
| 9. 灰色砂質土        | 19. 灰白色礫まじり粘質土  |
| 10. 濃灰褐色砂質シルト   | 20. 青白色シルト (地山) |



第84図 東溝



1. 黄色砂礫(盛土)
2. 濃灰色土
3. 濃灰褐色細砂
4. 褐色細砂
5. 灰色細砂
6. 灰褐色細砂
7. 淡黑褐色砂質シルト
8. 濃灰色細砂
9. 灰色細砂



10. 黒褐色砂質シルト
11. 淡黒灰色砂質シルト
12. 淡黒灰色シルト
13. 暗灰色砂質シルト
14. 暗灰色シルト
15. 灰黒色砂質シルト
16. 暗灰色砂質シルト
17. 淡灰色シルト
18. 青白色シルト(地山)



第85図 西溝

### 第 3 節 遺 物

#### 1 土 器

##### 東溝出土土器

今回の調査では最も纏まった遺物が見られ、器種的には壺・甕・鉢・高杯・器台等が揃っている。ただ主体は弥生時代後期の土器であるが、(225)～(227)のように畿内第Ⅳ様式に並行すると思われるものが若干混じっている。

##### 中期の土器(第86図)

時期の明らかに異なる(225)～(227)の内、(225)は端面を下方に大きく拡張した広口壺で、端面は5条の凹線文を施した後、櫛描直線文を縦方向に施している。端面の上面にも櫛による刺突文を施している。

(226)・(227)は体部から「く」の字状に屈曲して開く口縁を持つ甕で、端部は上方に狭み出されて面を持つ。端面はともに凹線文で飾っている。

##### 後期の土器(第86～91図)

上記の土器以外は型的には多少時間的な巾があるものも見受けられるが、同一層から重なり合って出土しており、一時期の土器類と捉えてよいものと思われる。器種は壺・甕・鉢・高杯・器台等が揃っているが、器台の占める割合が高い。

(228)～(254)は壺類(第86・87図)、頸部から外反して開く口縁部を持つA類(231～234・237～239)、頸部から屈曲して開く口縁部を持つB類(228～230・234)、内彎気味に外上方に伸びる口縁を下方に拡張したC類(241・248～254)、頸部から外反した後、屈曲して開く口縁部を持つD類(242～247)、に大別することができる。体部から底部を欠くものばかりで、その形状は知り得ないが、(296～298)は壺類の底部である。

頸部から外反して開く口縁部を持つA類には、口縁端部を拡張しないA1類(231～234)と下方に拡張するA2類(236・240)、口縁端部を上下に拡張したA3類(237～239)が見られる。調整は不明なものが多いが、(230)のように内外面とも刷毛調整するものと、(228)・(231)・(232)・(234)のように外面を篋磨きするものがある。(231)・(234)は内面も篋磨きされている。

(238)には口縁部に穿孔が見られ、蓋付きの壺になるものと思われる。拡張した口縁の端面を凹線文(235・237)、竹管円形浮文(239)、あるいは両者の組合せで飾るもの(236)等が見られるが、(239)には凹線文も施されていた可能性が高い。

頸部から屈曲して開く口縁部を持つB類には、口縁部を拡張しないB1類(228～230)と口縁端部を肥厚するB3類(234)が見られるが、(235)は小型で、外傾した端面を持ち、他のB類の壺とは趣を異にしている。調整方法についてはいずれも遺存状態が悪く、不明である。

(241)～(247)は、口縁部に屈曲部を持つ壺D類である。頸部から外反して開いた後、屈曲するD1類(242・244～247)、頸部から屈曲してほぼ水平に開いた後、屈曲するD2類(243)が見られる。調整方法は遺存状態があまり良くないため不明な点も多いが、外面は縦方向の篋磨きしたもの(241～245)が多い。内面は(245)に横方向の篋磨きが見られるだけで、他は不明である。

口縁部外面の文様は全体に施されるもの(247)と、端面の下半だけに施されるもの(242～245)がある。下半だけに文様が施されるものは、屈曲部からさらに外反して開く口縁を持つ。

外面の文様構成は櫛櫛波状文だけのもの(242)、凹線文だけのもの(241)、凹線文と竹管円形浮文を組み合わせたもの(243・244)、凹線文と竹管円形浮文を施した後、浮文間を竹管文で加飾するもの(245)、外面の上半に凹線、下半に竹管円形浮文を施し、浮文間を波状文で加飾するもの(247)と様々な組合せがあり、(244)は口唇部にも刻み目文が施されている。

(248)～(254)は内彎気味に外上方に開く口縁端部を拡張した壺C類であり、口縁端部の直下から拡張し、比較的巾の狭い端面を作るC1類(251～253)、口縁端部の下方を拡張し巾広の端面を形成するC2類(248～250・254)、口縁端部を上方に拡張したC3類(241)が見られる。

C2類には内彎する口縁の端部を下方に拡張する(248・249・254)と、外上方に伸びる口縁の端部を下方に拡張する(250)がある。また、口縁部外面がほぼ直立する(248・250)と、外上方に直線的に伸びるもの(249・254)が見られる。(254)は極めて大型の壺で、文様構成から見ても、特殊な用途が考えられる。

調整方法は遺存状態が悪いため不明な点が多いが、内外面とも篋磨きするもの(250・254)、外面は篋磨きし、内面はナデ調整したもの(248)がある。

端面の文様は凹線文を基本とし、凹線文だけのもの(250)、凹線文と竹管文を施したもの(248)、端面の上下に凹線を施し、その間に鋸歯文をいれ、鋸歯文の頂点に円形浮文を加飾したもの(249)、上下に幾条かの凹線を施し、その間を2個1組の鋸歯文と渦巻状浮文1個を交互に施したもの(254)が見られる。

(251)～(253)は口縁端部直下から端面を拡張した壺C1類であるが、いずれも口縁は内彎している。口縁の端面はほぼ直立するもの(251・253)と、(252)のように外傾した面となるものが見られ、端面の拡張はそれほど大きくない。

いずれも小片であるため、調整方法ははっきりしないが、(253)の内面は篋磨きされている。文様の構成は凹線文を基本とし、端面全体に凹線文を施したもの(253)、端面の上下に凹線文を施したもの(252)、端面の下端に凹線文を入れ、その上部に鋸歯文を施し、鋸歯文の頂点に竹管文を施したもの(252)が見られる。

(241)は口縁部を上方に拡張した壺C3類で、口縁部外面全体に凹線文を施している。

(255)～(262)は壺類であり、(255・256・258)は体部から外反して開く口縁を持つ壺A類である。(257・259)は外上方に伸びる口縁を持つ壺B類で、(260)は大型の壺D類に大別される。

A類の壺(255・256・258)は体部は細長い形状を呈し、体部から外上方に開いた後、外反する口縁を持ち、端部に面を持つ(255)、体部から外反しながら開き、端部を丸く納める(256・258)が見られる。(255)と(256)の体部外面には叩き目が残っている。

B類の壺(257・259)は体部から屈折して外上方に伸びる口縁を持ち、(257)のように口縁端部でやや内彎するものも見られる。口縁端部はともに丸くおさまられ、(259)の体部外面には叩き目が残る。

(260)は大型の壺D類で、最大径は口縁部にある。体部のすばまりが弱く、口縁部は大きく立ち上がる。口縁部は叩き出し技法で、叩き後に縦方向の刷毛調整している。体部外面には右上がりの叩き目を残すが、肩部には水平方向の叩き目が見られる。極めて特徴的な壺で、他地方では管見しない。

(261)・(262)は体部から突出した底部を持ち、外面に叩き目が残る体部から底部にかけての破片である。(262)は肩部から上を欠くが、体部は比較的長く、最大径は体部中央付近にある。(262)の内面は刷毛調整されている。体部径から見て中型の壺になるものと思われる。

鉢類は全て体部から外反して開く口縁を持つもので、小型の鉢A1類(263)、中型の鉢A2類(264・265)、大型の鉢A3類(266・267)の3種が見られる。

小型の鉢A1類である(263)は上げ底の底部で、口縁は体部とは僅かに角度を変えて外上方に開く程度で、口縁と体部の境はそれほどすばまらない。調整は内外面とも篋磨きする。

鉢A2類に分類される(264・265)は突出した底部に、内彎した体部を持ち、口縁部と体部の境がすばまって、口縁部の外反度の大きいもの(264)と、口縁部と体部の境が僅かにすばまる程度で、境が不明瞭なもの(265)がある。調整はともに内外面とも篋磨きしている。

鉢A3類の(266・267)は、体部から強く屈曲して口縁部となり、口縁部と体部の境が明瞭なもの(266)と、体部から僅かに外反する程度で口縁部となり、体部と口縁部の境が不明瞭なもの(267)があり、(267)は片口部を持つ。調整はともに遺存状態が悪いため不明であるが、(267)は体部の内面は篋磨きしている。

(268)～(275)は高杯であるが、全容を知り得るものはない。杯部の形態には、口縁部と体部が屈曲するA類(269・271・272)と、体部から内彎して口縁部となるB類(268・270・273)がある。

A類の内、体部と口縁部の境に稜を持って屈曲し、口縁部に模様を施さないA1類(269)と、屈曲部を下方に拡張し、口縁部を飾るA2類(271・272)がある。

A1類の(269)は口縁部の外反度が大きく、口縁端部は面を持っている。調整は口縁部内面

が横方向の笕磨き、体部は内外面とも縦方向に笕磨きしている。

A 2 類(271・272)は非常に丁寧な調整を施し、精製された土器である。ともに内外面とも縦方向あるいは横方向の笕磨き調整される。(271)の口縁部外面には櫛描波状文、(272)には櫛描波状文と竹管円形浮文が施され、(271)は口縁端部にも刻み日文が施されている。

体部から内彎する口縁を持つ高杯B類には、端部で外反して短く開く口縁を持つ(268)、口縁部と体部の境に稜を持つ(270・273)があり、(273)は稜が下方に拡張されていたようで、その部分に剝離痕が残る。(273)は比較的粗い作りで、体部外面に叩き目を残す。

脚部は、2点とも短いもので、杯部の底部から「ハ」の字状に開く(274)と、太い脚柱部から「ハ」の字状に開く(275)がある。ともに4個の透し孔を持ち、(274)の外面は笕磨きされ、(275)の裾部には4条の凹線文が施されている。図示できなかったが、この他にも脚部片は出土している。しかし長い脚部はなく、すべて短いものばかりで、脚柱部が細く、裾部が大きく開くものも見られる。

(276)～(290)は器台類で、口縁端面が拡張され、調整も丁寧にされた精製のA・B類(276・277・279～288)と、非常に粗製のD類(278・289・290)がある。

精製のA・B類は、口縁部が拡張され、口縁部外面が凹線文等で飾られるが、口縁部が体部から屈折するA類(277)、体部から内彎する口縁部を持つB類(276・278～286)がある。

A類(277)は、横上方に開く体部から屈折して立ち上がった後、外反する口縁部を持ち、屈折部を下方に僅かに拡張している。口縁端部は面を持ち、体部外面は縦方向に笕磨きしている。口縁部外面には凹線文が施され、その上から竹管円形浮文を張りつけ、浮文間に櫛描の波状文あるいは直線文で加飾している。

器台B類は外上方に伸びる体部がやや内彎して口縁部となるもので、やや内彎する口縁端部を小さく拡張するB 1 類(278・280)、口縁部が内彎し、端部直下を小さく拡張するB 2 類(279・281)、口縁部の下方を拡張するB 3 類(282～286)に分類できる。

B 1 類の口縁部外面は凹線文だけで飾られ、調整は内外面とも笕磨きする。

B 2 類は受部が内彎し、(279)のように外上方に開く体部から口縁部が内彎して開くものと、(281)のように、横上方に開く体部から内彎する口縁部を持つものが見られる。脚部は全容を知り得ないが、(279)の脚部は「ハ」の字状に開く。調整については(279)で内面の笕磨きが認められ、(281)で体部外面の笕磨きが認められている。口縁外面には凹線文が施されているが、(281)にはその上から竹管円形浮文が張りつけられている。また(281)は口縁内面にも凹線が施されている。

器台B 3 類は体部から内彎する口縁を持ち、内彎部の外面を下方に拡張したものである。口縁端部を丸くおさめる(282・283)と、口縁端部に面を持つ(284～286)ものがある。脚部まで遺存していたものは(286)の1点であるが、(286)の脚部は脚柱部上端にくずれた凸帯が1条

施され、脚柱部から「ハ」の字状に開く裾部を持つ。裾端部には面を持ち、外面に凹線が施されている。

調整は不明な点が多いが、(284)は内面に縦方向の寛磨きを残し、(285)の内面は横方向の刷毛後、縦方向の寛磨きされている。(286)は体部外面に叩き目を残しており、叩き後に寛磨きされたことを窺わせる。脚部は縦方向に寛磨きしている。

口縁部外面の文様構成は凹線文を基本とし、凹線文を口縁部外面の上下端に施し、その間を竹管円形浮文(285)、櫛描波状文+竹管円形浮文(283)、鋸歯文+竹管円形浮文(284)で飾るものが見られる。また(276・286)のように口縁部の外面全体に凹線を施し、竹管円形浮文をその上から貼り付けるものが見られる。他に(276)のように、口縁の内面にも乱雑な櫛描波状文を施している。

(287)は器台の脚部であるが、外面に寛磨きが残り、裾端部に凹線が施されていることから、器台A・B類の脚と思われる。比較的細い脚柱部から裾部が「ハ」の字状に開き、(286)と比較すると裾部の開きが大きい。裾端部は面を持っている。

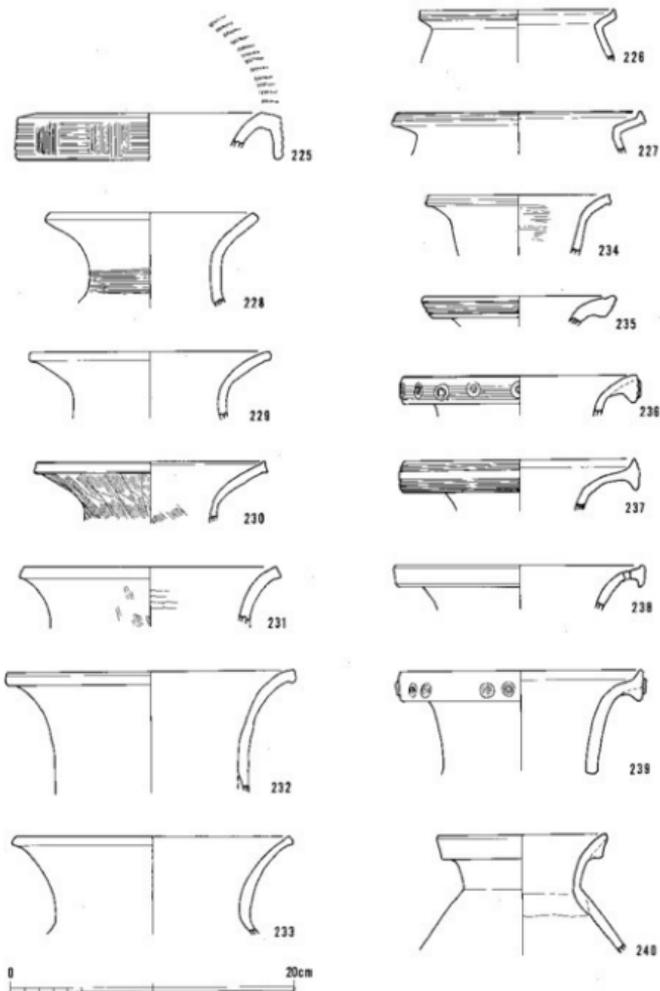
器台D類(288～290)はA類より小型で粗製のもので、出土量はA類より少ない。(288)のようにD類にあっては大型で、脚部から口縁部まで一度に成形するものと、(289・290)のように小型で、脚部と杯部とを分割成形するものがある。

(288)は1点だけであるが、極めて器壁が厚く、特に脚柱部の器壁が厚くなっている。外面に一部叩き目を残すが、内外面ともナデ調整されている。

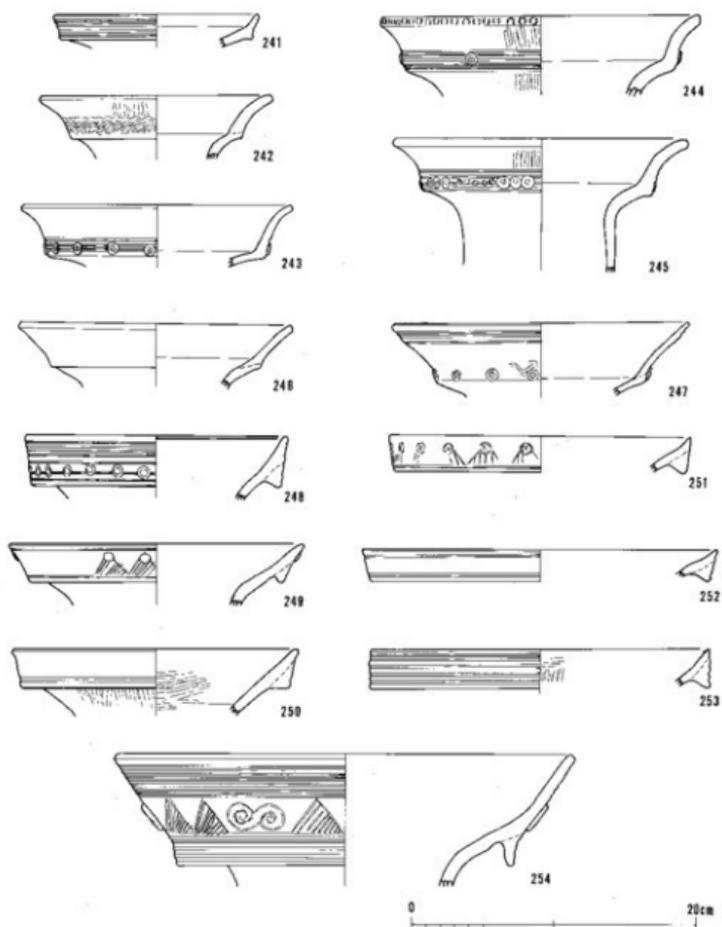
(289・290)は「ハ」の字状に開く脚部に杯部を接合したもので、脚柱部付近の破片だけが出土している。したがって杯部の形状は知り得ないが、(289・290)とも杯底部は開いていない。おそらく杯部が逆「ハ」の字状、脚部も「ハ」の字状となるものと思われる。調整は(290)に叩き目が残るが、遺存状態が悪く不明な点が多い。(289)・(290)とも杯部と脚部の接合痕を明瞭に残す。

(291)は壺形土器のミニチュアである。口縁部を欠くが、体部は歪んだ球形で、底部は突出せず、上げ底となっている。調整は外面が刷毛調整、内面は指押えである。

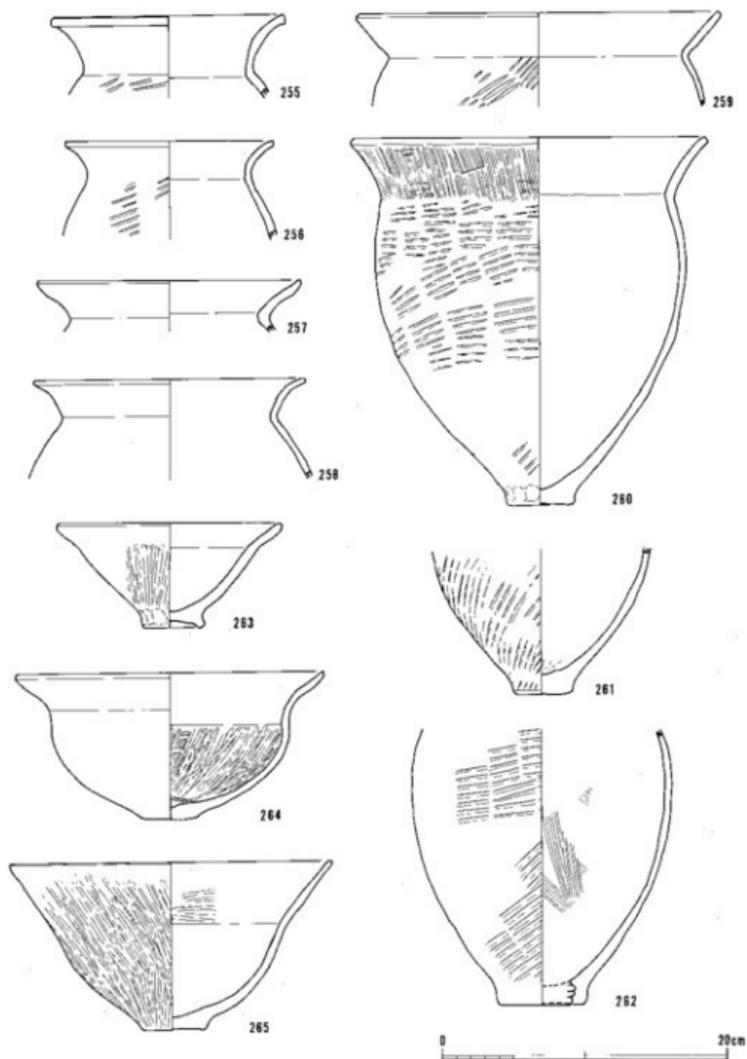
(292～298)は底部である。底部の形状は突出した小さな平底の底部(292)、体部から突出した平底の底部(294～298)、体部からほとんど突出しない平底の底部(293)があり、(295)の体部外面は寛磨きされ、(292・296・297)の体部外面は叩き目が残る。(292)は鉢形土器、(293・294・296～298)は壺類の底部となるものと思われ、(295)は体部外面が寛磨きされていることから鉢形土器か壺形土器の底部になるものと思われる。



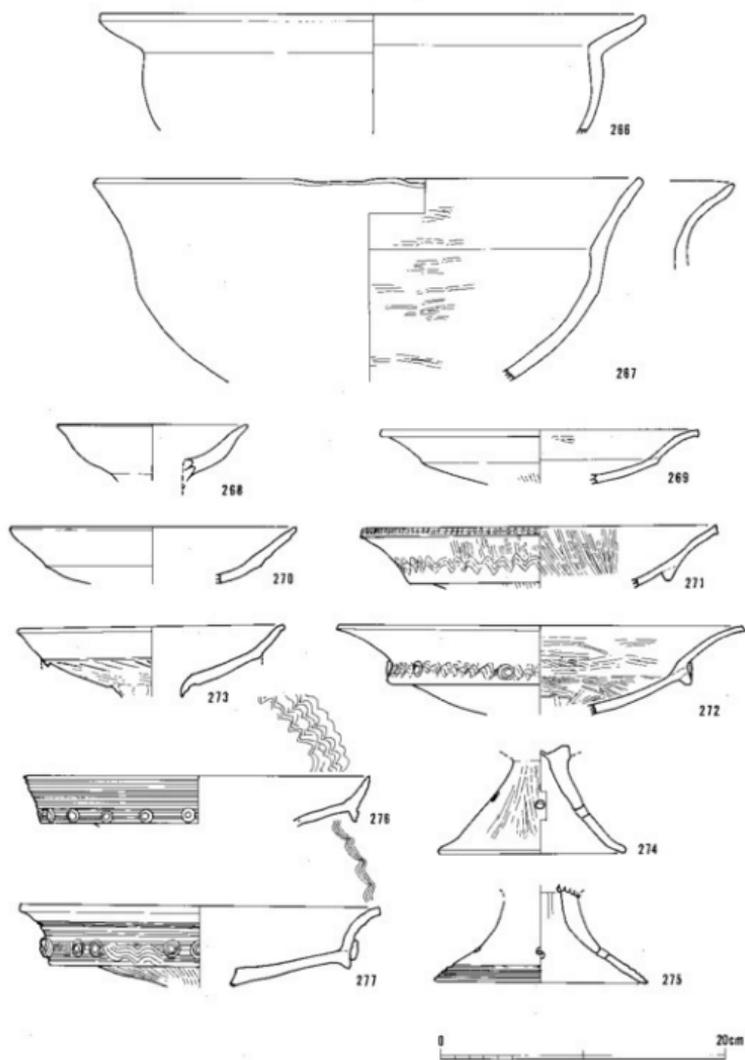
第86图 東清出土土器(1)



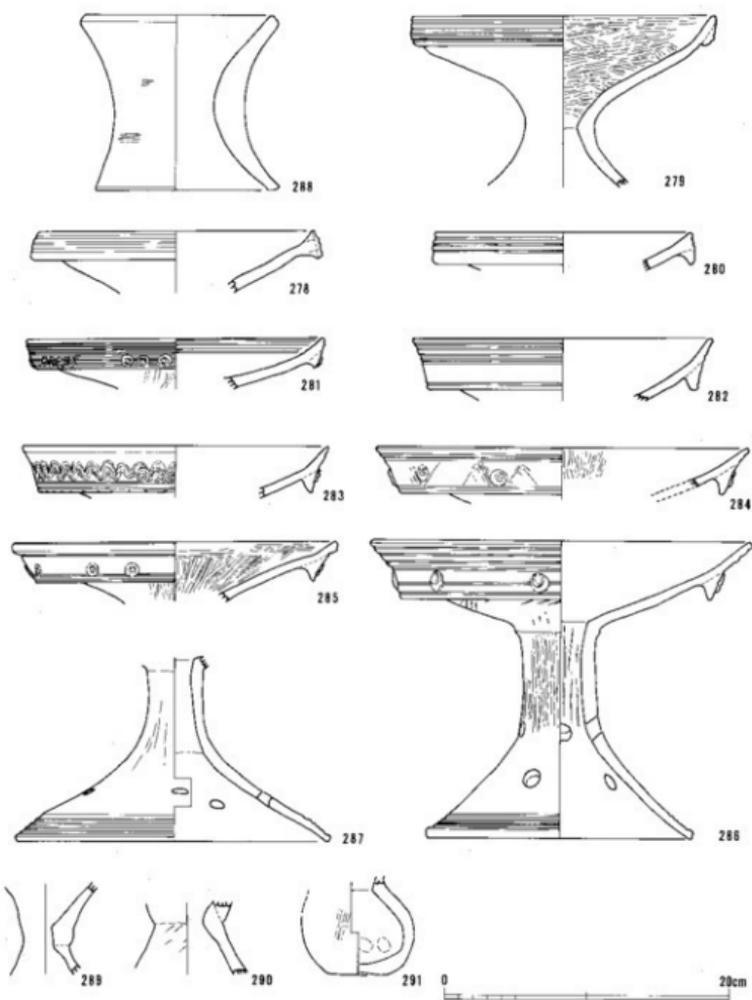
第87圖 東清出土土器(2)



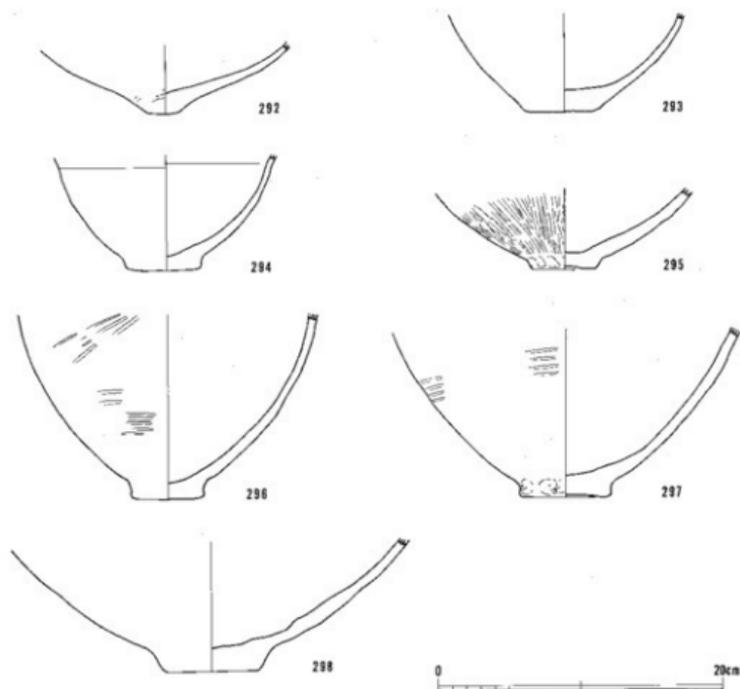
第88图 东满出土土器(3)



第89回 東漢出土土器(4)



第90图 東溝出土土器(5)



第91図 東溝出土土器(6)

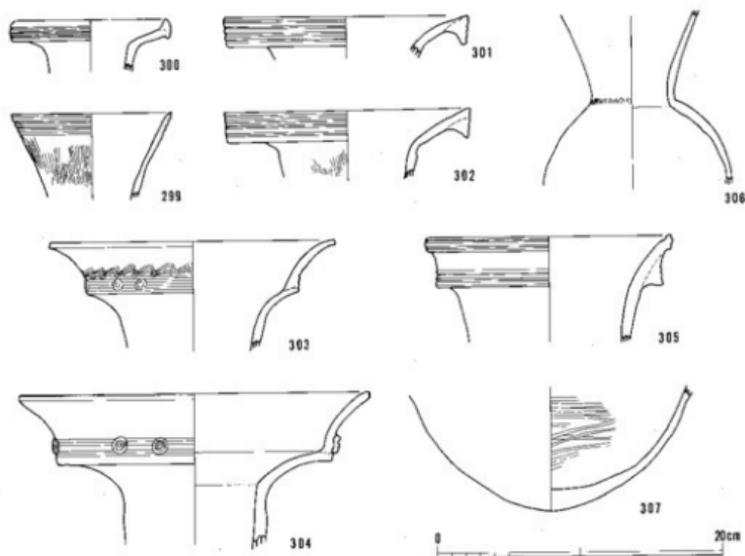
西溝出土土器 (第92図・93図)

壺・甕・鉢・高杯・器台類が出土しているが、器台類については図示し得なかった。また東溝出土遺物のように完形に復元できた遺物もない。

壺類は弥生時代中期に属すると思われる(299・306)が含まれている。(299)は頸部が外上方にそのまま伸びて口縁部となるもので、頸部は刷毛調整し、口縁部外面に凹線文を施す。(306)は頸部から体部上半にかけての破片であるが、頸部は外上方に伸び、頸部と体部の境に刺突文を施している。

弥生時代後期に属する壺類は何れも口縁端部を拡張し、端面を凹線文等で飾った装飾性に富むものである。体部まで知り得るものはないが、A 2、A 3、B 4、D 1、D 2類が出土している。

A 2類(301・305)は、頸部から外反して大きく開く口縁の端部を下方に拡張したものであ



第92図 西満出土土器(I)

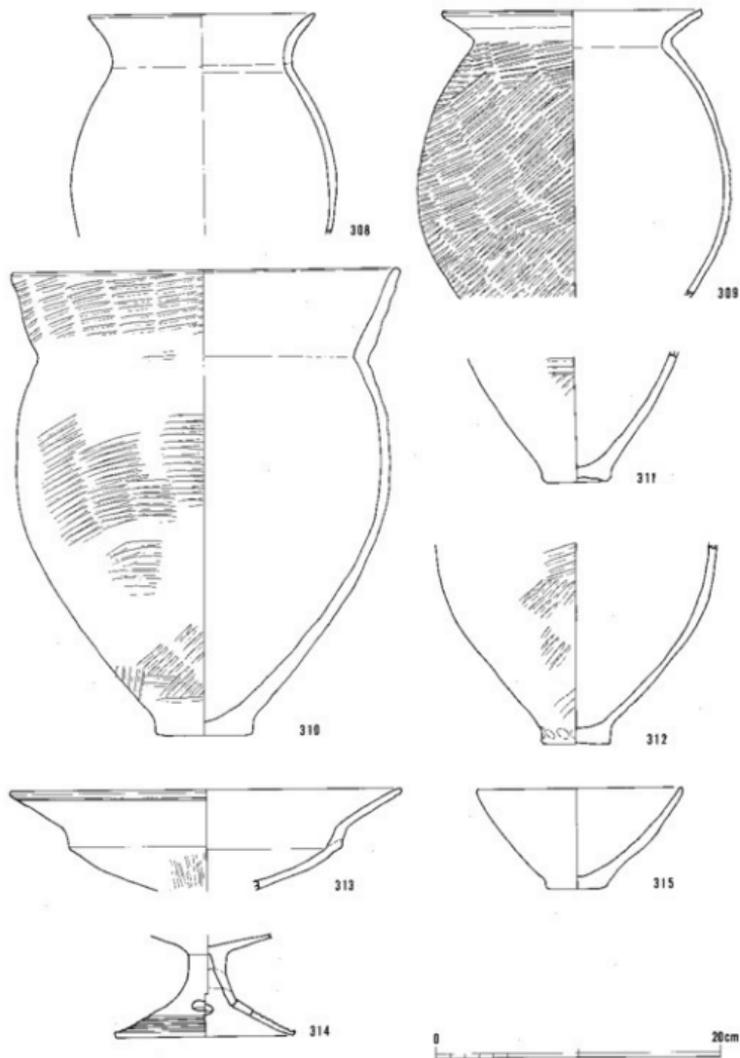
るが、(301)は大きく外反し、(305)は頸部からわずかに外反する程度である。(301)は口縁端面全体に凹線文を施し、(305)は口縁部外面の上下端に凹線文を施している。調整は遺存状況が悪く不明な点が多いが、(305)は内面篋磨きしている。

A 3類(300)は、外反して大きく開く口縁の端部を上方に拡張した小型の広口壺で、口縁端部をやや内傾気味に短く上方に立ち上げ、端面には凹線文を施す。頸部と口縁部の境は明瞭である。

(302)は直立する頸部から屈曲して直線的に外上方に開く口縁部を持つもので、壺B 4類に分類される。頸部外面に縦方向の篋磨きがわずかに残り、口縁端面全体に凹線文を施す。

(303)は、直立する頸部から外反して開く口縁部が屈折して上方に立ち上がった後、更に外反して開くもので、壺D 1類に属する。口縁部外面に凹線文を施した後、竹管円形浮文を貼り付け、さらに櫛描波状文で加飾している。ただ施文は端面の下半に止まっている。遺存状態が悪く、調整ははっきりしないが、頸部の外面と口縁部の内面を篋磨きしている。

(304)は、頸部から屈曲して外上方に開いた口縁部が屈折して上方に立ち上がり、更に外反して開くもので、壺D 2類に分類される。口縁部外面は下半だけに装飾が見られ、凹線文の上から、竹管円形浮文が貼り付けられている。



第93图 西清出土土器(2)

(308~310)は甕類で、(311)・(312)は甕の体部下半から底部にかけての破片である。いずれも体部は肩部が張らず、最大径を体部中位に置くものである。(308)・(309)は中型の、(310)は大型の甕である。

(308)は細長い体部から口縁部が上方に立ち上がった後、外反するもので、甕A2類に分類される。端部は丸い。

(309)は中位の張った体部が頸部ですぼまり、体部から屈曲して外上方に伸びる口縁部を持つもので、甕B1類に分類される。端部は面を持ち、体部外面には右上がりの叩き目を残す。叩き目は体部下半・体部中位・肩部ではそれぞれ方向が違っている。

(310)は大型の甕D類に分類されるもので、最大径を口縁部に置き、倒卵形の体部から口縁部が外上方に大きく立ち上がる。口縁部の立ち上がりが大きく、口縁部まで叩き整形されている。体部の内面はナデ調整である。極めて特徴的な甕である。

(313)・(314)は高杯の杯部と脚部の破片である。(313)の杯部は体部と口縁部の境に屈曲部を持つもので、高杯A1類に分類される。口縁部は体部から屈曲して立ち上がった後、さらに屈曲して外上方に直線的に開く。口縁端部下に1条の凹線をめぐらし、体部の外面は篋磨きされている。

(314)は高杯の脚部で、短い脚柱部から裾部が大きく開き、裾端部は面を持つ。裾部には6条の凹線文が施されている。外面は篋磨きされている。

(315)はC類の鉢で、体部が伸びて口縁部となるものである。

## 2 石器

### 台石 (第73図)

(18)は大型品の破片で、砂岩製である。受熱により、赤変している。西溝出土。

### 砥石 (第73図)

(22)の1点だけが出土している。(22)は6面全てに細かい線状擦痕が残り、研磨対象が鉄製品であったことが想定される。東溝出土。

#### 第 4 節 小 結

以上のように、この地区では多量の遺物を内蔵する 2 本の溝と、溝埋没後に掘り込まれた、中世以降と思われるピット状遺構が検出された。

しかし東西 2 本の溝とも巾・深さは一定せず、人工的に掘削された溝とは思われない。特に西溝は底が段をなして変化し、段下には水の落下に伴う窪みが見られる。こうした溝底の状態から見れば、自然流路と判断する方が妥当であろう。また東溝もはっきりと検出はできなかったが、工事掘削部分で溝が急激に浅くなり、西溝と同じような溝底の状態であった可能性が高い。おそらく両溝とも人工掘削によるものではなく、台地上の雨水等が谷部に集まり、谷部を開削した際にできた溝と思われる。

また東溝はその走行方向から、M-21 付近の谷部から流れ落ち、西溝は住居址 B-1・2 間に存在する谷部から流れ落ちる溝 3 に続くものと思われる。

両溝の時間的な関係は土層堆積状況から、東溝埋没後も西溝は浅い谷状となって残っていたことが窺える。したがって西溝が完全に埋没したのは東溝より遅れた時期であったと思われる。形成時について窺い知る事は出来なかったが、多量に出土した弥生時代後期の土器は両溝とも埋土中層からの出土であり、東溝の下層からは溝底より浮いていたが、中期の土器が出土している。したがって東溝の形成は弥生時代中期以前であったと考えられる。

両溝から出土した遺物は遺跡全体から出土した遺物量の 70% 近くを占める。遺物は両溝とも埋土中層の黒褐色系シルト層から出土しており、特に東溝では溝の東肩部から集中して出土している。この地区の東側には住居址 6 棟が検出された A 地区があり、そこから廃棄された可能性が高い。また西溝は破片が多く、東溝のような出土状態ではなかったが、西側の B 地区台地上には住居址 B-1・2 が存在しており、その関連も考えられる。

出土遺物には大きく弥生時代中期に属するものと、後期に属するものがあるが、中期のものは少なく、後期に属する遺物が圧倒的に多い。詳細は後述に譲るとして、ここでは時間的には弥生時代中期後半と後期後半に属するもので、後期後半の土器類には多少の型式差が見られるとしておきたい。

出土した土器類は、器種構成の上で器台類が多いと言う特徴を持つ。特に東溝の出土遺物にその特徴が顕著に現れている。それが何に起因するかは不明だが、東溝出土土器の中に特殊な用途が考えられる、S 字状浮文を持つ大型の壺が見られ、出土遺物の中の器台の多さと関連しているように思われる。

ピット状遺構は溝の埋没後に掘り込まれ、2 面で検出されたことから、明らかに 2 時期に設けられた遺構と思われる。しかしピット状遺構内からも、堆積した土層からも出土した遺物はなく、時期の特定は出来なかった。

# 第 5 章 ま と め

## 第 1 節 建物址・竪穴住居址群

### 1 中期後半の建物址と住居址

#### 建物址

弥生時代の建物址1・2は柱穴内から石器・土器が出土している。土器はその特徴から弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式並行期）に考えられるものであり、凡そ建物址もその時期の所産と考えられる。また竪穴住居址A-2・B-4もこの時期の所産と考えられることから、弥生時代中期後半の本遺跡には、竪穴住居址2棟と掘立柱建物址2棟が併存していたと考えられる。ただ本遺跡は後世の水田化の際大きく削平されており、遺構が消滅した可能性が高く、本来は今回検出した以上の住居址、建物址が存在していたと考えられる。

建物址1は柱穴の配置が特殊なもので、桁行にあたる東西両側にそれぞれ4本、北妻側中央と北から3列目には梁行の中央に柱穴が配置されている。この中央に配置された2本の柱穴は、他の柱穴と比較すると、径は小さく、深さも浅くなっている。

この2本の柱穴が建物址の構造上で果たす役割をどう捉えるかによって、建物址1の捉え方に違いがでてくる。まず2本の柱穴を建物址1の中で棟持柱等、主要な役割を果たす柱穴と捉えた場合、建物址1は2間×2間の規模で、南側に1間分の庇等の付属施設を持つ建物址となるという捉え方ができる。しかし現在弥生時代の建物址が検出されている他遺跡に類例を求めると、こうした構造の建物址例は皆無に近い。僅かに大阪府若江北遺跡S B 501<sup>(1)</sup>に似た例を求められることができるだけである。若江北遺跡例は両桁行に4本、両妻側に3本の柱穴が配置され、梁行の南から2列目の中央に柱穴が配置されている。したがって若江北遺跡のS B 501建物址を2間×2間で南側に1間分の付属施設を持つものとも考えられる。しかし今のところ、3間×2間で屋内施設を持つ建物という捉え方と、3間×1間で棟持柱を持ち、屋内の棟通りにも柱穴を持つ建物址という捉え方が示されているだけである。<sup>(2)</sup>

したがって建物址1を2間×2間の規模で、付属施設を持つ建物址とした場合には、弥生時代の建物址では、本遺跡が初見ということになる。しかし問題の2本の柱穴は小さく浅いこと、また別の捉え方もできることなどから、積極的にこうした構造の建物址とは考え難い。

さて2本の柱穴を建物址の補助的な役割を持つ柱であると捉えた場合、建物址1は3間×1間の規模の建物址と捉えられ、束柱ないし棟通りに補助的な柱を持つ構造の建物址と考え

られる。こうした構造の建物址の類例は高知県田村遺跡のSB1<sup>(3)</sup>に求められる。田村遺跡の例は3間×1間の建物址の一方の妻側中央に柱が配置されている。本遺跡の建物址1のように屋内にあたる位置に柱は配置されていないが、建物址1と似通った例とみていいものと思われる。また棟通りに補助的な柱を配置する例として岡山県沼E遺跡の建物址II、同土井遺跡<sup>(5)</sup>の建物址I、先の若江北遺跡の例などがある。沼E遺跡例は棟持柱を持つ3間×1間の建物址で、総柱建物状に屋内の棟通りにも柱を配置している。土井遺跡の建物址1は6間×1間の建物址で、南妻から2間入った位置の梁行中央に、柱穴が1本配置されている。これは棟が6間と長いことから補強のためと思われる例である。若江北遺跡ではこうした構造の建物が、SB501・504・518の3棟見られる。SB504は4間×1間と考えられる建物址で、建物址の中央に1本の柱が配置されている。またSB501・518はともに3間×1間の建物址で、それぞれ1本の柱が屋内に配置されている。

こうした例から本遺跡の建物址1も3間×1間の規模の建物址で、北妻側と屋内の棟通りに補助的な柱が配置された構造を持つものと考えた方が妥当と思われる。

また用途については、その判断は極めて困難であるが、桁行1～3間で、梁間が3m以下の狭いものは高床式建物が多いと言われている。それから見れば建物址1は桁行3間で、梁間も1間・3m前後であり、高床式の建物址と捉えられる。ただ柱穴が25cm前後と細く、たとえ補助柱をくわえても、建物址としては貧弱で、大きな重量に耐えられるかどうかは疑問である。したがって高床式建物として倉庫的な性格を持つ建物とは即断できない。

建物址2は両妻通りにも柱穴が配置されている。しかし妻通りの柱穴は南にずれ、柱穴の規模は小さく、棟持柱とは考え難い。近畿・中国地方の独立した棟持柱を持つ建物址の場合、棟持柱は妻通りの外側の近接した位置にあり、妻通りにあるものは見られない。そうしたことから梁行の規模は2間と捉えられ、建物址2は桁行5間、梁行2間の規模と捉えられる。

建物址2と同規模の建物址は県内では玉津田中遺跡<sup>(6)</sup>で検出されている。玉津田中遺跡例では、建物址の床面が遺存しており、床面上に焼土、炭化物とともに土器類が遺存していた。こうした状況から玉津田中遺跡では掘立柱建物と捉えられている。また弥生時代の高床式建物は梁行1間に限られるということから、梁行2間の建物址2は掘立柱建物址と考えられる。

弥生時代の建物址は一般的に西日本に多く、福岡県竹並遺跡<sup>(7)</sup>、高知県田村遺跡<sup>(8)</sup>等で前期から存在することが知られている。しかし前期にまで遡る例はまだ少なく、その例が増えてくるのは中期以降であり、特に中期後半から後期末の例が多いようである。

その内、梁行1間・約3m以上を測り、桁行も4間以上を測る大型の建物址の例としては、先の竹並遺跡、田村遺跡の他、鹿児島県王子遺跡<sup>(9)</sup>、福岡県三雲遺跡<sup>(10)</sup>・久保園遺跡<sup>(11)</sup>・辻田遺跡<sup>(12)</sup>・辻田西遺跡<sup>(13)</sup>、岡山県土井遺跡<sup>(14)</sup>・押入西遺跡<sup>(15)</sup>・沼E遺跡<sup>(16)</sup>・霧山遺跡<sup>(17)</sup>・野田遺跡<sup>(18)</sup>・兵庫県玉

津田中遺跡等があげられる。ただ平野部の遺跡は広範囲に及び、また存続時期が長期に渡っていることなどから、建物址の集落体での在り方まで追求できる資料は少ない。それに比べて丘陵・山地上の遺跡は範囲が限定しやすく、存続時期が短いことから、大型建物址の集落内での位置が比較的明らかになっている例がある。

岡山県押入西遺跡は3地区に広がる中期後半の遺跡で、桁行4間・梁行1間の大型の建物址と桁行・梁行とも1間の建物址がみられる。大型の建物址は、遺跡の中では最高所に位置する大規模の住居址から構成された住居址群の下方で、桁行・梁行とも1間の建物址2棟とともに検出されている。桁行3間までの小型の建物址は各住居址群にも存在しているが、大型の建物址は1棟だけであり、集落内では特異な存在となっている。

この押入西遺跡のように、大型の建物址が集落内では大規模な住居址から構成された単位群に近接した位置にある例は、同県沼E遺跡・野田遺跡等にも見られる。桁行が4間以上・梁行1間・3mを越す大型の建物址の集落内での位置が比較的明らかになっている例は、このようにまだ少ないが、集落内の大規模な住居址群に伴って存在するようであり、集落を構成する集団の内、有力な集団と共に存在する傾向があるように見受けられる。大規模な建物址がそうした集落内の有力な集団の管理下に置かれていた可能性がある。

#### 竪穴住居址

竪穴住居址としてはA-2とB-4の2棟が検出されている。2棟とも平面形は円形を呈し、規模は5m前後で、床面積約19㎡を測る。また構造も似通っており、床面中央に土壇を持ち、4本柱の構造を取る。ただ住居址A-2の柱穴には抜き取りの痕跡が確認されている。住居址A-2の床面には、中央の土壇と結びつき、床面を二等分するように小溝が設けられ、小溝は斜面下方側の屋外に伸びている。こうした溝を床面に持つ住居址は県内では今のところ三田市奈カリ与遺跡<sup>(17)</sup>・神戸市頭高山遺跡<sup>(18)</sup>など、中期後半の丘陵上の遺跡の住居址から見られるようになり、次の後期の住居址にも共通してみられるものである。

集落のほぼ全体が調査され、約30棟の住居址が検出された三田市奈カリ与遺跡の例を見ても、床面積が20㎡以下の住居址は小型の住居址であるようである。淡路では中期後半の竪穴住居址の検出例はこれで3遺跡目であり、集落構成・住居址規模等全く不明である。しかし、同じ淡路の森遺跡<sup>(19)</sup>では径約8mの住居址が検出されており、こうした断片的な資料をつなぎ合わせると、淡路でも中期後半の集落は、先の奈カリ与遺跡と同様、比較的大型の住居址と小型の住居址で構成されていたものと思われる。さらに今回のように建物址が検出され、遺跡によっては集落を構成する集団に建物址を伴うことが明らかになった。

#### 2 後期の住居址

##### 群構成

後期の竪穴住居址は、A地区で5棟、B地区で3棟の計8棟が検出された。先の中期の遺

構の項でも述べた通り、A地区とB地区との間には谷部が存在するという地理的な関係から、A地区とB地区の住居址群は同一のグループに纏めることには無理があり、別のグループとして捉えられる。またA・B地区の境あたりから東に張り出す台地頂部があり、この張り出し上にも住居址群の存在が予想されることから、後期の集落も3グループ以上の単位で構成された集落であったと考えられる。

**A群** A地区の住居址群は調査区の中では接近してあり、一グループとして纏められる。仮にA群とすると、A群は円形の住居址A-1・3、方形の住居址A-4～6の5棟で構成されるが、遺存状況が悪いことや、床面上に遺存していた遺物が少なく、各住居址の時期を特定することは困難であり、同時存在の住居址を特定するのは難しい。しかし僅かに床面上に遺存していた遺物や屋外溝、埋土中の遺物から、敢えて同時に存在した住居址を特定するならば、住居址A-1・3はほぼ同時に存在していたと考えてよいものと思われる。A-4～6は、出土遺物にやや古式の様相をとどめるものが見られるが、A-4～6も住居址A-1・3とほぼ同時に存在したものと考えられる。ただA-4～6は切り合い関係にあり、最も早い時期に住居址A-6が、次に住居址A-4・5が存在したのものと思われる。しかしA-4・5は同時存在なのか、時間的なずれがあるのかは判断できなかった。

こうしたことから、A群は住居址A-1・A-3と、方形住居址A-4～6の内の1～2棟の、3～4棟の住居址で構成されたグループとなるが、A地区の東は未調査であり、その部分に住居址の存在する可能性があることから、A群はこれ以上の堅穴住居址で構成されたグループであったと思われる。

A群を構成する住居址個々を見ると、平面形には円形と方形が見られ、住居址の規模も、A-4～6のように一辺4～5mで、床面積約10～24m<sup>2</sup>の小型方形住居址、径約8mで、床面積約43m<sup>2</sup>の円形住居址A-1、径約11mで床面積約87m<sup>2</sup>の大型円形住居址A-3が見られ、一時期には小型の方形住居址1～2棟と普通規模の住居址・大型住居址で構成されている。

また住居址個々の構造も、A-3は中央が攪乱され不明であるが、円形住居址と方形住居址とは異なっている。円形住居は床面の中央に土壌が設けられ、床面を二等分するように、中央の土壌と結びつく屋内溝が設けられ、屋内溝は屋外にまで伸ばされている。

方形住居址は3棟とも柱穴がはっきりせず、特に住居址A-6にはまったく認められなかった。また床面中央の土壌もA-4には浅いものが認められたが、A-5・6には見られず、A-5では斜面上方側の照下に土壌が設けられていた。

このように方形住居址と円形住居址には住居構造上の違いはもちろん、床面構造にも違いが認められ、中央土壌の位置・形態から方形住居址に新しい様相が見られる。

またA群の住居址には建替え・拡張がみられる。特に大型の住居址A-3は5回前後の同一場所での建替え・拡張が行われ、当初約7.7m・約42m<sup>2</sup>であった住居址が、最終時では約11

m・約87m<sup>2</sup>と、面積的には倍に拡張されている。A-4～6もA-6の同一場所での建替えと捉えられ、住居址A-3～6には短期とは思われるが、ある程度の時間的な連続性が見られる。しかし普通規模の住居址A-1には建替え等は見られない。

**B群** B地区の住居址群をB群とすると、B群はすべて円形の住居址で、規模も径約9～10m、床面積約57～65m<sup>2</sup>の大規模な住居址で構成される。しかし住居址B-1・3からの出土遺物がほとんど無く、3棟が同時に存在していたという確証には欠ける。ただ僅かに出土した遺物から見れば、住居址B-2と大きく時期差を示す遺物は無く、およそ3棟とも土器型式の上からはほぼ同時に存在したとみてよいものと思われる。また溝11・12は断面の形状や掘り方が住居址に伴う屋外溝に似通っており、溝11・12の東方に住居址が存在する可能性がある。ただ残された未調査区は僅かであり、B地区の堅穴住居址は台地上の南縁に配置されるという遺構配置から見れば、調査区外に住居址が存在するにしろ、1棟前後の可能性が高い。したがってB群は3～4棟で構成されるものと思われる。

このようなA群・B群であるが、構成する住居址には群間で様相を異にする。A群は小規模な住居址・普通規模の住居址・大規模の住居址で構成されるのに対し、B群は比較的大規模な円形の住居址だけで構成されている。またA群の住居址には同一場所での建替え・拡張が認められ、短期間であるかもしれないが、ある程度の時間的な連続性が認められる。これに対し、B群の住居址には建替え・拡張等は認められず、時間的な連続性は認められない。

また住居址規模は全体に大きく、特にB群を構成する3棟の住居址と住居址A-3は規模が大きい。県下の大規模住居址の代表とされる芦屋市会下山遺跡<sup>(21)</sup>のF住居址(9.8m×8.2m)、加古郡播磨町大中遺跡<sup>(22)</sup>4号住居址(9.4×9.4)等をしのぐ規模である。しかし最近の調査では弥生時代後期後半に極めて住居址規模が大きくなることが判明してきている。県下でも、加東郡社町家原・堂ノ元遺跡<sup>(23)</sup>(径約13m)、水上郡春日町因領遺跡<sup>(24)</sup>(径約12m)、朝来郡山東町森向遺跡<sup>(25)</sup>(径約12m)、神戸市北区宅原遺跡<sup>(26)</sup>(径約11.5m)等で、極めて大規模な住居址が検出されている。住居址A-3はこれらの例と匹敵する規模であり、大型住居址と見てよいものと思われる。こうした大型住居址の集落内での在り方を因領遺跡で見ると、径8～9mの住居址、径5mの小型住居址で構成された3単位集団の中央に径12mの大型住居址が存在しているようである。また芦屋市会下山遺跡では住居址群から離れ、祭祀場とされる遺構の近くに大型住居址は位置している。他遺跡では調査範囲が狭く、集落内で大型住居址の占める位置ははっきりしないが、これらの大型住居址は同一遺跡内で数棟検出された例は少なく、全て1棟前後の検出であることから、集落あるいは集落を構成する単位集団の中心となる住居址となるようである。その用途については種々論じられているが、大型住居址には単位集団に含まれ存在するものと、集落全体あるいは幾つかの単位集団のまとまりの中に存在するものがあると思われ、区別して考える必要があると思われる。

B群を構成する住居址はこうした大型住居址例と比較するとひとまわり小さく、また集落あるいは単位集団の中心になる住居とも思われなことから、必ずしも大型住居址とはいえない。しかし径約9～10mと規模は大きく、A群の通常の住居と考えられる住居址A-1よりも、かなり大規模である。他遺跡を見ても通常の住居と考えられる住居址よりも規模は大きくなっている。後期後半の代表的な集落遺跡とされる播磨大中遺跡と住居址規模を比較しても、播磨大中遺跡の大型住居とされる4号住居址より、B群の住居址は大規模になっている。また住居址個々の時期の特定はされていないが、同じ淡路の大森谷遺跡は時期的にも近く、距離的にも近いに係わらず、住居址の規模は7m前後である。こうした例からみると、B群を構成する住居址は通常の住居より、規模が大きいように思われる。

しかしB群の住居址から出土した遺物には特別なものは見られず、A群から出土した遺物と変化はない。そうした点から言えばB群もまた、集落を構成する1単位集団と考えられ、集落内にあつては、他の集団よりは大規模な住居だけで構成された単位集団と言えるだろう。

中期後半の押入西遺跡では、遺跡の中で最高所に位置する集団の住居規模は、他の集団より大規模となっている。また佐賀県千塔山<sup>(27)</sup>遺跡の後期後半期は、環濠に囲まれた集団は住居規模が大きく、環濠内には倉庫と考えられる建物址が検出されている。これに対し環濠の外側に位置する集団の住居は規模が小さくなっている。このような例は他に、岡山県奥坂遺跡<sup>(28)</sup>・天神原遺跡<sup>(29)</sup>・東蔵坊遺跡<sup>(30)</sup>・鳥取県水溜り・駕籠場遺跡<sup>(31)</sup>等、中期後半以降の遺跡に見られる。

こうした集落を構成する集団間の住居規模における「差」は、集落内の矛盾・格差を現わしたものと考えられ、大規模な住居で構成された単位集団が集落内で、有力な集団となつていたと考えられる。

本遺跡のB群が大規模な住居址で構成された上、背後に方形両溝墓を控え、通常集落単位の構成を示すA群とは谷を隔てて立地することなど、集落内にあつて何か特別な位置を示しているように思われる。しかし住居址内からの出土遺物に特別なものは見られず、B群の住居址の性格を特徴づけられないが、住居規模からすれば、有力な集団であつたと考えられ、背後に位置する方形両溝墓との関連が強く考えられる。

#### 住居址の床面構造

今回の調査では、中・後期のもも合わせ円形住居址は7棟、方形住居址3棟が検出され、その内、後期後半の円形住居址は5棟検出されている。住居址A-3は床面の中央が攪乱されており、不明な点が多いが、残る4棟の円形住居址の床面構造はほぼ共通している。まず壁下には壁溝を設け、床面の中央には土壇が設けられている。中央の土壇と壁溝は小溝で繋がれ、この小溝が屋外まで伸ばされたものが多い。柱穴は規模に応じて配置されるが、床面積40㎡代の住居址A-1では7本(6本検出)、50㎡代の住居址B-1でも7本となっており、床面積が60㎡代の住居址B-2・3では8本が検出されている。床面積が80㎡を越す住居址

No.	住居址番号	平面形	規模 (m)	床面積 (m <sup>2</sup> )	床面積 (m <sup>2</sup> )	主柱穴	中央土壌		屋 内 溝		壁土面	壁 溝 (cm)	壁高 (cm)	屋外溝		備 考		
							形	規模 (cm)	タイプ	規模 (cm)				全長 (m)	巾・深 (cm)			
1	A-2	円	5.3×5.3	4.7×4.7	19.26	4	楕円	120×92×27	B <sub>1</sub>	16~30× 6×16	5	20×3~11	21	1.5	40×17	主柱穴3本に抜取りの痕跡 中央土壌の周囲に炭化物		
2	B-4	円	5.6×5.1	5.1×4.6	18.69	4	円	70×66×26	無		無	25×15	15	無		北壁の一部消失 中央土壌上面と周囲に炭化物 主柱穴に抜き取り跡		
3	A-1	円	7.8×(8.0)	7.1×(7.3)	(42.63)	6 (7)	方	上110×90×10 下52×50×25	B <sub>2</sub>	23×5~22	?	20×10	15	?	?	西壁消失 焼失住居		
4	A   3	1	円	7.8×(7.8)	7.4×(7.3)	(42.08)	2?	?	?	?	?	20×10	?	24~36×10	0	?	?	屋内溝は一部遺存 柱穴は特定できない
5		2	円	8.6×(8.6)	8.4×(8.2)	(54.54)	4?	?	?	B <sub>1</sub>	10~30×20	?	10~15×4~15	0	?	?	屋外溝の存在は不明 柱穴は断定できない	
6		3	円	9.4×(9.8)	9.1×(9.6)	(67.71)	5?	?	?	B <sub>1</sub>	20×30	?	15×12	0	8.2	45×60×45	柱穴の特定困難 屋外溝に後の段階の掘直し	
7		4	円	10.8×(10.5)	10.5×(10.2)	(86.01)	7? (8.9)	?	?	B <sub>1</sub>	10~30×10~30	?	15~20×10	0	8.2	45×60×45	屋内溝・屋外溝は3と共通	
8		5	円	1.0×(10.5)	10.7×(10.2)	(87.03)	?	?	?	B <sub>1</sub>	10~30×10~30	?	12.7	0	8.2	45~60×45	4を北面に僅かに拡張 屋内溝・屋外溝は4と共通	
9	A-4	隅丸方	3.9×3.8	3.5×3.3	11.10	?	楕円	60×45×15	無	12×5	無	22×8	16	5.5	15~50 ×7~20	住居址A-6を切る 壁溝が延びて屋外溝となる 中央土壌に小溝が取り付く		
10	A-5	隅丸方	4.0×3.4以上	3.5×3.4以上	10.33 以上	2?	無	無	無	無	無	15×6	40	?	?	壁溝は東壁と南北壁の東半にかけて「コ」の字形。 東壁中央の壁間に深6cm、深さ22cmの土壌。 住居址A-6を切る。 埋土よりガラス管玉		
11	A-6	隅丸方	5.3×5.2	5.1×5.1	24.05	無	無	無	無	無	無	無	19	2.8	30×20	住居址4・5に切られる。 平面形は不整形 コーナーから斜めに屋外溝		
12	B-1	円	8.8×(9.0)	8.3×(8.6)	(56.66)	7	円	上1.15×(100) 下66×62×35	A	20×4~14	無	18×11	40	2.6以上	34×21	北壁の一部を残すだけ 南壁は壁溝まで消失 主柱穴以外に支柱穴1本 中央土壌に炭化物層		
13	B-2	円	10.0×9.8	9.1×9.0	62.37	8	円	上2.7×2.5×6 下1.2×1.1×27	B <sub>1</sub>	26×12~20	?	20~40×11~20	27	12以上	35×20	中央土壌の周囲に掘り約40cm高さ約5cmの高まり が一部遺存 床面の広い範囲と北壁面・床面に焼土 一部炭化物が遺存 主柱穴の一部に抜き取り跡 壁溝の一部に壁側に挟まれた部分が見られる。 壁溝内・中央土壌内・中央土壌周囲に土器が遺存		
14	B-3	円	10.0×9.6以上 (9.2)	9.5×6.4以上 (8.8)	(65.38)	4 (8?)	方円	上80×60×7 下40×40×9 (40×30×7)	B <sub>1</sub>	26~38×4~13	?	20×6~13	0	?	?	床面東半は削平を受け消失 西端は中世遺構に切られる 屋内溝には中央土壌と繋がる部分と屋内溝西半中 央付近に、石が埋められている 主柱穴は中世のビットがあるため不確定である。 ( )内数値は推定復元値		

表2 竪穴住居址一覧表

A-3は建替えが多く、柱穴の特定が困難であったため、柱穴数ははっきりしない。

各住居地の壁溝の内、住居地B-2の壁溝は一部住居地の際を挟り込んでおり、また壁溝の底には少量ではあるが砂の堆積が見られたことから、この住居地の使用時には壁溝は開いており、水の流れがあったものと思われる。

方形住居地は3棟検出されたが、その内の住居地A-6は床面上には何らの施設も見られなかった。住居地A-4では壁下には壁溝が設けられ、床面の中央には土壌が設けられていた。ただ検出された柱穴は浅く、主柱に成り得るかどうかは疑問である。住居地A-5では壁溝は一部が途切れ、中央の土壌も見られなかったが、斜面上方側壁下中央付近に土壌が設けられていた。住居地A-4・6にはコーナー部から屋外溝が台地斜面までのぼされていた。

#### 屋内溝と屋外溝

円形住居地の床面構造の内、特徴的な事は中央の土壌と壁溝を繋ぐ小溝（屋内溝）と、屋内溝と壁溝の接合部から屋外に伸びる屋外溝の存在である。こうした屋内溝・屋外溝は住居地A-2のように中期後半の住居地にもみられ、後期の円形住居地全てに設けられている。

屋内溝・屋外溝の在り方は中央の土壌から斜面下方側の壁溝とを繋げる屋内溝が設けられ、屋内溝と壁溝が繋がった部分から屋外に溝を伸ばすタイプ（A）と、中央の土壌を貫いて床面を二等分するように屋内溝が設けられ、屋外溝を伸ばすタイプ（B）とがある。

Aタイプの屋内溝は後期の住居地B-1にだけ見られ、二段に掘られた中央土壌の上段付近から、斜面と直交する方向に伸び、溝中央付近でやや浅くなった後、徐々に深くなり、壁溝との接合部では壁溝と同じ深さになっている。壁溝との接合部からは屋内溝を直線的に伸ばしたような状態で、斜面下方に向かって屋外溝が設けられている。

Bタイプの屋内溝は住居地A-1・2・B-2・3に見られ、住居地A-3は中央が攪乱されているためはっきりしないが、このタイプになるものと思われる。住居地B-2のように屋内溝から屋外溝が一直線になる（B<sub>1</sub>タイプ）と、住居地A-1のように中央土壌から「く」の字状に曲がる（B<sub>2</sub>タイプ）とが見られる。「く」の字状に曲がるものは斜面上方が折れ、下方側は屋外溝まで直線となっている。これは周辺の地形に起因するもので、住居地上方の斜面と下方の斜面とでは傾斜方向が異なるためと考えられる。

住居地B-2に例をとって見た場合、屋内溝は周辺の斜面にほぼ直交する方向に設けられ、中央の土壌から斜面上方側の溝は壁溝と接合する部分が最も浅く、中央の土壌とつながる部分が最も深くなっている。中央の土壌から斜面下方側の溝は中央の土壌から徐々に深くなり、壁溝と接合する部分では壁溝とほぼ同じ深さになっている。他の住居地でもほぼ同様で、斜面に直交する形に設けられ、斜面上方側で壁溝と繋がる部分が最も浅く、斜面下方側の壁溝と接合する部分が最も深くなっている。住居地A-3では斜面下方側で壁溝と繋がる部分では、壁溝よりも屋内溝は深くなっていた。屋内溝と中央の土壌との関係では、中央の土壌が

深く、屋内溝が中央の土壌より深くなることはない。また住居址B-3では斜面上方側の屋内溝が中央の土壌に繋がる部分に、屋内溝を堰き止めるような状態で角石が認められた。

屋内溝の性格については間仕切りの施設といった考え方もあるが、斜面と直交する方向に設けられ屋外溝に繋がることから、住居内の排水のための施設と考えられる。

屋外溝はA-5・B-4には見られなかったが、円形・方形という住居プラン、住居址の時期を問わず、設けられていた。円形住居址の屋外溝は、ちょうど屋内溝をそのまま屋外に伸ばしたように、屋内溝と斜面下方の壁溝との接合部分から設けられ、斜面にほぼ直交して設けられている。住居址B-2・3を除けば、屋外溝の先端は台地斜面まで延ばされている。

方形住居址は斜面下方側のコーナー部から屋外に延ばされ、住居址A-5では東壁下の壁溝がそのまま屋外に延ばされた形で設けられ、住居址A-6では床面より深く掘られている。

屋外溝と壁溝の関係は、壁溝より屋外溝のほうが深くなっているか、ほぼ同じ深さになっており、屋外溝のほうが浅くなることはない。屋内溝とはほぼ同じ深さになっている。

屋外溝は西日本に多く、特に本遺跡のように弥生時代中期後半以降の台地上及び丘陵上に立地する遺跡の住居址に多く見られる。岡山県押入西遺跡や鞆山遺跡のように、住居の壁体下部を暗渠とした屋外溝を設けている例も見られる。

このように屋外溝を伴う住居址は丘陵上や台地上の住居址に多いことや壁溝から外部に延びることから、屋外溝の性格については排水のためと考えられているが、同感である。屋外溝を設けることによって、住居内に流入した水等を汲み出すという面倒な仕事はなくなり、屋内から屋外への排水が容易になる。ただ大森谷遺跡では壁溝と屋外溝の接合部分に石が置かれ、住居からの排水を調整している例も見られ、屋外溝が単に住居の排水だけに止まらず、住居内の湿気調整の役割も果たしていた可能性もある。

また溝で排水することによって、住居からの排水は1か所に集中し、他住居あるいは集落内に問題が生じてくる可能性がある。そこで例えば、住居址B-2のように、すぐ南に谷部があり、そこに排水することが可能なにもかかわらず、そこには流さず、かなり斜面下方にまで、屋外溝を伸ばしている。そうした例は岡山県鞆山遺跡でも見られ、鞆山遺跡では斜面に排水することが可能な住居址が、斜面と並行した屋外溝を設け、集落内の溝に排水している。こうした例から、屋外溝を設けるにあたっては住居からの排水を隣接する住居等を避けて、排水可能な場所まで溝を延ばすという事が行われたように思われる。その場合ある程度の集団内の規制があった可能性もある。

#### 中央土壌

今回検出された住居址の内、方形のA-4～6と床面中央が攪乱されていたA-3を除いた住居址に見られる施設である。形態は円形あるいは楕円形のものや方形のものが見られるが、住居址B-3は方形に浅く掘り窪め、その中央を円形に掘り込んでいる。掘り方はほと

んどが二段に掘り窪められているが、住居址B-3のように浅く掘り込んだ中央をさらに掘り窪めるものと、住居址B-1のように緩く掘り込んだ後、傾斜を変えて急に掘り込むものがある。また住居址B-2の中央土壌の周囲には土塹が確認された。

今回検出された住居址の中央土壌の埋土には炭化物・焼土を含む層が認められている。特に住居址B-1の中央土壌には厚さ約3~5cmの炭化物層が見られた。しかし土壌底に炭化物層が確認できたものは無く、炭化物層は埋土の中層である。また土壌の壁が焼土化したものは認められず、住居址A-2・B-2などでは、焼土は中央土壌に近接した床面上などに認められている。また深さが住居址B-1では約50cmあり、炉址として使用するには深すぎるように思われる。こうしたことから中央土壌を炉址として捉えることはできない。

中央土壌を柱穴とみる考え方も示されている<sup>(21)</sup>が、土壌の断面は「U」字状、あるいは遊台形を呈し、埴土は「U」字状ないし皿状に堆積する。土層観察でも柱痕跡は確認できなかった。また屋内溝を持たない住居址B-4を除いて、この中央土壌には屋内溝が取りつく。屋内溝は住居址使用時には開口していたと考えられることから、中央土壌を柱穴と考えることにも否定的とならざるを得ない。

中央土壌を祭祀施設の可能性があるという見方もあるが、土壌内からの出土遺物にそうした特徴は認められなかった。中央土壌内からの出土遺物は全体に少なく、住居址B-2で大型の鉢が出土しただけである。ただこれも出土状態から見れば、床面から落ち込んだものと見られる。ただ同じ淡路の釘田遺跡の住居址では土壌底に高杯脚部片を枕状にし、小型の甕が横たえられていた。他に、時期は下がるが、古墳時代前期の岡山県百間川沢田遺跡<sup>(22)</sup>があり、中央土壌から素文鏡と白玉が出土している。しかし、こうした例は極めてまれであり、また住居廃絶時に行われた祭祀と思われる。したがって中央土壌の本来的な用途を決定づけるものとは思われない。

また中央土壌を地下水や床面の湿気を排除する用途を持つ施設とする考えもある。しかし屋内溝を土壌より深くすれば、本遺跡の住居址のように屋外に溝を伸ばした住居址は住居内に流入した水や湧水は自然と排水される。しかし検出した住居址にはそうした例は見られず、中央土壌は屋内溝より深く掘り込まれている。したがって土壌内に滞水したはずである。こうした点からすれば土壌を単に排水・防湿の施設と見る考え方はできない。

中央土壌と屋内溝との関係は、Aタイプでは中央土壌に向けて屋内溝が深くなり、Bタイプでは斜面上方側の屋内溝が中央土壌に向けて深くなり、斜面下方側の屋内溝は中央土壌から徐々に深くなって煎溝と繋がる部分が最も深くなる。したがってAタイプの住居址では、屋内溝で水を中央土壌に引き入れることができる。Bタイプの住居址では屋内溝で中央土壌に水を引き入れ、そこから斜面下方側の屋内溝と屋外溝で排水することができる。しかし中央土壌の底より屋内溝の底が高いことから、A・Bタイプの住居址とも中央土壌には滞水あ

るいは貯水していることになる。こうしたことから、中央土壌は単に排水・防湿といったことに限らず、水をとおして何らかの行為を行うために設けられた施設と捉えることもできる。それは水を使用しての貯蔵といったことも考えられる。

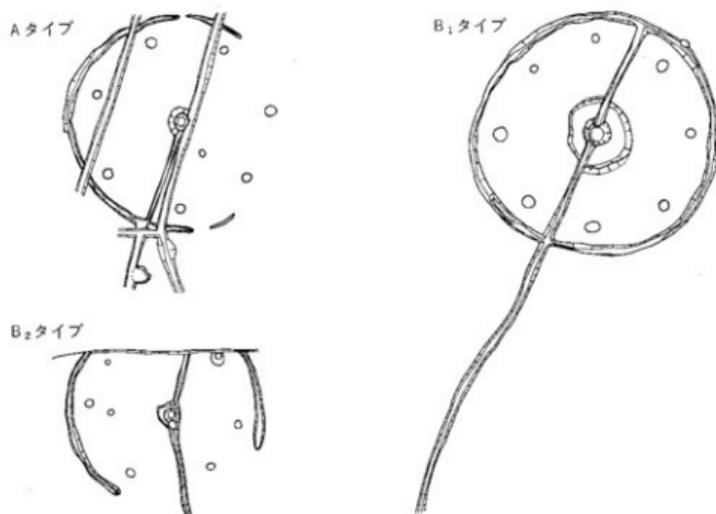
また、中央土壌と屋内溝の関係で注目されるのは住居址B-3である。この住居址では中央土壌と屋内溝の接合部付近の斜面上方側の屋内溝に、溝を堰き止めるように、溝と直交し、溝巾一杯に置かれた石が認められている。石は溝底より浮き、石の上面が住居址の床面とほぼ同じ高さになっており、落ち込んだものと見られない。溝内の石は土壌内に流れ込む水量を調節するために、使用されたものと捉えることができる。中央土壌は水量を調節する必要のある機能を有していたものと考えられ、やはり、水を使用しての貯蔵といった行為を窺せる。しかし住居址B-3のような例はほとんど見られず、僅かに似た例に大森谷遺跡で、屋内溝と斜面下方側の壁溝との接合部の、屋内溝側を堰き止めた状態に石が見られる程度である。

中央土壌が西日本の弥生時代から古墳時代前期の住居に広く設けられた施設であり、平地山地の住居址を問わずに設けられている。これは中央土壌が地域性・立地条件・気象条件等に捕らわれずに機能する施設であったと考えられ、当時の生活のなかでは欠かせない機能を持つ施設であったと考えられる。そうした所から中央土壌の持つ機能は単に一つに特定されたものでなく、貯蔵・排水・防湿・祭祀等の多目的な機能を有していたことも考えられる。

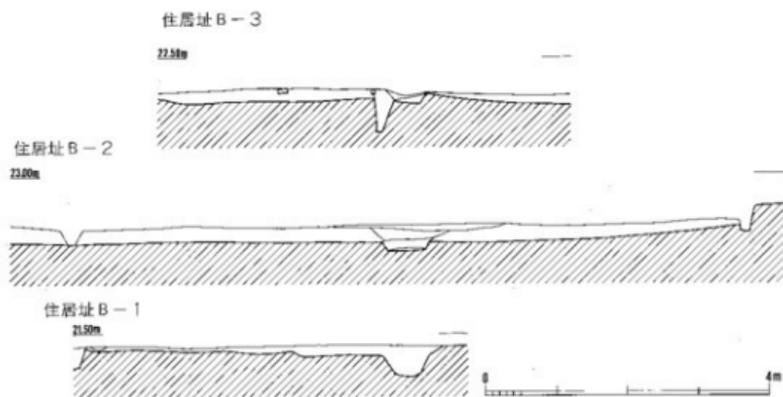
また必ずしもいちがいに言えないが、中央土壌は円形住居ではほぼ普遍的に見られるのに対し、住居プランが円形から方形に変わってくると、中央土壌も変化し始めるように思われる。形は不整形になり、深さは浅くなる。そうして古墳時代前期の布留期の住居址では床面中央には炉址が設けられ、壁際に土壌が設けられるようになる。住居の形が円形から方形に変化しても、また弥生時代から古墳時代になり社会体制の変化があったとしても、人々の居・食・住の基本が大きく変わることは考えられず、円形住居を中心にみられた中央土壌が方形住居の壁際の土壌に変化してゆく可能性が考えられる。そうした場合、中央土壌の持つ機能のなかでは貯蔵施設としての機能が最も重要なものであったものと思われる。

〔註〕

- (1) 大阪府教育委員会『若江北』1983年
- (2) 宮本長二郎『住居と倉庫』『弥生文化の研究』雄山閣 1986年
- (3) 高知県教育委員会『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1986年
- (4) 中山俊紀他『沼E遺跡II』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集 津山市教育委員会 1981年
- (5) 柳昭彦他『土井遺跡』『中国縦貫道建設に伴う発掘調査10』岡山県教育委員会 1977年
- (6) 澤井明比古他『玉津田中遺跡現地説明会資料』兵庫県教育委員会 1986年
- (7) 竹並遺跡調査会『竹並遺跡』朝倉社 1979年
- (8) 金岡忍 佐原真編『弥生文化の研究』雄山閣 1986年



第94図 雙穴住居址の類型



第95図 中央土塊と屋内溝

- (9) 鹿児島県教育委員会『王土遺跡』国道220号線鹿児島バイパス建設に伴う発掘報告書(1) 1985年
- (10) 福岡県教育委員会『三雲遺跡II』福岡県文化財調査報告書第60集 1981年
- (11) 福岡県教育委員会『原田遺跡群久保園遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集 1983年
- (12) 粟山伸司他『辻田遺跡』北九州市文化財調査報告書第35集 北九州市教育委員会 1980年
- (13) 粟山伸司他『辻田西遺跡』北九州市文化財調査報告書第13集 北九州市教育文化事業団 1982年
- (14) 井上弘他『押入西遺跡』『中国縦貫道建設に伴う発掘調査 1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 3 岡山県教育委員会 1973年
- (15) 村上幸雄・橋本惣司『稗山遺跡群』久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979年
- (16) 近藤義朗『野田遺跡』『岡山県史第18巻 考古資料』岡山県史編纂委員会 1983年
- (17) 井守徳男『奈カリ与遺跡』『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書II』兵庫県埋蔵文化財調査報告書第16冊 兵庫県教育委員会 1983年
- (18) 菅本宏明・森田稔『新高山遺跡』『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1986年
- (19) 本遺跡以外に洲本市森遺跡・下加茂岡遺跡で検出例がある。  
新見寛次『洲本市史』洲本市 1974年  
村川幸広『洲本市下加茂岡遺跡発掘調査概要』1963年  
吉識雅仁他『森遺跡』淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 兵庫県教育委員会 1987年
- (20) (19)の兵庫県教育委員会『森遺跡』に同じ
- (21) 村川行弘・石野博信『会下山遺跡』芦屋市文化財調査報告第3集 芦屋市教育委員会 1964年
- (22) 上田哲也他『播磨大中遺跡』播磨町教育委員会 1965年
- (23) 森下大輔・吉識雅仁『家原・堂ノ元遺跡』加東郡教育委員会 1984年
- (24) 兵庫県教育委員会が昭和60年度に調査  
村上泰樹『国領遺跡』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会 1988年
- (25) 山畑 基『森向山遺跡』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』兵庫県教育委員会 1988年
- (26) 『宅原遺跡』『昭和61年度現地説明会資料』神戸市教育委員会 神戸市健康教育公社 1986年
- (27) 中牟田賢治他『千塔山遺跡』基山町遺跡発掘調査団 1978年
- (28) 高畑知功他『大神坂遺跡・奥坂遺跡・新屋敷古墳』『岡山埋蔵文化財調査報告書53』岡山県文化財保護協会 1983年
- (29) 下澤公明他『天神原遺跡』『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査 4』岡山県文化財保護協会 1975年
- (30) 河本清他『東蔵坊遺跡B地区発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集 津山市教育委員会 1981年
- (31) 大賀晴浩『水廻り・駕籠掘場遺跡・森前遺跡発掘調査報告』鳥取県宮田地帯総合土地改良事業に伴う発掘調査報告 3 鳥取県東伯耆東伯耆町教育委員会 1988年
- (32) 石野博信『考古学から見た古代日本の住居』『日本古代文化の探検家』大林太良編 社会思想社 1975年
- (33) 兵庫県教育委員会が昭和58年度に調査  
吉識雅仁『鈴田遺跡』『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』兵庫県教育委員会 1986年
- (34) 内藤善史他『百間川沢田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 岡山県教育委員会 1985年

## 第 2 節 方形周溝墓群

寺中遺跡で検出した方形周溝墓は合計 6 基あり、すべて B 地区に存在し、弥生時代後期に属するものばかりである。

### 位置と立地

本遺跡の方形周溝墓は、同時期の居住地である A 地区には全く存在せず、B 地区内でも住居址が存在する南東部分には築造されていない。すなわち、方形周溝墓が存在するのは、B 地区の中央から北側にかけてであって、住居址と混在する状況は全く認められない。

また、方形周溝墓群の立地を細かくみると、方形周溝墓 5 以外は台地の平坦部から斜面に移行するちょうど境目に存在している。方形周溝墓 1・2 は台状部の北東側約 3 分の 1 が、方形周溝墓 3 はその約 3 分の 2 が斜面にかかっている。北側溝と南側溝の高低差は方形周溝墓 2 が約 60cm、方形周溝墓 3 で約 1.2m を測り、方形周溝墓 3 が斜面を少し下りたところに築造されていることがわかる。方形周溝墓 4 は斜面が始まる台地突端にあり、現状では北辺・東辺の両側は既に傾斜が始まっている。方形周溝墓 6 は部分的にしか調査ができなかったが、全体が緩やかな斜面に位置している。

### 分布状況

立地からみた状況により、方形周溝墓は集落の縁辺に寄せて築造されており、台地の縁辺部に偏って存在していることが窺える。しかし、方形周溝墓 5 の 1 基だけは台地中央の最も高い位置にあり、しかも、他の方形周溝墓群とは列を同じくせず、単独で存在している状況が窺える。

一方、方形周溝墓群は 1～4・6 まで台地の縁辺に一列に連なって築造されているが、これが地形に左右された結果、列になったものか、意識的に列としたものかについては、各方形周溝墓の築造過程の問題ともかかわるが、方形周溝墓 5 が 1 基だけ離れて台地中央部に位置していることを考慮に入れると、意識的に列状に築造していった可能性が高いものと考えられる。

### 築造順位

方形周溝墓群の築造については、方形周溝墓 2 と 3 が周溝を共有していることから、前後関係があったものと考えられるが、周溝埋土からは前後関係は確認できなかった。また、遺物についても、方形周溝墓 2 からは葎が 1 点出土しているだけで、土器からも前後関係は判然としない。一方、方形周溝墓 3 と 4 の出土土器を比べてみると、方形周溝墓 4 出土の甕は A 1 で、口縁部が長く、端部に面をもち、体部最大径は上半にあるものである。それに対し、方形周溝墓 3 の甕は B 2 に分類されるもので、口縁端部を丸くおさめ、体部最大径は中央にある。甕 B は甕 A よりも型的には新しく、これらの土器が方形周溝墓築造時のものとする

ならば、方形周溝墓4より方形周溝墓3の方が時期的に新しく築造されたことが窺える。次に、方形周溝墓4と方形周溝墓6の出土土器を比べてみると、甕ではどちらもAタイプのもので出土しており、壺では同じタイプのもので出土していないため時期は不明である。方形周溝墓5出土土器は甕がAタイプのもので、鉢は外反する口縁部をもつAタイプと体部に比較して大きな底部をもつBタイプのものである。鉢A・BはD地区東溝からも出土しており、型式的には古いものであるが、全体のつくりがやや雑になっており、東溝のものよりは若干時期が下がるものと思われる。甕は方形周溝墓4・6出土のものと同じ形態を示していることから同時期に属すると考えられる。

以上の土器の検討からすると、方形周溝墓4～6がほぼ同時期で最も古く、次に方形周溝墓3が築造されたという図式が考えられるであろう。したがって、方形周溝墓2と3が周溝を共有していることと、方形周溝墓4～6が居住地に最も近く存在していること、方形周溝墓1～4・6が列状をなしていることを考えあわせてそれらの築造順を考えてみると、方形周溝墓6・4→方形周溝墓3→方形周溝墓2・1と築造されており、さらに可能性としては、第96図に示したように、方形周溝墓6から方形周溝墓4→3→2→1と順次台地の上方へと築造されていったことが推定できる。一方、方形周溝墓5はそれらの列とは別に単独で、最も立地条件のよい所に存在し、築造時期も方形周溝墓4・6と同じであると考えられることなどから、方形周溝墓1～4・6とは別の群として捉えることがより妥当性の高いものと思われる。このことは、方形周溝墓3が斜面を少し下りた条件の悪いところに築造されていることを加味すれば、すでに築造されていた方形周溝墓5に規制されたために、方形周溝墓5と溝を共有することなしに、墓道分の間隔をあけて築造せざるを得なかったことを示しているものであろう。

#### 陸橋と墓道

墓道については各方形周溝墓の陸橋部の位置により、第96図のように推定できるものと思われる。すなわち、陸橋部の位置は方形周溝墓1では東隅部分であり、方形周溝墓2との間隔は南西側が広がっている。方形周溝墓2では前項で指摘した周溝が浅くなっている部分を陸橋部とするならば、北東隅に設置していることになる。方形周溝墓3が北方にずれて存在しているため方形周溝墓2の東側は広くあいている。方形周溝墓3では南東隅、方形周溝墓4では南東隅と北西隅の2ヶ所に存在している。北東側の陸橋部については削平もあるため不明確である。方形周溝墓5は特に削平が著しく、不確実な要素が多いが、現状では陸橋部は北西と北東の2ヶ所に存在している。これらの陸橋部の位置から推定される墓道は、方形周溝墓1～4の南側、方形周溝墓5の北側であると推定される。また、各方形周溝墓の長辺が東西方向を中心とした向きであることから、それに沿った方向、すなわち、東西方向が墓道であった可能性は非常に高いと思われる。一方、陸橋部が複数存在する方形周溝墓につ

いては、さきにもた築造順と絡めて考えるならば、東方に存在するものが主なものになると思われる。

## 規 模

各周溝墓の規模は、台状部では方形周溝墓2が最も大きく約19.6×13.8m、次いで方形周溝墓4の11.9×10.6m、方形周溝墓3の11.8×9.6m、方形周溝墓1の12×9.3mと続き、方形周溝墓5が最も小さく、10.8×10mである。このなかで、特に方形周溝墓2は畿内地方の巨大な方形周溝墓と比較しても遜色のない規模である。墳丘が残っていないことと周溝が浅いため視覚的には大きな規模に映らないが、本周溝墓より規模の大きなものは畿内地域でも、大阪府大阪市加美遺跡の中期の方形周溝墓<sup>(1)</sup>の26m×14mをはじめ、大阪府和泉市・泉大津市池上遺跡F地区B号方形周溝墓<sup>(2)</sup>(SH0121)の18m四方、兵庫県尼崎市田能遺跡の復元規模19m四方の3号方形周溝墓<sup>(3)</sup>3例程度であり、本遺跡方形周溝墓2と同程度の規模のものには大阪府池上遺跡F地区C号方形周溝墓<sup>(2)</sup>(SH0122)の19.8m以上×13.8mの他、兵庫県神戸市玉津田中遺跡SX-10<sup>(4)</sup>の19.4m×13.9mが認められる程度であり、大阪府東大阪市瓜生堂2号・14号方形周溝墓は本周溝墓より規模は小さい。また、以上挙げた方形周溝墓はいずれも弥生時代中期のもので、本周溝墓のように後期に属するものでは規模の巨大なものはない。ただ、台状墓として弥生時代後期～古墳時代初頭の奈良県宇陀郡大山山遺跡<sup>(5)</sup>では21m×15mの規模であり、本周溝墓よりも規模は大きい。

## 平面形態と築造企画

本遺跡検出の方形周溝墓の平面形態では、前項でも指摘したように、方形周溝墓2～4の周溝外側のライン平面形が円形あるいは楕円形を呈している点が特徴的である。この点については、方形周溝墓築造にかかる平面設計によるものか、築造の結果としてこのような形態になったものかといった二通りの考え方ができると思われる。この点についても少し具体的に考えてみたい。

まず、平面設計があったと仮定して、周溝の外周が最も円に近く、遺存状況が良好な方形周溝墓3につい



第96図 方形周溝墓群の築造順と墓道の位置

て設計図を描いてみたのが第97図-1である。方形周溝墓3の台状部各辺の長さの2分の1を計算して、その中心点を設定し、そこを中心として、各周溝の最も残りのよい外側ラインに合うように円弧を描くと、東側周溝の南半が大きくはみ出る以外は、ほぼ円弧の線と周溝外側ラインが合致する。次に台状部中心と各辺のコーナー部分を通る対角線を引き、外周の円弧まで延長する。そしてその対角線と円弧との交点をつなぐと、外周ラインの円の直径を対角線の長さにもつ長方形ができあがる。この長方形ラインについては、方形周溝墓3の台状部下端ラインにほぼ合致することが判明した。以上のことから、台状部の中央を中心とした円は周溝外側ラインにほぼ合致し、その円に内接する長方形は台状部下端のラインにもほぼ合うことが確認できた。これらのラインは周溝外側も含めた削平がなされていることや、古墳などのように基底石などがなく、削平の程度や周溝肩や底の自然崩壊などを加味しなければならぬものであるが、現段階ではそれらを考慮することは不可能に近いと思われる。したがって、築造企画の精密度がどの程度であったかということや、企画と実際ではどの程度の誤差があり、企画がどの程度まで実施されたかなどについては明確にすることはできない。

次に方形周溝墓4について検討してみることにする。方形周溝墓4の場合、台状部の西・南辺との間はほぼ直角になっているが、北辺と西辺とは鈍角に交わる。また、東辺については周溝が一部分しか残っていないため、台状部端は不明となっている。ここで、台状部を方形と仮定して西・南の各辺をそのまま利用し、北辺の最も周溝側にはみ出た台状部上端を北辺として採用し、台状部を復元すると、第97図-2のようになる。この推定復元案によって方形周溝墓3と同様にして台状部の中心点を求め、それを中心として遺存状況の良好な周溝外側ラインに最も合うように円弧を描くと、西側および東側周溝外側ラインにほぼ合致する。しかし、北側周溝についてはかなり外側に円弧がずれ、東側周溝は東南部が少しはみ出る。円弧の中心点を通る台状部の対角線を円弧まで延長し、それらの交点を結んで四角形を描くと、西・南側周溝については方形周溝墓3と同様に台状部の下端のラインとほぼ合うことが確認できる。しかし、北・東側周溝ではかなりずれている。以上のことから、台状部復元案による方形周溝墓4の築造企画を描くと、西・南側周溝の外側ラインとほぼ合致することが確認できた。

方形周溝墓2では、台状部が方形を呈しておらず、ややいびつな台形となっているため、方形周溝墓4と同様に方形としての復元案によって台状部の中心点を求め、そこを中点として周溝の外側の残りのよい部分に合うように円を描いた。そうすると、第97図-3に示したように、本方形周溝墓の場合、各コーナー部分は円弧にほぼ接し、東溝外側ラインも円弧の線に近いラインとなり、西溝外側ラインは円よりもやや内側に入り込むが、それほど差は大きくない。一方、北・南両側の周溝外側ラインは円弧から大きく内側にずれており、最も広いところでは約1.6mの差がある。しかし、北・南周溝外側のラインは両方とも曲線となって

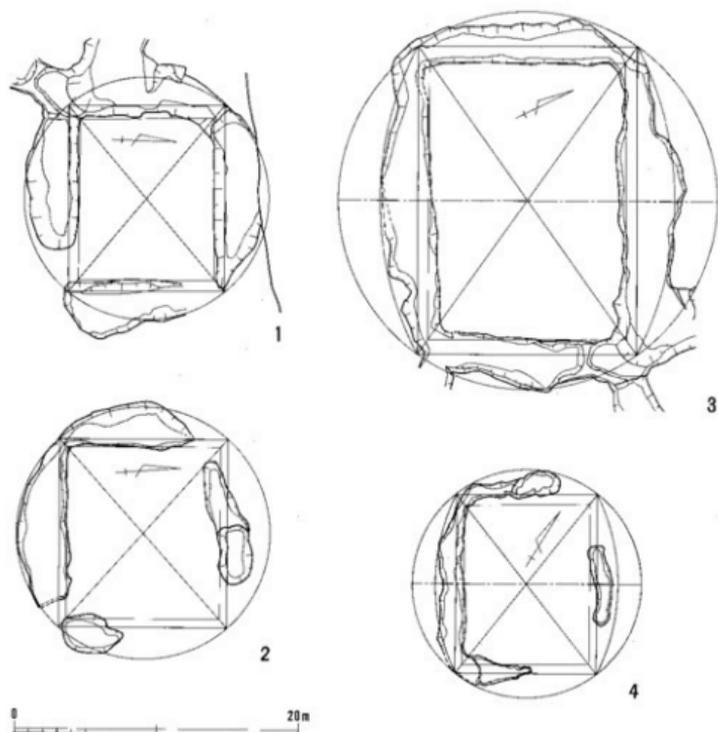
いるためそれに合う円弧を捜したところ、台状部の対角線が中央で交わってできる4つの角の各2等分線を外側まで延ばし、円弧と交わった点を中心とし、台状部の対角線を円までのばした交点を通る円弧を描くと、ほぼ北・南側各周溝外側ラインに近い線が描けることがわかった。したがって、方形周溝墓2では、台状部の中央を中心とする円は周溝のコーナー部分および西・東側の各周溝外側ラインにほぼ合致し、その円上を中心とする円弧は北・南の各周溝外側ラインにほぼ合うことが確認できた。

次いで方形周溝墓1について検討してみることにする。方形周溝墓1は周溝が全周せず途切れている部分が多く、台状部内側ラインもかなり歪んでいるため、台状部を方形とする復元線を描くと、第97図-4のように現状とはかなり違った線となった。しかし、復元した台状部の中央を中心とした円は周溝のコーナー部分にほぼ近いところを通っている。一方、北東・南西側周溝の各外側ラインとはかなり離れているが、方形周溝墓2で行ったのと同じ方法で円弧を描くと、それに近い線を引きことができた。しかし、台状部復元線は現台状部端のラインとはかなり異なったものであることや、台状部中点を中心とする円と現周溝外側ラインとのずれが大きく、問題点が多い。

方形周溝墓5についてもこの検討を行ってみたのであるが、周溝の遺存状況が悪いのと、北側溝外側ラインが弧状を呈していないため、かなりの誤差が生じた。

以上、本遺跡の方形周溝墓について平面企画があったものと仮定して考察してみたのであるが、その際周溝外側のラインが示しているように、円を基本としたもので考えてみた。その結果、方形周溝墓3の西・東側周溝、方形周溝墓4の西・南側周溝、方形周溝墓2の北・南・西側周溝、方形周溝墓1の北・南側周溝の各外側ラインが企画ラインとほぼ一致した。また、その円に内接する方形ラインは方形周溝墓2・3の現台状部上端ラインが示す方形と相似形になり、方形周溝墓4の2辺とも相似形になった。しかも方形周溝墓3では台状部下端ラインにほぼ合うことも認められた。これらの企画で描いた線は、方形周溝墓の現状が削平等により築造当初の姿を示していないため、当初の企画そのままを示しているものではないが、それとは相似形に近いものであると思われる。

しかし、一方では方形周溝墓3の東側周溝の南半部が企画から大きくはみ出していることや、方形周溝墓4の台状部や北側周溝外側ラインが企画ラインより内側に入っていること、方形周溝墓2の台状部ラインが企画と少しずれていたり、東側周溝が内側に少し入っていること、また、方形周溝墓1の台状部推定復元ラインと現状とがかなりずれていたり、西・東側周溝の外側ラインが企画と違った形になっていること等が挙げられ、推定企画ラインとずれている箇所も多いことにより、企画がどの程度のものであったのか、どの程度実行されたのか、あるいは本当に企画が行われていたのかという疑問も生じてくる。これらの点については、前述のように、本遺跡の周溝墓が粘土・葦石・基底石等を持たないことに合わせて、



第97図 方形周溝墓平面企画

遺存状況すなわち、平面的な削平の程度や周溝肩や周溝底の自然崩壊等も平面企画の実行程度と合わせて考えなければならないものである。しかし、それらの点が現在では確認不可能であると思われることから、ここでは、本遺跡の方形周溝墓の築造企画案を考えた結果、方形周溝墓を築造するにあたっては平面企画があり、それに基づいて築造された可能性が高いということが指摘できたにすぎない。

ここで考察した平面企画は、方眼によるものでなく、円を基本として内角を決め、それを延長してその線を対角線とする方形を作るといった方法を採用した。このように円を基本としてそこから方形を描く方法は<sup>(7)</sup> 們国男氏が考えており、一瀬和夫氏は方形を優先するかたちで、周溝掘削の方法としての円形を<sup>(8)</sup> 考えている。們国男氏は方形周溝墓の設計企画として宇津木向原遺跡の方形周溝墓を例に、中心角の大きさや尺の問題にまで言及している。本遺跡

では周溝墓の本来の姿が不明なため、中心角や尺の問題に触れることはできなかった。しかし、一瀬氏も考えているように、台状部に示される方形と、その中央を中心とする円とが方形周溝墓築造にあたっての基本になっており、方形の対角線が大きなウェイトを占めているという点では一致を見ることができるのである。

#### 近畿地方からみた寺中遺跡方形周溝墓

近畿地方の弥生時代後期の方形周溝墓は伊賀地域を除いた全地域に分布しているが、それらのうち数基の方形周溝墓が検出されている遺跡では大阪府東大阪市巨摩鹿寺遺跡<sup>(9)</sup>・高槻市紅茸山遺跡<sup>(10)</sup>・茨木市東奈良遺跡等、中期のように溝共有あるいは溝を接して群集するものが少なくなり、1基ごとにやや距離をおきながら群集する傾向にある。中期のように溝を共有して群集するものでは大阪府高槻市郡家川西遺跡<sup>(11)</sup>がある。本遺跡の方形周溝墓は溝を共有するものが存在するが、多くはやや距離をおいて群集しており、近畿地方全体の様相と同じ様な群集のしかたを示している。

埋葬施設は本遺跡では検出されていないため、全く不明であるが、規模が大きいためから多数埋葬であったことが推定できる。この点についても近畿地方の弥生時代後期の方形周溝墓と比較した場合、多数埋葬と単一埋葬の両方がみられることから、近畿地方の他の方形周溝墓の埋葬数と違っていない。

一方、淡路地域では方形周溝墓は現在までのところ洲本市の武山遺跡<sup>(12)</sup>で畿内第Ⅱ様式に属するものが1基検出されているのみである。近畿地方の弥生時代後期の方形周溝墓は前段階の中期から既に方形周溝墓の築造が続いている地域が殆どで、淡路地域のように第Ⅱ様式の武山遺跡例から空白期間をおいて後期に再び出現するという地域は全くみられない。したがって、淡路地域においても武山遺跡から本遺跡までの間隙をうめる時期の方形周溝墓が築造されていることはほぼ間違いないものと思われる。

本遺跡の方形周溝墓を近畿地方全体から見た場合、その示す内容は、群集のしかたと推定埋葬数の点では違うところはないが、周溝の平面形態に特徴があること、規模が極端に大きいものがあることと、地域内で断続的に方形周溝墓が築造されている点が異なっている。しかし、武山遺跡例からの空白時期は他地域の例からしても、今後発見される可能性は非常に高いものと思われる。

#### 住居址と方形周溝墓

寺中遺跡ではA・B両地区合わせて10棟の竪穴住居址を検出したが、それらのうち弥生時代後期に属するものが8棟で、A地区で5棟、B地区で3棟認められた。

A地区は台地の一部しか調査できなかったため、住居址全体の様相は全く不明であるが、検出した住居址はA-1・A-3が円形で、住居址A-4～A-6が方形である。住居址A-3は同心円状に拡張されており、最も小さいものの径は約7.8m、最も拡大されたものの径は

約11.0mである。住居址A-4とA-6、住居址A-5とA-6はそれぞれ重複関係にあり、これら3棟のうち同時に立っていたものは最も多くて2棟である。住居址A-4～A-6の規模はそれぞれ一辺約3.9m、4.0m、5.3mである。住居址A-1は検出した住居址のなかでは最も南で検出されたもので、径約8mである。

B地区では3棟とも円形の住居址で、最も南側にある住居址B-1は径約8.8mで、中央にある住居址B-2は径約10.0m、北側の住居址B-3は径約10.0mの規模で、いずれも全体的にA地区のものに比べて規模が大きいが、A地区の住居址A-3の最も大きなものとの差は約1mしかない。B地区内では住居址B-2が最も規模が大きいが、B地区の他の住居址と比べて大きな差はない。これら大型の住居址B-1～3が所在するB地区は、A地区よりも台地を少し上がった高いところに立地しており、非常に興味深い。

調査した範囲内で考えると、B地区の規模の大きなグループとA地区のグループとに分かれるようである。これは、台地のくびれ部をはさんで両側に存在していることから看取できよう。また、A地区のグループは住居址A-3が増築しており、群中では規模の大きなものとなっているため、目立った存在である。

一方、方形周溝墓については前に考察したように、方形周溝墓1～4・6と方形周溝墓5とが別のグループを形成していることが窺え、前者をI群、後者をII群として住居址群と関連させて考えてみると、規模が大きく数も多い方形周溝墓I群はB地区住居址群と、1基で構成される方形周溝墓II群は、A地区住居址A-3を中心としたグループと対応することが推察できる。後者については、A地区の住居址全体の様相が全く不明な現段階では不確定な要素が多いため、可能性の指摘に止めたいが、前者はB地区住居址群が台地上部という条件の良いところに立地していることも考え合わせると、方形周溝墓の被葬者の住居址としては可能性の高いものと考えられる。

寺中遺跡は方形周溝墓と住居址群といった集落の一つのセットが検出された良好な遺跡であり、今後このような遺跡がさらに良好な状態で検出されれば、集落と方形周溝墓の間がより具体的に関係づけられ、ひいては弥生時代の社会構造を明らかにすることができるものと思われる。

〔註〕

- (1) 永島輝臣・田中清美「大阪市加美遺跡の弥生時代中期墳丘墓」『月刊文化財』266号 第一法規出版 1985年
- (2) 石神 怡・井藤 徹・伊藤久嗣・江谷 寛・萩原儀征・瀬川芳則・前田豊邦ほか「池上・四ッ池 1970」第2版和国道内遺跡調査会 1970年
- (3) 石野博信・村川行弘・福井英治ほか「田能遺跡発掘調査報告書」尼崎市文化財調査報告第15集 尼崎市教育委員会 1982年
- (4) 「玉津田中遺跡現地説明会資料Ⅰ」兵庫県教育委員会 1986年8月30日
- (5) 田代克己・今村道雄ほか「瓜生堂遺跡Ⅲ」瓜生堂遺跡調査会 1981年
- (6) 伊藤勇輔ほか「奈良県宇陀郡榛原町大王山遺跡」榛原町教育委員会 1977年
- (7) 梶 岡男「古墳の設計」築地書館 1975年
- (8) 一瀬和夫「前方後円形墳丘の周溝掘削パターンと区画性—前方後円形成立に関する覚え書き—」『古代学研究』第112号 1986年
- (9) 岸本一広「近畿地方の弥生時代墳丘墓について—集落構造把握への視点として—」『網干善教先生華甲記念考古学論集』1988年
- (10) 堀江門也・玉井 功・井藤暁子ほか「巨摩・瓜生堂—近畿自動車道大塚〜吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—」(財)大阪文化財センター 1982年
- (11) 原山正三「紅葺山遺跡」『高槻市史』第6巻 考古篇 1973年
- (12) 富成哲也・大船孝弘・橋本久和・森田克行「嶋上郡銜跡発掘調査概要・3」高槻市文化財調査概要Ⅲ 高槻市教育委員会 1981年
- (13) 岡本 稔・湖上雅史・丹羽佑一ほか「武山遺跡発掘調査報告」洲本市教育委員会 1975年

### 第 3 節 遺 物

#### 1 弥生土器

出土した弥生土器は図示できたもので総数244点あるが、それらには中期～後期のものがあり、中期のものが15点、後期のものは229点認められる。後期の土器は東溝で71点、方形周溝墓が80点、住居址が47点、その他の遺構27点、包含層4点となっている。

以下、弥生土器を中期と後期にわけ、その器種構成と特徴について述べてゆきたい。

##### (1) 弥生時代中期の土器

中期の土器は住居址A-2・B-4、建物址2から出土しているが、その点数は少ない。

器種別にみると、壺が3点、甕が3点、高杯または台付鉢が脚部を含めて6点、甕と思われる底部が1点である。次に器種別にその特徴を述べてゆきたい。

##### 壺

壺では口縁部が大きく外反する広口壺が住居址A-2と建物址2から各1点ずつ出土している。建物址2のもの(37)は頸部に凹線文を施し、肩部には櫛描き兼状文を模した直線文を描き、口縁端面には櫛描波状文、口縁端面内面には列点文をめぐらしている。住居址A-2出土の壺には広口のものと同直口のもの2種がある。広口のは器厚がやや薄く、口縁端部を大きく上下に拡張する。文様は全く施していない。後者の直口のは外反ぎみから若干内彎する口縁部となり、口縁端部直下に凹線文を3条施している。

##### 甕

甕は住居址A-2で2点と建物址2で1点出土している。住居址A-2出土の(3)は建物址2出土のもの(36)と口縁部の形態がよく似ている。口縁部は体部から「く」の字状に屈折し、端部を上方向に摘み上げている。(36)の体部外面には太筋の平行叩き目が施され、下半は刷毛目を加えている。口縁端面には凹線文は施さない。

住居址A-2出土のもう一つの甕(4)は大型のもので、口縁部から肩部にかけての破片で、口縁部の外反度は少なく、端部もあまり肥厚しない。口縁端部には2条の凹線文を施している。

##### 高杯・台付鉢

住居址A-2とB-4から出土している。住居址A-2出土の(5)は浅い杯部で、口縁端部直下に1条、杯部の屈曲部に2条の凹線文を施している。(6)は深い杯部をもつもので、口縁端部を左右に少し拡張している。口縁端部やや下に残存しているだけで3条の凹線文が認められる。他に文様は認められない。

住居址B-4からは3点出土しているが、図示できたのは2点のみである。鉢形の(38)は屈曲部に2条の凹線文を施し、杯部中央は円板充填による。木器を模倣した形の(39)は大きく

垂下する口縁端部をもち、文様はまったく認められない。図示できなかった1点は(6)に近い形態を示し、凹線文を施したものである。

#### 弥生中期土器の検討

出土した弥生時代中期の土器のさらに細かい時期について検討を加えたいが、淡路地方における弥生土器の様相が不明で、編年が確立していない現状では、若干の誤りもあると思われるが、畿内地方の編年に照らしあわせて考えてみたい。

壺では建物址2から出土した(37)が櫛描き文と凹線文を合わせ持っており、畿内第Ⅲ様式新段階ないし第Ⅳ様式の特徴を示している。また、住居址A-2出土の(1・2)は凹線文のみで、無文化の傾向が著しく、畿内第Ⅳ様式の特徴である。

甕は、住居址A-2出土の(4)が新しい傾向を示し、住居址A-2出土の(3)と建物址2出土の(36)がともに畿内第Ⅲ様式新段階から第Ⅳ様式に属するものである。

高杯・台付鉢は住居址B-4出土の(39)が第Ⅳ様式には少ないものである一方、住居址A-2・B-4出土の(5・6・38)は第Ⅲ様式には殆ど見られないものである。

以上のことから、本遺跡の弥生中期土器は畿内第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式に含まれ、遺構別にみるならば、建物址2が最も古い様相を呈し、畿内第Ⅲ様式新段階により近いものと思われ、次いで、住居址B-4が畿内第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式、住居址A-2は畿内第Ⅳ様式に属するものと考えられる。

#### (2) 弥生時代後期の土器

後期に属する土器は住居址A-1・3～6、住居址B-1～3、方形周溝墓1～6、D地区東・西溝から出土しており、その数は多数にのぼり、器種別にみると、壺が61点、甕が25点、器台が16点、高杯が9点、鉢が16点とほぼ全器種が多数出土している。しかし、小さな破片が多いため、器種を特定できないものが多くある。

以下では、土器の数が多いため、各器種ごとに型式分類を行い、それぞれの特徴を述べる。次に項をあらため、土器の示す特徴を述べ、他地域との関係から編年的位置づけを行う。

#### 型式分類

##### 壺

壺は大きくA～Dの4種類が認められる。それらは口縁部の破片が殆どであるため、分類は口縁部の形態差により行った。

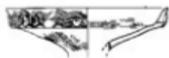
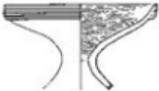
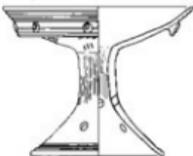
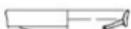
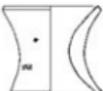
壺Aは頸部から外反しながら上外方にのびる口縁部をもつもので、3種類に細分される。

壺A1は外反しながら上外方にのびた口縁端部を拡張しないもので、口径では大小2種がある。

壺A2は口縁端部を下方に拡張するもので、口縁端面に文様をもつものもたないものが

壺A	A1		壺A	A1	
	A2			A2	
	A3		壺B	B1	
B1					
B2					
B3					
壺C	B4		壺B	B2	
	C1				
	C2		壺C	C	
C3					
壺D	D1		壺D	D	
	D2				

表3 弥生後期土器器種分類

器台 A			鉢 A	A1	
器台 B	B1			A2	
	B2			鉢 B	A3
	B3		鉢 C		
器台 C					
器台 D					
高杯 A	A1				
	A2				
高杯 B	B1				
	B2				

ある。

壺A3は口縁端部を上下に拡張するもので、口縁端面は無文のものや擬凹線を施すもの、円形浮文を貼りつけるものがある。

壺Bは直立する頸部から曲折して外上方にのびる口縁部をもつもので、4種類に細分できる。

壺B1は頸部から曲折して外上方にのびた口縁端部を肥厚しないもので、四国系と考えられる。

壺B2は口縁端部を肥厚するもので、上方にひきのばすものも認められる。B1同様四国系と考えられる。

壺B3は口縁端部付近で曲折し、端部を肥厚するものである。

壺B4は頸部から曲折して外上方にのびた口縁端部を下方に拡張するものである。

壺Cは内彎気味に外上方にのびる口縁部をもち、端部を拡張するものである。二重口縁壺に近い態をもっている。3種に細分できた。

壺C1は口縁端部を下方に拡張するものである。

壺C2は口縁端部を下方に拡張するが、端部よりやや下がった位置に粘土を張り付けるもので、端面に文様をもつものが多い。大型のものがある。

壺C3は口縁端部を上方に拡張するもので、端面に擬凹線を施している。

壺Dはほぼ直立する頸部から外上方に外反し、さらに屈曲して外反しながらのびる口縁部となるもので、いわゆる二重口縁壺である。口縁部外面に文様をもつものが多い。

壺D1は頸部から外上方に外反しているものである。

壺D2は頸部からほぼ水平に外反しているものである。

## 甕

甕は大きく4種類が認められ、体部の形態及び口縁部の形態によって分類した。

甕Aはやや長胴の体部から屈折して、外反しながらのびる長い口縁部をもつものである。端部の形態によって2つに細分できる。

甕A1は口縁端部に面をもつものである。

甕A2は口縁端部を丸くおさめるものである。

甕Bは体部から「く」の字形に屈折して、ほぼまっすぐにのびる口縁部をもつもので、口縁端部は丸くおさめる。大きさによって2つに細分できる。

甕B1は大・中型のものである。

甕B2は小型のものである。

甕Cは体部から「く」の字形に屈折する口縁部をもち、端部を上方につまみあげるものである。四国系の甕と考えられる。

壺Dはあまり張らない鉢形の体部をもち、口縁部が「く」の字形に外反する大型の壺である。

## 器 台

本遺跡では器台の出土量が非常に多く、また、多くが杯部の破片であり、高杯や壺との区別が非常に難しいため、誤認しているものがある可能性が高い。

器台Aは直線的な体部から屈折して外反する口縁部をもち、口縁部外面に文様を施す。

器台Bは内彎気味にのびる受け部を持ち、口縁部はさらに内彎するもので、口縁部外面を拡張するものである。端部に文様を施す。拡張部分の形態差によって、3つに細分できる。

器台B1は口縁部はあまり内彎せず、端部を下方に拡張するもので、口縁端部には擬凹線を施す。端部が外傾するものが多く、壺の可能性はある。

器台B2は口縁端部外面を下方に拡張するが、拡張部があまり外側に張り出さないもので、口縁部外面には擬凹線を施し、円形浮文を付すものもある。

器台B3は口縁端部からやや下がった位置に粘土を貼りつけて拡張するもので、口縁部外面には擬凹線・櫛描文・円形浮文を施している。器台Cは内彎気味の体部で、口縁部を上下に拡張する小型のものである。壺の可能性はある。

器台Dは中央がゆるやかにくびれる単純な器台で、文様は施していない。

## 高 杯

高杯は杯部の形態から2種類に分けられる。破片のため、器台との混同があるかもしれない。

高杯Aは内彎しながら横外方にのびる杯底部から屈折して外反する口縁部をもつもので、屈曲部の装飾により2つに細分できる。

高杯A1は装飾を施さないものである。

高杯A2は屈折部を下方に拡張するもので、屈折部外面には文様を施している。

高杯Bは内彎しながら外上方にのびる杯部をもち、屈曲の有無により2つに細分される。

高杯B1は単純な碗形の杯部をもつものである。

高杯B2は杯底部と口縁部の間がやや屈曲するもので、小型のものもあり、器台かも知れない。

## 鉢

鉢は屈曲した口縁部のもの、体部が直線のもの、体部が彎曲するものの3種に分類される。

鉢Aは内彎する体部から屈曲して外傾・外反する口縁部をもつもので、大・中・小がある。

鉢A1は小型のもので、底部は上げ底である。蓋の可能性はある。

鉢A2は中型のもので、底部は平底である。口径に対し深く、外傾角度にばらつきがある。

鉢A3は大型のもので、底部は平底である。口径に対し浅く、大きく外反するものがある。

鉢Bはほぼまっすぐにのびる体部で、口縁端部を丸くおさめている。底部は平底である。

鉢Cは内彎しながらのびる体部で、口縁端部を丸くおさめている。底部は上げ底である。

#### 弥生後期土器の検討

##### 壺

壺Aは畿内地方でも弥生時代に普遍的に存在する型式のもので、端部を拡張しないA1のうち、(136)・(137)・(234)は外面を篋磨きし、丁寧なつくりとなっている。あるいは四国系かもしれない。A2の端部を下方に拡張するタイプは端面に凹線文を施すものが多い。A2のうち、(240)の器形はやや異形であり、東海地方のものに似ているが、どの地域のものかは特定できない。(305)の肥厚部分も端部から下にあり、他に類例をみない。壺A3は上下に拡張しており、中期的特徴を残すものである。(77)については中期のものであるかもしれないが、(237)・(299)については徳島県黒谷川郡頭遺跡に類似例があり、弥生後期～庄内式の範疇のものである。(23)の土器は頸部と体部の境に突帯を貼り付けており、特徴的である。

壺Bの屈折する口縁部についても四国の影響をうけたものと思われ、特にB2の(34)は文様が違うが、黒谷川郡頭遺跡に例が認められ、(79)の口縁上端をつまみあげたものも、四国によくみられるタイプである。

壺Cは口縁端部の拡張が、端面よりもやや下がった位置に貼りつけたもので、いずれも他地域では通常、数量的に少ないものであるが、本遺跡を含め三原郡西淡町谷町筋遺跡など、淡路地方では多く出土する器形である。口縁端部外面を凹線文・鋸齒文・円形浮文などで飾る土器が非常に多く、また、壺Dや器台A・Bにもみられるように、本遺跡では飾る土器の比率が非常に高い。北淡路の採集品のなかにも文様を持った土器が多くあり、飾ることを目的とした器形として淡路地方で発達したものと考えられる。壺Cは畿内地方では庄内式になって出現しているが、本遺跡では後述するように、後期末葉に属するものである。壺C2のうち、(254)は器台の可能性がある。壺C3は口縁部の肥厚のしかたが特徴的であるが、他に類例がなく、全体の器形は不明である。口縁部外面には凹線文を施している。

壺Dは二重口縁の壺であるが、上部の発達が乏しいうえに器壁も厚く、古いタイプに属するものである。この型式の壺は各地で出土しているが、紀伊・播磨の他は量的には少ないのが通常である。本遺跡も含め、淡路の遺跡では洲本市大森谷遺跡、三原郡西淡町鉾田遺跡や谷町筋遺跡などで出土量の比率が高い。この土器も壺Cや器台A・B同様、飾る土器として淡路地方で発達した器形と考えられる。飾る文様としては、凹線文が最も多く、次いで竹管文を加えた円形浮文があり、竹管文も施している。他には櫛櫛波状文も施している。通常、これらの2～3種類を組み合わせて施している。いくつかの組み合わせ方法があるが、最も多いのは凹線文と竹管円形浮文である。なお、三原郡西淡町志知川・沖田南遺跡では、同タイプの土器が少量出土しているが、口縁部外面いっばいに凹線文を施している。また、波状

文や円形浮文で飾るものも存在しているが、これらの場合は口縁部が垂直に立っている。

#### 壺

壺Aは口縁部や体部が長いことから、紀伊の影響と思われ、和歌山県有田郡吉備町田殿・尾中遺跡や海南市亀川遺跡、和歌山市北田井遺跡などで多く認められる。胴は長いが、最大径は体部中位より上にある。外面の調整はすべて叩きであり、内面はナデである。A1は端部に面を持ち、A2は端部が丸い。したがって、型式学的にはA2よりA1が古いと考えられる。

壺Bは壺Aに比べて口縁部が短いもので、端部はすべて丸い。B1の大・中形のものうち、体部が残存しているものは(309)の1点のみである。(309)の体部最大径は中位やや下にある。B2は小形で口縁部が比較的長く、体部も長い。体部最大径は中位より上にある。外面の調整は叩きで、内面はナデである。壺Aの小形のものかもしれない。壺A・Bとも底部は平底である。

壺Cは口縁部が体部から「く」の字状に屈折して、端部を上方に積み上げた特色ある土器で、中期の要素を残しているものである。この特徴をもつ土器で後期に属するものは四国に多く存在している。(139)については壺の可能性もある。

壺Dは鉢に近い形の大型の壺で、他に類例を見ないものである。淡路でも同様のものは認められないが、型的にやや新しいと考えられるものは、西淡町谷町筋遺跡で出土している。

#### 器台

前述のように、本遺跡からは器台は非常に多く出土しており、バラエティーに富んでいる。

器台Aは受け部の上に口縁部を継ぎ足して製作しており、高杯と同様の造りである。竹管円形浮文、櫛描波状文などで飾っている。

器台B1は壺の可能性も残すが、全体の器形が不明であることに加えて、類例が不明なため器台として扱った。B2はB3の退化型式と思われ、装飾が少ない。B3は数量的、装飾的にも壺C・D同様、淡路地方で発達したと考えられる特徴的な器形である。凹線文・竹管円形浮文・櫛描波状文・鋸歯文で飾っている。

器台Cは出土量が少ないうえに、製作技法が特異で、他に類例をみない。

器台Dは粗製の単純なものである。

#### 高杯

高杯は本遺跡では出土量が非常に少なく、誤認により、器台や壺に分類しているかもしれない。飾るもの(A3)が存在している他、B2のように類例の不明な器形が存在している。

#### 鉢

鉢には大・中・小の3種が存在しているが、口縁部が外反するものは、大型・中型に限られる。大型品には口径に比べ、浅いものが多い。すべて平底ないし若干の上げ底となってい

る。

#### 弥生後期土器の編年的位置づけ

寺中遺跡から出土した後期の土器は前述したように、紀伊と四国の両方の影響を受けていると考えられる。淡路地方の土器編年や様相が明らかになっていない現在、これらの土器を編年的に位置づけるためには、紀伊と四国の編年観に照らし合わせて考える必要がある。

まず、紀伊の影響を大きく受けている壺についてみる。紀伊では管見によれば、紀の川流域と有田川流域の2つの地域の編年細分案が出されている。

紀の川流域では、本遺跡に類似する壺は亀川遺跡と井辺Ⅰ遺跡の一群に認められる。井辺Ⅰ遺跡の一群は編年的には、弥生時代の終末に位置づけられている。

一方、有田川流域編年案では、壺について見れば、Ⅰ期の田殿・尾中遺跡溝Ⅰと溝Ⅱ下・中層出土遺物の時期に相当する。有田川流域編年のⅠ期は弥生時代後期末に編年されるが、紀の川流域編年の亀川遺跡に後続し、井辺Ⅰ遺跡の前半の一部に相当すると考えられている。また、二重口縁壺については、有田川Ⅱ期に多く認められるが、それらは口縁部が長く発達し、新しい傾向を示している。寺中壺Dにも口縁部が長いものが若干認められるが、より古い傾向を示す口縁部の短いものが殆どである。なお、有田川Ⅱ期は庄内併行期と考えられている。

次に、四国の影響を受けている壺(壺A3・B)・壺Cについてみる。四国では徳島県黒谷川郡頭遺跡で弥生後期～庄内期の編年がなされている。本遺跡の壺A3の凹線文の口縁部の類似例は黒谷川Ⅱ式の2号住居跡から出土している。黒谷川Ⅱ式は庄内式前半と考えられている。ただし、この形態の口縁部は畿内では弥生時代中期～後期の幅広い時期に存在している。壺BのうちB1・B2は溝Ⅰ・Ⅱから類似例が出土している。これらは黒谷川Ⅰ式にあたり、後期後半である。壺Cの口縁端部の特徴はⅠ～Ⅲ式のすべてに認められ、時期の特定はできない。

寺中遺跡出土の弥生後期の土器のうち、壺Dと壺A・Bについては紀の川流域では亀川遺跡～井辺Ⅰ遺跡の時期にあたり、後期の後葉とされている。有田川流域ではⅠ期と一部Ⅱ期を含むものもある。有田川Ⅰ期は井辺Ⅰの前半とされ、本遺跡は弥生後期の末葉と考えられる。

また、壺A3・B1・B2は四国の編年では後期末～庄内前半にあたるが、他に庄内式は見当たらない。したがって、本遺跡出土土器は後期末葉に属し、庄内までは下がらないものと考えられる。

なお、東溝出土土器は時期的巾を持っていると考えられ、住居址B-2出土土器は壺の口縁端部や鉢の形態から、東溝の一群の新しい様相としてとらえることができると思われる。しかし、比較材料が乏しいため、類似の増加をまって、検討してゆく必要がある。

〔註〕

- (1) 弥生後期の土器については、播磨町郷土資料館の山本三郎氏に多くの御教示を得た。
- (2) 菅原康夫『黒谷川部遺跡Ⅰ—昭和59年度発掘調査概報—』徳島県教育委員会 1986年  
菅原康夫ほか『黒谷川部遺跡Ⅱ—昭和60年度発掘調査概報—』徳島県教育委員会 1987年
- (3) 昭和59年度に兵庫県教育委員会が発掘調査。平成元年度調査報告書刊行予定。
- (4) 岡本 稔・広岡俊二・松下 勝『北淡路の遺物』『兵庫考古』第9号 1980年
- (5) 別府洋二・平田博幸・市橋重喜ほか『大森谷遺跡—淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—』兵庫県文化財調査報告書第27冊 兵庫県教育委員会 1985年
- (6) 昭和58年度に兵庫県教育委員会が発掘調査。平成元年度調査報告書刊行予定。
- (7) 松下 勝・別府洋二ほか『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県文化財調査報告書第40冊兵庫県教育委員会 1987年
- (8) 渋谷高秀ほか『田殿・尾中遺跡—庄地区道12号長田連絡改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』古備町教育委員会 1982年
- (9) 植田法彦・中尾憲市『亀川遺跡発掘調査概報』海南市文化財調査研究会・海南市教育委員会 1978年
- (10) 藤丸器八郎・笠井保夫『和歌山市北田井遺跡発掘調査概報Ⅱ』和歌山県教育委員会 1971年
- (11) 富加見泰彦『紀の川下流域における古式土師器の細分』『鳴神地区遺跡発掘調査報告書—般国道24号バイパス関連遺跡発掘調査—』和歌山県教育委員会 1984年
- (12) 渋谷高秀『出土遺物の考察—弥生時代後期末～古墳時代前期』『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書—尚南瀬道路建設に伴う関連遺跡発掘調査—』和歌山県教育委員会 1985年

## 2 鳥形土製品

方形周溝墓3北溝から出土した異形土器は、全体の形が判明していないが、愛知県朝日遺跡出土の鳥形土製品とされているものに類似している。朝日遺跡では遺存状況が良好なものとしては5点認められるが、そのうちの4点(第95図2・3・6～8)が本遺跡出土例に類似している。それらは中期末(高蔵式)～後期(欠山式)の時期の所産であり、一方が尖った平面楕円形を呈し、もう一方には凹形の口縁部を付けている。尖った方は鳥の尾を表現していると思われ、鳥の頭部は表現していない。底部は平底ないしそれに近く、製作法としては粘土板の端を上方でつなぎあわせて中空としており、外面の調整はナデを施している程度である。本遺跡出土例はそれらと比較すると口縁部と尾部を欠損している以外は全く同じ状況を示している。したがって、本遺跡出土異形土器も鳥形土製品と判断した。また、本遺跡例が弥生時代後期末であることから時期的にも合致する。

ところで、弥生時代の鳥形については金関忠氏・水野正好氏が主として鳥形木製品について論考されている。金関氏は『魏志東夷伝』馬韓の条に述べられている蘇塗を、杆頭に木の鳥を立てる習俗のことと考え、集落内の祭儀にあたって、その祭場に立て並べられた神杆の鳥として鳥形木製品をとらえた。

一方、水野氏は和泉の池上遺跡の鳥形木製品が、数羽ずつ2次にわたって集落を囲む溝から出土していることから、境界をめぐる鳥であったと考え、村境の出入り口には鳥居が立っていたと推定している。

また、井上義光氏・館谷一氏は鳥形木製品・鳥形土製品の両者の資料を広く全国的に集め、分類を行っている。井上氏は鳥を描いた青銅器・土器も含めた「鳥形模造品」を、使用方法によって「飛翔を表現し、杵頭(杆頭?一筆者注)にたてる」A類と、「静止状態を表現し、平坦な部位に置く」B類の二つに分類し、B類について容器的機能をもつものとするものでないものとして使用方法の再分類の可能性を指摘している。そして、A類は農耕儀礼の天的宗儀に基づき、B類は地的宗儀に天的宗儀的影響、要素が加わって出現するものと考えている。

館谷氏は鳥の線刻画やスタンプ文様を除き、鳥をイメージとして造形されたものを「鳥形製品」と呼び、そのなかで鳥として完結している「鳥形模造品」をI類、鳥のモチーフを容器に使用した鳥形土器をII類とし、さらにI類のなかの木製品と土製品をそれぞれI-A類、I-B類に細分している。また、I-A類には井上氏の分類基準となった動・静態の2種が認められることからさらに細分し、I-B類には鶏形と水鳥形の2種類があることも指摘している。館谷氏はその後半で弥生時代の「鳥形土器」についての考察を行い、「鳥形模造品は人間と「穀霊」を観念的に媒介する「もの」であるのに対し、鳥形土器は人間の行為に伴い、それらを物理的に媒介する「もの」と考えている。また、弥生時代の鳥形製品の多くが伊勢湾地方以西の西日本に分布することから、「遠賀川式土器」の波及と文化内容とを関連づけて

解釈している。

井上氏の分類のなかでA類はその推定される使用方法と鳥形の造作（柄穴等）が合致し、民俗例もあることから問題はないと思われるが、B類はその使用方法に曖昧な点が多くあり、むしろ再分類の必要があると思われる。それは、現資料を見る限り、井上氏も可能性を指摘しているように、容器としての機能をもつものとそうでないものという、資料が示す特徴に基づいたものを基準とすべきであろう。

この点に関しては、鮎谷氏の鳥形模造品と鳥形土器という分類が、資料が示す機能に、より即したものであるが、鳥形模造品の細分の際にはそれを無視し、木製品と土製品という安易な分類として進めてしまい、分類の視点が一貫していないことが問題であり、そのことが、分類が後半の考察に生かされない形となってしまった原因と思われる、残念である。

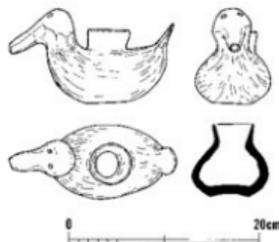
ここでは以上の諸氏による研究をもとに、それらの問題点を踏まえたくらんで、弥生時代を中心とした「鳥形製品」の分類についてもう一度考えてゆきたい。しかし、筆者の力量不足から鳥の線刻画やスタンプ文様は除外せざるを得なかった。また、金関氏や水野氏によって考察されている柄穴をもつ鳥形木製品については、前にも述べたように、その推定される使用方法と結びついており、井上・鮎谷両氏の分類が基本的に合致しているため、問題はないと思われる。したがって、本稿では鳥形製品のうち鳥形土製品（鮎谷氏のいう鳥形模造品の中の土製品および鳥形土器）を中心に再分類を行い、そこから派生する諸問題について検討してゆきたい。

弥生時代の鳥形土製品は鮎谷氏の指摘のように、その殆どが伊勢湾地方以西の西日本に分布しているが、管見によれば表4に示した25遺跡33例が認められるにすぎない。それらを図で示したのが第95図であるが、未発表のものが多く、掲載できたのは僅かである。

鳥形土製品は、容器としての「鳥形容器」と形態を写した「鳥形土製品」の2者に大きく分けることができ、さらに前者は形態的・機能的特徴から3つに細分できる。

I-A類は頭部を造出せず、そこが口縁部となる容器で、リアルな表現をしているものではなく、刷毛やナデを鳥の羽を思わせるように施しているものがある程度である。

弥生時代のもののうち、全体の形が推定でき、時期もはっきりしているものには、愛媛県中村松田遺跡例や静岡県蔵平遺跡例、愛知県朝日遺跡例の計8例が認められる。ほかに兵庫県加茂遺跡では中期中頃の土壇から1点出土しているが、一方の端が欠けており、やや不安を残すが、全体の作りが雑である点からI-A類として扱った。なお、鳥取県目久美遺跡から出土



第98図 白石遺跡出土の鳥形土器

した前期に遡ると推定されているものは、その形状が鳥形よりも袋状に近く、ここでは特に鳥形容器としては扱っていない。

古墳時代中期頃のものでは、石川県漆町遺跡で包含層より1点が出土している。

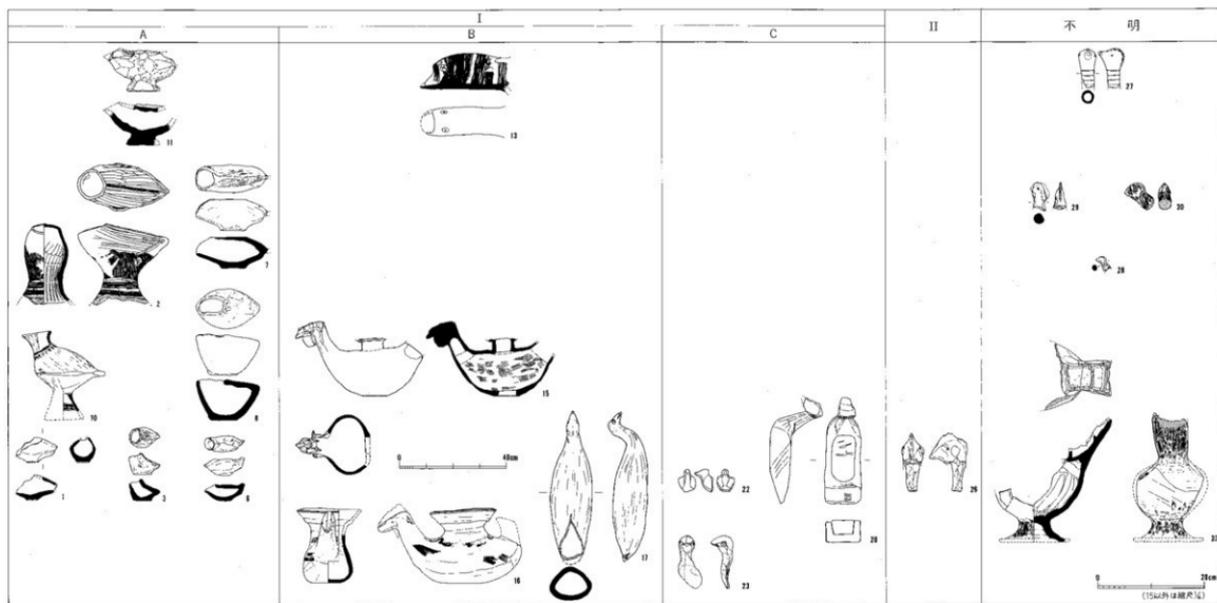
I—A類は古墳時代後期の須恵器の鳥形瓶に似ているが、須恵器鳥形瓶が丸底であるのに対して、弥生時代のものでは平底が多く存在し、若干の相違が認められる。また、静岡県蔵平遺跡例は脚台付であり、愛知県朝日遺跡の例は壺形土器の口縁部を鳥形に造出したものであり、やや異なったものも存在している。時期的には、分類にやや不安を残すが、兵庫県加茂遺跡の例が第Ⅲ様式の土壇から土器と一緒に出土しており、最も古いものである。次いで静岡県蔵平遺跡例が中期末～後期に属し、後期のものでは愛知県朝日遺跡で7例、愛媛県中村松田遺跡・本遺跡で各1例と後期のものが数量的に最も多い。

I—A類は加茂遺跡出土例が最も古いと考えられ、弥生時代中期中葉に出現している。それ以降は連続して存在しているようである。分布は現在のところ愛媛・兵庫・愛知・石川・静岡の範囲で出土している。出土遺構でみると、加茂遺跡では土壇出土、蔵平遺跡ではピット、朝日遺跡では溝から5点と包含層から2点、古墳時代の漆町遺跡では包含層から出土しており、特に出土遺構による区分はできないようである。

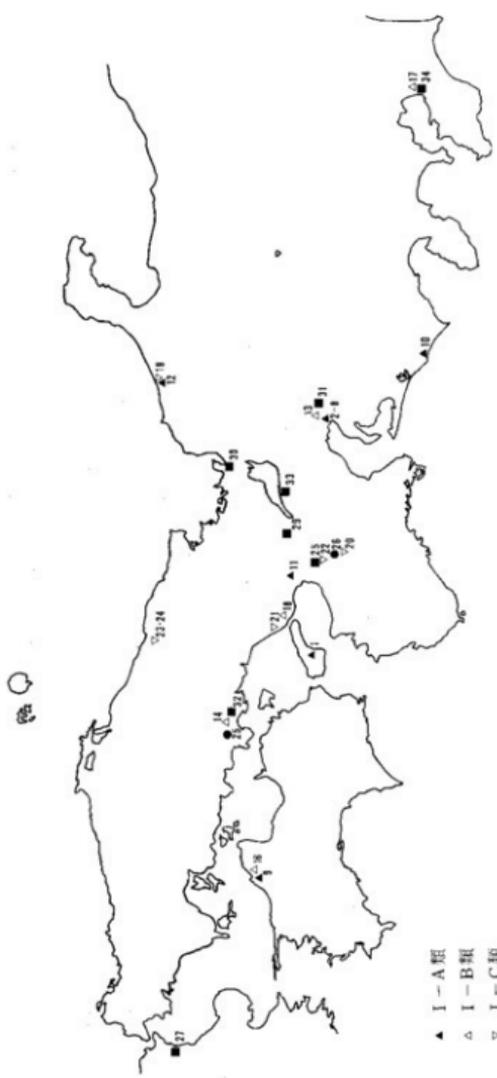
I—B類はI—A類同様容器であるが、基本的には鳥の全姿を表現しており、頭部嘴の部分に注ぎ口となっていたり、尾部に口縁を作り出しているもの、その両方のもの、あるいは背部に口縁部を作り出しているものなどがある。

このうち時期的に最も古く、中期とされているものは、愛知県瑞穂遺跡の水鳥の頭部であるが、採集品であるため時期に問題が残っている。時期が明確なものでは新潟県の津古生掛墳丘墓の鶏形3例と岡山県雲山鳥打1号墳丘墓の例が弥生時代後期末に属している。津古生掛墳丘墓のものは、頭部・尾部に注口部や口縁部はないが、背部に二重口縁が作り出されており、腹部にも丸い孔があげられている。雲山鳥打1号墳丘墓の鶏形のものは頭部が注ぎ口になっており、尾部は造り出さず口縁となっている。また、足が存在していたようである。弥生時代後期末～古墳時代初頭のものには、愛媛県宮前川北斎院遺跡の鶏と推定されている容器がある。包含層から出土しているが、完形に近く、頭部嘴の部分に注ぎ口となり、背部に二重口縁を作り出している。尾は中実である。古墳時代前期の例では、千葉県南二重堀遺跡で住居址から水鳥を模したものが出土している。時期の下がる例では、群馬県白石遺跡出土の鳥形注口土器(第98図)があり、背に口縁部、嘴が注口部となっており、基本形態は宮前川北斎院遺跡と同じである。しかし、水鳥を模したものである点が異なっている。

一方、兵庫県の古田南遺跡では、古墳時代前期の住居址から頭部・尾部ともに筒状を呈するものが出土している。片方が途中で欠損しているため、頭部・尾部のどちらかを造出しているかもしれない。また、背部にあたる部分にも筒状の口縁部を造り出している。I—B類



第99回 弥生時代—古墳時代前期 鳥形土製品分類表



第100圖 弥生時代~古墳時代前期 鳥影土製品分布圖

としては異形である。

I-B類は福岡・愛媛・岡山・兵庫・愛知・千葉・群馬の各県で出土しており、主として太平洋側に分布が認められる。また、時期の不確定な瑞穂遺跡を除くと弥生時代後期末以降に限られることがわかる。出土遺構でみると、白石遺跡跡を古墳の周濠出土とすれば、墳墓出土例が6例中3例と多い。また、鶏を模したものと、水鳥を模したものが約半数ずつ出土している。

I-C類も全体を作出するが、背部が大きく開いた容器（いわゆる鳥船形土器）になるものと思われる。土製品では完形のもの認められないが、奈良県纏向遺跡で出土している木製品が全体をうかがえる良好な資料である。他の土製品では完形のものがないため、確実ではないが、いずれも頸部の下の背部側が開いており、また、鳥取県秋里遺跡では体部の船形の破片も出土しているらしく、纏向遺跡と同様の形態になると考えられる。I-C類は背部が開いている点に着目して、ほぼその形態と考えられるものを集めた。

最も古いものでは兵庫県大中遺跡住居址出土の水鳥を模したと考えられるもので、弥生時代後期末と考えられる。大阪府東郷遺跡出土のものは弥生時代後期末～古墳時代前期初頭と考えられ、水鳥を模倣しているようである。古墳時代前期に属するものでは、先に挙げた奈良県纏向遺跡の土壌出土の水鳥を模した木製品のほか、鳥取県秋里遺跡からは水鳥と鶏の両方が出土している。また、秋里遺跡からは他にも鳥形が出土しているようであるが、確認できなかった。石川県漆町遺跡からも水鳥状の弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に属するものが1点出土しているようであるが、これも確認していない。

分布は、現在のところ鳥取県～石川県の狭い範囲に限られており、時期的にも弥生時代末～古墳時代前期に限られている。また、ほとんどが水鳥を模倣したものである。出土した遺構をみると、大中遺跡では住居址、東郷遺跡は浅い落ち込み、纏向遺跡は土壌、秋里遺跡では包含層から出土し、漆町遺跡例は溝から出土しており、一定していない。

一方、岡山県さくら山遺跡の弥生時代中期後半の住居址から出土した土製品は、小さなものであるが、水鳥の全体の姿を表現しており、中実で容器とはなっていない。また、奈良県唐古・鍵遺跡の弥生後期末の土壌から出土した鶏形の頭部は、肉髯の欠損が認められるだけの完形品で、報告者が想定しているように「胴体かあるいは棒のようなものに挿入・着装した」と考えられ、使用方法として金関氏や水野氏が推定されたものが想定できる。

このように、全体か一部かの表現の違いはあるが、容器ではない鳥形製品をまとめてII類とした。類例が少ないため分類上やや不安を残すが、I類とは機能的に違ったものと考えられることによりII類として扱う。

以上、主として弥生時代の鳥形土製品を大きく二つに分類し、さらに形態によりI類を3つに分けたが、他に、欠損していることにより分類できなかったものが多い。

たとえば、弥生時代中期に属するものでは、福岡県下稗田遺跡・大阪府亀井遺跡・京都府中久世遺跡・福井県吉河遺跡で出土している。いずれも頭部の破片で、すべて注口部は認められない。全体の形状は窺い得ないが、I—B・C類かII類に属するものと思われる。下稗田遺跡例は中期初頭の住居址から出土したもので、鶏の雛を模倣しているようである。亀井遺跡の周溝墓のマウンド下層から出土したものは、胸に二つの穿孔が認められ、孔に紐を通していたと推定されている。また、伴出遺物から中期後半と考えられている。中久世遺跡例は採集品であるため不確実であるが、一緒に採集された土器が中期中頃のものであるため、同様の時期と考えられている。鶏をかたどったものである。吉河遺跡例は土壌内出土品で、中期とされている。雛をかたどったものと考えられている。

弥生時代後期のものは愛知県南東山遺跡で2点出土している。どちらも頭部の破片で、注ぎ口は認められない。両方とも水鳥を表現したもので、1基の住居址から欠山式土器と伴出している。I—B・C類かII類に属するものと思われる。

古墳時代前期のものでは、初頭に属する岡山県百間川沢田遺跡出土例がある。土器溜から出土したもので、報告書では構造船のようなものを想定しているが、上方にのびた部分は体部と比較すると、幅・形状ともに船よりもむしろ鳥の尾部と考えられ、刷毛目も鳥の羽のように施しており、全体の形状をみても鳥形と思われる。脚台がついて中空のものであるが、頭部から上半部にかけて欠失しており、注口部があったかどうかは不明である。全体を造り出していると考えられることからI—B類ないしII類に属するものであろう。ほかに滋賀県の服部遺跡II河道と千葉県東寺山石神遺跡住居址から頭部の破片が出土している。

以上、鳥形土製品について容器と形態表現の大きく2類に分け、I類をさらに3つに分けた。しかし、現段階では容器と形態といった2者に分類するには後者のうち全体を窺える確実なものが2点しかなく、分類上の不安が大きい。したがって、ここでは現段階での分類であり、新しく資料が加われば別の妥当な分類を考えなければならない。

以上の分類をまとめると次のようになる。

I—A類は中期から存在しているが、後期に多く、分布は愛媛・兵庫・石川・愛知・静岡とI—B類に比べてやや狭い。5遺跡11例認められ、特に愛知県朝日遺跡で多く出土している。出土地別では包含層、土壌、溝がある。古墳時代後期の須恵器で鳥形瓶とされているものにつながってゆくと考えられる。

I—B類は6遺跡6例みとめられ、中期から存在する可能性がある。分布は福岡・愛媛・岡山・兵庫・愛知・千葉と最も分布範囲が広い。I—B類は古墳時代中期にも類例があり、先にあげた群馬県白石遺跡の他に和歌山県大日山I遺跡でも2点出土している。福岡県津古生掛墳丘墓や岡山県雲山鳥打遺跡1号墳丘墓では墳墓に使用され、岡山県百間川沢田遺跡出土のリアルな形態と考えあわせると、墳輪へ分岐していった可能性がある。出土地別では墳

丘墓・住居址・包含層で、一定していない。

I—C類は弥生後期末以降に出現し、小さなものが多い。4遺跡5例以上があり、木製品で1例存在する。分布は鳥取県・兵庫県・大阪府・奈良県・石川県で、I類のなかでは分布範囲が最も狭く、時期も限られている。水鳥をかたどったものが多い。

II類は前述のように2例しか認められず、小さなものと頭部だけのもの各1例である。岡山県と奈良県で出土しており、中期と後期末である。置くあるいは立てて使用したと思われる。

以上、本遺跡例も含め、弥生時代を中心とした鳥形土製品を25遺跡33例についてみてきたが、鳥形土製品の出現当初から鶏と水鳥をかたどったものの両者が存在している。

これらを遺構別にみると、中期の古い時期に属するものは、住居址や土壇・溝・ピットの遺構から出土しているものばかりであることがわかる。また、土壇から出土しているものは加茂遺跡・吉河遺跡・葦平遺跡等中期に属するものが多く、後期では唐古・鍵遺跡、古墳時代前期では籬向遺跡があるにすぎない。

一方、住居址から出土しているものには、中期初頭では福岡県下稗田遺跡、中期後半では岡山県さくら山遺跡、後期末では兵庫県大中遺跡、後期では愛知県南東山遺跡、古墳時代前期では千葉県南二重堀遺跡・東寺山遺跡がある。これらを見ると、住居址内での使用方法が考えられるものは、九州から始まり、時期を降るにしたがって東へ波及していった様子が窺える。

次に、出土地域を九州・近畿・東海等、府県単位よりも少し大きな地域に分けて、各分類別に時期的な流れを考えてみることにする。

I—A類のなかでは、中期中葉の兵庫県加茂遺跡が最も古く、中期末では静岡県葦平遺跡、後期では愛知県朝日遺跡と愛媛県中村松田遺跡、古墳時代前期では石川県漆町遺跡と続いている。したがって、I—A類については近畿地方で最も早く出現し、次いで東海地方、四国地方、北陸地方の順に出現していることがわかる。

I—B類では、中期中頃と考えられている愛知県瑞穂遺跡の採集品以外は、福岡県津古生墳丘墓、岡山県雲山鳥打墳丘墓、愛媛県宮前川北斎院遺跡、兵庫県大中遺跡、千葉県南二重堀遺跡、すなわち、東海・北陸を除いた九州・中国・四国・近畿・関東の各地で、弥生時代後期末～古墳時代前期の短い間にほぼ一斉に出現していることがわかる。

I—C類は鳥取県秋里遺跡、大阪府東郷遺跡、石川県漆町遺跡等、山陰・近畿・北陸で古墳時代前期になって出現している。

これまでみてきたように、弥生時代～古墳時代前期の鳥形土製品について若干の検討を加えてきたが、類例数が少ないことに加えて、力量不足から十分な検討ができなかった。類例の増加をまって、さらに検討を加えていく必要がある。

No	分類	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	種別	備考	文献
1	I-A類	寺中遺跡	兵庫県洲本市	方形周溝墓3北溝	弥生時代後期末			
2	I-A類	朝日遺跡	愛知県名古屋	61KL区SD01	弥生時代後期初頭(高歳期)			5
3	I-A類	朝日遺跡	愛知県名古屋	IV3D7区SD371	弥生時代後期後半(次山期)			5
4	I-A類	朝日遺跡	愛知県名古屋	III2E4区SD180	弥生時代後期初頭(高歳期)			5
5	I-A類	朝日遺跡	愛知県名古屋	IV3D11区黒色土	弥生時代後期初頭(高歳期)			5
6	I-A類	朝日遺跡	愛知県名古屋	II1A3区SD177	弥生時代後期後半(次山期)			5
7	I-A類	朝日遺跡	愛知県名古屋	IV1F23区黒色土下部	弥生時代後期初頭(高歳期)			5
8	I-A類	朝日遺跡	愛知県名古屋	II5E6区黒色土	弥生時代後期(高歳~次山)			5
9	I-A類	中村松田遺跡	愛媛県松山市		弥生時代後期			8
10	I-A類	歳平遺跡	静岡県磐田郡	P-1	弥生時代中期末~後期初頭			9
11	I-A類	加茂遺跡	兵庫県川西市	土壘2(市道11号)	弥生時代中期(III古)			10
12	I-A類	漆町遺跡	石川県小松市	白江ネンブツドウ南	古墳時代前期~中期			12
13	I-B類	瑞穂遺跡	愛知県名古屋	採集品	弥生時代中期?	水鳥形		13
14	I-B類	霧山鳥打遺跡	岡山県岡山市	1号墳丘墓	弥生時代後期後半	陶形	6固体出土	
15	I-B類	津古生掛古墳	福岡県小郡市	東側くびれ部~前方部	古墳時代前期初頭	陶形	数点出土	14
16	I-B類	宮前川北斎院遺跡	愛媛県松山市	西山地区A11区	弥生時代後期末~古墳前期	陶形?		15
17	I-B類	南二重堀遺跡	千葉県千葉市	69号住居址	古墳時代前期初頭	水鳥形		16
18	I-B類	吉田南遺跡	兵庫県神戸市	第17次調査SB07	古墳時代墳前期			18
19	I-C類	湊町遺跡	石川県小松市	サンパソワリ地区33号溝	弥生時代後期末~古墳前期	水鳥形		12
20	I-C類	藤向遺跡	奈良県桜井市	辻地区土壘4	古墳時代前期初頭	水鳥?	木製品	19
21	I-C類	大中遺跡	兵庫県加古郡	住居址1床面直上	弥生時代後期末~古墳前期	水鳥?		20
22	I-C類	東郷遺跡	大阪府八尾市	水溜まり(SX1)	弥生時代後期末~古墳初頭	水鳥?		21
23	I-C類	秋里遺跡	鳥取県鳥取市	B・10区	古墳時代前期	水鳥形		22
24	I-C類	秋里遺跡	鳥取県鳥取市		古墳時代前期	陶形		22
25	II類	さくら山遺跡	岡山県赤松郡	第3地点住居址	弥生時代中期末	鶴か?		23
26	II類	唐古・巖遺跡	奈良県磯城郡	第11次SK-03	弥生時代後期末	陶形		24
27	不明	下俣田遺跡	福岡県行橋市	C地区9号住居跡	弥生時代中期初頭	陶形?		25
28	不明	亀井遺跡	大阪府八尾市	SX-01墳丘下層	弥生時代中期後半	水鳥?		26
29	不明	中久世遺跡	京都府長岡京市	採集品	弥生時代中期?	陶形		27
30	不明	吉河遺跡	福井県敦賀市	土壘153	弥生時代中期	陶形		28
31	不明	南東山遺跡	愛知県春日井市	第1号住居址	弥生時代後期後葉	水鳥形	2点出土	29
32	不明	百間川沢田遺跡	岡山県岡山市	高繩手A区土壘溜5	古墳時代前期初頭			30
33	不明	服部遺跡	滋賀県守山市	旧河道A	古墳時代前期	水鳥形		31
34	不明	東寺山石神遺跡	千葉県千葉市	5号住居址4	古墳時代前期	陶形?		32

表4 弥生時代~古墳時代前期 鳥形土製品出土地一覧

最後になったが、I・II類の機能について若干付け加えておく。鳥形土製品はあくまで祭祀の機能が基本であると考えられることから、I類の容器については、祭祀的機能も備えた実用品であり、そのため、墳墓への供献用へ分岐していったものと考えられる。したがって、II類については、その使用方法から祭祀のみの用途と考えられる。

〔註〕

- (1) 安藤安信「土製品」「朝日遺跡」愛知県教育委員会 1982年
- (2) 金岡 恕「神を招く鳥」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社 1982年
- (3) 水野正好「弥生時代のまつり—その成立と展開—」『歴史公論』第8巻第9号弥生人の精神生活雄山閣 1982年
- (4) 井上義光「祭祀研究の一視点—鳥形土製品を中心として—」『木永先生未寿記念献呈論文集』明新社 1985年
- (5) 安藤安信他「土製品」「朝日遺跡」愛知県教育委員会 1982年  
 館田 一「朝日遺跡の鳥形土器について—鳥形土器を考えるにあたって—」『年報 昭和62年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1988年
- (6) ここでいう「鳥形製品」は館谷氏の定義をそのまま援用し、鳥形木製品・鳥形土製品・鳥形土器、鳥の線刻画や鳥のスタンプ文様を施した土器・青銅器等、鳥を表現した遺物全般を包括する意味で用いる。
- (7) 4表には熊本県宮地遺跡の船形土器、山口県天上遺跡の皮袋形土器、大阪府高塚山遺跡の鳥形土器、兵庫県大中遺跡の靴形土器等は含んでいない。これらの中には鳥形土器に似たものも含まれているが、今回分類したものと同形態のものがいないため、除外した。
- (8) 『月刊文化財発掘出土情報』7 ジャパン通信社 1987年
- (9) 柴田 実「静岡県蔵平遺跡発見の鳥形土器」『考古学雑誌』第66巻第1号 1980年
- (10) 国野慶隆・田中達夫「川西市加茂遺跡—市道11号線建設に伴う発掘調査報告—」川西市教育委員会 1982年
- (11) 小原貴樹・杉谷愛象他「目久美遺跡 加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」米子市教育委員会(加茂川改良工事関係埋蔵文化財発掘調査団)・鳥取県河川課 1986年  
 目久美遺跡の鳥形土製品は包含層から出土しているが、前期の単純包含層ではなく、時期決定には問題が残っている。
- (12) 田嶋聖人「漆町遺跡」石川県埋蔵文化財センター 1982年
- (13) 吉川富夫「尾張岡端池発見の動物形土器」『考古学』第8巻第9号 1937年
- (14) 宮田浩之「津古生掛遺跡II みくに對第二十地区區整理事業関係埋蔵文化財調査報告9」小都市文化財調査報告書第44集 小都市教育委員会 1988年
- (15) 大滝雅綱・須藤教子「宮前川遺跡—中小河川改修事業埋蔵文化財調査報告書—」(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1986年

- (16) 古内 茂「千葉東南部ニュータウン12—南「重堀遺跡」住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部・(財)千葉県文化財センター 1983年
- (17) 井上 太「群馬県藤岡市白石出土の水鳥形注口土器」『考古学雑誌』第65巻第3号 1979年
- (18) 神戸市教育委員会の西岡誠司氏に御教示をいただいた。
- (19) 石野博信・関川高功ほか『難向』奈良県桜井市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1976年
- (20) 播磨町郷土資料館にて発見。同館の山本二郎氏に御教示をいただいた。
- (21) 米田敏幸・嶋村友子「1.東郷遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告12 (昭和60年度国庫補助事業) 八尾市教育委員会 1986年
- (22) 加藤利晴『鳥取県秋里遺跡1』鳥取市文化財調査報告書Ⅱ鳥取市教育委員会 1978年  
前田 均・杉谷美恵子・平川 誠『秋里遺跡発掘調査概要報告書—秋里下水終末処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—』鳥取市文化財報告書15 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1983年
- (23) 神原英朗『用木山遺跡』岡山県雲山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(4)岡山県山陽町教育委員会 1977年  
山陽町郷土資料館の則武忠直氏の御好意により発見。同氏には御教示もいただいた。
- (24) 寺沢 薫『唐古・健遺跡第10次・11次発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報』1980年。奈良県立橿原考古学研究所 1980年
- (25) 『下押田遺跡発掘調査概報 IV』行橋市文化財調査報告書第13集行橋市教育委員会 1983年
- (26) 中西靖人・宮崎孝史・西村寿文他『亀井遺跡—寝屋川南部流域下水道事業長古ボンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』(財)大阪文化財センター 1982年
- (27) 高橋美久二氏の説明。「〈シンポジウム〉鶏の考古学」『古代学研究』第114号 1987年
- (28) 中司照世・工藤俊樹・月輪 泰『古河遺跡発掘調査概報』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 2 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1986年
- (29) 宮川芳照『鳥形土器』『南東山遺跡』春日井市遺跡発掘調査報告第4集春日井市教育委員会 1970年
- (30) 二宮治夫他編『百間川沢田・長谷遺跡2—旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査Ⅳ—』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1985年
- (31) 大橋信弥・山崎秀二他『服部遺跡発掘調査概報』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1979年
- (32) 沼沢 豊他『東寺山石神遺跡』(財)千葉県文化財センター 1977年
- (33) 吉田宜夫・古賀直樹他『日本道路公団近畿自動車道和歌山線埋蔵文化財調査報告』和歌山県教育委員会 1972年  
和歌山県史編纂委員会『和歌山県史 考古資料』和歌山県 1982年

### 3 S(Z)字形浮文

本遺跡の東溝から出土した(254)の大型の壺(あるいは器台)の口縁部外面には、装飾として擬凹線文や複合鋸齒文のほか、S字形の浮文が数ヶ所に横位に貼りつけられていた。

この文様をもった土器は本遺跡ではこの1点のみであり、他には全く認められなかった。本項ではこのS(Z)字形浮文について若干の検討を行う。

弥生土器を観察すると、表面がS(Z)字形の意匠で飾られている場合がたまに見受けられる。これらの意匠の中には、最も多いものとしてスタンプ文があり、次いで貼り付け浮文が多いようである。その他には篋描き文や彩文が存在しているが、量的には少ない。

次に、管見にふれたS(Z)字形浮文について兵庫県を中心として集め、確認できたものを示したのが表6である。分布は西は愛媛県から認められ、東は石川県まで存在している。その他の各地の報告例に逐一あつたわけではないが、萬谷幸美氏が集成したものと分布範囲が重なっている。これらが正確な分布を示しているのか否かは不明である。兵庫県が多いのは比較的丹念に集めたためである。

時期は、弥生時代前期のものを除外すると、後期から存在しており、最も新しいもので布留期であり、装飾が行われた時期は極めて限られているようである。

器種としては、壺が最も多く、次いで器台、高杯の順になっている。施文部位は全て口縁部に限られているが、岡山県西奥遺跡の1点のみ体部に貼り付けている。また連続して施すものは皆無であるが、兵庫県吉福遺跡のように間隔をつめて口縁部全体に施している。多く施すのはこの1例のみで、他は全て1ヶ所ないし数ヶ所に貼り付けているものばかりである。

また、出土例のうち、S字とZ字形それぞれが占める割合は、1つの個体に両方貼り付けているものが2例あるが、それ以外では23例中15例がS字形、8例がZ字形で、S字形の方が全体の約7割を占めている。

出土遺構別では、採集品の他は土壌、包含層、溝、住居址があるが、一定していない。

これらの文様は単独で施される場合は25例中3例と非常に少なく、凹線文・擬凹線文・篋描波状文・鋸齒文・竹管文などと共に使用されている。文様の組み合わせには凹線文と波状文が多いが、それぞれの地域・時期にもついた施文であると考えられる。

次にS(Z)字形浮文の文様自体について、もう少し細かく見ることにする。

文様を詳しく見ると、非常に丁寧につくってあるものから、粗雑で簡単なものまで、また、円形浮文の上に竹管文を加えて巻きの状況を示しているものまである。これらをもう少し整理してみると、

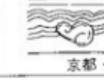
IA	 兵庫・吉福
IB	 滋賀・吉身中
IC	 京都・岡崎
II	 大阪・美園

表5 S(Z)字形浮文分類表(縮尺1/5)

No.	分類	遺跡名	所在地	器種	浮文形態	他文様との組み合わせ	註
1	IA	国府遺跡	大阪府藤井寺市	器台?	Z字形	擬凹線文	3
2	IA	東奈良遺跡	大阪府茨木市	壺	Z字形		4
3	IA	吉福遺跡	兵庫県佐用郡	器台	S字形	凹線文	5
4	IA	西奥遺跡	岡山県御津郡	台付壺	S字形	2条の突帯	6
5	IA	宮前川遺跡	愛媛県松山市	壺	S、Z字形	波状文	7
6	IB	竹松遺跡	石川県松任市	器台	Z字形	棒状波状・刻目文・擬凹線文	8
7	IB	吉身中遺跡	滋賀県守山市	壺	S字形	擬凹線文・直線文・竹管文	9
8	IB	越水山遺跡	兵庫県西宮市	壺	S字形	波状文	10
9	IB	東神吉遺跡	兵庫県加古川市	器台?	S字形	波状文	11
10	IB	東溝遺跡	兵庫県加古川市	壺	Z字形	竹管文・波状文	12
11	IB	大中遺跡	兵庫県加古郡	壺	S字形		13
12	IB	榑東遺跡	兵庫県姫路市	壺	S、Z字形	擬凹線文	14
13	IB	常全遺跡	兵庫県揖保郡	壺	Z字形		15
14	IB	寺中遺跡	兵庫県洲本市	壺?	S字形	擬凹線文・鋸齒文	
15	IC	南新保D遺跡	石川県金沢市	高杯	S字形	擬凹線文・刻目目文	16
16	IC	岡崎遺跡	京都府京都市	壺	S字形	波状文	17
17	IC	安満遺跡	大阪府高槻市	壺	S字形	波状文	18
18	IC	谷町筋遺跡	兵庫県三原郡	壺?	S字形	鋸齒文	19
19	IC'	常全遺跡	兵庫県揖保郡	壺	S字形	竹管文・波状文	15
20	II	大垣内遺跡	兵庫県西脇市	壺?	S字形	山形文・鋸齒文	20
21	II	長越遺跡	兵庫県姫路市	壺?	Z字形	擬凹線文	14
22	II	美園遺跡	大阪府八尾市	壺	S字形	波状文	1
23	II	美園遺跡	大阪府八尾市	壺	S字形	波状文	1
24	II	美園遺跡	大阪府八尾市	壺?	Z字形	波状文・直線文	1
25	II	美園遺跡	大阪府八尾市	器台	Z字形	波状文・直線文	1

表6 S(Z)字形浮文を有する土器出土地一覧

次のようになる(表5)。

I類は貼りつけのみのものである。巻きの状態によりA～Cの3種類に分かれる。

IA類は巻きが3重程度のものである。丁寧に大きなものが多く、形も整っている。

IB類は2重程度の巻きで、やや粗雑な形のものがあり、IA類に比べると文様も小さい。

IC類は巻きが殆どなく、鉤状に反転した程度の小さなものである。

II類は両端の巻きの上から竹管文を施す、あるいは、巻きを省略した円形浮文を貼り付け、その上から竹管文を施しているものである。

I類については、型式学的にIA類からIC類への変化がたどれると考えられるが、時期的にもう少しみてみることにする。

IA類に分類されるもののうち、国府遺跡の土器は弥生後期でも末までは下がらないものと思われ、宮前川遺跡のものは後期の所産である。西奥遺跡の土器は後期後半に属し、吉福遺跡では弥生後期末～古墳初頭に位置づけられている。最も新しいものは東奈良遺跡の土器で、庄内期に編年される。IA類は、S(Z)字形浮文が存続する時期でも比較的古い時期に多い。

I B類では、後期後半と考えられるものは3例あり、後期末が1例、後期末～古墳初頭が5例である。I A類に比べ、新しい時期のものが多い傾向が窺える。

I C類は管見では4例しか認められないが、後期後半が2例、後期末～区内が1例、区内～布留が1例で、I類の中で最も新しいものを含んでいる。なお、大型が1点出土している。

II類では、6例のうち4例までが大坂府美園遺跡で出土したもので、後期後半と後期末のものを含んでいる。他の2例は後期末ないし古墳時代初頭に属する。時期的にはI A類やI B類に重なると思われる。以上をまとめると、I A類は形式的・時期的に最も古く、次いで、I B類、I C類へと変化していくようである。また、II類はI A類やI B類と併行して使用されていたと考えられるが、使い分けについては今後の課題である。

なお、この文様を施す土器は、大型のものや特殊な形態のものに多く認められ、今里氏という「祭紋」としての機能が最も妥当であると考えられる。

〔註〕

- (1) 萬谷幸美「美園遺跡出土のS字状浮文土器について」『美園—近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—』大坂府教育委員会・(財)大坂文化財センター 1985年
- (2) 今里幾次「播磨弥生式土器の動態(二)」『考古学研究』第16巻第1号 1969年
- (3) 直良信夫「二、三弥生土器の紋様について」『考古学雑誌』第19巻第4号 1929年
- (4) 「東京良遺跡発掘調査概報I」東京良遺跡調査会 1979年
- (5) 石野博信・松下 勝他「播磨古福遺跡—古墳時代前期土器の調査—」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集 兵庫県教育委員会 1974年
- (6) 光永良一「西奥遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告63 岡山県教育委員会 1986年
- (7) 大滝雅嗣・須藤敦子「宮前川遺跡—中小河川改修事業埋蔵文化財調査報告書—」(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1986年
- (8) 四柳嘉章「竹松遺跡出土の土器」『土師式土器集成 本編I』1971年
- (9) 大橋信也・谷口 徹・大橋美和子「吉見中遺跡発掘調査報告書—守山市吉見町所在—」滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1982年
- (10) 武藤 誠羅「新修芦屋市史」資料篇1 1976年
- (11) 兵庫県教育委員会 松下 勝氏の御指示による。
- (12) 石野博信・松下 勝「播磨・東播磨弥生遺跡II」兵庫県教育委員会 1969年
- (13) 上田哲也他「播磨大中」1965年
- (14) 松下 勝他「播磨長越遺跡」兵庫県文化財調査報告書第12冊兵庫県教育委員会 1978年
- (15) 磯崎正彦他「兵庫県太子町宮全遺跡調査概報」『兵庫県埋蔵文化財調査報告書』4 兵庫県教育委員会 1971年
- (16) 高木哲郎他「金沢市南新保D遺跡—金沢駅西第二土地区画整理事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告

一」金沢市文化財紀要26 金沢市・金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会 1981年

- (17) 飛野博文「山城の弥生後期の土器」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 1983年
- (18) 「安曇遺跡発掘調査報告書—9地区の調査—」高槻市文化財調査報告書第10冊 高槻市教育委員会 1977年
- (19) 昭和59年度に兵庫県教育委員会が調査。平成元年度調査報告書刊行予定。
- (20) 昭和62年度に兵庫県教育委員会が調査。平成2年度調査報告書刊行予定。

#### 4 中世の遺物

土師器は土壌・溝より50個体分以上が出土しており、その大半が皿である。それらは、いわゆる「白色系」土師器皿と「褐色系」土師器皿に大別できる。

「白色系」土師器皿は径9.7cm・径15.2cm・径17.1cmと法量の異なるものが出土しており、いずれも横田編年のB3タイプに該当する。

「褐色系」土師器皿は法量からは口径7cm・器高1.5cm前後の小皿、口径11cm・器高2.5cm前後の中皿、口径13cm・器高2～3cm前後の大皿に分かれる。大皿はさらに、器高2cm前後の浅皿と3cm前後の深皿に分かれる。これらの「褐色系」土師器皿はまたロクロ回転・底部切り離し技法によって3種（左回転・右回転・静止糸切り）に分けることができる。

左回転ロクロによる製品は大皿にのみ見受けられる。丸く立ち上がる器形・薄い器壁・クサリ線を含んだ精良な胎土・浅黄橙～灰白色調・底部外面に板目状斑痕という特徴をもつ。

右回転ロクロによる製品は、浅黄橙色調で密な胎土・薄い器壁をもつ精製品と橙色調で石英粒を多く含む胎土・甘い焼成・厚い器壁をもつ粗製品に分かれる。深皿は底部部境のナデによって稜をもつ。静止糸切り底を持つ製品は(178)の1点のみで、厚い器壁をもつ粗製品である。

須恵器は溝15より捏ね鉢が出土した。その内(210)は、魚住窯赤根川支群産と考えられる。江井ヶ島沖海あがり品や草戸千軒町遺跡S G3060下層・S D3140に類例を求められる。(208・209)は荻野編年VI期、(210)はVII期に相当すると考えられる。

陶器は碗・擂鉢が出土している。碗は古瀬戸（黄瀬戸）碗が土壌4・溝15・16より出土している。いずれも小長曾窯期にあたる製品と考えられる。擂鉢は溝15より出土しているが、いずれも備前焼擂鉢である。水の子岩や胡耶山下窯址に類例があり、備前IVA期にあたる。

瓦器にはいずれも小片であったが碗・皿がみられる。大阪南部・和歌山の編年案と比較すれば、外面のミガキの省略、内面の2分割のミガキの存在といった所から、13世紀前半あたりの年代が考えられる。

本遺跡の中世遺物を主として構成する溝15・16、土壌4・6・7・8の出土遺物は、相互

に同器種・同時期と考えられる遺物を内に入れている。したがって、上記の遺構はほぼ同時期のもと考えられ、各器種の編年による年代の提示を勘案すれば、15世紀代中頃を中心とした時期を想定出来よう。瓦器が示す13世紀代をのぞけば、他の時期を示す明確な遺物を出土した遺構はなく、13・15世紀代の2時期が寺中遺跡の中世での主な活動時期であったと考えられる。

〔註〕

- (1) 横田洋三「土師器皿の分類と編年」『平安京跡研究調査報告第11輯 平安京左京四条三坊十三町』古代学協会 1984年
- (2) 大村敬通・水口富夫「魚住古窯跡群」兵庫県教育委員会 1983年
- (3) 福井照道他「草戸千軒町遺跡 第35・36次発掘調査概要」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1986年
- (4) 荻野繁香「西日本における中世須恵系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会会誌』福井考古学会 1985年
- (5) 宮石宗弘他「瀬戸市史 陶磁史篇二」瀬戸市役所 1981年
- (6) 伊藤 晃「15～17世紀の備前焼」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985年
- (7) 渋谷高秀「紀伊の中世土器」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985年
- (8) 横田洋三「平安京跡研究調査報告第12輯 平安京左京三坊三十一町」古代学協会 1984年

# 土器観察表

## 弥生土器

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
1	壺	住居址A-2	口径(13.8)	1/8	外反する口縁部。端部は上下に拡張され、面を持つ。 調整不明。	外) 浅黄橙 7.5YR8/4 内) 黄橙 7.5YR8/8	
2	甗	住居址A-2	口径(15.7)	1/8	ほぼ直立する頸部が僅かに外反して口縁部となる。口縁部は内側に僅かに突出し、凹面となる。 口縁部は内外面ともナデ。腹部内面は指押えの痕跡。頸部外面調整不明。 口縁下に3条の凹線を施す。	におい橙 7.5YR7/3	
3	甗	住居址A-2	口径(16.6)	1/6	体部から屈曲して「く」の字状に開く口縁部。端部は上方に狭み出され、凹面を作る。 内外面とも調整不明。 口縁端面には2条の凹線を施す。	外) におい橙 5YR7/3 内) 橙 5YR7/6	
4	甗	住居址A-2 中央土壌内	口径(31.2)	1/6	体部から外上方に開く口縁部。端部は肥厚して面をなす。 調整は不明。 頸部には2条の凹線を施す。	黄橙 7.5YR7/8	
5	高杯	住居址A-2	口径(27.5)	1/8	浅い体部から屈曲して、外上方に口縁部が立ち上がる。口縁端部は僅かに内側に突出し、内傾した面を持つ。 内外面とも調整不明。 口縁部外面の上部に1条、下部に2条の凹線を施す。	外) 灰白～浅黄橙 ～明褐灰 7.5YR8/2 ～8/3～7/1 内) 灰白～明褐灰 7.5YR8/2 ～7/1	
6	鉢	住居址A-2 床面直上	口径(28.7)	1/13	内彎して外上方に開く口縁部。端部は内側に突出して凹面となる。 口縁部外面はヨコナデ。 内面の調整不明。 口縁部外面に3条の凹線を施す。	外) 黒褐 7.5YR3/1 内) 浅黄橙 7.5YR8/3	
7	脚部	住居址A-2	底径(14.6)	1/5	斜め下方に開く脚部。裾端部は外上方に拡張され、裾端面は凹面をなす。 外面は縦方向の寛磨き。内面は不明。	橙 7.5YR7/6	
8	壺	住居址A-2 中央土壌内	底径(8.3)	1/3	平底。 底部周囲の外面に指押え痕。	外) 橙 7.5YR7/6 内) 灰白 7.5YR8/2	底部下端に黒斑あり。
9	甗 B2	住居址A-2	腹径(13.8)	1/5	体部から「く」の字状に開く口縁部。最大径を体部中段の上位におき、あまり肩は張らない。 体部外面は上半をほぼ水平方向の叩き、下半は右上がりの叩き。頸部外面に縦方向の躬毛目が残る。	橙 5YR6/8	体部中位に黒斑あり。

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色 調	備 考
10	壺 A 2	住居址A-1	口径(19.2)	1/3	外方向に立ち上がる頸部が外反して 口縁部となる。口縁端部はやや下方 に拡張して面をなす。	橙 7.5YR7/6	
11	壺 A 2	住居址A-1	口径(16.1)	1/6	外反して開く口縁部。端部は下方に 粘土紐を貼り付け拡張する。 外面はヨコナゲ、内面調整不明。	外) におい赤褐 5YR5/3 内) におい橙 5YR7/4	
12	壺 D 1	住居址A-1	口径(24.8)	1/8	頸部は外反し、口縁部との境には明 瞭な稜を持つ。口縁部は外反し、端 部は丸い。 調整不明。	外) 橙 7.5YR7/6 内) 浅黄橙 7.5YR8/6	
13	高 杯 A 1	住居址A-1	口径(22.4)		大きく外反する口縁部。端部は丸い。 体部と口縁部の境には明確な稜を持 つ。 調整不明。	外) 橙 7.5YR7/6 内) 浅黄橙 7.5YR8/6	
14	底 部 (壺)	住居址A-1 壁溝内	底径 4.4		ややドーナツ状の底部から、内彎す る体部が外上方に立ち上がる。 底部内面に指押え、指ナデ痕。体部 内面は指ナデ。底部外面は、指ナデ。 体部外面は、右上がりの叩き(5条/ 3cm)。	外) 橙 2.5YR6/6 内) 橙 5YR6/6	胎土に金雲 母を含む。
15	底 部 (壺)	住居址A-1 南壁溝内	底径 4.9		底部からやや内彎して、外上方に立 ち上がる体部。底部内面に工具によ る圧痕が残る。	橙 5YR7/6	
16	底 部	住居址A-1 壁溝内	底径 5.0		中央の膨らんだ底部。 底部の周囲は指押え。底部内面にも 指押えの痕跡。	外) 橙 5YR6/8 内) 浅黄橙 7.5YR8/3	
17	脚 部 (高杯)	住居址A-1			中空の短い脚柱部が下端でやや外反 する。 脚柱部内面は絞り目が残り、外面は 縦方向の磨き。	外) 橙 7.5YR7/6 内) 浅黄橙 7.5YR8/3	
18	壺 C 1	住居址A-3 壁外溝	口径 18.4	2/3	やや外傾して立ち上がる細い頸部か ら、外反して外上方に開く口縁部。 端部下に粘土紐を貼り付け、端面を 上下に拡張する。体部は中位が張り 下半は欠損。 全体に髹表剥離し、調整、文様等不 明。	外) におい橙 5YR7/8 内) 橙 5YR7/8	凹跡の痕跡 残る?
19	底 部 (壺)	住居址A 3 壁外溝	底径 4.8		突出した底部から、外上方に大きく 開く体部。 体部外面は部分的に磨きが残る。 体部内面はナデ調整。	外) 橙～褐灰 5YR7/6 ～4/1 内) 淡橙 5YR8/3	18と同一個 体と思われ る。

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
20	底部 (壘)	住居址A-3 壁溝内	底径 2.3		小さな底部から内彎する体部が外上方に立ち上がる。底部は平底。体部外面は、縦方向の突起。底部外面ナデ。	橙 7.5YR7/6	
21	底部 (壘)	住居址A-3 壁外溝	底径 4.0		上げ底の底部から外上方に体部が立ち上がる。体部外面右上がりの叩き、内面板ナデ。底部外面はナデ、底部周囲は指押えの後、縦方向のナデ。	外) 橙 5YR7/8 内) 浅黄 5YR7/3	
22	脚部 (高杯)	住居址A-3 壁外溝			短い脚柱部から大きく開く裾部。調整不明。	橙 5YR6/8	
23	壘 A3	住居址A-4	口径 19.8	口縁部完	筒状の頸部から外反して、外上方に開く口縁部。端部は上下に拡張される面をもつ。内面はナデの後、横方向の突起。外面調整不明。頸部と体部の境には2段に刺突文を施した1条の貼付突起を四す。端面には4条の凹線文を施す。	淡橙 5YR8/4	
24	底部 (壘)	住居址A-4 中央土境	底径 4.1		底部から内彎して立ち上がる体部。内外面とも調整不明。	橙 7.5YR7/6	
25	壘	住居址A-4 中央土境	底径 3.1		細長い体部。底部の周囲には指押えの痕跡が残る。体部の外面は、右上がりの叩き。内面調整不明。	外) におい橙 7.5YR7/3 内) 橙 5YR7/6	
26	壘 B2	住居址A-5	口径(14.4)	1/6	比較的肩の張った体部から「く」の字状に外反する口縁部。口縁部は頸部付近で、やや内彎する。体部外面の一部に水平方向の叩きが残る。他は調整不明。	におい橙 5YR6/3	
27	鉢 B	住居址A-5	口径 11.2 器高 6.3 底径 2.9	完	内彎気味の体部がそのまま伸びて、口縁部となる。体部外面右上がりの叩き(4条/2cm)。口縁部内面はココナデ。他は調整不明。	外) におい橙 7.5YR6/4 内) 橙 5YR6/6	
28	底部 (壘か鉢)	住居址A-5	底径 3.9		やや上げ底の底部から、内彎する体部が外上方に伸びる。体部外面右上がりの叩きの後ナデを施す。底部周囲の外面に指押え痕が残る。底部外面はナデ。	明褐 7.5YR5/8	黒斑あり。
29	底部 (壘か鉢)	住居址A-5	底径 4.9		やや上げ底気味の底部から、大きく外上方に開いて伸びる体部。体部外面は突起、内面はナデ。底部外面はナデ、底部周囲の外面は指押えの後ナデ。	におい赤褐 5YR5/3	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
30	ミニチュア鉢	住居址A-6	口徑 5.0 器高 8.15 底徑 3.1	完	底部から内彎して伸びた体部が、中位からほぼ直立して口縁部となる。体部、底部ともナデ調整。体部の外面に凹凸が多くみられる。	橙 5YR6/6	
31	底部(壁?)	住居址A-6	底徑 3.2		小さな底部から、外上方に立ち上がる体部。 調整不明。	外) 橙 7.5YR7/6 内) 明褐色 7.5YR7/2	
32	脚部(器台)	溝1	底徑 17.2	1/2	筒状の脚柱部がゆるく外反して下方へ開き脚座部となる。 外面は柱状部から裾端部付近まで、縦方向の彫磨き、裾端部は内外面ともナデ調整。内面は脚柱部の上半に絞り目が残り脚柱部下半、裾部には刷毛目(11本/1.2cm)が部分的に残る。 杯部は接合。 裾部には1条の沈線文を施し、その上部に径3mmの凹形刺突文を施す(約12個、3mm間隔)。 裾部と柱状部の間には凹形透し孔が施されているが数不明。	橙 5YR7/6	
33	甃B4	A地区包含層(住4・6の上面)	口徑(13.8)	1/6	内傾する頸部が外彎して口縁部となる。 口縁内面横方向の彫磨き。他は調整不明。 口縁端部は下方に拡張され、1条の凹線文を施す。	浅黄橙 7.5YR8/3	
34	甃B2	A地区包含層	口徑(20.6)	1/2	ほぼ直立した頸部から、大きく外反する口縁部。端部は上下に肥厚し面をなす。 端面には1条の凹線文と刻み目を施す。	外) 橙 5YR6/8 内) 明赤褐 5YR5/8	
36	甃	建物址2 Pit 1	口徑(16.5)	1/7	肩の張らない体部から、外上方に「く」の字状に屈曲して開く口縁部。端部は上方に積み上げ、端面を拡張する。 口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面、水平方向の叩き後、刷毛(8本/cm)調整。内面ナデ。 口縁端面に2条の凹線文を施す。	にぶい橙 7.5YR7/4	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
37	壺	建物址2 Pt 1	口径 18.4	1/2	外上方に伸びる頸部から外反して、水平に開く口縁部。端部は上下に拡張して端面を作る。 口縁部は内外面ともヨコナデ。頸部は外面ヨコナデの後、縦方向の板ナデ、内面ヨコナデ。 口縁端面に9本単位の縞溝波状文を施し、内側にも帯による刺突文を施す。頸部外面には3条の凹線文を、肩部は縞状文を施す。	にぶい橙 7.5YR7/4	
38	高杯	住居址B-4	口径(23.8)	1/4	外上方に開く体部から、屈曲して立ち上がる口縁部。端部は面を持つ。杯部は縦方向の縞磨き。他は調整不明。 口縁部下端に2条の凹線文。	浅黄橙 7.5YR8/6	
39	高杯	住居址B-4	口径(19.6)	1/7	水平に開いた後、割曲して下方に垂下し、巾広い端面を持つ口縁部。口縁上端部は僅かに内側に突出する。	橙～褐灰 5YR7/6 ～4/1	二次焼成のためか色調が赤変。
40	器台 B 1	住居址B-2	口径(16.2)	1/6	外上方に開いた後、やや外反する口縁部。端部は下方に粘土紐を貼り付け、端部を拡張する。 端面には3条の凹線文を施す。調整不明。	にぶい橙 ～明褐灰 7.5YR7/3 ～7/2	内面に黒斑あり。
41	壺	住居址B 2 排水溝	口径(17.7)	1/5	外方に開く口縁部。端面は下方に拡張し、5条の凹線文を施す。 内面はヨコナデ後、横方向の縞磨き。外向ナデ。	明赤褐 2.5YR5/6	胎土にクサリ砂を含む。
42	壺 B 2	住居址B-2	口径(13.3) 器高 15.4 腹径 13.0 底径 2.9	1/5	口縁部は「く」の字状に開き、やや内弯する。端部は丸い。体部の中位に最大径を持ち、底部は小さな上げ底となる。 体部外面下半は右上がりの叩き(4条/1.5cm)。上半は水平叩き(3条/1.5cm?)。体部内面はナデ。口縁部は調整不明。	外) 橙 5YR7/8 内) 淡橙 5YR8/4	
43	壺 A 2	住居址B 2	口径(16.9) 器高 27.0 腹径(18.3) 底径(3.8)	1/3	体部から外上方に立ち上がった後、外反して開く口縁部。体部は細長く、中位に最大径をもつ。底部は突出する。 体部外面は下半が右上がり、中位がやや右上がり、上半が右上がりの叩き(5条/2.4cm)。 体部内面はナデ。口縁部は内外面ともナデ。 体部下半に接合痕が残る(分割法)。	外) 橙 ～にぶい橙 5YR6/8 ～4/3 内) 橙～褐灰 5YR6/8 ～4/1	

No.	器種	出土地区 遺構層位	流量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
44	甕 A1	住居址B-2	口径(15.0) 腹径(17.1)	1/3	体部から外上方に立ち上がった後、 外反して開く口縁部。体部は中位より やや上が最大径となり、長い体部 と思われる。 体部外面の上半は水平方向の叩き、 下半は右上がりの叩き(2条/cm)。 内面は板ナデ。口縁部外面縦方向の 板ナデ。内面左上がりの板ナデ。		
45	底部 (甕)	住居址B-2 中央土壇周囲	底径 4.2	2/3	平底の突出した底部から、外上方に 開く体部。 体部外面右上がりの叩き。内面ナデ。 底部内面に板状工具の爪痕が残る。	橙 5YR6/8	
46	底部 (甕)	住居址B-2	底径 4.3	1/2	傷かに上げ底の底部から、内押しで 外上方に立ち上がる体部。 体部外面右上がりの叩き(4条/1.5 cm)。内面板ナデ。底部外面周囲に指 押し痕。	外) 浅黄橙 7.5YR8/2 灰褐 5YR5/2 内) ぶい褐 ~黒褐 7.5YR5/4 ~3/1	
47	底部 (甕)	住居址B-2	底径 4.8		上げ底気味の底部。 底部の外周はナデ。底面には指押え の凹凸。体部外面は、右上がりの叩 き後ナデ。	明赤褐 5YR5/6	
48	底部 (甕)	住居址B-2 中央土壇付近	底径 4.4		底部から外上方に立ち上がる体部。 外面は叩き。叩きは右上がりのもの と右下がりの両方みられる。	ぶい橙 5YR7/4	内面に黒斑 あり。
49	底部 (甕+鉢)	住居址B-2 壁溝	底径 3.7		ドーナツ状の上げ底の底部。 体部の外面は右上がりの叩き(6条/ 3cm)。 内面調整不明。	外) 橙 7.5YR6/6 内) 橙~褐灰 5YR6/6 ~6/1	
50	底部 (甕+鉢)	住居址B-2	底径 4.3		上げ底の底部から、内押しで外上方 に開く体部。 調整不明。	外) 明赤褐 10YR7/6 内) 黄橙 7.5YR7/8	
51	底部 (甕)	住居址B-2	底径 4.1		底部から外上方に立ち上がる体部。 底部の穿孔は未完成。 外面は右上がりの叩き(4条/2cm)。 内面板ナデ。	明赤褐 5YR5/6	胎土に金箔 母少量含む。
52	底部 (鉢)	住居址B-2 中央土壇付近	底径 5.0		下方に開いて台状となる、上げ底の 底部。 内外面ともナデ。	ぶい橙 7.5YR7/4	

No	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
53	鉢 C	住居址B-2	口径 13.0 器高 7.3 底径 2.9	ほぼ 完	小さな上唇底の底部から、内彎して立ち上がる体部。口縁端部は丸い。底部外面周囲に指押え痕が残る。	明赤褐 2.5YR5/6	
54	鉢 A 2	住居址B-2	口径 22.9 器高 10.3 底径 4.4	ほぼ 完	丸底に近い平底の底部から内彎して外上方に立ち上がる体部。口縁部は体部から外反し、直線的に外上方に伸びる。端部は丸い。体部上半に縦方向の寛磨きが部分的に残る。	外) 淡橙 5YR8/4 内) 淡橙～褐灰 5YR8/4 ～5/1	
55	鉢 A 3	住居址B-2	口径(22.6) 器高 8.0 底径 (3.8)	1/2	やや突出した平底の底部から外上方に開いた後、内彎する体部。口縁部は体部から外反して開き、端部は丸い。口縁部内面は横方向の寛磨き。体部内面は縦方向の寛磨き。	外) 浅黄橙～褐灰 7.5YR8/6 ～5/1 内) 橙 5YR6/8	
56	鉢 A 3	住居址B-2	口径(29.8)	1/8	上端で内彎する体部に、大きく外反する口縁部。口縁端部は面を持つ。口縁部外面は縦方向、体部上半は横方向、体部下半は縦方向の寛磨き。口縁部内面は横方向の寛磨き。体部内面は左上がりの寛磨き。	橙 5YR7/6	
57	鉢 A 3	住居址B-2	口径(38.2) 器高(12.35) 底径 5.2	1/10	丸底に近い平底の底部から大きく外方に開く体部。底部から体部外面寛磨き。内面寛磨き。	外) 褐 7.5YR4/4 内) 橙 7.5YR7/6	
58	舞台 A	住居址B-2	口径 22.3	1/2	斜め上方に伸びる体部に、ほぼ直立した後、外反する口縁部が付く。口縁端部は面を持つ。体部外面は縦方向の寛磨き。内面は口縁部、体部とも横方向の寛磨き。口縁部外面には11本/1.8cm単位の縞縞波状文を施した後、2個1組の竹黄門形浮文を貼り付ける。	明褐 7.5YR5/6	
59	高杯 B 1	住居址B-2	口径(15.2)	1/11	短く外上方に開く脚柱部から、外反して開く裾部。体部は碗形を呈する。口縁部は短く立ち上がる。調整不明。	浅黄橙 7.5YR8/4	
60	脚部 (高杯)	住居址B-2	底径 (13.4)		脚柱部から大きく外反して開く裾部。端部は丸い。脚柱部内面横方向のナデ、絞目が残る。	橙 7.5YR7/6	

№	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色 調	備 考
61	ミニチュ ア型	住居址B-2	底径 3.4	2/3	突出する底部から内側してほぼ直立する体部。 体部外面に部分的に叩き目が残る。 口縁端部欠損。	外) 浅黄橙 10YR8/4 内) 橙 7.5YR7/6	
62	壺 A 2	住居址B-1 屋内溝	口径(16.4)	1/8	外上方に開く口縁部。端部下に粘土 積を貼り付け下方に拡張した端面を 作る。 調整不明。 端面には1条の凹線文を施す。	浅黄橙 7.5YR8/4	
63	底 部 (壺)	住居址B-3 東壁溝	底径(4.4)		Fーナツ状の上げ底の底部。	浅黄橙 7.5YR8/4	
64	壺 D 2	溝 4	口径(26.3)	1/5	外上方に開いた後、屈曲して、さら に外反して開く口縁部。端部は面を なす。 口縁端面の下半には4条の凹線文を 施す。	外) 橙 7.5YR7/8 内) 浅黄橙 7.5YR8/4	
65	底 部 (壺)	溝 3	底径(4.2)		突出した平底の底部から外上方に開 く体部。 体部外面に右上がりの叩き(3条/ cm)。	外) 明赤褐~黒 褐 5YR6/6 ~2/1 内) におい赤褐 5YR5/4	
66	底 部 (壺)	溝 3・4	底径 3.2		小さく突出した平底の底部。 調整不明。	外) 浅黄橙 7.5YR8/4 内) 黒褐 7.5YR3/1	
67	底 部 (壺・鉢)	溝 3	底径(3.8)		やや突出した平底の底部。	外) におい橙 7.5YR7/4 内) 褐色 10YR4/1	
68	底 部 (壺)	溝 3	底径(3.3)		突出した平底の底部。	外) 橙~黒褐 5YR6/6 ~2/1 内) 橙 5YR6/6	
69	脚 部 (高杯)	溝 3	底径(14.1)	1/6	脚柱部から大きく開く裾部。 脚柱部内面に絞りが残るが、調整 は不明。 返し回数不明。 裾端部には3条の凹線文を施す。	外) 橙 7.5YR7/6 内) 灰褐 7.5YR6/2	
70	脚 部 (高杯)	溝 3	底径(17.6)	1/3	「ハ」の字状に開く裾部。 調整不明。 裾端部に3条の凹線文を施す。	橙 5YR6/8	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
71	罎台 B 2	竇7	口径(18.0)	1/8	内壁して開く口縁部。端部下に粘土紐を貼り付け、端面を下方に拡張する。 調整不明。 端面に3条の凹線文を施す。	外) にぶい黄橙 ～黒褐 10YR7/3 ～3/1 内) 橙 7.5YR7/6	
72	壺 B 4	方形周溝墓1 西溝	口径 18.0	2/3	大きく外反する口縁部で、端部は下方に拡張する。 外面はヨコナデ。内面は調整不明。	外) 橙 5YR7/6 内) 灰橙 5YR8/4	
73	罎 B 2	方形周溝墓1 西溝	口径(16.1)	1/6	外反して外上方に伸びる口縁部で、端部は凹面を呈する。 外面はヨコナデ。	橙 5YR6/6	胎土に金雲母を含む。 四国系?
74	甕部	方形周溝墓1 西溝	底径 (5.5)	1/3	平底から屈曲してやや外反しながら伸びる体部。	橙 5YR6/6	胎土にクサリ雜を多く含む。
75	脚部 (高杯)	方形周溝墓1 西溝	底径(13.6)	1/11	下下方にまっすぐ伸び、端部は面をなす。外面下端は器表割離。 外面は寛形さ。内面はナデ。 透し孔があるが、個数は不明。	外) 橙 5YR7/6 内) 褐灰 5YR5/1 橙 5YR7/6	
76	罎 B 1	方形周溝墓2 西溝	口径(12.5)	1/4	口縁部は体部から上方に屈曲して立ち上がった後、さらに外上方に折れ曲る。口縁端部は下方に少し突き出す。 肩部内面は横方向の整削りであるが、その他は表面が割離しているため調整不明。	外) 明赤褐 5YR5/6	クサリ雜は含まない。 四国系?
77	壺 A 3	方形周溝墓3 東溝	口径(17.9)	1/8	大きく下方に厚厚する口縁端部。 外面はヨコナデ、他は調整不明。 口縁端部に3条の凹線文を施す。	浅黄橙 7.5YR8/4	
78	壺 A 3	方形周溝墓3 北溝	口径(18.0)	1/12	上下に大きく拡張する口縁部。 口縁端部外面はヨコナデ。	淡橙 5YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4 褐灰 7.5YR4/1	
79	壺 B 2	方形周溝墓3 東溝	口径(13.6)	1/8	大きく外反する口縁部で、端部は上方に大きく引き伸ばす。端面は凹面である。 器表割離のため調整不明。	外) 橙 2.5YR6/6 内) 橙 2.5YR7/6	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
80	甕 C 2	方形周溝墓 3	口径(13.6)		外反する口縁部。端部下方に粘土紐を貼り付け、外面が凹曲した口縁部とする。 内外面ヨコナデ。 口縁端面は上端と下端にそれぞれ2条の凹線を施し、その間に竹管文を施す。	橙 5YR6/6	
81	壺	方形周溝墓 3	頸部径 (11.7)	1/3	体部から屈曲して、やや内側に直立す頸部。 器表剥離のため調整不明。 体部と頸部の境に断面三角形の貼付突起。その上に刻み目を施す。	橙 2.5YR7/6	
82	器台 C	方形周溝墓 3 北溝	口径(16.0)	1/11	若干内彎する体部に、大きく上下に拡張した口縁部を持つ。 器表剥離のため調整不明。	浅黄橙 7.5YR8/4	胎土にクサリ跡は含まない。
83	器台 C	方形周溝墓 3 北溝	口径(16.9)	1/8	若干内彎する体部に、大きく上下に拡張した口縁部を有する。 口縁端部に縦凹線を描いているようであるが、条数、巾不明。	外) 浅黄橙 7.5YR8/4 褐灰 7.5YR6/1 内) 橙 2.5YR7/6	胎土にクサリ跡は含まない。
84	甕 B 2	方形周溝墓 3 東溝	口径(13.4)	1/4	体部から「く」の字状に屈曲して外上方に伸びる口縁部。 口縁部外面はヨコナデ。体部外面は水平方向の叩き(3条/cm)。	橙 2.5YR6/1	
85	甕 B 2	方形周溝墓 3 北溝	口径 12.0 器高(15.0) 底径 3.7	1/3	上半部に最大径を持ち、肩のあまり張らない体部から、「く」の字状に屈曲してまっすぐ外上方に伸びる口縁部。底部は少し突出する平底。 口縁部は調整不明で、粘土紐接合痕が残る。体部外面は叩き(2条/cm)、内面はナデと思われる。	灰白 7.5YR8/1 浅黄橙 7.5YR8/3 明褐灰 7.5YR7/1	体部中位に黒斑あり。
86	脚部 (高杯)	方形周溝墓 3			ほぼ水平に伸びる杯部に、ゆるやかに外反しながら下外方に開く脚部。 脚部上端は円板充塞。脚柱部内面に絞りが認められる。	橙 7.5YR6/6	
87	脚部 (高杯)	方形周溝墓 3			ゆるやかに外反して、下外方に伸びる脚部。脚柱部は棒に胎土を突きつけて成形したものと思われる。 内面はヨコナデ調整か。	外) ぶい黄橙 10YR7/3 内) 橙 5YR7/6	
88	脚部 (高杯)	方形周溝墓 3 北溝	底径 10.5	1/5	若干外反しながら、下外方に伸びる脚部。端部は丸い。 内外面ともにヨコナデ。 適し孔を穿つ。外面端部に1条の凹線を施す。	外) ぶい赤橙 2.5YR5/3 内) ぶい橙 5YR6/3	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
89	底部 (底か壁)	方形周溝葦3	底径 4.7		横上方に伸びる体部に、突出する平底を持つ。底部外面は丸みを持つ。	にぶい黄橙 5YR7/3	
90	底部 (壁)	方形周溝葦3 北溝	底径 4.15		やや突出する平底から、外上方に内彎しながら伸びる体部。 外面底部付近は指押え、底部外面には木葉痕が残る。 体部外面は叩きか。	外) 橙 2.5YR7/8 内) 橙 2.5YR7/8 赤灰 2.5YR6/1 ~5/1	
91	底部 (壁)	方形周溝葦3 西溝	底径 3.25		若干突出した感じの平底から、外上方に少し外反しながら伸びる体部。 外面は叩き(3条/cm)の後、下方に縦方向のナデを施す。底部外面も叩きを施す。	にぶい黄橙 10YR7/4	
92	底部 (壁)	方形周溝葦3 東溝	底径 3.7	2/3	上げ底を呈し、体部は外上方にまっすぐに伸びる。 底部周囲には指押え痕が残る。体部外面には右上がりの叩き(3条/cm)。底部にも叩きを施す。内面はナデもしくは板ナデを施す。	橙 2.5YR6/6 赤灰 2.5YR4/1	
93	底部 (壁)	方形周溝葦3 東溝	底径 4.7		若干内彎しながら外上方に伸びる体部。突出する平底で、下端は外方に拡張している。底部内面は凹む。 底部外周には指押え痕が残る。体部外面は右上がりの叩き(3条/cm)。	外) 明赤褐 2.5YR4/1 内) 橙 5YR6/6	二次焼成を受けている
94	底部 (壁)	方形周溝葦3	底径 3.9	2/3	外上方に伸びる体部で、底部はそのまま平底となり、突出しない。 底部輪台技法。体部外面は右上がりの叩き(3条/cm)。	外) 明赤褐 5YR6/6 内) 橙 7.5YR7/6	外面下側に黒斑あり。
95	底部 (壁)	方形周溝葦3 西溝	底径 3.5		平底の底部からそのまま外上方に伸びる体部。 体部外面には右上がりの叩き(4条/cm)。内面は板ナデを施す。	外) にぶい橙 7.5YR7/3 内) 灰褐 7.5YR6/2	下部に黒斑あり。
96	底部 (壁)	方形周溝葦3 東溝	底径 4.9		突出する平底。 周囲と内面に指押え痕が残る。	にぶい赤褐 5YR5/4	
97	底部 (壁)	方形周溝葦3 東溝	底径 4.8		突出する平底から体部は外上方に伸びる。 底部輪台技法。底部内面は凹む。	にぶい赤褐 5YR5/4	二次焼成をうけるか。
98	底部 (壁)	方形周溝葦3 北溝	底径 4.1		中央部が凹む上げ底。 外面はナデか。内面には指押え痕が残る。	外) 橙 2.5YR6/6 内) 褐灰 7.5YR4/1	胎土にチャートを含む。

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色 調	備 考
99	底 部 (残)	方形周溝基3 北溝	底径 3.9		突出する底部から、内彎しながら外上方に伸びる体部を持つ。底部内面は凹む。 体部外面は叩き(3条/cm)であるが、殆ど磨滅している。	外) 明赤褐 2.5YR5/6 赤灰 2.5YR4/1 内) 明赤褐 2.5YR5/6	
100	底 部 (残)	方形周溝基3 北溝	底径 4.3		中央が凹んだ平底から、若干内彎しながら外上方に伸びる体部を持つ。底部外面は叩きの後ナゲと思われ、内面は板ナゲ調整。	外) 橙 2.5YR6/8 内) 黒褐 7.5YR3/1	
101	異 形 土 器	方形周溝基3 北溝	残存長7.7 残存幅4.8 残存高4.6 底径 2.4	1/2	中空で中央が太く、端はすぼまっているが、先端は欠損している。底部は少し突出して平底に近い。 脚壁は薄く、平たく伸ばした粘土板を上方でつないで成形している。内面はナゲ調整。外面は調整不明。	外) 褐灰～橙 7.5YR5/1 ～6/6 内) 橙 5YR6/6	鳥形土器と思われる。 粘土にクサリ砂を少量含む。
102	壺 B3	方形周溝基4 南溝	口径 12.2	1/6	外反気味に上方に立ち上がった後、屈曲して外上方に伸びる口縁部。肩部はやや肥厚し、端歯はやや丸味を持つ。	橙 5YR6/8	
103	壺 B2	方形周溝基4 南溝	口径(12.4)	1/5	横外上方に伸びる口縁部で、端部は下方に少し引き伸ばす。 外面はヨコナデ。内面は横方向の寛野きか。 口縁部に2条の凹線を巡らす。	橙 2.5YR6/6	胎土に金雲母を含む。 四角系?
104	壺	方形周溝基4 南溝	頸部径7.7	1/2	体部からゆるやかに屈曲して上方に伸びる頸部。 外面は縦方向の寛野き。内面はナゲか? 体部と頸部の境に鋭状工具による半月状の刺突文を巡らす。	明赤褐 5YR5/6	
105	壺 A1	方形周溝基4 南溝	口径(15.0)	1/8	く」の字状に外反する口縁部。肩部は面を持ち、下方に若干突き出す。 外面は叩き後ヨコナデ。口縁部内面はヨコナデを施す。	明赤褐 5YR5/6	
106	杯 部 (高杯) B1	方形周溝基4 西溝	口径(13.8)	1/8	彎曲しながら外上方に立ち上がり、端部は丸く納める。 頸部剥離により調整痕不明。 口縁部外面に1条の凹線を施す。	外) 橙 5YR7/6 内) 浅黄橙 7.5YR8/6	

No.	器種	出土地区 遺構層位	流量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
107	脚部 (高杯)	方形周溝墓4 西溝	底径(9.7)	2/3	脚部は下外方に外反しながら伸び、 裾部にゆくにつれ器厚を減じる。 3方向に透し孔を穿つ。 外面脚柱部は縦方向の筋刷り。内面 裾部は粗い刷毛(6本/cm)の後、ヨ コナデ。脚部内面には絞り目が認め られる。 裾部外面に2条の凹線文。	にぶい橙 7.5YR7/4	
108	脚部 (高杯)	方形周溝墓4 南溝			外反しながら下外方に伸びる脚部。 裾部にゆくにつれ器厚を減じる。 円形の透し孔を4方に穿つ。 脚柱部内面には絞り目が認められ る。	橙 5YR6/6	
109	脚部 (高杯)	方形周溝墓4 南溝			外反しながら下外方に伸びる脚部。 裾部にゆくにつれ器厚を減じる。 外面は縦方向の寛産さか。内面には 絞り目が認められる。	外) にぶい橙 5YR7/3 内) 橙 5YR6/6	
110	脚部 (高杯)	方形周溝墓4 南溝			筒状の脚柱部から外反して、下外方 に伸びる裾部。 外面は縦方向の粗い筋磨き。内面裾 部はヨコナデ。脚柱部内面には絞り 目が認められる。	橙 5YR6/6	
111	脚部 (器台)	方形周溝墓4 南溝			筒状の脚柱部から下外方に伸びる裾 部を持つ。 脚柱部は棒に粘土を巻きつけて成 形。 器表刺離により調整不明。	橙 5YR6/6	
112	底部 (甕)	方形周溝墓4 南溝	底径 5.2		平らな底部から外上方に、直線的に 伸びる体部を持つ。底部は横外方に 広がる。 外面は右上がりの叩き(2条/cm)。 底部外周に指押え痕残る。内面は板 ナデ。	にぶい橙 5YR6/4	
113	底部 (甕)	方形周溝墓4 西溝	底径(4.0)	1/2	中央が凹んだ上げ底から、外上方に 直線的に立ち上がり、体部になる。 底部輪台技法。 外面は右上がりの叩き(2.5条/cm)。 内面は縦方向のナデ。	褐 7.5YR4/3	
114	底部 (甕)	方形周溝墓4 南溝	底径 3.8	1/2	平底から外上方に直線的に伸びる体 部。底部内面はやや尖る。 外面は右上がりの叩き(2.5条/cm)。 内面は粗い縦方向の刷毛目。	にぶい橙 7.5YR6/4	
115	底部 (甕)	方形周溝墓4 南溝	底径 4.7		やや突出する平底から、若干内彎し ながら外上方に伸びる体部を持つ。 外面は叩き(2条/cm)を施す。	外) 明赤褐 5YR5/6 内) 灰褐 5YR6/2	

No.	器種	出土地区 遺構層位	流量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
116	底部 (鉢)	方形周溝基4 南溝	底径 4.8		外上方に直線的に伸びる体部に、やや突出する平底が付く。 内外面ともに器表剥離により調整不明。	橙 5YR6/6	
117	底部 (甕)	方形周溝基4 南溝	底径 4.3		やや突出する平底から横外上方に、直線的に伸びる体部。 外面は縦方向の荒磨き。	外) ぶい赤褐 5YR5/3 内) 褐灰 10YR4/1	
118	底部 (鉢)	方形周溝基4 南溝	底径 4.2		突出する平底から横外上方に伸びる体部。 外面は縦方向の荒磨きであるが、磨減しており不明瞭。	外) 橙 5YR6/6 内) ぶい橙 5YR7/4	
119	底部 (鉢)	方形周溝基4 南溝	底径 4.9		やや内彎する体部に突出した平底が付く。 外面は右上がりの叩き(2条/cm)後、縦方向の荒磨き。	外) ぶい赤褐 5YR5/4 内) 淡橙 5YR8/3	下端から体部に黒斑あり。
120	底部 (甕)	方形周溝基4 南溝	底径 5.4		突出する平底から、外上方に伸びる体部を持つ。 内外面とも器表剥離のための調整不明。	浅黄橙 7.5YR8/3	
121	底部 (甕)	方形周溝基4 南溝	底径 4.4		内彎しながら横外上方に伸びる体部に、突出した平底が付く。底部は若干凹んでいる。 底部周囲に指押え痕が明瞭に残る。 外面は叩き。	外) ぶい橙 5YR7/4 内) 黒灰 5YR5/1	
122	底部 (鉢)	方形周溝基4 南溝	底径 3.8		上げ式の底部から、若干内彎しながら外上方に伸びる体部を持つ。 底部外周に指押え痕が残る。外面は右下がりの叩き(2条/cm)が部分的に残存している。内面は板ナデか。	褐 7.5YR4/3	
123	底部 (鉢)	方形周溝基4 東溝	底径 2.5		外上方に、直線的に伸びる体部がそのまま平底となる。底部中央に径8mmの穿孔。 外面は右上がりの叩き(2条/cm)。内面は板ナデか。	ぶい橙 5YR6/4	外面に黒斑あり。
124	底部 (鉢)	方形周溝基4	底径 6.6		台形の脚部、端部は部分的に内方へ折り曲げている。 脚部と体部の境に指押え痕が残る。外面はヨコナデ。内面は縦方向のナデ。	ぶい橙 5YR6/4	胎土にクサリ腺を含まない。東海系?
125	甕 A1	方形周溝基5	口径(11.5)	1/5	外反しながら横外方に開く口縁部。 端部は垂直の面をなし、下方に若干狭み出す。 内外面とも器表剥離のための調整不明。	橙 5YR6/6	

No.	科種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
126	窠 A 1	方形周溝墓 5 北溝	口径(16.8)	1/6	体部から「く」の字状に屈曲して横外方に外反する。I線縁部付近でさらに反る。肩部はやや丸い。 内外面ともにヨコナダ調整。	にぶい橙 5YR7/4	
127	鉢 B	方形周溝墓 5 北溝	口径(12.7) 器高 6.5 底径 3.8	1/3	突出する平底から若干内彎しながら外上方に伸びるI線部。肩部はやや外反し、丸く納める。底部内面は凹む。 底部周囲は指押えの後、取方向の板ナダ、I線部はヨコナダ。内面は板ナダ。	外) 橙 5YR6/6 内) にぶい橙 5YR6/4	
128	鉢 A 2	方形周溝墓 5 北溝	口径(23.2)	1/6	内彎する体部から、ゆるやかに屈曲して外反するI線部。肩部はやや丸い。体部とI線部の境は不明瞭。 内外面ともに器表割離のため調整不明。	橙 7.5YR7/6	胎土に金雲母を少量含む。
129	底部 (變)	方形周溝墓 5 北溝	底径 3.6		内彎気味に外上方に伸びる体部・底部は体部からそのまま平底になる。底部内面はやや尖る。 外面は右上がりの叩き(3条/cm)。	外) にぶい橙 5YR6/4 内) 淡橙 5YR8/4	
130	底部 (變)	方形周溝墓 5 北溝	底径 4.1		底面は凹面を呈する上げ筋。若干内彎しながら外上方に伸びる体部。外面は右上がりの叩き(2条/cm)が深く刻まれ、底部周囲は指押え痕が残る。	橙 2.5YR6/6	体部に黒斑あり。
131	底部 (變)	方形周溝墓 5 北溝	底径 4.3		やや突出する平底から、体部は内彎気味に外上方に伸びる。 外面は右上がりの叩き(2条/cm)。 底部外周には指押え痕が残る。内面は板ナダか。	橙 5YR6/6	胎土に黒雲母・クサリ砂を含む。 内面に黒斑あり。
132	底部 (變)	方形周溝墓 5 北溝	底径 4.0		突出する底部から外反して、外上方に伸びる体部。 外面はゆるい右上がりの叩きが密に残る(3条/cm)。 内面は板ナダ。	にぶい赤褐 5YR5/4	外面に黒斑あり。
133	底部 (變)	方形周溝墓 5 北溝	底径 3.3		突出する上げ底の底部に、内彎しながら外上方に伸びる体部を持つ。 底部周囲に指押え痕が残る。内外面ともにナダか。	にぶい褐 7.5YR5/4	胎土に黒雲母を含む。
134	底部 (變)	方形周溝墓 5 北溝	底径 3.6		突出した底部から若干内彎する体部に続くが、外面に粘土剥離痕が認められ、脚台が付くかもしれない。底部は少し上げ底となる。 底部周囲には明瞭な指押え痕が全周する。体部外面は取方向の寛碧き。内面は板ナダか。	にぶい橙 5YR7/4	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色 調	備 考
135	壺 A 3	方形周溝墓 6	口径 17.2	1/2	体部から「く」の字状に屈曲して、外反しながら外上方に伸びる口縁部。口縁端部は大きく上下に拡張する。体部と頸部の境の内面は角張る。全体的に壁厚が薄い。内外面ともに器表の刺離が著しく、調整不明。口縁端部に円形浮文を貼り付けるが数・単位不明。	外) 橙 5YR7/6 内) 浅黄橙 7.5YR8/4	
136	壺 A 1	方形周溝墓 6	口径(11.8)	1/4	外反しながら外上方に伸びる口縁部。端部は上下に拡張する。外面はヨコナデか。内面は横方向の磨き。口縁端部に2条の凹線文を施す。	橙 2.5YR6/6	胎土に金雲母を含む。
137	甗 A 1	方形周溝墓 6	口径 11.4	1/3	外反しながら外上方へ伸びる。端部は上へ押し上げる。端面はやや丸味を持つ。内面は横方向の磨きを密に施す。外表面刺離のため調整痕不明。	橙 2.5YR6/6	胎土に金雲母を含む。
138	壺 D 2	方形周溝墓 6	口径 26.9	1/4	体部から「く」の字状に屈曲し、やや外傾して上方に、直線的に伸びる頸部を持つ。口縁部は頸部から横外方に屈曲し、さらに屈折して外反しながら外上方に伸び、端部に至る。口縁端部は外傾する平坦面となる。内外面とも器表刺離のため調整不明。体部と頸部の境に断面三角形の貼付突起を巡らし、刻み目を加飾する。複合口縁の下端部に、弱い凹線を4条施し、その上に竹管円形浮文を3個単位で6方向に貼り付ける。	外) 橙 5YR7/6 内) 浅黄橙 7.5YR8/4	
139	甗 C	方形周溝墓 6	口径(18.7)	1/9	体部から大きく横外上方に外反する口縁部、端部は上方に引き伸ばし、丸く納める。端部外面は凹面を呈する。内外面ともにヨコナデ。	橙 5YR6/6	
140	甗 B 2	方形周溝墓 6	口径 14.0	1/5	体部から「く」の字状に屈曲して、外上方に直線的に伸びる口縁部。屈曲部は内面に鋭い稜を持つ。口縁端部は丸く納める。外面はヨコナデ。	橙 7.5YR7/6	
141	甗 B 1	方形周溝墓 6	口径 18.1	1/6	体部から「く」の字状に屈曲し、外上方に伸びる口縁部。端部はやや丸い口縁内外面ともにヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	

No.	器種	出土地区 遺構層位	流量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
142	甕 B 1	方形周溝墓 6	口径 20.4	1/2	体部から「く」の字状に大きく屈曲し外上方に長く伸びる。口縁部はやや丸い。 外面は叩き(3条/cm)の後ヨコナデ。	外) ぶい橙 5YR7/4 内) 浅黄橙 7.5YR8/4	
143	甕 A 2	方形周溝墓 6	口径 17.6	1/7	肩の張らない体部から「く」の字状に屈曲し、やや反しながら外上方に長く伸びる口縁部。端部付近でさらに外反する。 体部外面は水平方向の叩き(2.5条/cm)、内面はナデ。口縁部外面はヨコナデ、内面は横刷毛(6本/cm)の後ヨコナデ。	淡橙 5YR8/4	
144	鉢 C	方形周溝墓 6	口径 14.6 器高 7.3 底径 2.5	1/2	中央がやや凹む小さな上げ底から、内彎しながら外上方に伸びる体部、口縁部は若干外反する。底部内面はやや凹む。 口縁部外面はヨコナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4	胎土にクサリ塵を含む。
145	脚部 (高杯)	方形周溝墓 6			脚柱部は下外方に、外反気味に伸びる太い筒状。杯部と脚部の接合痕が残り、口縁部も観察できる。杯部内外面磨きか。脚部外面縦刷毛の後横方向の磨き。内面には絞り目が明瞭に認められる。	ぶい茶褐 7.5YR6/4	
146	脚部 (高杯)	方形周溝墓 6			若干開き気味に下方に直線的に伸びる筒状の脚柱部。体部は外反気味に外上方に伸びる。 外面は磨きか?内面はナデか。内面には絞り目が認められる。	橙 5YR6/8	
147	底部 (甕)	方形周溝墓 6	底径 5.1		突出気味の底部から横外上方に若干内彎しながら伸びる体部へと続く。底部外面は中央が少し凹む。 体部外面は縦方向の磨きであるが器表剝離のため不明瞭。内面は器表剝離が著しい。	外) 橙 5YR7/6 内) ぶい橙 5YR7/3	
148	底部 (かか)	方形周溝墓 6	底径 3.0		突出気味の小さな底部から、内彎気味に横外上方に伸びる体部へ続く。底部外面は少し凹んで上げ底状となっている。 体部外面は磨きか。内面は刷毛か。	ぶい赤褐 5YR5/4	胎土にクサリ塵を多く含む。 体部に黒斑あり。
149	甕部 (かか)	方形周溝墓 6	底径 2.9		若干突出する平底から、体部は横外上方に内彎気味に伸びる。甕部外面は中央部のみ凹む。 体部外面は縦方向の磨き。	浅黄橙 7.5YR8/3	
150	底部 (甕)	方形周溝墓 6	底径 4.4		突出する平底。体部は外上方に直線的に伸びる。底部内面は凹む。 体部外面は叩きか。内面は縦方向のナデ。	橙 5YR6/6	

No	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色 調	備 考
151	底 部 (残)	方形周溝基 6	底径 6.3		中央部がやや凹む上げ気味の大きな底部。底部周囲は外方に広がる。体部は外上方に外反気味に伸びる。底部内面はやや尖る形となる。底部周囲に指押え痕が残る。	にぶい黄橙 10YR7/4	
152	甃	甃椀 1	口径 20.8	1/8	やや上向きの横外方に直線的に伸びる口縁部。端部は下方に垂下する。器表全体刺磨が著しく、文様、調整不明。	橙 5YR7/6	
153	甃	土器椀	口径 26.3 底径 3.1		やや突出する小さな平底をもち、体部は内彎しながら外上方に伸び、体部中位で丸く張り出す。器表の刺磨により調整痕が不明瞭であるが、外面は距磨き。内面は刷毛もしくは板ナデか。体部下半に径 1.3cmの焼成後の穿孔が1ヶ所認められる。	外) 橙 5YR7/6 内) 淡橙 5YR8/3	
154	甃 C 3	B地区包含層 Ⅳ区南端	口径(20.4)		外反した後屈曲して立ち上がる口縁部。外面はヨコナデ。口縁端面には3条の鬚門線を施す。	外) 橙 2.5YR7/6 内) 橙 5YR7/8	
155	鉢 C	B地区包含層 Ⅳ区南端中央	口径 11.25 器高 6.9 底径 2.05	3/4	小さな上げ底の底部。体部は外上方に開いた後、内彎して伸び、口縁部となる。端部は尖る。磨製のため調整不明。	外) 橙 2.5YR7/6 内) 橙 5YR7/8	
225	甃	東溝	口径(15.7)	1/6	外上方に開く口縁部。端部を下方に折り曲げて拡張し巾広の端面を作る。内外面ともヨコナデ。端面には5条の凹線文を施した後、縦方向の櫛歯直線文を施す。(9本/1.3cm)、口縁端部の上面には櫛歯列点文を施す。	にぶい橙 7.5YR7/4	
226	甃 C	東溝	口径(13.6)	1/5	肩の張らない体部から「く」の字状に屈曲して開く口縁部。端部を上方に突き上げている。口縁部外面ヨコナデ、他は調整不明。口縁端面に1条の門線文を施す。	外) にぶい赤褐 5YR5/4 内) にぶい橙 5YR7/4	
227	甃 C	東溝	口径(16.1)	1/6	肩の張らない体部から「く」の字状に屈曲して開く口縁部。端部を上方に拡張している。外面と口縁部内面はヨコナデ。口縁端面には2条の凹線文を施す。	にぶい橙 7.5YR7/4	
228	甃 B 1	東溝	口径 14.2	ほぼ 完	直立して筒状の頸部が大きく外反して、口縁部となる。端部は面をなす。調整不明。	外) にぶい橙 5YR7/4 内) 淡橙 5YR8/4	黒斑あり。

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
229	壺 B 1	東溝 中央	口径 16.6	2/3	ほぼ直立する頸部が大きく外上方に 開き口縁部となる。 内外面とも調整不明。	外) 橙 7.5YR7/6 内) ぶい橙 5YR7/4	二次焼成の ためか部分 的に赤紫色 に変色。
230	壺 B 1	東溝	口径(16.0)	1/6	直立する頸部から外反して開く口縁 部。端部は僅かに肥厚する。 口縁部の外面は刷毛の後、ヨコナデ。 頸部外面は刷毛調整(10本/cm)。口 縁部内面ヨコナデ。頸部内面刷毛。	橙 7.5YR7/6	
231	壺 A 1	東溝	口径(17.6)	1/4	頸部から外反して開く口縁部。 内面は横方向の磨き。外面は縦方 向の磨き。口縁端部は内外面とも ヨコナデ。	ぶい黄橙 10YR7/4	
232	壺 A 1	東溝 溝底	口径(20.2)	1/7	ほぼ直立する頸部が外反して開き、 口縁部となる。口縁端部は僅かに下 方に肥厚する。 口縁部内外面はヨコナデ。頸部外面 縦方向の磨き。内面ナデか?	淡黄 2.5YR8/3	
233	壺 A 1	東溝	口径(19.1)	1/2	外上方に開く頸部が外反して口縁部 となる。口縁端部は僅かに肥厚する。 口縁端部の内外面にヨコナデ、他は 調整不明。	淡橙 5YR8/4	
234	壺 A 1	東溝	口径(12.7)	1/3	内彎気味に、外上方に立ち上がる頸 部。口縁部は大きく外反し、端部は 面を持つ。 頸部外面は縦方向の磨き。口縁部 外面はヨコナデ、内面は口縁部頸部 とも横方向の磨き。	淡橙 5YR8/4	
235	壺 B 3	東溝	口径 13.4	1/6	大きく外方に開く口縁部。端部は外 上方に揃み上げられる。 内外面ともヨコナデ。 口縁端部には3~4条の凹線文を施 す。	淡橙 5YR8/4	
236	壺 A 2	東溝	口径(16.3)	1/5	やや外反する頸部が大きく外方に開 き口縁部となる。口縁部は下方に粘 土紐を貼り付け拡張する。 内外面とも調整不明。 口縁部内面には3条以上の凹線文を施 した後、竹管円形浮文を貼り付ける。	外) 黄橙 7.5YR7/8 内) ぶい黄橙 10YR7/4	
237	壺 A 3	東溝	口径(16.1)	1/4	頸部から外反する口縁部。端部は上 下に拡張され端面をなす。 調整不明。 端部には上半に2条、下半に3条の 凹線文を施す。	外) 淡橙 5YR8/3 内) ぶい橙 7.5YR7/4	

No	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
238	壺 A 3	東溝	口径(17.2)	1/4	外反する口縁部。肩部を上下に拡張し端面を作る。 口縁部には内面から外面に向かって、2個1組の焼成前の穿孔がみられる。	外) ぶい橙 7.5YR7/4	
239	壺 A 3	東溝	口径 16.7	ほぼ 完	やや外上方に開いた頸部から、大きく外反して開く口縁部。口縁部は上方に狭み上げた後、下方に粘土紐を貼り付け端面を作る。 調整不明。 口縁部端面には2個1組の竹管円形浮文を6方に貼り付ける。	橙～浅黄橙 7.5YR7/6 ～8/4	
240	壺 A 2	東溝	口径(11.8)	1/3	肩の張らない体部からやや外上方に立ち上がる短い頸部が付き、肩部がそのまま伸びて口縁部となる。口縁部は三角形の粘土紐を貼り付け、拡張された端面をなす。 体部の内面はナデ。他は調整不明。 端面には2条の凹線文の痕跡が残る。	橙 5YR7/6	
241	壺 C 3	東溝	口径(14.2)	1/6	外上方に開く口縁部が屈曲して、短く立ち上がり端面を作る。 外面は縦方向の笠磨き。 端面には5条以上の鬚門線文を施す。	外) ぶい橙 5YR7/4 内) 浅黄橙 7.5YR8/4	
242	壺 D 1	東溝	口径(16.0)	1/4	外反する頸部が強く屈曲して、外反する口縁部となる。 口縁部の外面は縦方向の笠磨き。内面は横方向の笠磨き。肩部外面は縦方向の笠磨き。内面調整不明。 口縁部と頸部の接合部はヨコナデ。 口縁部端面に5本単位の柳葉状文を施す。	外) ぶい黄橙 10YR7/3 内) ぶい橙 7.5YR7.4	
243	壺 D 2	東溝	口径(18.6)	1/8	大きく外反した後屈曲し、外上方に立ち上がり、肩部で外反する口縁部。端面には下半に3条の凹線文を施し、その上に竹管円形浮文を貼り付ける。	浅黄橙 10YR8/3	
244	壺 D 1	東溝	口径(21.9)	1/5	頸部から外反して開き、屈曲して立ち上がった後、さらに外反する口縁部。 口縁部外面は縦方向の笠磨きを施文後に行う。 口縁部端面には下半に5条の凹線文を施し、竹管円形浮文を貼り付ける。 口縁部にも竹管文を施す。	外) ぶい橙 7.5YR7/4 内) 灰白 2.5Y8/2	

No	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
245	壺 D 1	東溝	口径 20.3	ほぼ 完	直立して傾状の肩部から大きく外反した後屈曲し、外反して立ち上がる口縁部。 外面は口頸部とも縦方向の磨き。口縁部内面横方向の磨き。口縁部端部の下半4条の凹線文を施した後、竹管円形浮文(3個1組)を貼り付け、さらにその間を竹管文で飾る。	灰色 2.5YR5/2	内面に黒斑あり。
246	壺 D 1	東溝	口径 18.9	1/4	頸部から外上方に開いた後、折曲して外上方に開く口縁部。端部は面をなす。 外面はヨコナデ、内面調整不明。	淡橙 5YR5/4	
247	壺 D 1	東溝	口径(20.5)	1/4	頸部から外方に開き、段をなして屈曲した後、再び外上方に開く口縁部。調整不明。 端面には上端に3条の凹線文、下半は櫛歯波状文を施した後、竹管円形浮文を14個貼り付ける。	によい橙 5YR7/4	
248	壺 C 2	東溝	口径(18.2)	1/3	外上方に開いた後、内彎して立ち上がる口縁部。口縁部は下方に粘土紐を貼り付け、拡張される。 頸部外面縦方向の磨き、内面ヨコナデ。 口縁部外面の上半は7条、下端に2条の凹線文を施し、その間に約28個の竹管円形浮文を飾る。	によい橙 7.5YR7/4	
249	壺 C 2	東溝	口径(20.4)	1/10	内彎気味に外上方に開く口縁部。端部下に粘土紐を貼り付け、端面を下方に拡張する。 口縁部端部の上端と下端には1条の凹線文を施し、その間に縦磨きの磨面文を施した後、文様の頂点部分に円形浮文を貼り付ける。磨面文と円形浮文は2個1組まで確認できるが、個数は不明。	によい橙 7.5YR7/4	
250	壺 C 2	東溝	口径(19.7)	1/8	外反して開く口縁部が端部付近で内彎する。端部下には粘土紐を貼り付け端面を下方に拡張する。 外面は縦方向、内面は横方向の磨き。 端面には下端に1条の凹線文を施す。	外) 橙 7.5YR7/6 内) 浅黄橙 ～黒褐 10YR8/3 ～3/1	内面に黒斑あり。
251	壺 C 1	東溝	口径(20.9)	1/8	外上方に大きく開く口縁部は端部で上方に傾み上げられる。端部下に粘土紐を貼り付け、下方に拡張した端面を作る。 端面には下端に1条の凹線文を施し、磨面文状の三角形文を施した後、文様の頂点部分に竹管文を施す。	によい黄橙 10YR7/3	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
252	壺 C 1	東溝	口径(24.8)	1/8	内壁して外上方に開く口縁部。端部下に粘土紐を貼り付け、端面を下方に拡張する。 内面は端部が横方向、以下は縦方向の瓦磨り。 口縁部端面には5条の凹線文を施す。	によい橙 ～褐灰 10YR7/3 ～5YR6/8	二次焼成のため内面赤変。
253	壺 C 1	東溝	口径(23.7)	1/8	内壁して外上方に開く口縁部。端部下に粘土紐を貼り付け、下方に拡張する。 内面は端部が横方向、以下は縦方向の瓦磨り。 口縁部端面には5条の凹線文を施す。	外) によい橙 ～褐灰 5YR6/4 ～5/1 内) 灰褐 5YR5/2	胎土に金雲母を含む。
254	壺 C 2	東溝	口径 31.6	1/2	頸部から外反して開いた後、内壁して外上方に開く口縁部。内壁部外面に粘土紐を貼り付け、端面を下方に拡張する。 外面は頸部との境に縦方向の刷毛(8本/1.5cm)を残す以外ナデ。内面は横方向の瓦磨り。頸部は不明。 口縁部端面には上半に8～10条、下半に5条の縦凹線文を施し、その間に6方向からS字状渦巻文を貼り付け、浮文間を2個の渦巻文で飾る。	外) 橙～淡橙 5YR7/6 ～8/4 内) 浅黄橙 10YR8/3	
255	壺 A 1	東溝	口径 16.0	1/2	体部から外反して、外上方に大きく立ち上がる口縁部。 体部外面は右上がりの叩き、内面はナデ。口縁部外面は指ナデ、内面はナデ。口縁部の調整は粗雑。	によい赤褐 5YR4/4	
256	壺 A 2	東溝	口径 14.5	1/6	肩の要らない体部から、ゆるく外反して開く口縁部。端部は面を打つ。 体部外面は右上がりの叩き(2条/cm)、内面はナデ。口縁部は内外面ともナデ。	浅黄橙 10YR8/3	
257	壺 B 1	東溝	口径(18.3)	1/5	体部から「く」の字状に外反し、上半で内壁して開く口縁部。端部は丸い。 口縁部外面は板ナデ。体部外面は右上がり叩き。	によい橙 7.5YR7/4	
258	壺 A 2	東溝	口径(18.8)	1/6	体部から外上方に立ち上がった後、外反して開く口縁部。端部は丸い。 頸部から口縁部外面はココナデ、体部外面は叩き後ナデ酒している。 内面は不明。	外) によい橙 5YR7/4 内) 浅橙 5YR8/4	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
259	甕 B1	東溝	口径 25.4	1/2	体部から「く」の字状に開く口縁部。端部は面を持つ。体部外面は右上がりの叩き(3条/cm)が残る。口縁部外面の下半にも部分的叩きが残る。他は調整不明。	外) 橙 2.5YR6/8 内) 橙 5YR6/8	
260	甕 D	東溝	口径 24.4 腹径 21.7 器高 25.8 底径 4.8	完	肩の張らない体部。体部から外上方に開く外反気味の口縁部。底部は突出してやや上げ底気味となる。体部外面は、下半が右上がりの叩き(4条/2cm)、上半は水平方向の叩き。口縁部外面は水平方向の叩き後に刷毛調整(10本/1.7cm)、体部内面はナデ。底部周囲外面に指押えの痕跡が残る。	にぶい黄橙 ～灰黄橙 10YR7/3 ～4/2	底部から体部下半の外面赤変し、体部中位にスス付着。
261	甕 底部	東溝	底径 4.1		底部から内彎する体部が外上方に立ち上がる。体部外面はラセン状の叩き(5条/3cm)。内面板ナデ。	外) にぶい黄褐 10YR5/4 内) にぶい黄橙 10YR6/4	胎土に金器屑を多く含む。
262	甕 底部	東溝	底径(5.6) 腹径(18.2)		突出した底部から、外上方に立ち上がる体部。体部は張り弱い。体部上半外面は、ほぼ水平の叩き。内面はナデ調整。部分的に鮮色が残る。	にぶい黄橙 ～黒褐 10YR4/3 ～3/1	
263	鉢 A1	東溝	口径(15.7) 器高 7.4 底径 4.4	ほぼ 完	底部から外上方に立ち上がった体部が外反して直線的に開き、口縁部となる。口縁端部は丸い。体部外面は縦方向の発磨き。体部内面にも横方向の発磨きが部分的に残る。底部外面と周面に指押えが残り。	外) 浅黄橙 7.5YR8/3 内) 淡橙 5YR8/4	
264	鉢 A2	東溝	口径(21.3) 器高 10.3 腹径 16.5 底径 3.8	ほぼ 完	底部から外上方に開き、上半で内彎する体部。口縁部は内彎気味に外上方に開く。口縁端部は面を作る。底部は丸底に近い平底。体部外面は、部分的に縦方向の発磨きが残る。内面は体部が縦方向、口縁部が横方向の発磨き。	外) にぶい橙 7.5YR7/4 内) にぶい橙 7.5YR6/4	
265	鉢 A2	東溝	口径 22.3 器高 12.0 底径 4.5	ほぼ 完	底部から内彎して立ち上がる体部が、僅かに外反して、直線的に伸びる口縁部となる。口縁端部は丸い。外面は縦方向の発磨き。内面は口縁部が横方向、体部が縦方向の発磨き。	外) 橙 5YR7/6 内) 明褐色～橙 5YR7/1 ～7/6	
266	鉢 A3	東溝	口径(38.4)	1/6	内彎してほぼ直立する体部から、屈曲して外上方に開く口縁部。端部は上方に狭み上げる。内外面とも調整不明。	灰白 7.5YR8/2	
267	鉢 A3	東溝	口径(38.2)	1/5	内彎する体部から外反して、外上方に伸びる口縁部。端部は面を持つ。内面は横方向の発磨き。外面は口縁部がヨコナデ、頸部付近がヨコナデ後に不定方向のナデ。体部は横方向のナデ。	外) 淡橙～黒灰 5YR8/1 ～5/1 内) 淡橙 5YR8/4	

No	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色 調	備 考
268	高杯 B 2	東溝	口径(13.2)	1/4	内湾して深く体部が外反して口縁部となる。 口縁部外面にヨコナデ、他は調整不明。	外) 橙 5YR7/6 内) ぶい橙 5YR5/4	
269	高杯 A 1	東溝	口径(22.2)	1/8	体部から屈曲し、外反して開口部。端部は面をなす。 口縁部外面は縦方向、内面は横方向の寛磨き。口縁部下ヨコナデ。体部外面縦方向の寛磨き。内面縦方向の寛磨き。	ぶい黄橙 10YR5/4	
270	高杯 B 2	東溝	口径(20.0)	1/5	体部から僅かに屈曲して、外上方に伸びる口縁部。屈曲部には稜を持つ。内外面ともヨコナデ。	ぶい橙 5YR6/4	
271	高杯 A 2	東溝	口径(24.8)	1/12	大きく外上方に開き内彎した後、さらに外反する口縁部。端部は面を持ち、内湾部の外面に粘土紐を貼り付け、端部を下方に拡張する。 口縁部外面はヨコナデの後、縦方向の寛磨き。口縁部の外向は縦方向の寛磨き。口縁部内面はヨコナデ後縦方向の寛磨き。 口縁部外面には3本単位の櫛波状文が山形に施され、端部には1条の凹線文の後、刺突文を施す。	ぶい菊 7.5YR5/4	
272	高杯 A 2	東溝	口径(28.0)	1/4	内彎して大きく外上方に深く体部から、段をなして屈曲した後、外上方に大きく開口縁部を持つ。口縁部は屈曲部で下方に拡張される。 口縁部内面は横方向の寛磨き。体部内面の上半は横方向、下半は縦方向の寛磨き。 口縁部外面下部の屈曲部を10ヶ所の竹筥円形浮文と、その間を4本単位の櫛波状文で飾る。	外) 淡橙 5YR8/4 内) ぶい橙 5YR7/4	
273	高杯 B 2	東溝	口径(18.3)	1/6	内彎する体部が外上方に伸び、僅かに屈曲して口縁部となる。口縁部は僅かに外反する。 口縁部は屈曲部外面に粘土紐貼り付けのための指痕が残る。口縁部外面ヨコナデ。体部外面は左上がりの叩きの後ナデ。内面は縦方向の寛磨き。	ぶい黄橙 10YR6/3	口縁外面に 黒斑あり。
274	脚部 (高杯)	東溝	口径 13.2		「ハ」の字状に開口脚部。裾端部付近で僅かに外反し、端部は面を作る。 透し孔は4ヶ所認められる。 外面は縦方向の寛磨き。内面板ナデ、端部付近はヨコナデ。	ぶい橙 7.5YR7/4	胎土に金雲 母を含む。

No.	器種	出土地区 透層単位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
275	脚部 (高杯)	東溝	底径 14.9		「ハ」の字状に下方外に開く、太く短い脚柱部が大きく開いて裾部となる。 内面は板ナデか。 脚端部に4条の門線を描し、透し孔は4方向。	淡橙 5YR8/4	
276	器台 B3	東溝	口径 24.0	1/8	大きく外上方に開き、内壁して立ち上がる口縁部。内湾部の外面に粘土紐を貼り付け、端面を下方に拡張する。 内面は横方向のナデ。外面は縦方向の荒磨き。 端面には7本の門線文を施した後、竹管形浮文を約28個刺突する。内面にも4本単位の櫛歯波状文を施す。	橙 7.5YR7/6	
277	器台 A	東溝	口径 25.0	1/2	ほぼ水平に開く体部に、直立した後大きく外反する口縁部。 体部外面は縦方向の荒磨き、口縁部内面は横方向の荒磨き。 口縁端面には鬚凹線文を乱雑に施した後、竹管形浮文を2個1組、1個と交互に貼り付け、さらに浮文間を5本単位の櫛歯波状文で飾る。櫛歯波状文は口縁文となる部分もある。	橙 7.5YR7/6	
278	器台 D	東溝	口径 13.2 器高 12.2 脚径 9.6 底径 12.0	完	上下が開く鼓形形の器台。口径は脚径を上回る。口縁端部、脚端部とも面をなす。 外面は叩きの後、ナデ調整。内面はナデ調整。 器壁は極めて薄い。	外) 灰白 7.5YR8/2 内) 淡橙 5YR8/4	
279	器台 B2	東溝	口径 21.5	裾部 以外 完	体部は外上方に大きく開き、曲出して口縁部となる。口縁部は粘土紐を貼り付け拡張し、端面を形成する。 踵部は体部からすぐに「ハ」の字状に外反し、裾部は欠損。 脚部外面は縦方向の荒磨き。 体部外面は下半が縦方向、上半が横方向の荒磨き。口縁部と体部内面は横方向の荒磨き。 口縁端面には4条の鬚凹線文を施す。	外) 灰白 7.5YR8/2 内) 淡橙 7.5YR7/4	胎土に長石チャートなどを含む。
280	器台 B1	東溝	口径(19.4)	1/8	外上方に開く口縁部。端部は上下に拡張する。 外面縦方向の荒磨き。口縁部内面コナデ。体部内面縦方向の荒磨き。 端面に3条の門線文を施す。	にぶい黄橙 10YR7/4	

No.	器種	出土地区 遺構層位	直径(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
281	器台 B 1	東溝	口径(17.8)	1/8	外上方に開いた後、僅かに内彎して 端部となる口縁部。端部下に粘土紐 を貼り付け端面を作る。 内面は縦方向の笠磨き。 口縁端面には3条の円線文を施す。	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁外面に 黒斑あり。
282	器台 B 2	東溝	口径(20.6)	1/6	外上方に大きく開く口縁部がやや内 彎して端部となる。端部下に粘土紐 を貼り付け、端面を下方に拡張する。 外面は縦方向の笠磨き、内面も部分 的に縦方向の笠磨きが見える。 口縁端面には6条の円線文を施した 後、4個1組の竹管円形浮文を施す。 口縁端部の内面にも4条の凹線文を 施す。	外) 橙 7.5YR7/6 内) にぶい橙 7.5YR7/4	口縁外面に 黒斑あり。
283	壺 C 2	東溝	口径(20.7)	1/6	外上方に開く口縁部が内彎して端部 となる。端部下に粘土紐を貼り付け 端面を下方に拡張する。 端面には上端に5条、下端に1条の 円線文を施す。	にぶい橙 7.5YR7/4	
284	器台 B 3	東溝	口径(21.3)	1/8	外上方に開く体部が屈曲して、口縁端 部となる。口縁部は下方に粘土紐を 貼り付け拡張された面をもつ。 口縁部外面は上端に1条、下端に2 条の凹線文を施し、その間に楕円波 状文を施した後、3個1組の竹管円 形浮文で飾る。 調整不明。	浅黄橙 10YR8/3	
285	器台 B 3	東溝	口径(25.9)	1/6	やや内彎する体部がそのまま伸びて 口縁端部となる。口縁端部の外面下 方に粘土紐を貼り付け、端面を下方 に拡張する。 口縁部の内面は縦方向の笠磨き。 口縁部外面は上端と下端にそれぞれ 2条の凹線文を施し、その間に竹管 円形浮文を貼り付けた後、浮文間を 斜線文2個で加飾する。	橙 7.5YR7/6	
286	器台 B 3	東溝	口径(22.5)	1/4	外上方に開いた体部がそのまま伸び て口縁端部となり、口縁端部外面の 下方に粘土紐を貼り付け、端面を拡 張する。 体部外面は縦方向の笠磨き、内面は 横方向の刷毛後、縦方向の笠磨き、 口縁部の内面は横方向の刷毛後、横 方向の笠磨き。 口縁部外面には、上端に1条、下端 に2条の円線文を施し、その間に2 個1対の竹管円形浮文で6ヶ所に加 飾する。	にぶい黄橙 10YR7/4	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
287	器台 B3	東溝	口径 26.6 器高 19.8 底径 18.4	完	直立する脚柱部から下外方に外反して、「ハ」の字状に開く裾部。体部は外上方に伸び、僅かに内彎して口縁部となる。内彎部外面には粘土紐を貼り付け、口縁端面を下方に拡張する。 外面は体部が右上がりの叩き後上半はナデ、下半は縦方向の磨き。脚部は裾部まで縦方向の磨きを縦文後に施す。内面は口縁部から体部上半にかけて横方向の磨き、体部下半は縦方向の磨き。脚部は裾部がヨコナデ、脚柱部の上半がヨコナデ、下半が縦方向のナデ。 口縁端面には6～7条の縦凹線文を施した後、竹筥円形厚文を10方向に貼り付ける。脚部は上端に1条の突帯を、裾端部に5条の凹線文を施す。透し孔は2段に4方向から施す。	橙 2.5YR6/6	
288	高杯部 脚部	東溝	底径 22.2	脚部 完	細い脚柱部から外反して、大きく開く裾部が下端付近で内彎して、裾端部となる。裾端部は面を持つ。 外面は縦方向の磨き。内面は脚柱部が縦向き、裾部が横方向の板ナデ、脚柱部内面に絞りが残る。 裾部には円形透し孔5個、裾端部には凹線文を5条施す。	外) 淡橙 5YR8/4 内) 灰褐 5YR6/2	
289	脚部 (器台)	東溝			短く「ハ」の字状に開く脚部に、外上方に開く体部を接合する。 脚部外面に接合痕を残す。 調整不明。	浅黄橙 10YR8/3	
290	脚部 (器台)	東溝			「ハ」の字状に開く脚部。 脚部外面は叩き後に板ナデ、内面縦方向の指ナデ。 外面に明瞭に接合痕を残す。	に い い 橙 5YR7/4	
291	ミニ チュア 壺	東溝	腹径 7.8 底径 4.3	2/3	ゆがんだ体部。体部の底を凹ませ、その周囲に平らな面を作り、底部としている。 体部外面には部分的に縦方向の磨きが残る。内面は下半が縦方向、上半が横方向のナデ。	外) に い い 黄 橙 10YR6/3 内) に い い 黄 橙 10YR7/3	
292	尖部 (器台)	東溝	底径 2.3		小さい尖部は尖底に近い。体部は大きく開く。 体部外面は叩き後板ナデ、内面ナデ。 底部貼り付け。	に い い 橙 5YR7/4	
293	底部 (壺)	東溝	底径 5.2		内彎して外上方に開く体部。底部は平底。 内外面ともナデ調整。	外) 淡橙 5YR8/3 内) に い い 橙 5YR7/4	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
294	底 部 (亞)	東溝	底径 5.2		底部から内彎する体部が外上方に立ち上がる。 内外面とも調整不明。	外) ぶい橙 5YR7/4 内) 橙 5YR6/6	
295	底 部 (盛)	東溝	底径 5.1		比較的高く、突出した底部から内彎する体部。 体部外面は下半が水平方向、上半が右上がりの印きの後ナデ。内面ナデ。底部周囲はココナデ。	外) 灰黄褐 10YR5/2 内) ぶい黄橙 10YR6/2	
296	底 部 (亞)	東溝	底径 4.8		突出したドーナツ状の上げ底の底部から外上方に開く体部。 体部外面は縦方向の磨き。内面ナデ。底部周囲に指押え。	外) ぶい黄橙 10YR5/3 内) ぶい橙 7.5YR7/4	
297	底 部 (亞)	東溝 中央	底径 6.4		やや上げ底気味の底部から内彎して外上方に開く体部。 体部外面は右上がりの印き後に刷毛。内面刷毛。底部の周囲に指押え痕が残る。	外) 赤橙 10YR6/6 内) ぶい橙 5YR7/4	
298	底 部	東溝	底径 6.2		底部から外上方に大きく開く体部。調整不明。	外) 灰褐 7.5YR6/2 内) 灰褐 7.5YR4/2	
299	壺 A 3	西溝	口径(10.6)	1/3	細くほぼ直立した頸部が大きく開き、肩部は上下に拡張された面をもつ。 外面はナデ。内面は調整不明。 口縁端面には3条の凹線を施す。	ぶい橙 5YR7/4	
300	壺	西溝	口径(11.2)	1/3	外上向に開く頸部がそのまま伸び口縁部となる。 頸部外面は縦方向の磨き。内面は調整不明。 口縁端面には4条の凹線を施す。	ぶい橙 7.5YR7/3	
301	壺 A 2	西溝	口径(17.0)	1/6	大きく外反する口縁の端部下外向に粘土紐を貼り付け、垂下する口縁部を形成する。 肩部には4条の凹線を施す。 調整不明。	浅黄橙 7.5YR8/3	
302	壺 B 4	西溝	口径(17.2)	1/9	やや外上方に開く頸部を大きく外反させて口縁とし、口縁端部下外向に粘土紐を貼り付けて垂下した口縁部とする。 外面縦方向の磨き。内面磨減のため調整不明。 口縁端面には4条の凹線を施す。	ぶい橙 5YR7/3	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
303	壺 D 1	西溝	口径(19.6)	1/2	外傾して直線的に開く頸部から大きく外反した後、屈曲して上方に立ち上がり、外反する口縁部。端部は面をなす。 頸部外面は縦方向、頸部上端は横方向の寛磨き。口縁部内面は、横方向の寛磨き。他の部分は調整不明。 口縁部外面の下半には4条の縦凹線文を施した後、2個1組の竹管円形浮文を施した後、2個1組の竹管円形浮文と4本単位の柳掛波状文を飾る。	橙 7.5YR7/6	
304	壺 D 2	西溝	口径(24.4)	1/5	直立する筒状の頸部から、大きく外反した後屈曲して、外上方に立ち上がり、外反して開く口縁部。 口縁部内面寛磨きか。調整等は器表が剥離しているため不明。 口縁下部に2条の凹線文を施し、2個1組の竹管円形浮文を6ヶ所に貼り付ける。	浅黄橙 7.5YR8/3	
305	壺 A 2	西溝	口径 17.5	2/3	直線的に開く頸部が外反して、口縁となる。口縁端部に粘土紐を貼り付け幅面を拡張している。 頸部上半の内面には縦方向の寛磨き、口縁部内面は横方向の寛磨きが残る。 口縁端部の上端に2条、下半に3条の凹線文を施す。	にぶい黄橙 10YR7.3	内面に黒斑あり。
306	壺	西溝	腹径 13.1		球形の体部から外上方に開く頸部。頸部と体部の外面は縦方向の寛磨き。体部の内面はヨコナガ。頸部と体部の内面には絞目が残る。 頸部と体部との境に柳による刺突文を施す。	外) にぶい橙 7.5YR7/3 内) 薄灰 7.5YR4/1	
307	鉢	西溝			やや扁平な球形の体部。体部上端がやや外反して口縁部となる。 底部内面は縦方向の寛磨き。体部上半の内面は横方向の寛磨き。体部中央は縦横の寛磨きが交差する。	外) にぶい橙 7.5YR7/3 内) 浅黄橙 ~黒褐色 7.5YR8/3 ~3/1	内面に黒斑あり。
308	壺 A 2	西溝	口径 15.7 腹径 18.5		肩の張らない体部から、外反して開く口縁部。端部は丸い。 体部外面に右上がりの叩き目が残る。 口縁部内外面に指痕尻痕。	にぶい橙 5YR7/3	
309	壺 B 1	西溝	口径 18.0	1/8	中位の張った体部から「く」の字状に外反する口縁部。端部は丸い。 体部外面は右上がりの叩き(上半と下半では角度が違う)。内面ナガ、口縁部外面ナガ。口縁部外面に粘土紐接合痕が残る。	にぶい橙 7.5YR7/3	

No	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
310	甕 D	西溝	口径 27.0		肩の張らない体部から、外上方に開く口縁部。肩部は面をなす。頸部の屈曲は弱い。 体部外面の下半は右上がりの叩き、体部上半から口縁部外面までは水平叩き。内面は体部、口縁部ともナデ。	外) 橙 5YR8/4 内) 浅黄橙 7.5YR8/4	
311	底部 (甕)	西溝	口径 4.0	1/2	やや上げ底の底部から外上方に開く体部。 体部外面の下半は右上がり、中央よりの部分は水平方向の叩きの後、板ナデ調整。	外) におい橙 ～灰褐 5YR6/4 ～6/2 内) 浅黄橙 ～灰褐 7.5YR8/3 ～5/2	
312	底部 (甕)	西溝	底径 4.4		突出した底部から内凹しながら外上方に開く体部。 体部外面は右上がりの叩き、下半は叩き後に板ナデ。内面はナデ。底部周囲の外面に指頭圧痕。	外) におい赤褐 2.5YR5/4 内) におい橙 7.5YR7/4	
313	高杯 A1	西溝	口径(27.1)	1/6	内彎気味に大きく開く体部から屈曲して、ほぼ直立した後、外反して開く口縁部。 体部外面に縦方向の磨き部分が部分的に残る。 口縁部下に1条の凹線文の痕跡が残るが、はっきりしない。	外) 浅黄橙 7.5YR8/4 内) におい橙 7.5YR7/4	
314	脚部 (高杯)	西溝	底径 12.4		短く中空の脚柱部が大きく外反して密着となる。挿座部は面を形成する。 脚柱部外面は縦方向の磨き。内面は絞目と粘土根接合痕を残す。 裾端部外面に6条の凹線文を施す。	浅黄橙～淡橙 10YR8/3 ～5YR8/3	
315	鉢 B	西溝	口径 14.1 器高 7.1 底径 4.3	完	底部からやや内彎気味に外上方に開く体部。 調整は不明。	におい橙 7.5YR7/3	外面に黒斑あり。

須恵器

No.	器種	出土地区 遺構層位	流量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色 調	備 考
156	須恵器 杯 蓋	土壇 1	口径 14.4 器高 2.9	完	扁平な天井部、つまみは中央が膨み、 僅かに宝珠形のおもかげを残す。体 部は内彎した後、下方に強く屈曲し て口縁部となる。口縁端部は断面二 角形を呈する。 天井部外面は回転置削り。他は内外 面とも回転ナデ。	青灰 10BG5/1	157とセット
157	須恵器 杯	土壇 1	口径 13.3 器高 3.7 底径 9.6	完	底部から明瞭な稜を持って直線的に 開く体部。体部下半に段を持つ。口 縁部は僅かに外傾し、端部は丸い。 体部直下に高台を貼り付ける。高台 はやや下方外方に開き、高さは低い。 底面は置切り後ナデ。底部内面に1 回の仕上げナデ。他は回転ナデ。	外) 明青灰 10BG7/1 内) 青灰 10BG6/1	156とセット
158	須恵器 杯	方形周溝墓 2 南溝	口径(16.9) 器高 7.5 底径 11.4	1/8	平らな底部から丸みを持って立ち上 がる口縁部。端部は丸い。体部直下 に高台を貼り付ける。高台はやや外 側にふんばり、端部は凹面をなす。 底部外面は置切りの後未調整である が、高台貼り付けの際の回転ナデが 及んでいる。他は内外面ともに回転 ナデ。	青灰 5BG6/1	
159	須恵器 長頸壺	方形周溝墓 2	底径(10.3)	1/3	底部のやや内側に高台を貼り付け る。高台は外方にふんばり、端部を 下方に拡張する。底部はやや中央が 膨らむ。 外面下半は回転置削り。上半は内外 面ともに回転ナデ。内面下半は放射 状のナデ。内面底部は不定方向のナ デ。底部外面は回転ナデ。	外) 褐灰 10YR6/1 内) 明青灰 5BG7/1	体部下半に 自然釉がみ られる。

中世土器

No.	器種	出土地区 遺構層位	流量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色 調	備 考
35	土師器 羽 釜	A地区包内形	口径(21.4)	1/12	内湾する口縁部。端部はやや肥厚する。口縁部外面直下に鈎を巡らす。口縁部外面はロクロナデ、内面はナデ。体部外面は右よりの平行叩き。	内) 赤橙 10R6/6 外) におい橙 10R6/4	
160	瓦 器 甌	Pit 8	口径(15.8)	1/9	口縁部は直門する。口縁部内外面はヨコナデ。体部外面は指押え。他は磨滅のため不明。	内) 灰 N7/ 外) 灰 N6/	内面の器面は割離。
161	瓦 器 甌	建物址 3 (Pit 52)	口径(16.6)	1/10	口縁部はやや外反する。口縁部内外面はヨコナデ。体部外面は指押え。体部内面はラセン状の、口縁部内面は横方向の暗文。	灰 N5/	
162	瓦 器 皿	Pit 9	口径(12.9) 底径(7.3) 器高 2.6	1/6	体部は斜め上方へ直線的に伸びる。体部内外面はヨコナデ。底部は回転糸切り。	灰白 N8/	
163	土師器 皿	土壌 7	口径(13.0)	1/4	体部は外上方へ直線的に開き、口縁部は僅かに内湾する。端部は丸い。内外面ともにロクロナデ。	内) 浅黄橙 10YR8/3 外) 淡橙 2.5YR8/4	
164	土師器 皿	土壌 7	底径(13.0)	1/4	底部外面に強いロクロナデを施し、僅かに突出する底部を造り出す。底部は回転糸切り。	内) におい橙 5YR7/4 外) 橙 7.5YR7/6	胎土に微細なクサリ礫を含む。
165	土師器 土 埴	土壌 7	口径(26.4)	1/8	口縁部は外反し、端部は肥厚した面を持つ。口縁部は内外面ロクロナデ。体部外面は右よりの平行叩き(3条/cm)、内面は横方向の刷毛(10本/cm)。	内) におい橙 5YR6/3 外) 灰褐 5YR6/2	口縁部・体部に炭化物付着。
166	土師器 皿	土壌 8	口径(12.3) 器高 3.0 底径(7.3)	1/6	体部は外上方へ伸び、口縁部は僅かに内湾する。端部は丸い。底部は僅かに突出する。底部外面に強いロクロナデ。右回転糸切り。	浅黄橙 7.5YR8/3	
167	土師器 底 部	土壌 8	底径(6.6)	1/3	内面はロクロナデの後、指頭による調整。外面は回転糸切り。	内) 黄灰 2.5YR5/1 外) 浅黄橙 10YR8/3	内面に炭素付着。
168	土師器 小 皿	土壌 6	口径(9.7) 器高 2.1 底径(3.6)	1/4	体部は外傾し、口縁部は内湾する。体部外面は指押え調整。口縁部外面は右よりのロクロナデ調整。	灰白 5YR8/2	燈明皿に使用。
169	土師器 皿	土壌 6	口径(15.2) 器高 2.7 底径(8.5)	1/4	体部は外傾し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は僅かに上方へ振り上げる。体部は指押え。口縁部はロクロナデ。	灰白 5YR8/2	

No	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
170	土師器 皿	土壇 6	口径(13.4) 器高(2.8) 底径(7.0)	1/3	口縁部は直口し、端部は丸い。内外面ともにロクロナデ。底面は回転糸切り。底面に板目状汗痕が残る。	灰白 7.5YR8/2	口縁部・体部に炭素吸着。
171	土師器 皿	土壇 6	口径 12.7 器高 3.0 底径 7.4	完	口縁部は外上方へ伸び、端部は丸い。薄い造り。内外面ともにロクロナデし、底部内面の周縁は門縁状を呈する。底面外面は左回転糸切りの後、板状工具による調整(板目状汗痕)。	内) 灰白 7.5YR8/2 外) 明灰褐 7.5YR7/1	胎土に微細なクサリ織を含む。
172	土師器 皿	土壇 6	口径 12.7 器高 2.5 底径 6.4	完	器形・調整等(171)と同じ。	灰白 7.5YR8/2	
173	土師器 皿	土壇 6	口径(12.8)	1/4	口縁部は外上方へ伸び、端部はシャープで僅かに外反する。薄い造りで内外面ともロクロナデ。	内) 灰白 10YR8/2 外) 淡黄橙 7.5YR8/3	
174	土師器 皿	土壇 4	口径(12.8) 器高 2.3 底径(6.9)	1/2	口縁部は外上方へ伸び、端部は丸い。薄い造りで、内外面ともロクロナデ。底面は左回転糸切り。	淡黄橙 7.5YR8/3	
175	土師器 皿	土壇 4	口径 13.5 器高 2.3 底径 7.0	完	口縁部は外上方へ伸び、端部は丸い。底面は僅かに突出する。薄い造りで、内外面ともロクロナデ。底面外面は回転糸切り。	橙 7.5YR7/8	口縁部内外面に炭素吸着。
176	土師器 皿	土壇 4	口径(12.9) 器高 2.3 底径(7.7)	1/3	器形・調整等(175)と同じ。	橙 5YR8/4	
177	土師器 皿	土壇 4	口径 13.4 器高 3.0 底径 7.2	完	口縁端部は丸く、僅かに内湾する。内外面ロクロナデし、底部内面は門縁状を呈する。底面は右回転糸切り。	橙 7.5YR8/3	胎土に微細なクサリ織・石英粒を含む。
178	土師器 皿	土壇 4	口径 13.5 器高 3.2 底径 8.2	完	口縁部は直口し、端部は丸い。厚手の造りで、内外面ともロクロナデ。平高台状の底面は静止糸切り。	橙 2.5YR6/8	石英・長石粒多し。
179	土師器 皿	土壇 4	口径 12.6 器高 2.7 底径 7.3	1/2	体部上半は外上方へ内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸い。内外面ともロクロナデし、底部内面は門縁状を呈する。体部下半外面に部横方向の刷毛。底面は右回転糸切り。	よい橙 7.5YR7/4	胎土に微細なクサリ織を含む。
180	土師器 皿	土壇 4	口径 12.6 器高 2.7 底径 8.0	完	器形・調整等(179)と同じ。但し、底面内面に仕上げナデを施す。	明灰褐 7.5YR7/2	胎土に微細なクサリ織を含み、石英粒を多く含む。
181	土師器 皿	土壇 4	口径 12.3 器高 3.1 底径 7.9	完	体部上半は外上方へ直線的に立ち上がる。口縁部は直口し、端部は丸い。内外面ともロクロナデし、底部内面の周縁は門縁状を呈する。底面内面中央に仕上げナデ。底面は右回転糸切り。	灰白 7.5YR8/1	口縁部外面に炭化物付着。胎土に微細なクサリ織・石英。

No	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
182	土師器 皿	土壇4	口径(12.3) 器高 3.2 底径 7.5	ほぼ 完	体部は外上方へ直線的に立ち上がる。口縁端部は丸い。 内外面ロクロナデ。底部内面中央に 仕上げナデ。底部は回転糸切り。	淡橙 5YR8/4	胎土に微細 なクサリ織 を含む。
183	土師器 皿	土壇4	口径(12.2) 器高 3.1 底径 (7.1)	1/7	体部は外上方へ直線的に立ち上 がり、口縁端部は丸い。 内外面ロクロナデし、底部内面は仕 上げナデ。底部は回転糸切り。	橙 5YR7/6	胎土に微細 なクサリ織 を含む。
184	土師器 皿	土壇4	口径(12.7) 器高 3.1 底径 (7.2)	1/6	体部は外上方へ直線的に立ち上 がり、口縁端部は丸く、直口する。 内外面ロクロナデ、外面体部下半に一 部横方向の刷毛。底部右回転糸切り。	淡橙 5YR8/4	胎土に微細 なクサリ織 を含む。
185	土師器 皿	土壇4	口径 12.6 器高 2.8 底径 7.7	1/2	体部は外上方へ内彎気味に立ち上 がる。口縁端部は丸い。 内外面ともにロクロナデし、底部内 面は凹線状を呈する。外面体部下 半には強いロクロナデを施す。底部は右 回転糸切り。底部内面に仕上げナデ。	橙 5YR7/6	底部外面に 炭化物付 着。胎土に 微細なクサ リ織を含む。
186	土師器 皿	土壇4	口径(12.3) 器高 (2.9) 底径 7.1	1/4	体部上半は外上方へ内彎気味に立ち 上がり、口縁端部は丸い。 内外面ロクロナデし、底部内面は凹 線状を呈する。底部は右回転糸切り。 底部内面中央に仕上げナデ。	内) 淡赤橙 2.5YR7/3 外) 灰赤 2.5YR5/2	胎土に微細 なクサリ織 を含む。
187	土師器 土 罎	土壇4	口径(25.5)	1/8	口縁部は外反し、端部は肥厚し、面 を持つ。 口縁部は内外面ロクロナデ。体部外 面は右より平行印毛(3条/cm)、内 面は横方向の刷毛(12本/cm)。	内) 橙 5YR7/6 外) 淡黄橙 7.5YR8/3	
188	施釉陶 器 椀	土壇2	口径(16.0)	1/4	体部からやや屈曲して外反する口縁 部。端部はやや尖る。 内外面ともに施釉する。	灰白 10YR7/2	黄瀬戸
189	瓦 質 土 器 火 鉢	土壇9	口径 (内径50 外径55)	1/15	肩部に2条の突帯を持ち、その間に 押印を連続して施す。	暗灰 N3/	
190	土師器 小 皿	溝16	口径 6.4 器高 1.2 底径 5.1	完	内彎して立ち上がる口縁部。端部は 丸い。 内外面ともロクロナデ。底部内面は 指押え痕を残す。底部は右回転糸切 り。	橙 5YR7/6	胎土に微細 なクサリ織 を含む。石 英粒多い。
191	土師器 小 皿	溝16	口径 6.8 器高 1.5 底径 5.6	完	外上方に伸びる短い口縁部。端部は 丸く、やや外反する。 口縁部は内外面ともにロクロナデ。 底部は右回転糸切り。	橙 5YR7/6	胎土に微細 なクサリ織 を含む。石 英粒多い。
192	施釉陶 器 椀	溝16	底径 (7.4)		内面及び外面体部上半にオリーブ黄 色の釉を施す。	灰白 10YR7/2	黄瀬戸

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
193	土師器 皿	溝15	口径(7.8) 器高 1.0 底径(5.9)	1/5	外上方に開く口縁部。端部は丸い。 薄い造りで、内外面ロクロナデ。底 部は右回転糸切り。	浅黄橙 7.5YR8/6	胎土にクサリ 礫を含む。
194	土師器 皿	溝15	口径(11.2) 器高(2.8) 底径(4.8)	1/3	体部は内彎し、口縁部は外上方に伸 びる。端部は丸い。 内外面ロクロナデ。底部は回転糸切り。	浅黄橙 7.5YR8/3	
195	土師器 皿	溝15	口径(10.9) 器高(2.3) 底径(6.2)	1/4	やや内彎し外上方に立ち上がる。端 部は鋭い。 内外面ロクロナデで、ロクロは右回り。 薄い造り。	内) 浅黄橙 7.5YR8/6 外) 浅黄橙 10YR8/3	胎土に微細 なクサリ 礫・石英粒 を若干含む。
196	土師器 皿	溝15	口径(11.5) 器高(2.7) 底径(4.8)	1/9	内彎して、外上方に立ち上がる口縁 部。端部は鋭い。 薄い造り。内外面ともにロクロナデ。	内) 浅黄橙 7.5YR8/3 外) 灰赤 2.5YR5/2	
197	土師器 皿	溝15	口径(12.4) 器高 2.4 底径(7.1)	1/5	口縁部は外上方に伸び、端部は丸い。 内面ロクロナデし、底部内面は凹線 状を呈する。底部内面に仕上げナデ。 底部は回転糸切り。	浅黄橙 7.5YR8/3	胎土に集積 なクサリ 礫・石英粒 を若干含む。
198	土師器 皿	溝15	口径(13.4) 器高(2.5) 底径(7.9)	1/4	口縁部は外上方に伸び、端部は鋭い。 薄い造りで、内外面ロクロナデ。底 部は左回転糸切りか。	内) 浅黄橙 7.5YR8/3 外) 橙 5YR7/6	
199	土師器 皿	溝15	口径(13.0) 器高(2.3) 底径(8.0)	1/4	口縁部は外上方に伸び、端部は鋭い。 薄い造りで、内外面ロクロナデ。ロ クロは右回り。	内) 橙 7.5YR7/6 外) 浅黄橙 7.5YR8/6	
200	土師器 皿	溝15	口径(13.1) 器高 2.3 底径 7.0	3/4	口縁部は内彎し、端部は鋭い。 薄い造りで、内外面ロクロナデし、 底部内面は凹線状を呈する。底部は 回転糸切り後、板状工具による調整 (板目状圧痕)。	浅黄橙 7.5YR8/3	胎土に微細 なクサリ礫 を含む。
201	土師器 皿	溝15	口径(17.1) 器高(2.9) 底径(10.2)	1/6	体部上半は外反し、口縁部は上へ 積み上げる。 体部下半は指押え。口縁部・体部上 半は横方向のナデ。内面はナデ。	灰白 7.5YR8/1	石英粒を含 む。
202	土師器 皿	溝15	口径(12.4) 器高(3.6) 底径(8.6)	1/7	口縁部は直口し、端部は丸い。 内外面ロクロナデし、底部内面は凹 線状を呈する。底部内面に仕上げナ デ。底部は回転糸切り。ロクロは左 回り。	灰白 7.5YR8/1	
203	土師器 皿	溝15	口径(13.0) 器高(2.8) 底径(8.6)	1/4	口縁部は外上方に伸び、端部は鋭い。 薄い造り。内外面ロクロナデ。底部 は右回転糸切り。	内) 浅黄橙 7.5YR8/3 外) 浅黄橙 10YR8/3	

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色 調	備 考
204	土師朝 皿	溝15	口径(12.2) 器高(3.1) 底径(6.5)	1/3	体部から外上方に直線的に立ち上がる口縁部。口縁端部は丸く、僅かに内彎する。 内外面ロクロナデ。底部右回転糸切り。	橙 2.5YR7/6	胎土に微細なクサリ塵・石英・長石粒を含む。
205	土師器 皿	溝15	口径(12.5) 器高(2.7) 底径(7.2)	1/3	口縁部は外上方に伸び、端部は鋭い。薄い造り。内外面ともにロクロナデ。底部は右回転切り。	浅黄橙 7.5YR8/6	
206	土師器 羽 釜	溝15	口径(25.6)	1/4	口縁部は内傾し、端部は肥厚して面をなす。口縁部外面直下に筋を貼り付け遅らす。 口縁部内外面はロクロナデ。体部外面は右よりの平行叩き(13条/cm)。体部内面は横方向の刷毛(13本/cm)。	内) 浅黄橙 7.5YR8/6 外) 浅黄橙 7.5YR8/4	
207	土師器 底 部	溝15	底径(8.3)	1/2	体部は直線的に立ち上がる。体部外面はロクロナデ。底部外面は指押え。底部は糸切り。ロクロは右回り。	内) 褐灰 5YR4/1 外) 黒褐 5YR3/1	内外面に炭素吸着。胎土に微細なクサリ塵・石英・長石粒を含む。
208	須恵器 埴 鉢	溝15	口径(27.5)	1/11	口縁部は肥厚し、上方に拡張する。端部は丸い。口縁部外面は丸みを帯びた面を持つ。 内外面ロクロナデ。ロクロは右回り。	内) 灰褐 5YR6/2 外) 灰白 7.5YR8/1	電焼き痕跡。 内面に2次焼成痕。
209	須恵器 埴 鉢	溝15	口径(24.6)	1/23	口縁部は肥厚し、上下に拡張する。端部は鋭く、面を持つ。 内外面ともにロクロナデ。 口縁部外面は面を持ち、2条の凹線を遅らす。	灰白 7.5YR8/1	
210	須恵器 埴 鉢	溝15	口径(25.2) 器高(8.7) 底径(6.8)		口縁部は上方に拡張されて肥厚し、端部は丸い。口縁部外面は面を持つ。 内外面ロクロナデ。ロクロは右回り。	青灰 5B G 6/1	
211	施 釉 陶 器 碗	溝15	底径(5.0)	1/4	外上方へ直線的に立ち上がる体部。体部底部とも内面は輪軸する。 底部は削り出し高台。	内) オリーブ黄 7.5YR6/3 外) 灰白 7.5YR8/2	黄瀬戸。漆による補修痕。
212	施 釉 陶 器 碗	溝15	口径(16.7)	1/12	緩やかに内彎する体部。やや屈曲して外反する口縁部を持つ。 内面と外面体部上半にオリーブ黄色の釉を施す。裏胎部は右回転のロクロ削り。	内) 灰白 7.5YR7/2 外) 灰白 7.5YR8/1	黄瀬戸。底部は削り出し高台の可能性はある。
213	無 釉 滑 鉢	溝15	口径(32.0)	1/10	体部はやや内彎。口縁部は上下に拡張され、端部は尖る。 内外面ロクロナデ。内面に標榜きの扉門(10本/単位)を施す。	内) 灰白 7.5YR8/1 外) 青灰 5B G 6/1	前田ITA期

No.	器種	出土地区 遺構層位	法量(cm)	残存	形態・技法の特徴	色調	備考
214	無胎 陶鉢	溝15	口径(30.2)	1/10	体部はやや内彎。口縁部は上下に拡張され、端部は尖る。 内外面ともにロクロナデ。内面に櫛歯きの瘤目(9本/単位)を施す。	内) 灰白 7.5YR8/1 外) 青灰 5B G6/1	偏前IV A期 重焼き痕跡。
215	無胎 陶鉢	溝15	口径(28.9)	1/4	外上方へ伸びる体部。口縁部は上下に拡張。端部は尖る。 内外面ロクロナデ。内面に櫛歯きの瘤目(8本/単位)を施す。	青灰 (5B G5/1)	偏前IV A期
216	土師器 皿	B地区包含層	口径(7.2) 器高 1.5 底径(5.4)	1/3	内彎気味に外上方へ伸びる口縁部。端部は丸い。 内外面ロクロナデ。底部は右回転糸切り。	浅黄橙 7.5YR8/6	胎土に微細なクサリ礫を含む。
217	土師器 皿	B地区包含層	口径(10.3) 器高(0.9) 底径(8.6)	1/9	外上方へ伸びる短い口縁部。端部は鋭い。 底部は回転糸切り。	内) 明褐灰 7.5YR7/2 外) 灰白 7.5YR8/2	
218	土師器 皿	B地区包含層	口径(12.6) 器高(2.4) 底径(6.7)		内彎する口縁部の端部は鋭い。 薄い盛りで、内外面ロクロナデし、底部内面は凹線状を呈する。底部は左回転糸切り。底部外側に板状工具によるナデ。	内) 明褐灰 7.5YR7/2 外) 灰白 7.5YR8/2	胎土に微細なクサリ礫を含む。
219	須恵器 底部	B地区包含層	口径(10.6)	1/8	底部側面はロクロナデにより外反気味。体部は外上方へ直線的に開く。 内外面ロクロナデ。底部は回転糸切り。	明青灰 5B G7/1	石英・長石粒多い。
220	瓦 器 皿	B地区包含層	口径(14.7)		体部は内彎し、口縁部はやや外反。口縁部内外面はヨコナデ。体部外面は指押え。底部内面はラセン状の、口縁部内面は横方向の櫛文。	青灰 5B G5/1	
221	施陶 皿	B地区包含層	口径(14.8)	1/12	外反する口縁部。端部は拡張し水平な面を持つ。口縁部は施釉、体部は露胎。酸化還元成により発色。	明褐 7.5YR5/6	瀬戸・美濃系
222	施陶 器 椀	B地区包含層	口径(8.2)	1/4	緩やかに内彎する体部。やや凹曲して外反する口縁部を持つ。内面及び体部外面上半に天目釉を施す。	内) 5YR4/4 外) 7YR2/1	瀬戸・美濃系 天目
223	白磁 部	B地区包含層			外方へよんばる高台。体部外向・底部外側面に施釉。	明緑灰 5G7/	
224	瓦 上 器 皿	B地区包含層			底部外側面に凸帯を巡らす。 底部に足の貼り付け痕。内外面ともに炭素吸着。	黒 7.5YR2/1	火鉢

石器計測表

遺物 番号	器種	出土 地区	遺構・層位	石 材	分 類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	遺存状態
1	石鏃	B	包 含 層	サヌカイト	凹基無茎	1.2	1.1	0.2	(0.25)	一部新欠
2	石鏃	B	溝 4	サヌカイト	凹基無茎	1.7	1.2	0.3	(0.65)	脚一方端欠
3	石鏃	B	P i t 23	サヌカイト	凹基無茎	(2.0)	1.4	0.4	(1.1)	脚一方欠
4	石鏃	B	包 含 層	サヌカイト	凹基無茎	1.8	1.4	0.3	0.6	完 形
5	石鏃	B	黒褐色土	サヌカイト	凹基無茎	(2.1)	(1.1)	0.3	(0.9)	短脚一欠
6	石鏃	B	S B - 1	サヌカイト	凹基有茎	(4.3)	1.9	0.5	3.5	先端欠
7	石鏃	B	方形頂溝墓5	サヌカイト	凹基有茎	2.3	1.4	0.5	1.25	完 形
8	石鏃	B	包 含 層	サヌカイト	—	2.6	1.8	0.5	1.95	完 形
9	石鏃	A	住 居 址 2	サヌカイト	—	3.6	5.2	0.9	13.1	完 形
10	石鏃	B	黒褐色シルト	サヌカイト	—	2.9	6.1	0.6	10.5	一 部 欠
11	削器	B	黒褐色シルト	サヌカイト	—	4.5	7.1	0.8	42.9	完 形
12	削器	B	黒褐色シルト	サヌカイト	—	2.8	5.1	0.8	20.7	完 形
13	楔形 石器	B	中世包含層	サヌカイト	—	2.8	2.1	0.3	3.2	完 形
14	敲石	B	S K - 4	砂 岩	棒 状	10.5	3.4	3.0	150.0	完 形
15	敲石	B	住 居 址 4	砂 岩	棒 状	13.7	4.2	3.2	240.0	完 形
16	磨石	B	黒褐色土	砂 岩	—	12.5	11.0	4.8	990.0	完 形
17	台石	A	住 居 址 6	砂 岩	—	(9.7)	13.5	6.1	(903.0)	約4分の3欠
18	台石	D	西 溝	砂 岩	—	(12.9)	9.4	4.4	(665.0)	約4分の1欠
19	台石	B	住 居 址 2	斑瀧岩	—	44.5	29.6	12.9		完 形
20	台石	B	住 居 址 2	砂 岩	—	(33.3)	35.1	11.5		約5分の1欠
21	砥石	A	住 居 址 1	砂 岩	—	22.9	15.5	9.0	3895.0	完 形
22	砥石	D	東 溝	砂 岩	—	16.6	12.2	3.2	1340.0	完 形
23	砥石	A	住 居 址 2	砂 岩	—	(11.5)	5.0	4.1	(400.0)	両 端 欠
24	砥石	A	包 含 層	砂 岩	—	12.8	7.0	5.3	825.0	完 形
25	砥石	A	住 居 址 2	砂 岩	—	32.3	12.5	7.0		完 形

# 圖 版





上) 東より



下) 北東より



上) 南より



下) 東より



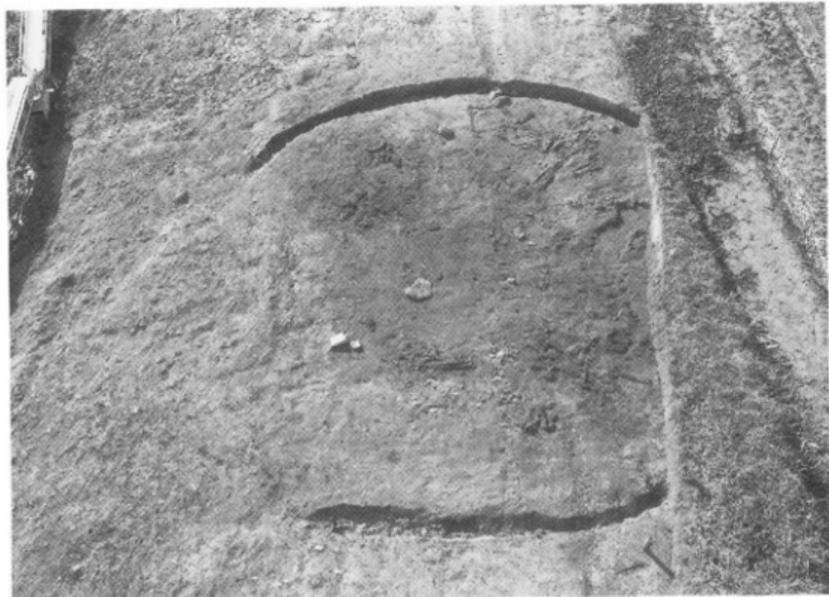




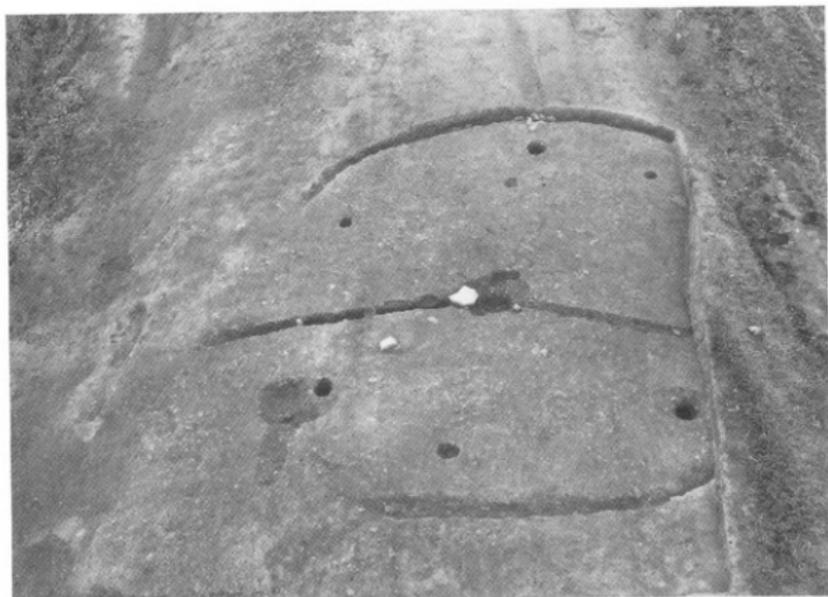
上) 住居址群 (東より)



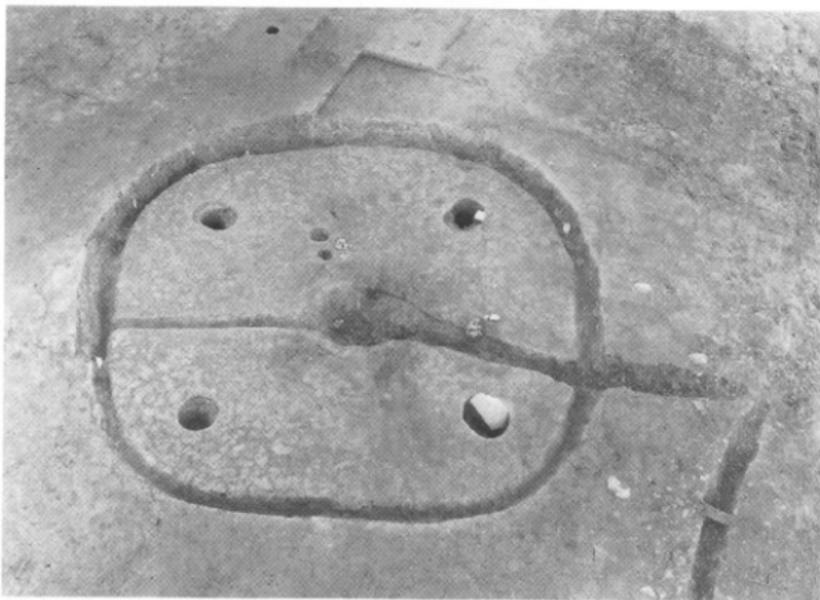
下) 住居址群 (西より)



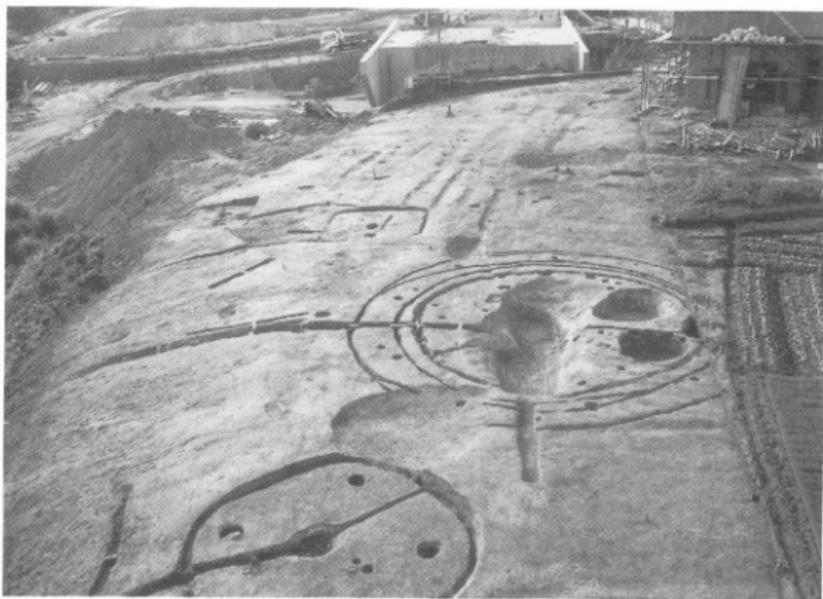
上) 住居址A-1 床面上炭化物



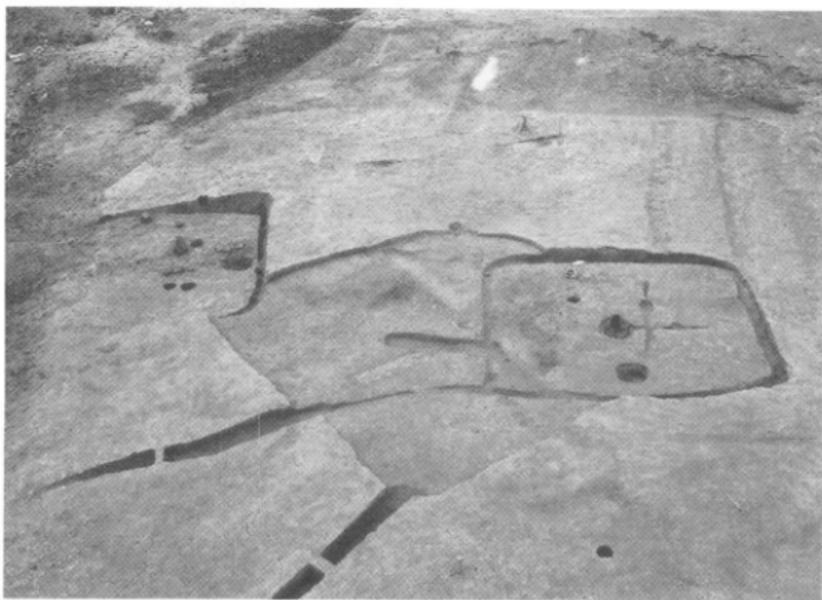
下) 住居址A-1



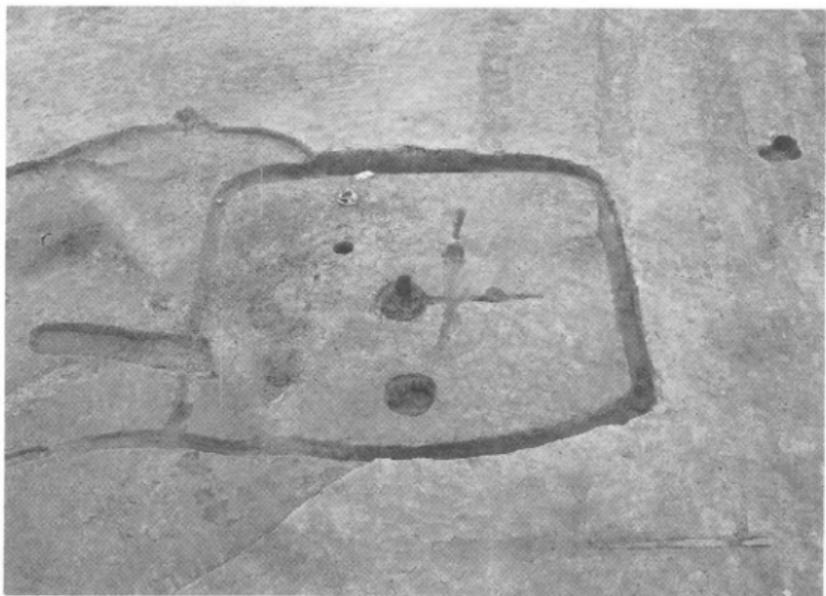
上) 住居址A-2



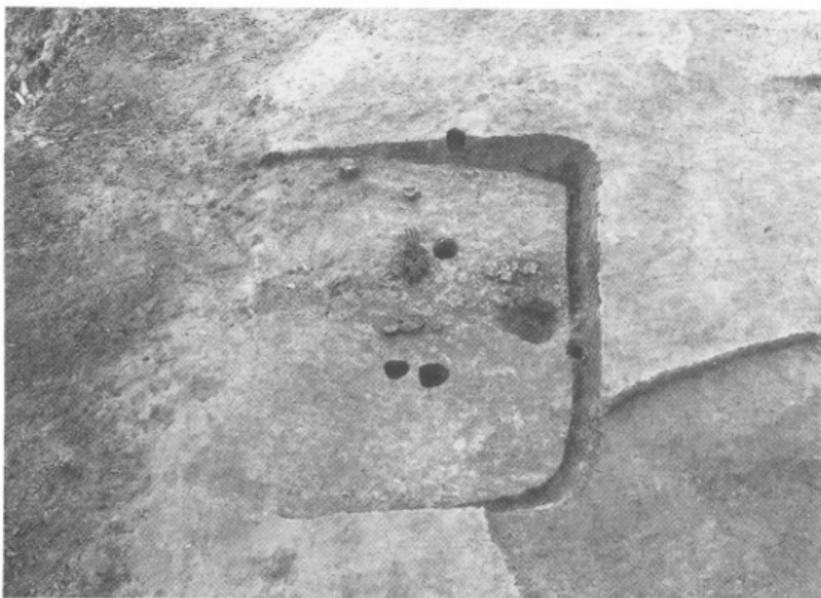
下) 住居址A-3



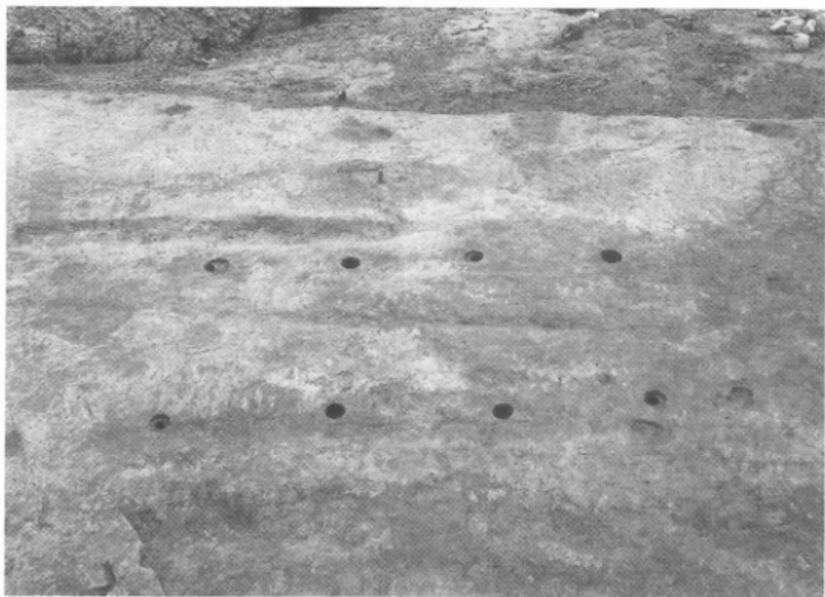
上) 住居址A-4・5・6



下) 住居址A-4



上) 住居址A-5



下) 建物址

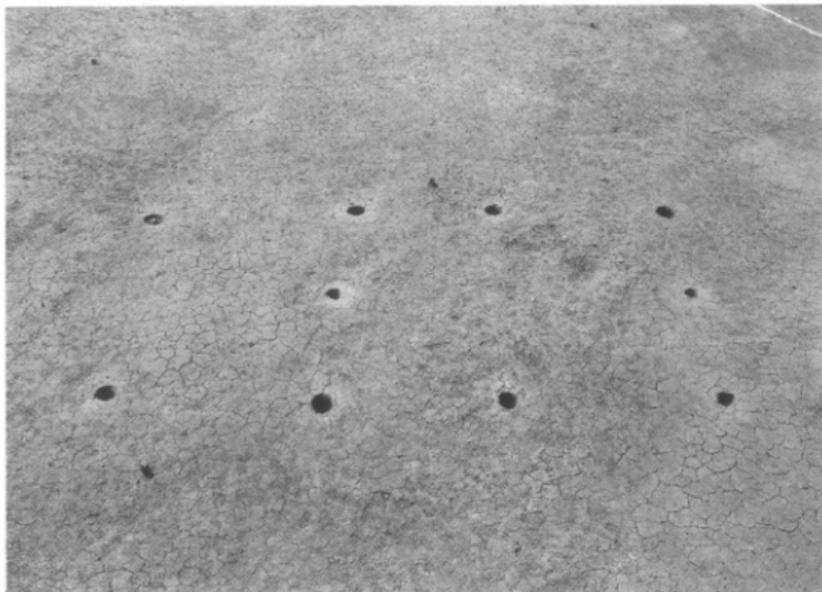




上) 土層断面



下) 住居址B-4



上) 建物址 1



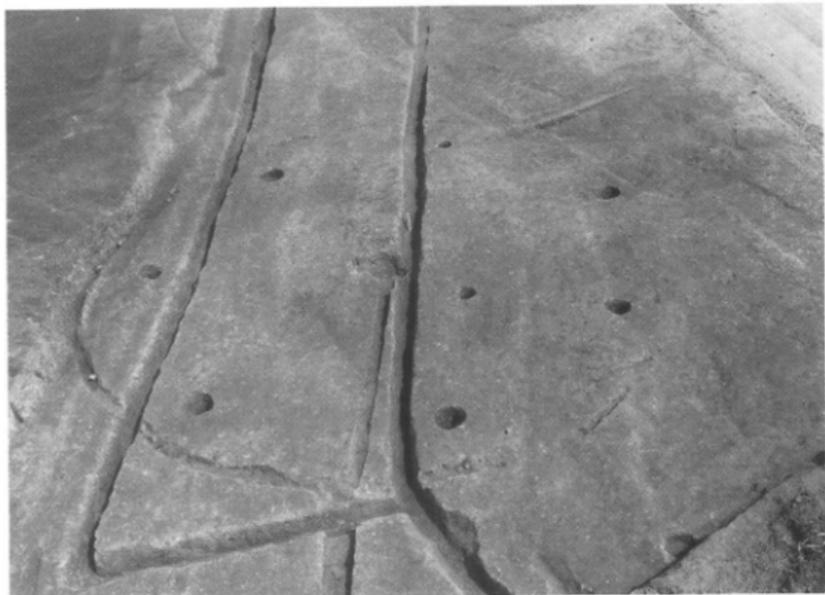
下) 建物址 2



上) 住居址群(北より)



下) 住居址群(南より)



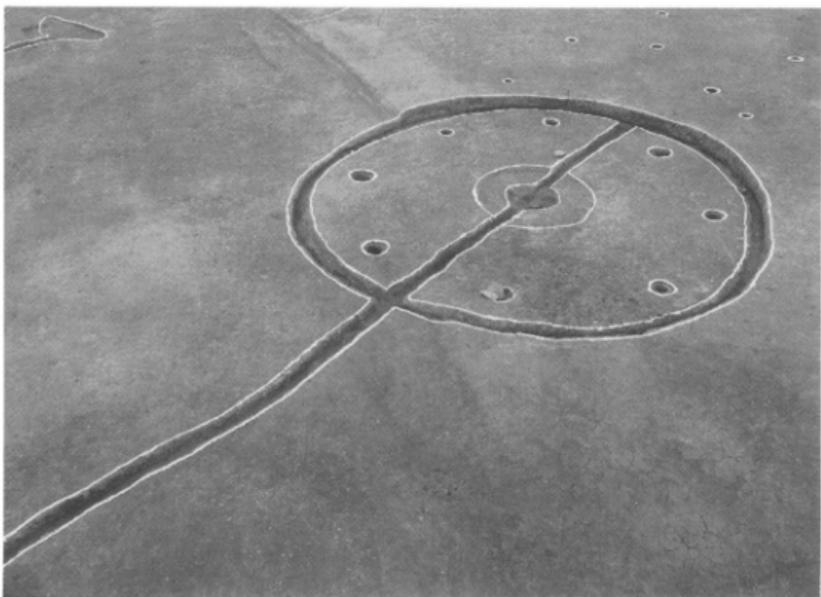
上) 住居址B-1



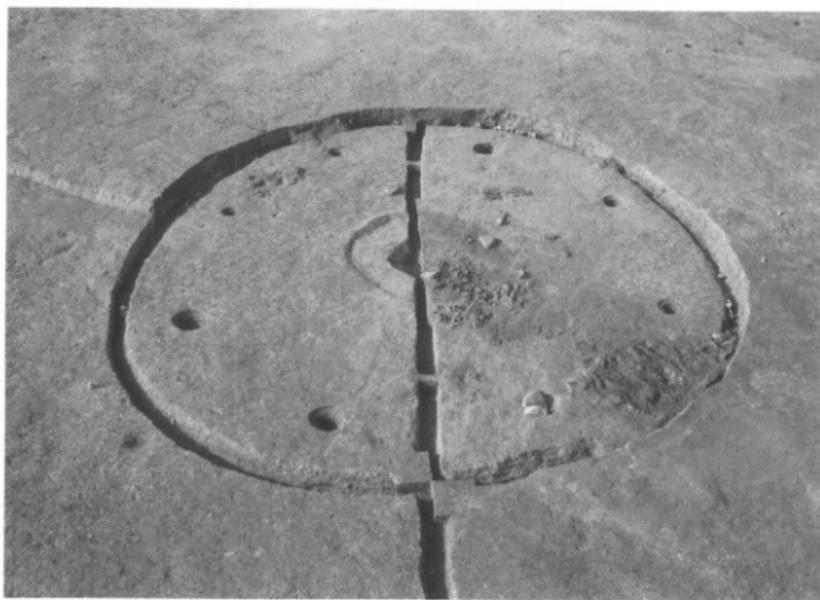
下) 住居址B-1 中央土層土層断面



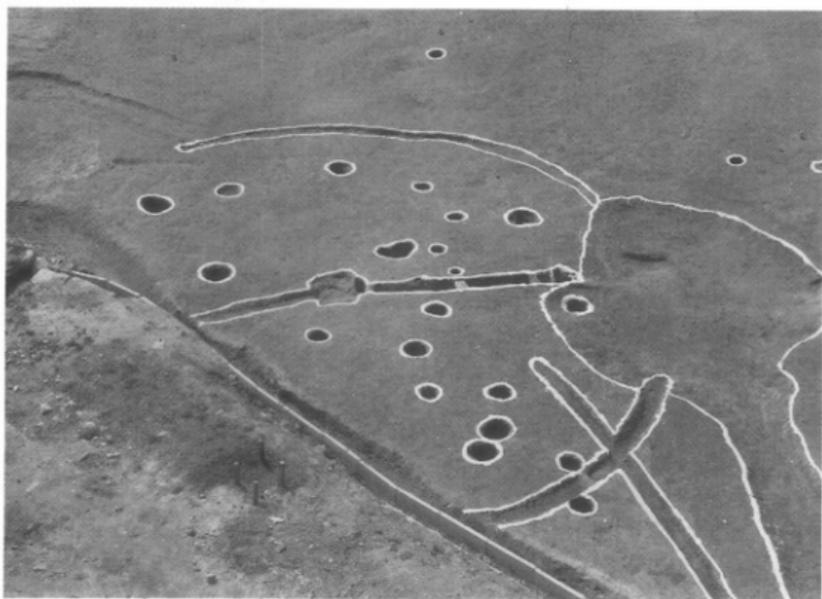
上) 住居址B-2



下) 住居址B-2



上) 住居址B-2



下) 住居址B-3



上) 方形周溝墓群(東より)



下) 方形周溝墓群(西より)



上) 方形周溝墓1 (検出状況)



下) 方形周溝墓1



上) 方形周溝墓2(検出状況)



下) 方形周溝墓2



上) 方形周溝墓3(検出状況)



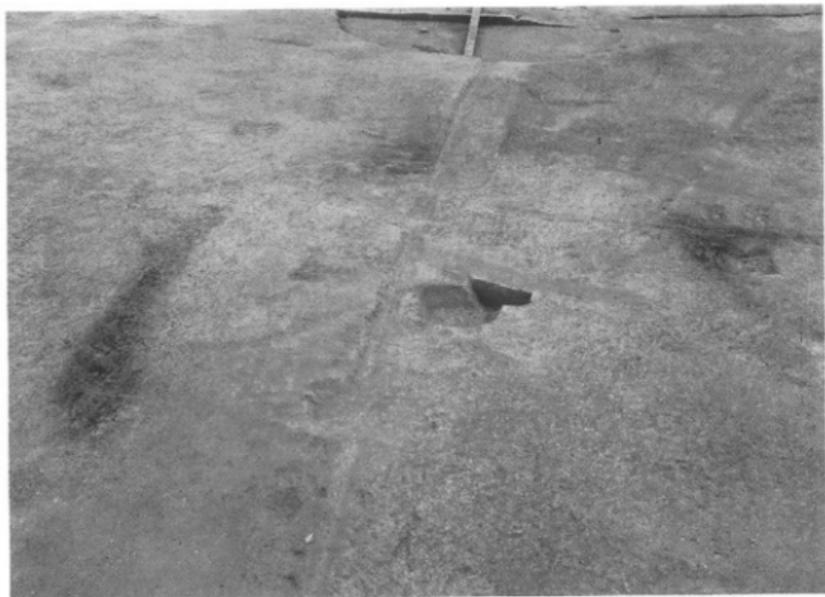
下) 方形周溝墓3



上) 方形周溝墓4(検出状況)



下) 方形周溝墓4



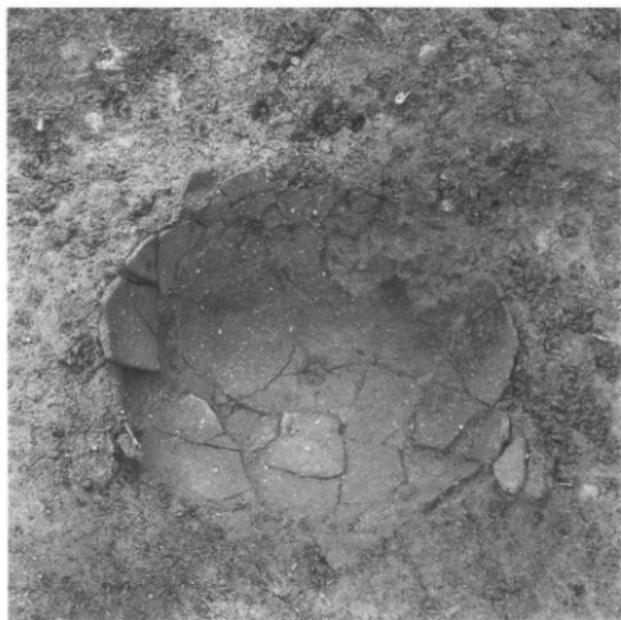
上) 方形周溝墓5(検出状況)



下) 方形周溝墓5



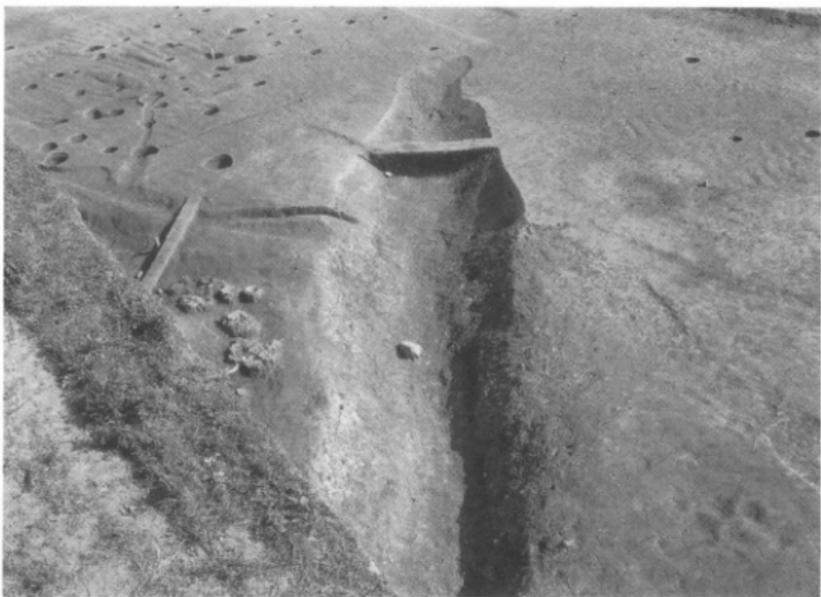
上) 方形周溝墓6



下) 土器棺



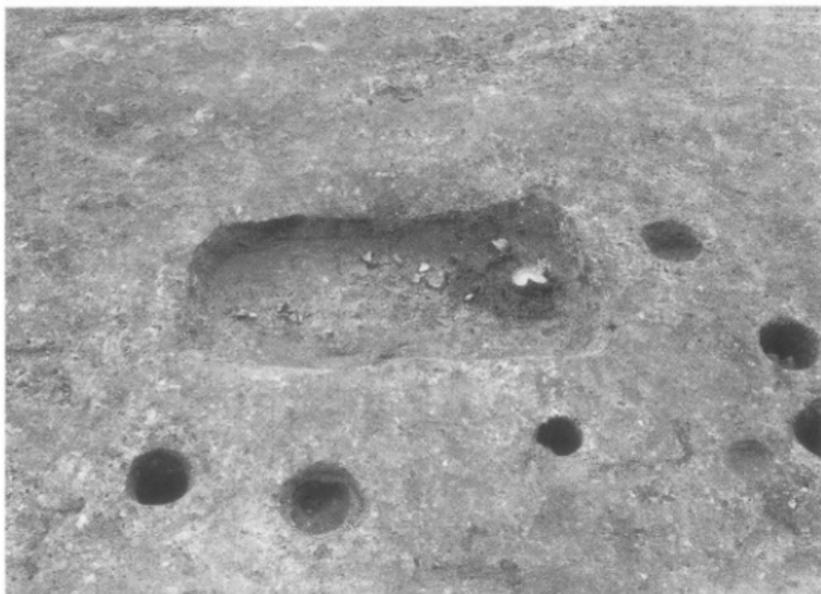
上) 溝3・4・7



下) 溝14



上) 建物址3



下) 土壇6



上) 土塚4 (遺物出土状況)



下) 土塚4



上) 調査前の状況



下) 東溝土層断面



上) 東溝(遺物出土状況)



下) 東溝



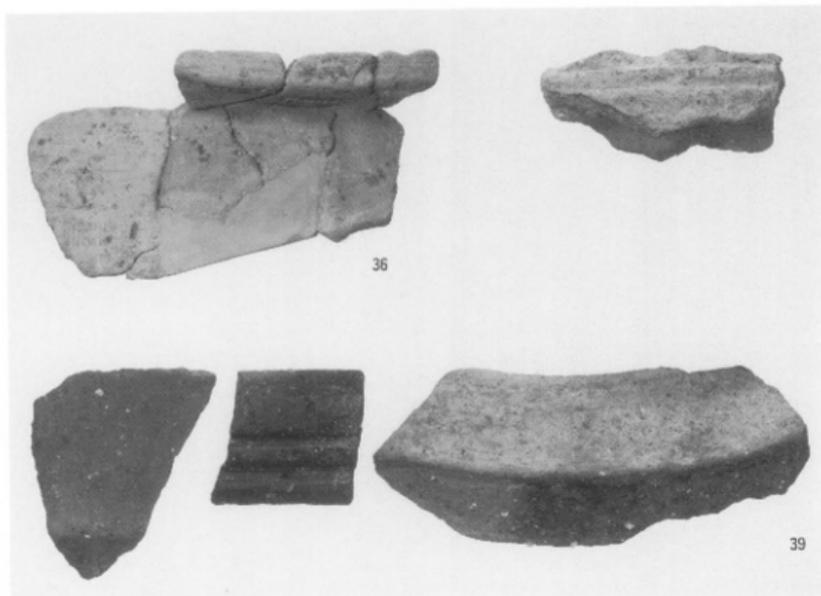
上) 西清土層断面



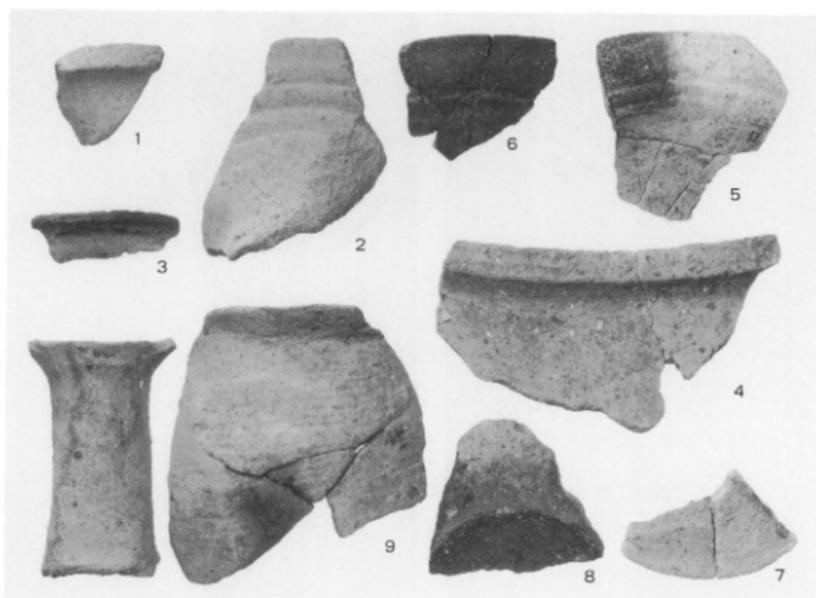
下) 西清



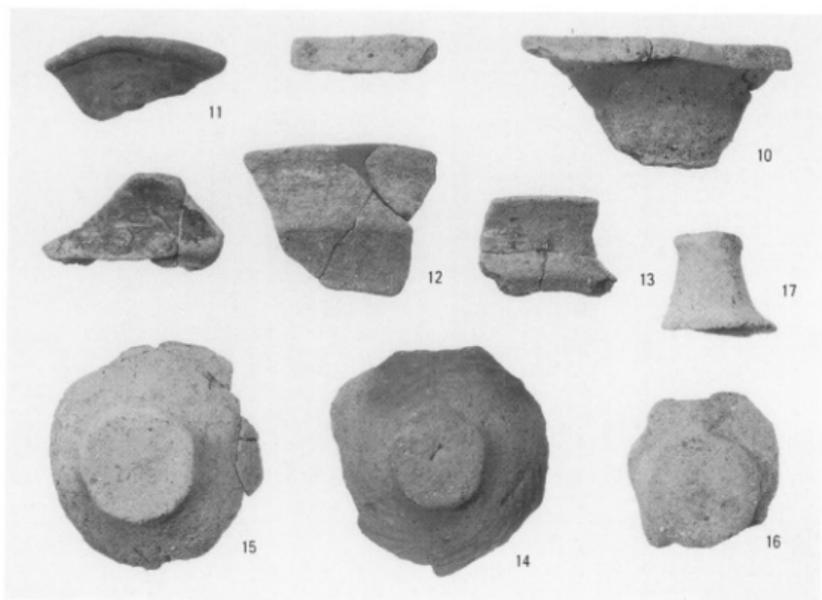
上) 建物址2 出土土器



下) 住居址B-4 出土土器



上) 住居址A-2 出土土器



下) 住居址A-1 出土土器



18



23



27

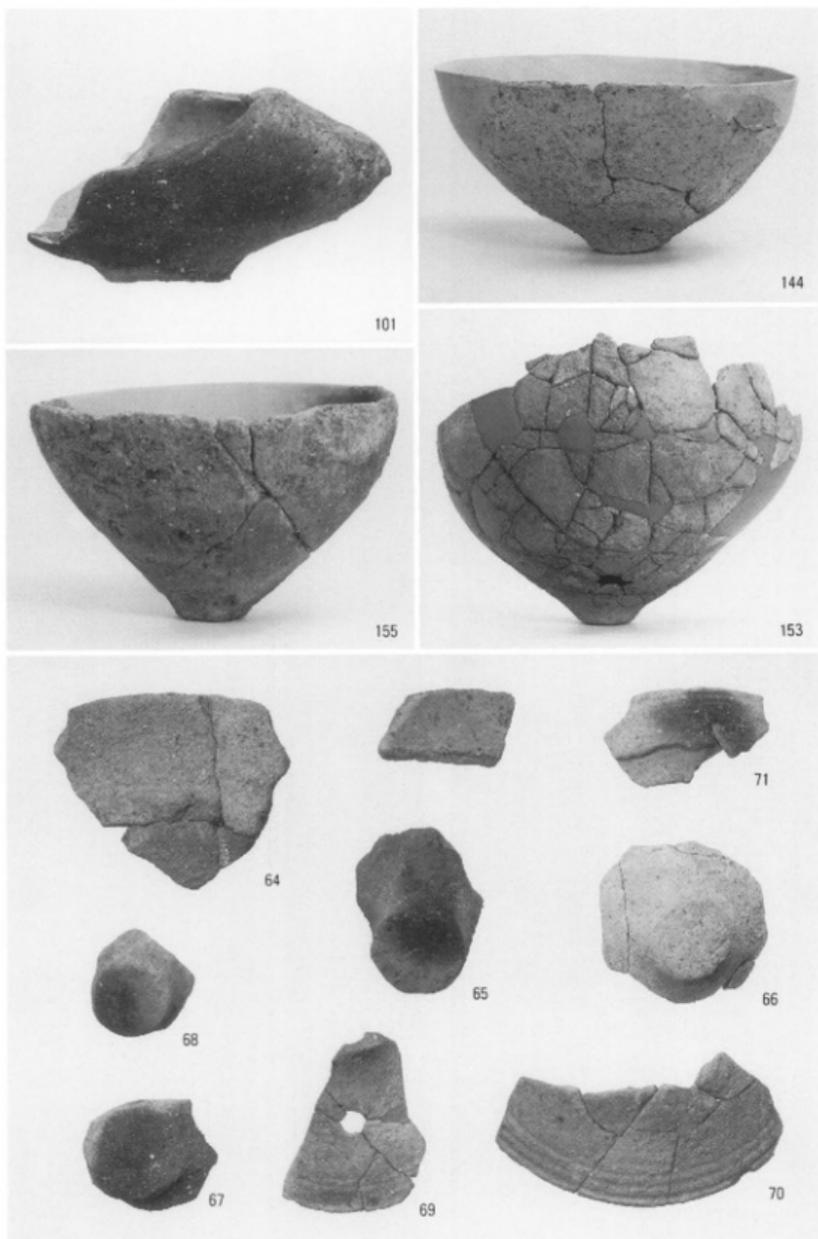


32

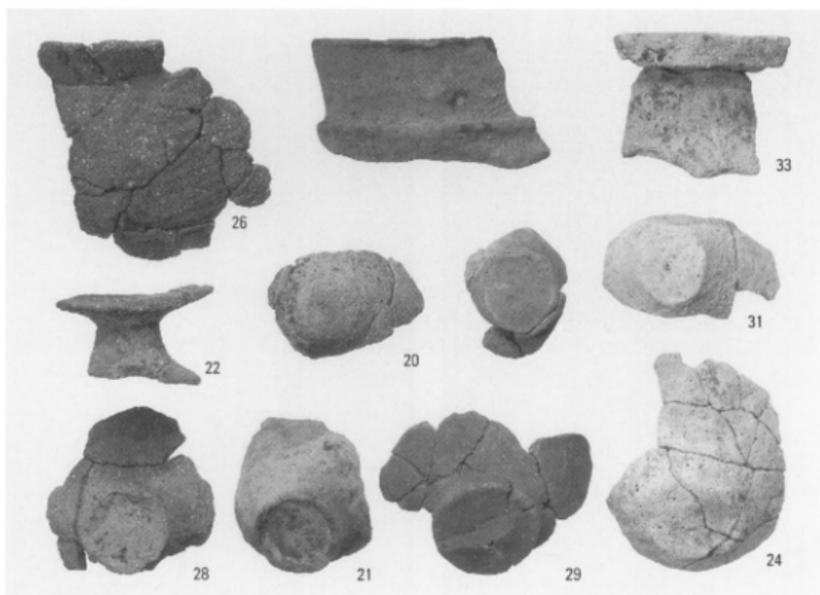


30

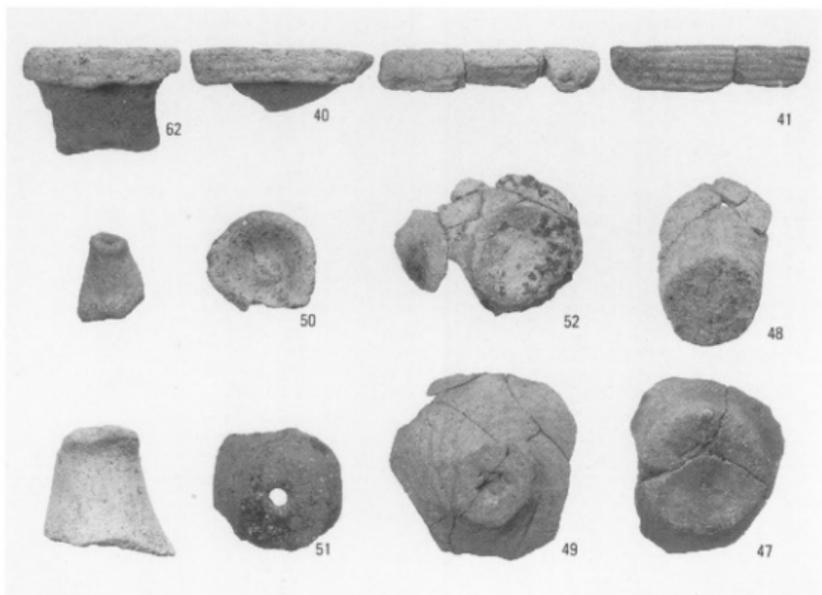




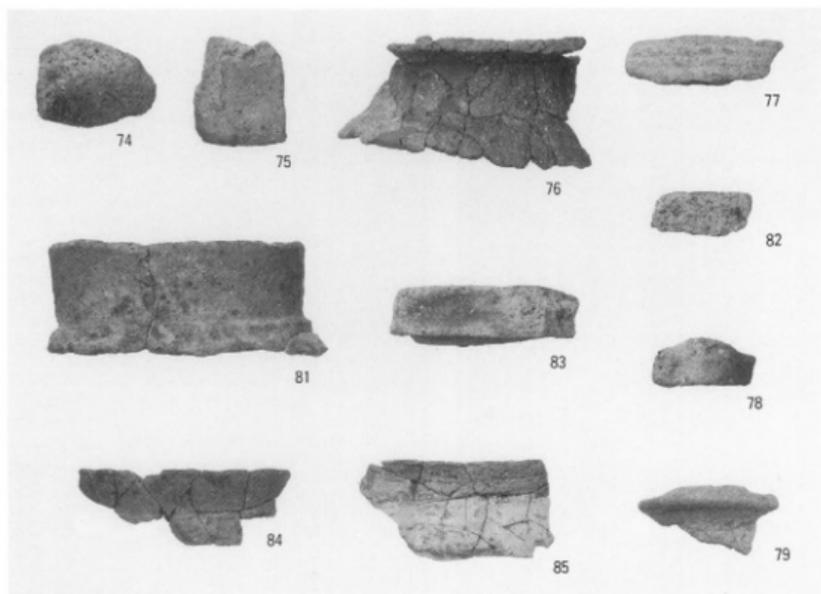
上) 方形周溝墓3(101)・6(144)・土器棺(153) 包含層(155) 下) 溝内出土土器



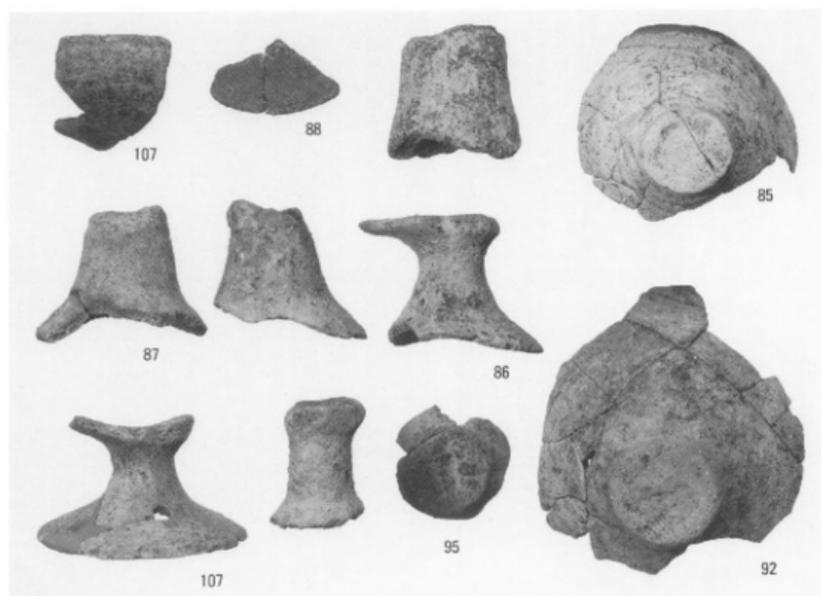
上) 住居址A-3~6 出土土器



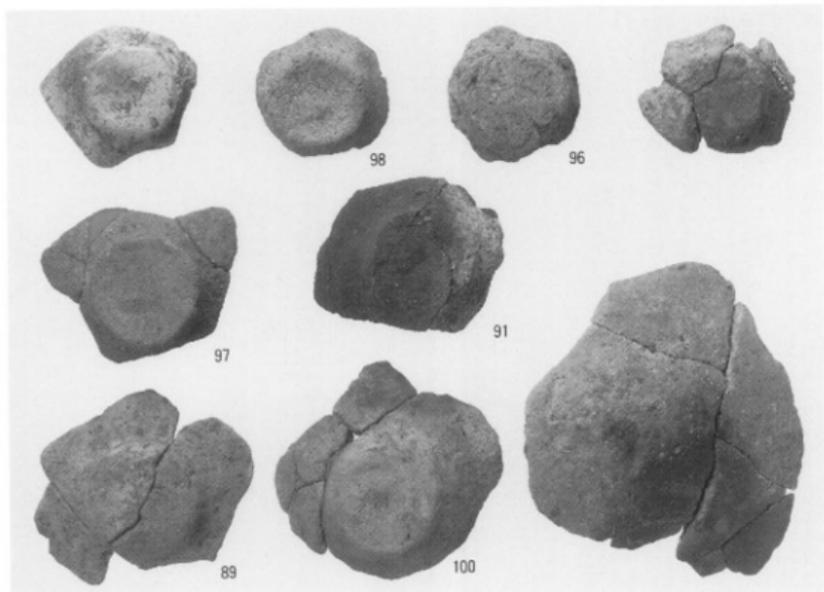
下) 住居址B-1~3 出土土器



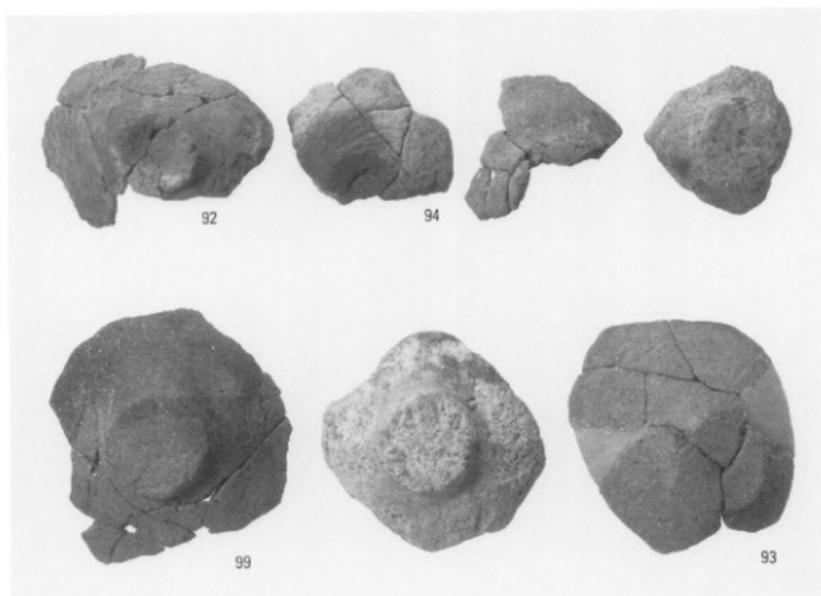
上) 方形周溝墓1・2 出土土器



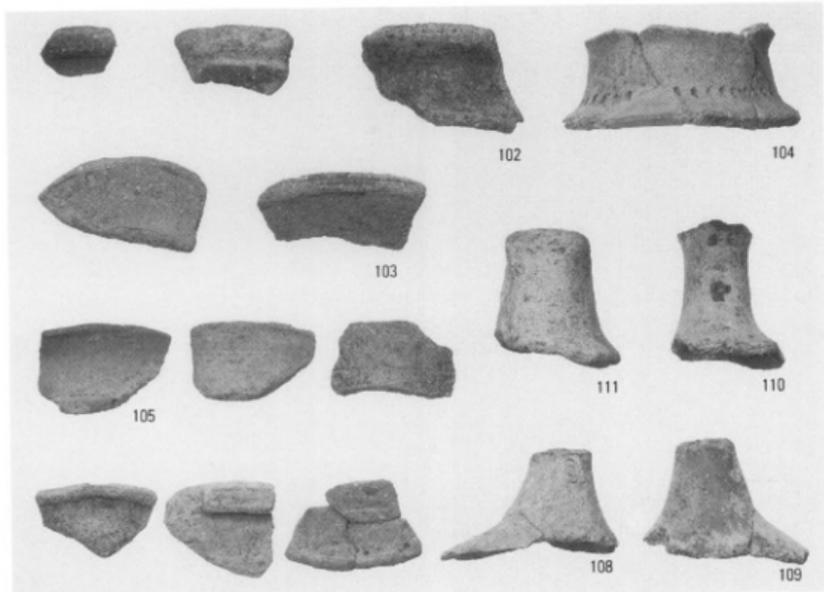
下) 方形周溝墓3・4 出土土器



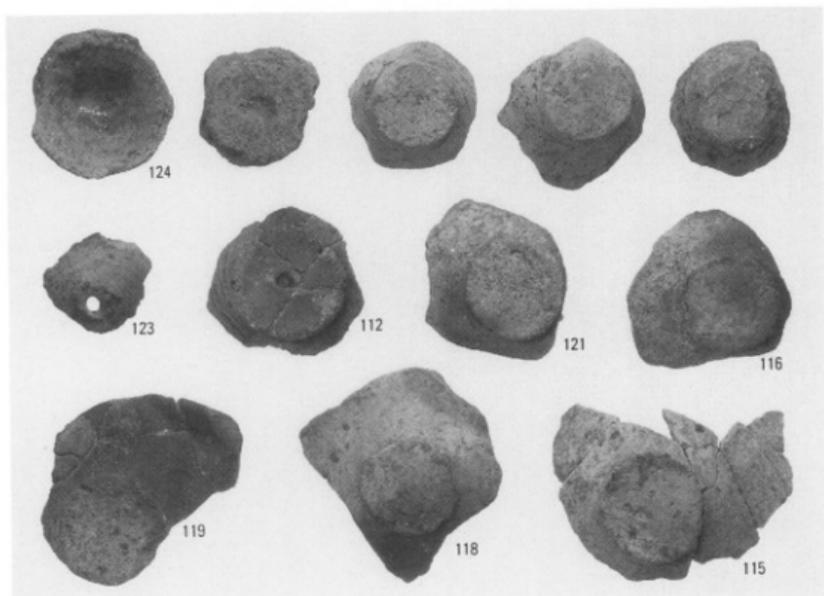
上) 方形周溝墓3出土土器



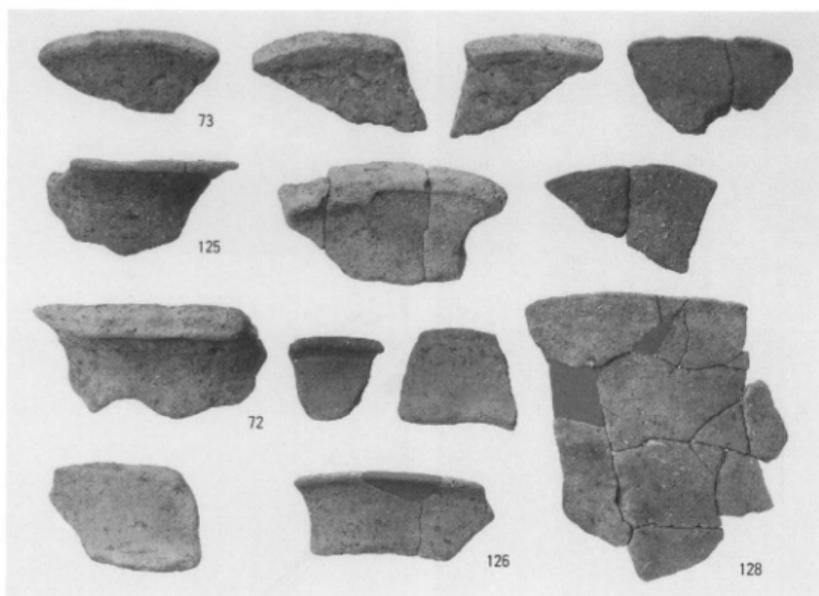
下) 方形周溝墓3出土土器



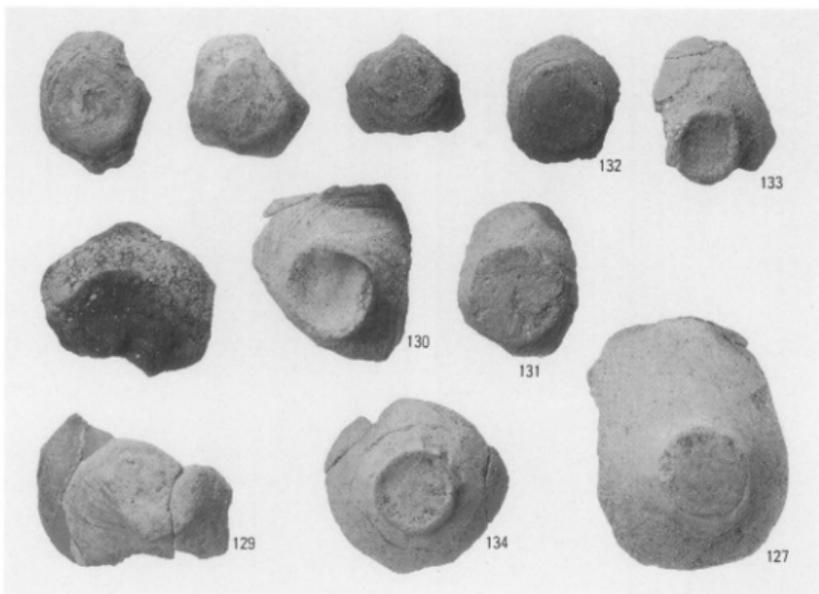
上) 方形周溝墓4出土土器



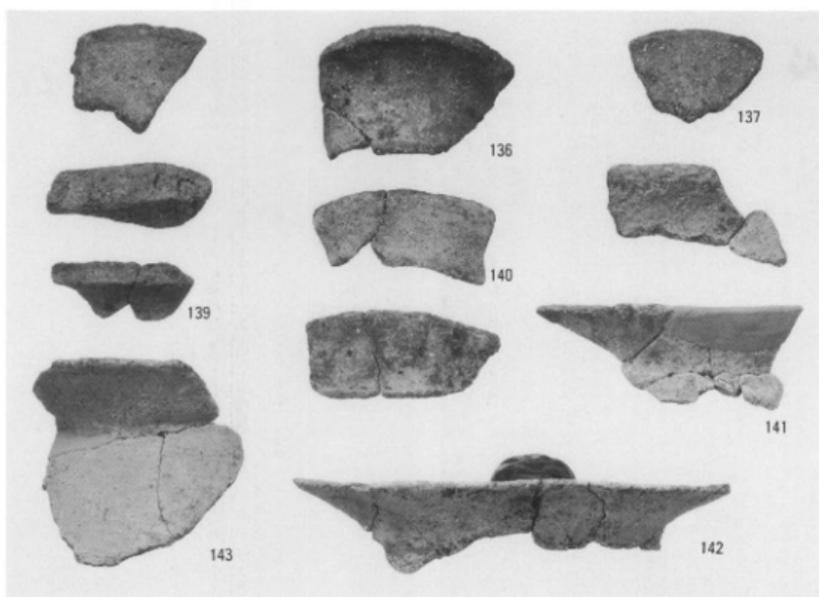
下) 方形周溝墓5出土土器



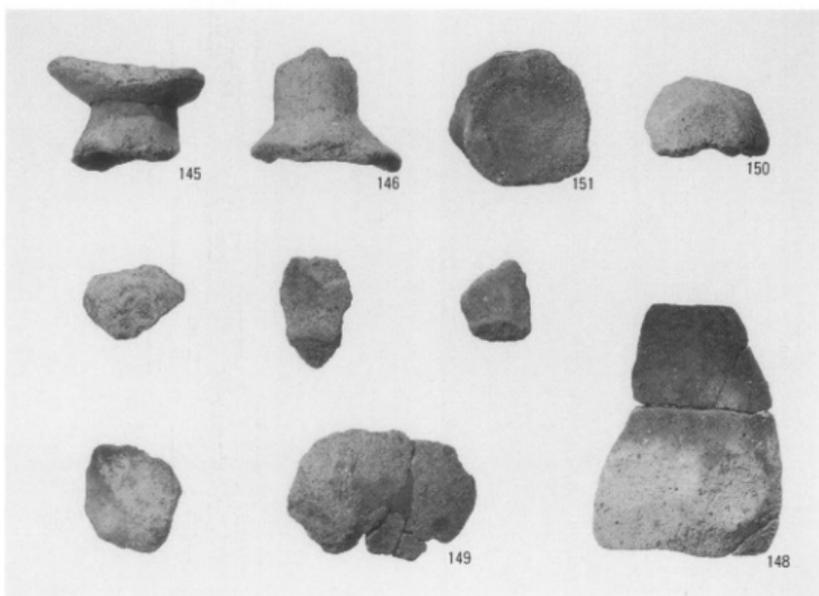
上) 方形周溝墓1～6出土土器



下) 方形周溝墓6出土土器



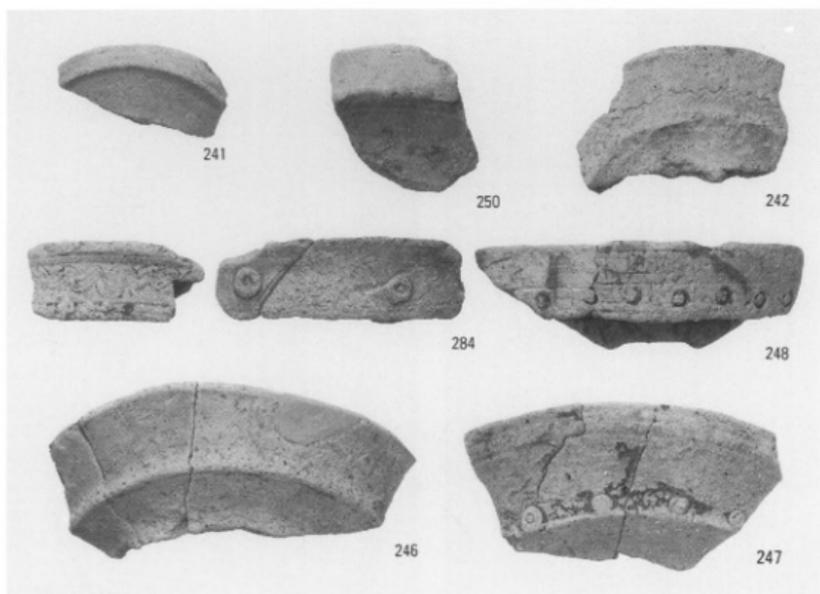
上) 方形周溝墓6出土土器



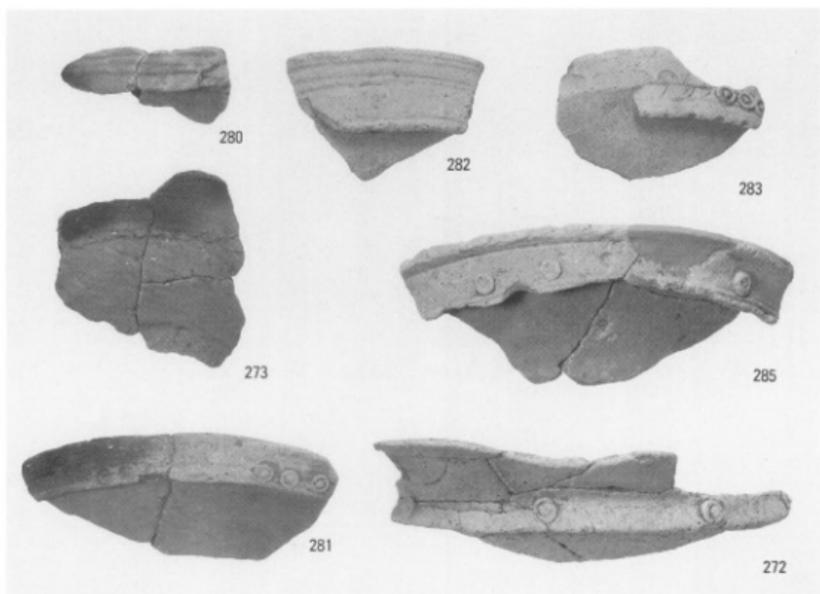
下) 東溝出土土器



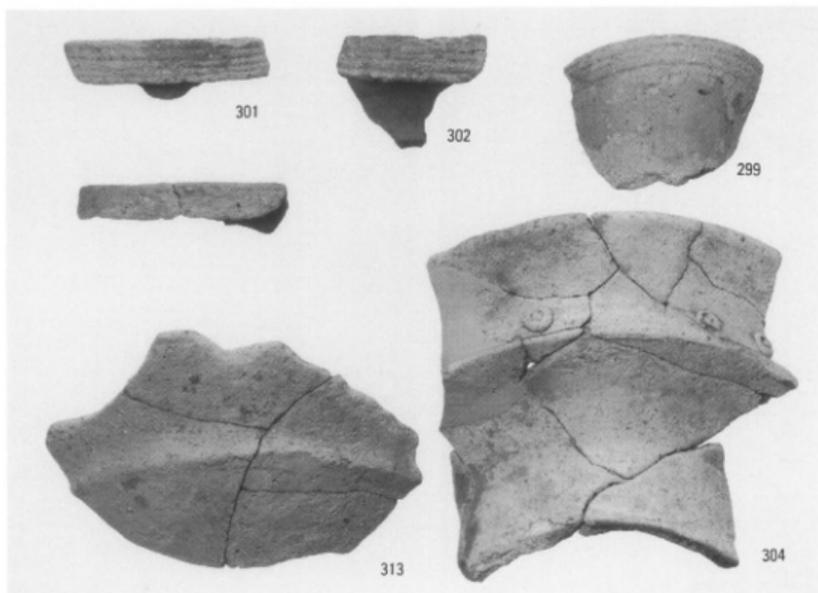




上) 東溝出土土器



下) 東溝出土土器





ガラス管玉



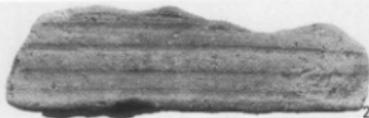
紡錘車



紡錘車



251



253



244



243



282



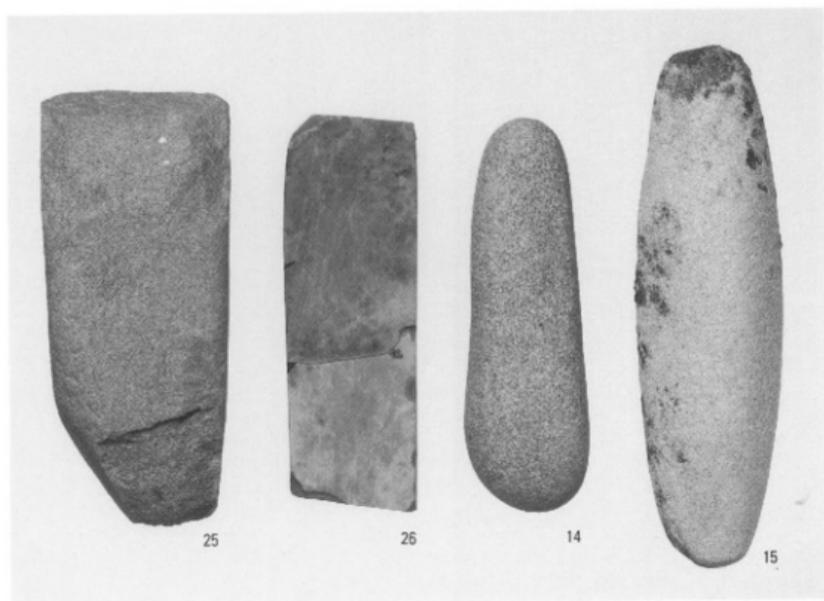
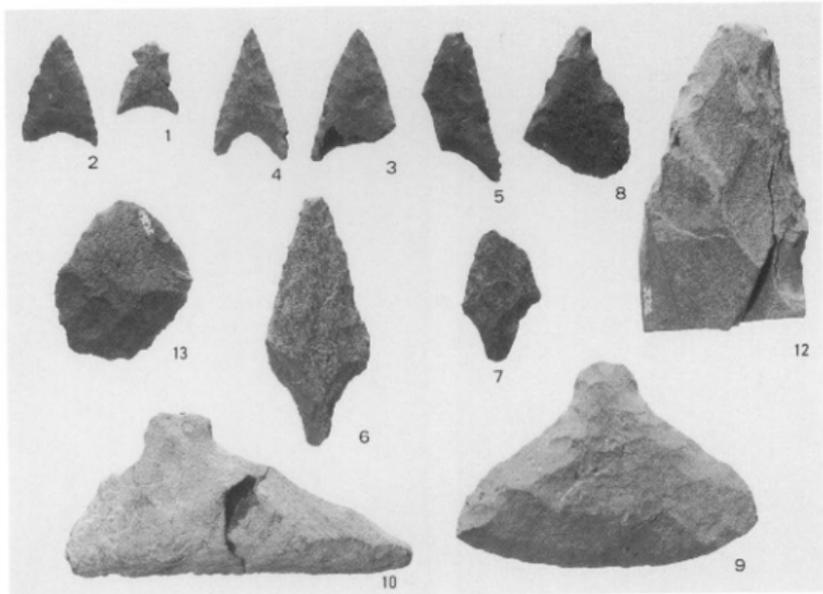
249



271



276





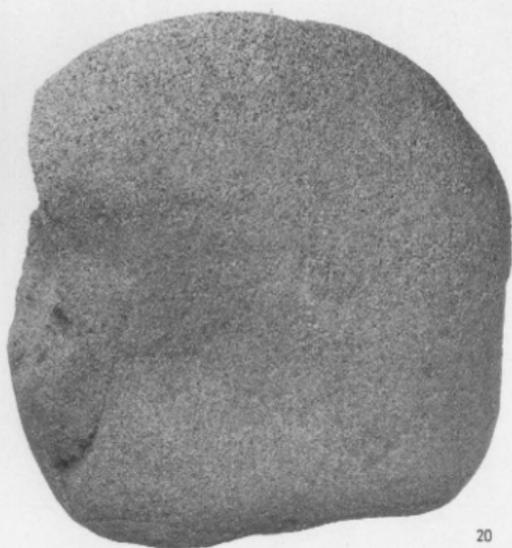
24



17



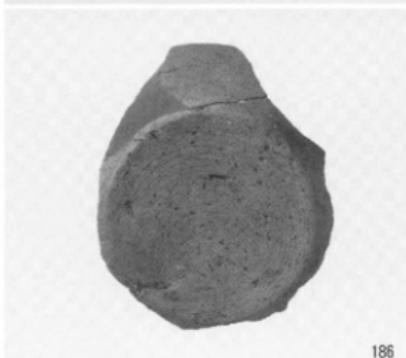
21



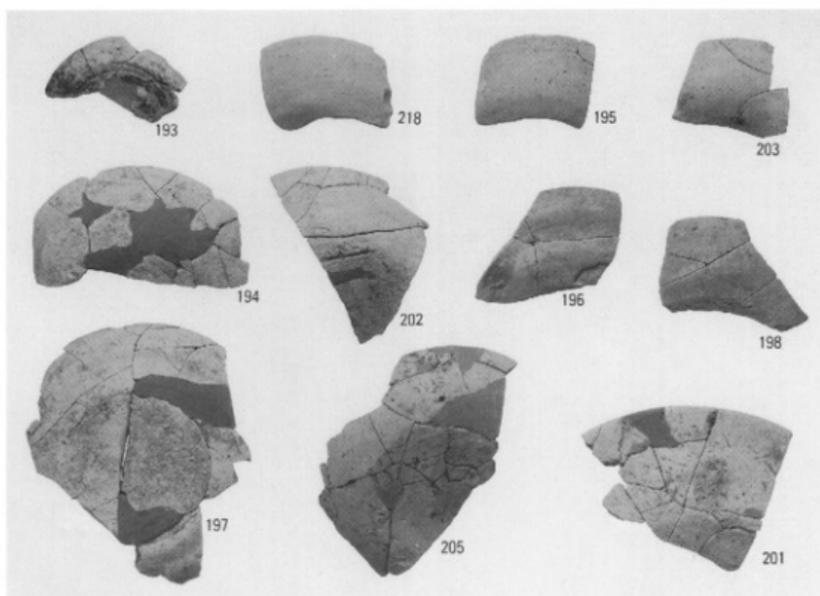
20



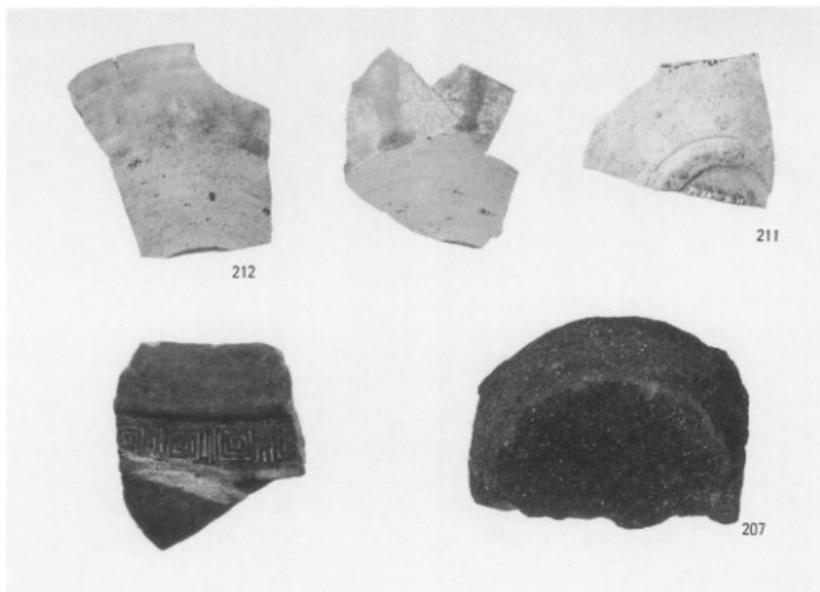
土壇 1 (156・157)・方形周溝墓 2 (158・159)・土壇 4 (182)・土壇 6 (170)・溝 15 (200・204)・溝 16 (190・191) 出土土器



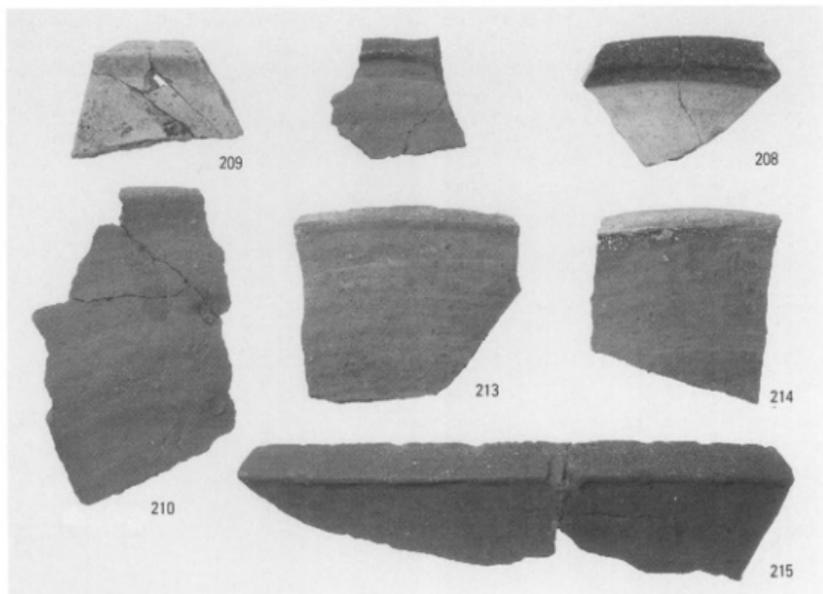
土壤4・6(172) 出土土器(土師器皿・埴)



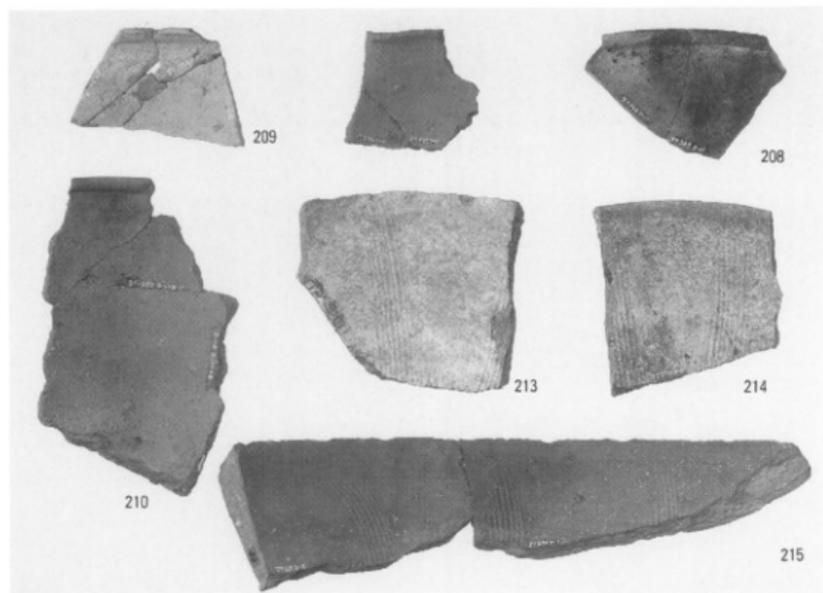
上) 溝15出土土器(土師器)



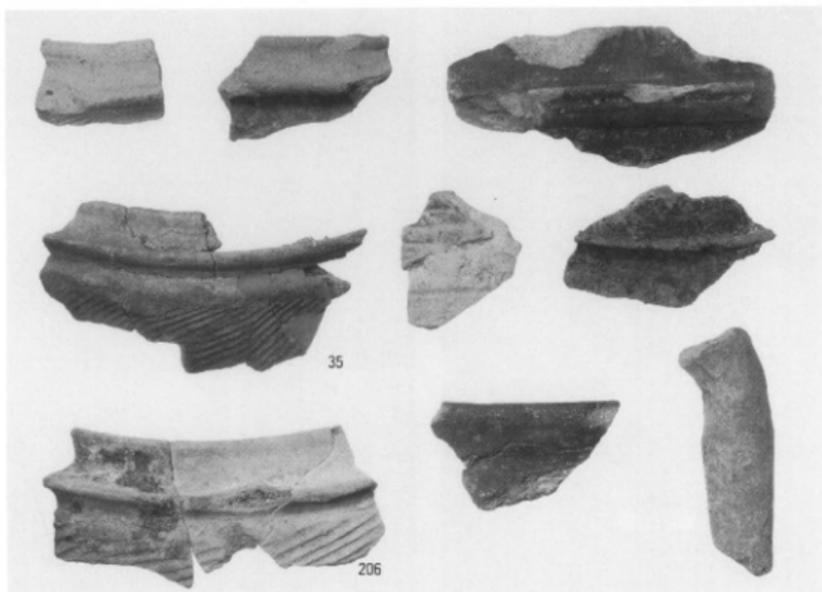
下) 溝15出土土器(国産陶器・瓦質土器・土師器)



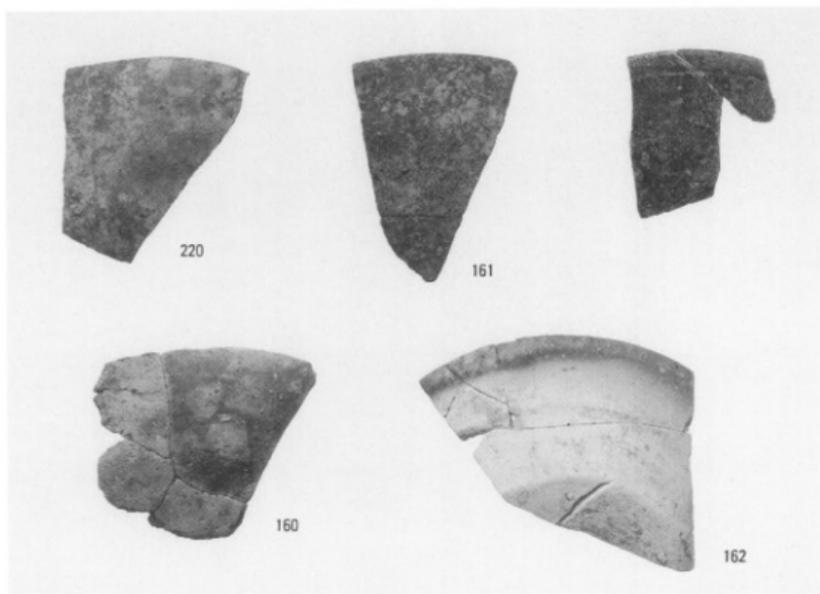
上) 溝15出土土器(須恵器・備前)外面



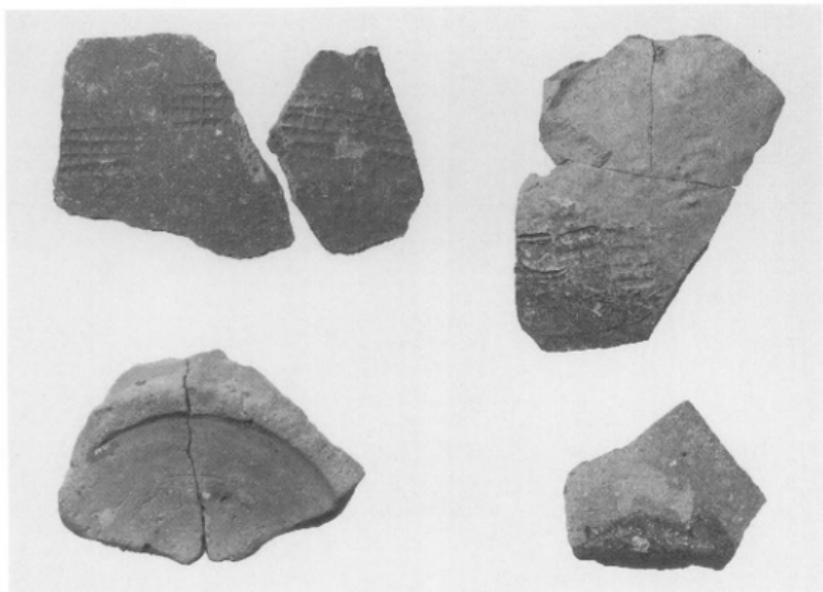
下) 溝15出土土器(須恵器・備前)内面



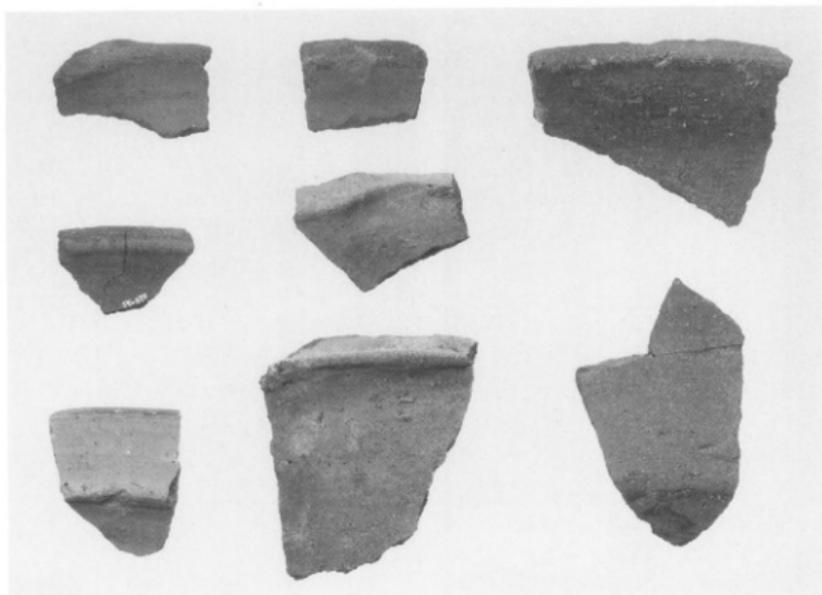
上) 羽釜・土埴(35-柱穴・206-溝15・他は包含層出土)



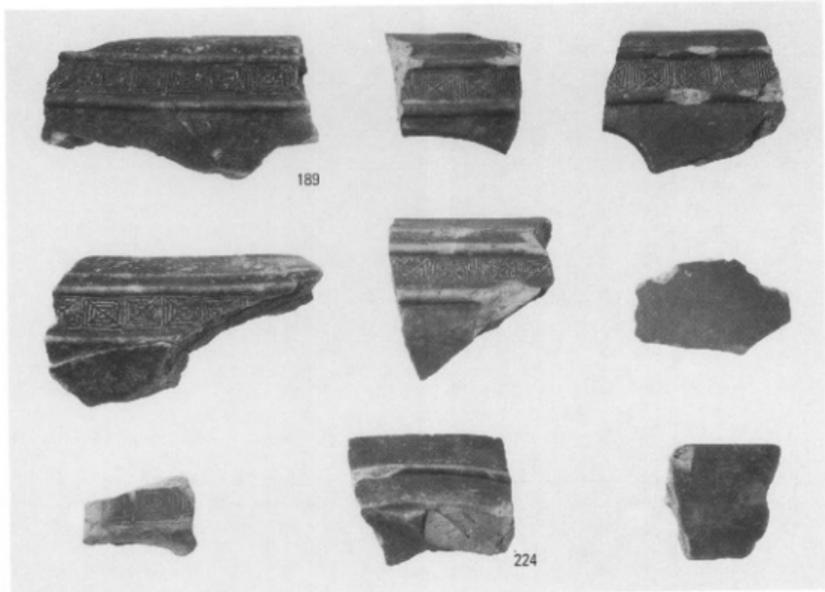
下) 瓦器(160~162-建物址3・220-柱穴・他は包含層出土)



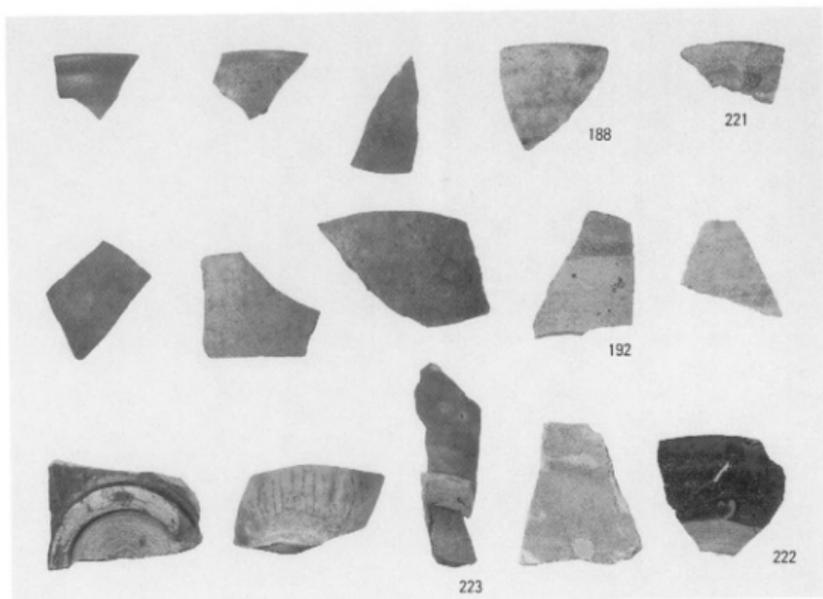
上) 国産陶器(包含層出土)



下) 須恵器、備前焼(包含層出土)



上) 瓦質土器(189-土壌9・他は包含層出土)



下) 磁器・国産陶器(188-土壌2・192-溝16・他は包含層)

---

兵庫県文化財調査報告 第64冊

# 寺 中 遺 跡

淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書IV

平成元年3月31日発行

編集発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

TEL.(078)341-7711

印刷 船場印刷株式会社

〒670 姫路市定元町4の2

TEL.(0792)96-3535

---